山口県埋蔵文化財センター調査報告　第11集

大浦古墳群（おおうらこふんぐん）

梅ケ崎古墳群（うめがさきこふんぐん）

－一般県道山口阿知須宇部線道路改良事業に伴う発掘調査報告－

1999

財団法人　山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター

大浦・梅ヶ崎古墳群　遠景

梅ヶ崎15号墳出土　鉄刀

序

本書は、山口県山口土木建築事務所の委託を受けて、財団法人山口県教育財団が実施した一般県道山口阿知須宇部線道路改良事業に係る大浦古墳群、梅ヶ崎古墳群の発掘調査の記録です。

私たちにとって先人が残した文化財は、ふるさとの歴史を理解する上で、大変貴重な財産です。この文化や伝統を継承することは、21世紀に向けて活力と潤いに満ちた社会を創造するために欠くことのできないものです。これらの文化財を損なうことなく未来へ伝えていくことは、今日、私たちに与えられた課題であるといえます。

遺跡の保護については、埋蔵文化財保護の立場から基本的には現状保存が望ましいものでありますが、やむを得ず消失することになった遺跡については、発掘調査を実施し、記録保存を行うこととしております。

当古墳群についても、事業計画に基づき、関係諸機関と協議・調整を重ね、当事業によってやむなく失われる範囲を確定し、発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、大浦・梅ヶ崎古墳群では、14基の古墳が見つかり、古墳時代後期に県内有数の群集墳が営まれていたことについて新たな資料が得られました。これらの資料はこの地域の当時の様子を知る上で貴重な手がかりとなるものです。

本書はその調査結果をまとめたものであり、収録された資料が、教育・学術・文化の振興のために広く活用されることを願っています。

終わりに、調査の実施にあたって御協力いただいた関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成11年３月

財団法人山口県教育財団

理事長　　牛見　正彦

例　　言

1．本書は、財団法人山口県教育財団が、平成10年度に実施した大浦古墳群・梅ヶ崎古墳群の発掘調査概要報告書である。

2．調査は、財団法人山口県教育財団が山口県山口土木建築事務所の委託を受けて実施したものである。

3．調査組織は次のとおりである。

調査主体　財団法人山口県教育財団
　　山口県埋蔵文化財センター

調査担当　財団法人山口県教育財団指導主事　山本　義信
　　安部　康史
　　河村　悟史
　　大村　秀典
　　奥原栄一郎

4．調査にあたっては、山口県山口土木建築事務所、山口市教育委員会並びに地元関係各位から協力・援助を得た。

5．調査及び本書の作成にあたっては、山口県埋蔵文化財センター職員の助言・協力を得た。

6．本書の第１図は、国土地理院発行５万分の１地形図「小郡」、「宇部東部」を使用した。第２図は、山口市役所都市計画課提供のものである。

7．本書に使用した方位は、国土座標（第３座標系）で示し、標高は海抜標高である。

8．本書に使用した土色の色調表記は、Munsell方式による。
　農林省農林水産技術会議事務局（監修）「新版標準土色帖」

9．図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。

10．土器実測図について、断面黒塗りは須恵器、白抜きは土師器を表す。

11．墳丘土層断面図と石室実測図の網掛けは旧地表層を、閉塞施設実測図の網掛けは閉塞石を表す。

12．本書の作成・執筆は、山本・安部・河村・大村・奥原が分担し、山本が編集した。

梅ヶ崎古墳群古墳番号新旧対応表

新番号	６号墳	７号墳	８号墳	９号墳	10号墳	11号墳	12号墳	13号墳	14号墳	15号墳
旧番号	12号墳	９号墳	８号墳	10号墳	15号墳	11号墳	14号墳	13号墳	７号墳	６号墳

本　文　目　次

第１章　遺跡の位置と環境……1
第２章　調査に至る経緯と調査の概要……3
第３章　調査の成果
　第１節　大浦古墳群……9
　　１．13号墳
　　２．14号墳
　　３．15号墳
　　４．16号墳
　第２節　梅ヶ崎古墳群……31
　　１．６号墳
　　２．７号墳
　　３．８号墳
　　４．９号墳
　　５．10・11号墳
　　６．12号墳
　　７．13号墳
　　８．14号墳
　　９．15号墳
第４章　まとめ……89

図　版　目　次

図版１　大浦古墳群Ⅲ地区全景　大浦古墳群Ⅳ地区全景
図版２　13号墳調査前　13号墳玄室内敷石　13号墳石室完掘　13号墳墓道検出状況　13号墳全景　13号墳全景　14号墳調査前　14号墳トレンチ完掘
図版３　14号墳北西側周溝部遺物出土状況　14号墳墳丘検出状況　14号墳石室完掘　14号墳石室完掘　14号墳玄門閉塞　14号墳玄門閉塞除去後　14号墳石室内遺物出土状況　14号墳石室内土玉出土状況
図版４　15号墳調査前　15号墳床面検出状況　16号墳調査前　16号墳崩落石検出状況　16号墳トレンチ完掘　16号墳墳丘　16号墳玄室内敷石　16号墳石室完掘
図版５　大浦13号墳出土遺物　大浦14号墳出土遺物①
図版６　大浦14号墳出土遺物②　大浦15号墳出土遺物　大浦16号墳出土遺物
図版７　梅ヶ崎古墳群Ⅰ地区全景　梅ヶ崎古墳群Ⅱ地区全景
図版８　６号墳調査前　６号墳全景　６号墳墳丘　６号墳玄室内敷石　６号墳石室内平瓶出土状況　６号墳南側列石　６号墳石室完掘（西から）　６号墳石室完掘（南から）
図版９　７号墳全景　７号墳トレンチ完掘　７号墳崩落石検出状況　７号墳遺物出土状況(東から)　７号墳遺物出土状況（西から）７号墳遺物出土状況（南から）７号墳石室内耳環出土状況　７号墳完掘
図版10　８号墳調査前　８号墳トレンチ完掘　８号墳墳丘　８号墳石室内遺物出土状況①　８号墳石室内遺物出土状況②　８号墳石室内遺物出土状況③　８号墳石室完掘（南から）　８号墳全景

図版11　9号墳全景　9号墳閉塞施設　9号墳玄室内敷石　9号墳墳丘及び周溝内遺物出土状況　9号墳石室内遺物出土状況①　9号墳石室内遺物出土状況②　9号墳開口部東側土器出土状況　9号墳石室完掘
図版12　10号墳全景　11号墳崩落石検出状況　11号墳全景　11号墳閉塞施設　11号墳墳丘　11号墳石室内耳環出土状況　11号墳石室完掘
図版13　12号墳調査前　12号墳墳丘　12号墳周溝　12号墳石室完掘　13号墳調査前　13号墳墳丘　13号墳石室内遺物出土状況　13号墳石室完掘
図版14　14号墳調査前　14号墳全景　14号墳崩落石検出状況　14号墳東側墳丘断面　14号墳西側墳丘断面　14号墳墳丘（東から）　14号墳墳丘（北から）　14号墳墳丘除去後
図版15　14号墳羨道閉塞　14号墳石室内遺物出土状況　14号墳羨道内遺物出土状況①　14号墳羨道内遺物出土状況②　14号墳玄室内排水施設　14号墳羨道内排水施設　14号墳東側周溝部土器出土状況　14号墳北側周溝部土器出土状況
図版16　15号墳調査前　15号墳全景　15号墳崩落石検出状況　15号墳玄門閉塞　15号墳玄門閉塞　15号墳玄門閉塞除去後　15号墳石室完掘（西から）　15号墳石室完掘（南から）
図版17　15号墳石室内鉄刀出土状況　15号墳奥壁側鉄刀出土状況　15号墳玄門側鉄刀出土状況　15号墳右壁側鉄刀出土状況　15号墳石室内装身具出土状況
図版18　梅ヶ崎古墳群Ⅰ地区全景　梅ヶ崎1号墳　梅ヶ崎2号墳　梅ヶ崎3号墳　梅ヶ崎4号墳　梅ヶ崎5号墳
図版19　梅ヶ崎6号墳出土遺物　梅ヶ崎7号墳出土遺物
図版20　梅ヶ崎8号墳出土遺物　梅ヶ崎11号墳出土遺物　梅ヶ崎12号墳出土遺物
図版21　梅ヶ崎9号墳出土遺物
図版22　梅ヶ崎13号墳出土遺物
図版23　梅ヶ崎14号墳出土遺物①
図版24　梅ヶ崎14号墳出土遺物②
図版25　梅ヶ崎15号墳出土遺物①
図版26　梅ヶ崎15号墳出土遺物②

挿　図　目　次

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2
第2図　大浦古墳群・梅ヶ崎古墳群調査区設定図… 4
第3図　大浦古墳群Ⅲ地区調査前地形測量図… 7
第4図　大浦古墳群Ⅳ地区調査前地形測量図… 8
第5図　13号墳調査後地形測量図 …… 9
第6図　13号墳墳丘土層断面図 ……10
第7図　13号墳石室実測図 ……11
第8図　13号墳出土土器実測図 ……12
第9図　14号墳墳丘遺存状況図 ……13
第10図　14号墳墳丘土層断面図 ……14
第11図　14号墳調査後地形測量図 ……15
第12図　14号墳石室平面図 ……16
第13図　14号墳石室実測図 ……17
第14図　14号墳閉塞施設実測図 ……18
第15図　14号墳石室内遺物出土状況図 ……19
第16図　14号墳石室内土玉出土状況図 ……20
第17図　14号墳北西側周溝部遺物出土状況図 20
第18図　14号墳出土土器実測図 ……21
第19図　14号墳出土鉄製品実測図 ……22
第20図　14号墳出土小玉実測図 ……23
第21図　14号墳出土耳環実測図 ……24
第22図　15号墳Wトレンチ・Eトレンチ土層断面図…25
第23図　15号墳Nトレンチ土層断面図 ……25
第24図　15号墳調査後地形測量図 ……26
第25図　15号墳石室実測図 ……26
第26図　15号墳出土土器実測図 ……26

第27図　15号墳出土土錘実測図 ……26
第28図　16号墳墳丘遺存状況図 ……27
第29図　16号墳墳丘土層断面図 ……28
第30図　16号墳調査後地形測量図 ……28
第31図　16号墳石室実測図 ……29
第32図　16号墳出土土器実測図 ……30
第33図　16号墳出土土錘実測図 ……30
第34図　6号墳墳丘遺存状況図 ……31
第35図　6号墳南側列石実測図 ……31
第36図　6号墳調査後地形測量図 ……32
第37図　6号墳墳丘土層断面図 ……33
第38図　6号墳石室平面図 ……33
第39図　6号墳石室実測図 ……34
第40図　6号墳石室内遺物出土状況図 ……35
第41図　6号墳出土土器実測図 ……36
第42図　6号墳出土鉄製品実測図 ……36
第43図　6号墳出土装身具実測図 ……36
第44図　7号墳調査後地形測量図 ……37
第45図　7号墳トレンチ土層断面図 ……38
第46図　7号墳墓坑実測図 ……38
第47図　7号墳遺物出土状況図 ……39
第48図　7号墳出土土器・耳環実測図 ……40
第49図　8号墳墳丘遺存状況図 ……41
第50図　8号墳調査後地形測量図 ……41
第51図　8号墳墳丘土層断面図 ……42
第52図　8号墳石室平面図 ……42
第53図　8号墳石室実測図 ……43
第54図　8号墳石室内遺物出土状況図 ……44
第55図　8号墳出土土器実測図 ……44
第56図　9号墳墳丘遺存状況図 ……46
第57図　9号墳調査後地形測量図 ……46
第58図　9号墳墳丘土層断面図 ……47
第59図　9号墳石室平面図 ……47
第60図　9号墳閉塞施設実測図 ……47
第61図　9号墳石室実測図 ……48
第62図　9号墳遺物出土状況図① ……49
第63図　9号墳遺物出土状況図② ……50
第64図　9号墳遺物出土状況図③ ……50
第65図　9号墳遺物出土状況図④ ……50
第66図　9号墳出土耳環・鉄製品実測図 ……50
第67図　9号墳出土土器実測図 ……51
第68図　10号墳・11号墳墳丘遺存状況図 ……53
第69図　10号墳・11号墳調査後地形測量図 …53
第70図　11号墳墳丘土層断面図 ……54
第71図　11号墳石室平面図 ……54
第72図　11号墳閉塞施設実測図 ……54
第73図　11号墳石室実測図 ……55
第74図　11号墳遺物出土状況図 ……56
第75図　11号墳出土遺物実測図 ……56
第76図　12号墳墳丘遺存状況図 ……57
第77図　12号墳墳丘土層断面図 ……58
第78図　12号墳調査後地形測量図 ……58
第79図　12号墳石室実測図 ……59
第80図　12号墳石室内遺物出土状況図 ……60
第81図　12号墳出土鉄製品実測図 ……60
第82図　13号墳墳丘遺存状況図 ……61
第83図　13号墳墳丘土層断面図 ……62
第84図　13号墳調査後地形測量図 ……63
第85図　13号墳石室実測図 ……64
第86図　13号墳石室内遺物出土状況図 ……65
第87図　13号墳出土土器実測図 ……65
第88図　13号墳出土鉄製品実測図 ……66
第89図　13号墳出土耳環実測図 ……66
第90図　14号墳墳丘遺存状況図 ……68
第91図　14号墳調査後地形測量図 ……68
第92図　14号墳墳丘土層断面図 ……69
第93図　14号墳石室平面図 ……70
第94図　14号墳石室実測図 ……71
第95図　14号墳閉塞施設実測図 ……72
第96図　14号墳石室内排水施設実測図 ……72
第97図　14号墳石室内遺物出土状況図 ……73
第98図　14号墳東側周溝部遺物出土状況図 …74
第99図　14号墳出土土器実測図 ……75
第100図　14号墳出土鉄製品実測図①……75
第101図　14号墳出土鉄製品実測図②……77
第102図　14号墳出土玉類実測図……78
第103図　14号墳出土石鏃実測図……78
第104図　15号墳調査後地形測量図……79
第105図　15号墳墳丘土層断面図……80
第106図　15号墳石室平面図……81
第107図　15号墳閉塞施設実測図……81
第108図　15号墳石室実測図……82

第109図　15号墳石室内遺物出土状況図……83
第110図　15号墳出土土器実測図……84
第111図　15号墳出土鉄刀実測図……84
第112図　15号墳出土鉄製品実測図……85
第113図　15号墳出土装身具実測図①……86
第114図　15号墳出土装身具実測図②……87

表　目　次

第１表　14号墳出土土器観察表……21
第２表　14号墳出土鉄鏃計測表……22
第３表　14号墳出土小玉計測表……24
第４表　７号墳出土土器観察表……40
第５表　９号墳出土土器観察表……52
第６表　13号墳出土土器観察表……66
第７表　13号墳出土鉄鏃計測表……66
第８表　14号墳出土土器観察表……76
第９表　14号墳出土鉄鏃計測表……78
第10表　15号墳出土耳環計測表……86
第11表　15号墳出土玉類計測表……88
第12表　梅ヶ崎古墳群古墳一覧表……89
第13表　梅ヶ崎古墳群出土土器編年表……91
第14表　大浦古墳群古墳一覧表……94

付　図　目　次

付図１　梅ヶ崎古墳群調査前地形測量図

第１章　遺跡の位置と環境

大浦古墳群・梅ヶ崎古墳群の所在する山口市江崎地区は、山口市の南部、椹野川河口の西側に位置し、南側には山口湾が広がる。山口湾岸は水田が広がる農村地帯であるが、水田のほとんどは近世の干拓によるものである。干拓以前は、丘陵前面に形成された若干の洪積台地があるのみで、現在の低地の大半は海面下にあった。

大浦・梅ヶ崎古墳群が立地する御伊勢山、相原山は黒雲母花崗岩からなる小丘陵で海に向けて突出している。この丘陵は洪積世に沈水して島嶼群が形成されたもので、その後、洪積世に発達した低地や砂州によって陸繋島となったものである。湾内にはこのような陸繋島が多く、他には今津山、大江山、長浜などがそれにあたる。特に、東の秋穂半島の先端部にあたる岩屋半島などは典型的な陸繋島の状態を見せてくれる。よって、現在の海岸線はこれらの陸繋島間を直線的に結ぶように形成されるが、これは前述したとおり近世の干拓によるもので、干拓以前は島嶼群または陸繋島が湾に突きだし、小さな入り江が複雑に入り組む変化に富んだ海岸線であったとみられる。

嘉川・陶・鋳銭寺・秋穂二島などの標高10mから15m前後の台地からは、旧石器時代のナイフ型石器などが発見されている。縄文時代の遺跡は、今津川河口一帯の相原遺跡、秋穂二島の美濃ヶ浜遺跡、阿知須町の丸塚山遺跡などがある。弥生時代の遺跡は、県下では多く分布しているが、山口湾岸では極めて少ない。この時代はまだ灌漑技術も乏しく、大きな河川、平地といった自然条件に恵まれなかったため、米作りを主体とする弥生人の生活には適さなかったものと思われる。

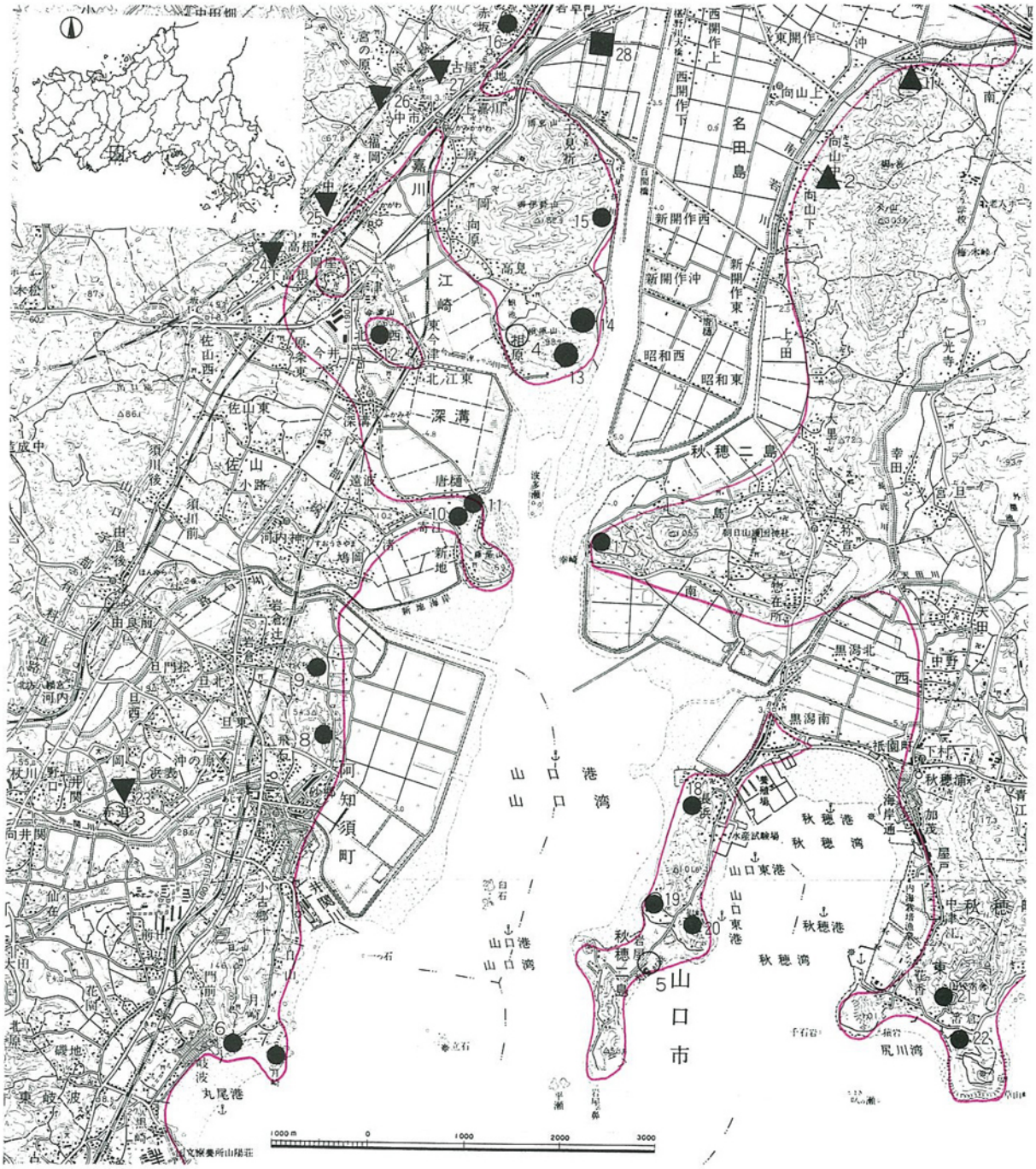
古墳時代、山口湾岸に最初に出現する古墳は、ほぼ５世紀代に入ってから藤尾山・猫山古墳が相次いで築造される。藤尾山古墳は直径30m、猫山古墳は直径24mの大型円墳である。両古墳は内部主体を持たないこと、壺型埴輪を出土していることなど、類似性が指摘される古墳である。両古墳の造営者が埋葬されなかったことについては、畿内勢力との政治的緊張状態があり、そのような情勢の中、なんらかの理由で埋葬されなかったとみられている。その後、湾頭岸に県下最大規模の直径約40m、高さ５mを測る大型円墳の淨福寺古墳が造営される。５世紀中葉になると現在は干拓によって陸繋化され秋穂半島になっているが、かつては島嶼に立地していた直径20mの兜山古墳が造られる。

県内における大型の円墳（直径20m以上）は、前述した淨福寺古墳をはじめとして、山口盆地を含めた椹野川流域に集中して分布する。この傾向は古墳時代前期・中期では特に顕著である。また、山口盆地では、５世紀後半段階で大型の円墳と入れ替わるように、小規模の前方後円墳が首長墓として採用される。前方後円墳は畿内勢力との結びつきを窺わせるものであり、このことから、山口盆地を含む椹野川流域では在地勢力が温存され、畿内勢力の浸透が遅れたことと関連するものとの指摘がある。このことは、前述した藤尾山・猫山古墳の造営者が埋葬されなかったこととの関連も窺える。

古墳時代後期である６世紀前半になると、御伊勢山南麗に大浦古墳群が形成され始め、中葉には相原山の南麗に梅ヶ崎古墳群が形成される。少し遅れて御伊勢山東麗に浦辺古墳群が展開する。ほぼ同じ時期に、藤尾山の対岸の大江山山頂付近から中腹にかけて幸崎古墳群が、行政区上阿知須町に包括される丸塚山一帯に丸塚古墳群が展開する。

これらの古墳（群）を造営した人々の経済的基盤は一体何であったのか。農耕に適した場所といえば狭小な海岸段丘と低湿地あるいは小河川の氾濫原のみであり、地形的には農業生産に多くを望むこ

とは困難な地域である。こうした山口湾岸の農耕に適さない環境と、海浜に面した地理的条件から、その経済的基盤は海浜または海洋に求めることもできるであろう。特に、古墳時代後期の美濃ヶ浜遺跡をはじめとする製塩遺跡との関連も指摘されている。また、大浦・梅ヶ崎古墳群の南東側は深溝と呼ばれ、海岸線が複雑に入り組む天然の良港であったようで、中世には大内氏の拠点的港であった地である。このような海上交通の要衝地として、古墳時代にも重要な地であったことは想像に難くない。とすれば、海上交通を掌握した当地域の有力首長墓であった可能性もある。　　（安部）



1．潟上遺跡　2．向山遺跡　3．赤迫遺跡　4．相原遺跡　5．美濃ヶ浜遺跡　6．若宮古墳群　7．月崎古墳群　8．丸塚古墳1号墳　9．丸塚古墳群（2～5号墳）　10．藤尾山古墳　11．猫山古墳　12．今津山古墳　13．**梅ヶ崎古墳群**　14．**大浦古墳群**　15．浦辺古墳群　16．淨福寺古墳　17．幸崎古墳群　18．長浜古墳　19．兜山古墳群　20．揺木山古墳群　21．尻川古墳　22．筈倉古墳　23．神正遺跡　24．高根遺跡　25．中塚遺跡　26．上嘉川遺跡　27．稽古屋遺跡　28．小郡開作経塚

▲…縄文　○…古墳時代の集落　●…古墳　▼…中世　■…近世

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

第２章　調査に至る経緯と調査の概要

椹野川河口の西岸に連なる御伊勢山・相原山の東側から南西側にかけての山麓に、浦辺古墳群、大浦古墳群などの古墳群が存在することは以前から知られていたが、実際の調査の手が伸びることはなく、点在する古墳の基数及び石室形態等詳しい実体については不明のままであった。しかしながら、未来に向けての豊かな郷土創りの指針として山口県が開催を計画した『21世紀未来博覧会』(2001年吉敷郡阿知須町にて開催）へのアクセス道路が当該地域内を路線とすることが予定されたため、工事の計画・実施を担当する山口県土木建築事務所の委託を受けて、山口県埋蔵文化財センターが計画地区内の事前の予察調査を行うことになった。予察調査は平成７年に行われ、その結果、山口市大字嘉川所在の浦辺古墳群で３基、同市大字江崎所在の大浦古墳群で３基、合計６基の古墳が確認され、同じく路線内に存在する小郡開作経塚も含めて、平成８年４月から調査が行われる運びとなった。

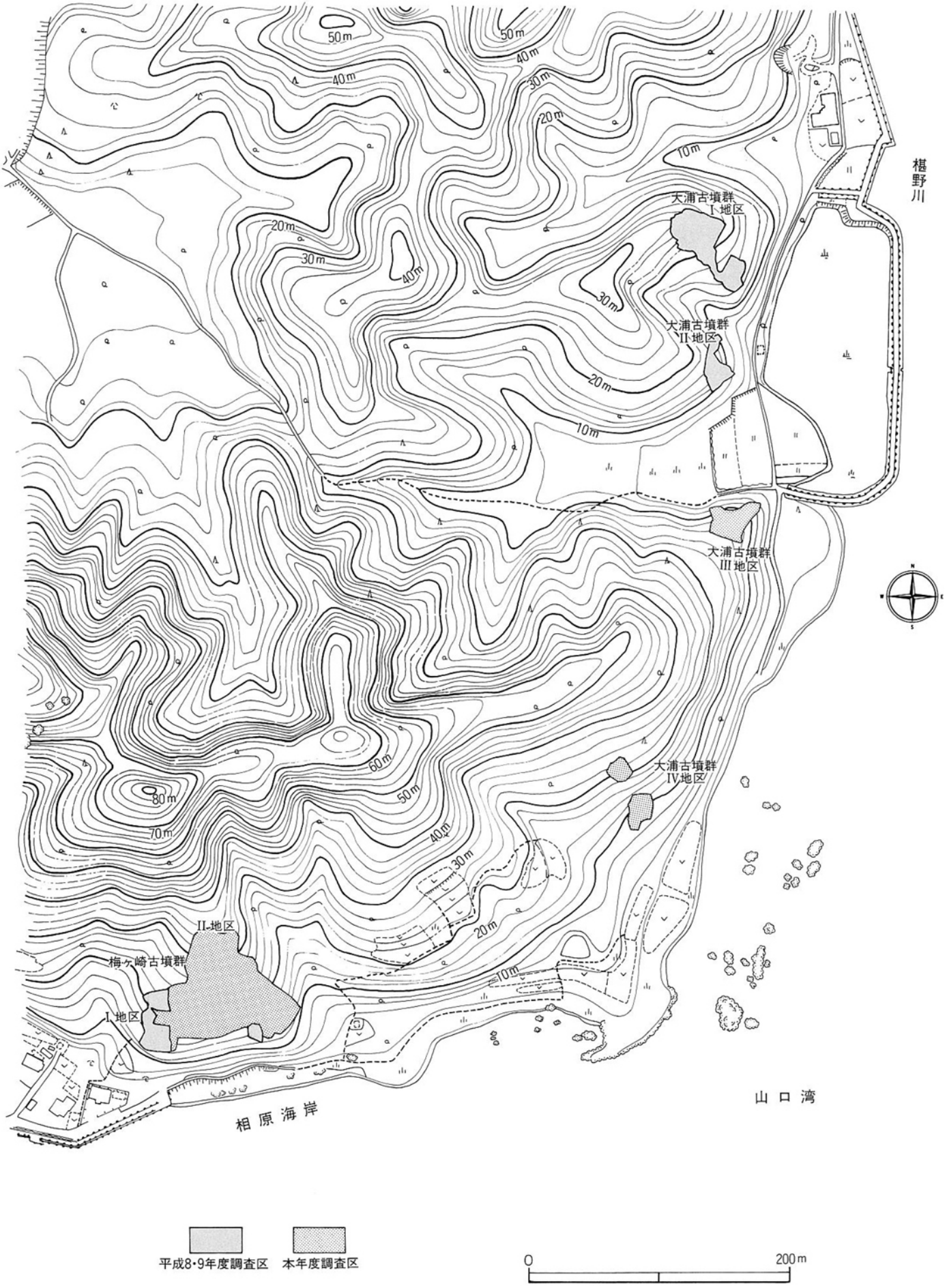
竪穴系横口式石室（大浦２号墳）

ところが、実際に調査が始まると、予察調査で確認した以外の古墳が新たに発見され、さらに同年10月に行われた第２次予察調査でも、大浦古墳群で３基、その南西に続く同市大字江崎所在の梅ケ崎古墳群で５基の古墳が確認された。そのため、調査は平成９年度まで延長されることとなり、結果的に、２年間で合計20基という大規模な古墳の発掘調査が行われることとなった。この２年間の調査では、北部九州にその起源を持つとされる「竪穴系横口式石室」の系譜につながる古墳が７基、同じく北部九州を中心に築かれた「複室構造の横穴式石室」が２基発見され、山口湾岸における古墳時代後期の群集墳の成立と展開過程を明らかにしていく上で、大きな資料を提供することとなった。しかも、調査期間中に行った周辺踏査では、路線外にも多数の古墳が存在することが確認され、当該地域の古墳群は、県内でも有数の規模を誇る古墳時代後期の群集墳であることが判明したのである。

トレンチ調査

一方、大浦古墳群から梅ケ崎古墳群にかけての相原山の南側山麓一帯は、近世末以来、段々畑として開墾されてきており、古墳時代の旧地形の上面がかなりの規模で削平されていた。しかも、雑木林と化した現況では、通常の古墳調査の場合と

重機によるトレンチ調査



第2図　大浦古墳群・梅ヶ崎古墳群調査区設定図

違って、地形をもとにして古墳の存在を確認することは誠に困難な状況であり、平成８～９年の調査では、予察調査で事前に確認された古墳の調査を行う際に、その周辺で新たに古墳が発見されることが度々あった。そこで、本工事着工が急がれる中、工事用取り付け道路の建設に合わせて、路線内全範囲の樹木伐採が行われた後に、あらためて予察調査を実施し、残された路線内の古墳の基数を把握することが急務となり、それを受けて、第３次予察調査が平成10年１月に行われた。その結果、路線内には新たに８基の古墳の存在が確認され、平成10年４月からの発掘調査に至ったものである。

今年度の調査は平成10年４月15日に着手した。予察調査の結果では、昨年度調査された大浦古墳群Ⅱ地区の南に隣接する丘陵上に１基、さらに南に250m近く離れた場所に２基、さらにその南西約350mの、昨年度調査された梅ケ崎古墳群の東から東北側の丘陵に６基の古墳が存在することが報告されていた。そこで、調査に当たって、便宜上、大浦古墳群Ⅱ地区に隣接する場所を大浦古墳群Ⅲ地区、さらにその南の地区については、大浦古墳群の主群からは離れるものの、行政区を考慮して大浦古墳群Ⅳ地区とした。梅ケ崎側については、今年度の調査場所が昨年度１基だけ調査したⅡ地区に隣接するため、梅ケ崎古墳群Ⅱ地区とすることとした。

墳丘検出

調査の予定範囲は、90mを超える路線幅が直線距離にして約600mも続くという広大な地域で、しかも、予察調査前に行われた取り付け道路建設の際に削除された排土が、取り付け道路際の調査区内に山積みになっていた。そのため、予察調査で発見されなかった古墳が存在する可能性もあり、調査の最初の段階での最大の目的は、まず路線内に綿密なトレンチを設定し、予察調査で発見することのできなかった古墳の有無を確認することであった。ところが、地形的に見てトレンチが必要とされる場所には、取り付け道路建設の際に削除された土が、厚さ１m以上山積みになっているところもあり、人力によるトレンチ掘り込みには、多大の時間と労力を要した。そこで、調査半ばから重機を導入し、何とか初期の目的を達成することができた。以下、それぞれの地区ごとに調査の概要を述べる。

石材除去

まず、大浦古墳群Ⅲ地区では、予察調査で古墳１基と丘陵先端部に遺物包含層が存在することが確認されていた。ただ、隣接する大浦古墳群Ⅰ地区・Ⅱ地区の場合、狭い範囲に古墳が密接する場

閉塞石検出

合が多く、しかもⅢ地区は、現況では畑として上面が削平されていたため、他の古墳が存在する可能性もあった。そこで、平均的な円墳の墳丘径を10mとして、ほぼ5mおきに、等高線と平行してトレンチを設定したが、新たに古墳を発見するには至らず、結局、Ⅲ地区での調査対象は、古墳1基（大浦13号墳と呼ぶこととした）と遺物包含層のみになった。遺構の範囲を確認するトレンチ調査の結果、遺物包含層にも遺構が存在しないことが判明したため13号墳のみの調査になり、7月3日より具体的な調査を開始。表土除去の後、墳丘、石室、墓道を検出、続いて写真撮影、石室実測、地形測量等を行い、最終的にⅢ地区の調査は8月17日に終了した。

Ⅲ地区からⅣ地区にかけての250mにわたる丘陵は、全て段々畑に開墾されていたため、それぞれの畑ごとにトレンチを設定した。しかし、畑の客土の厚さは1m近くあり、予想以上に丘陵の傾斜が急で、遺構・遺物とも検出されなかったため、古墳は存在しないものと判断した。

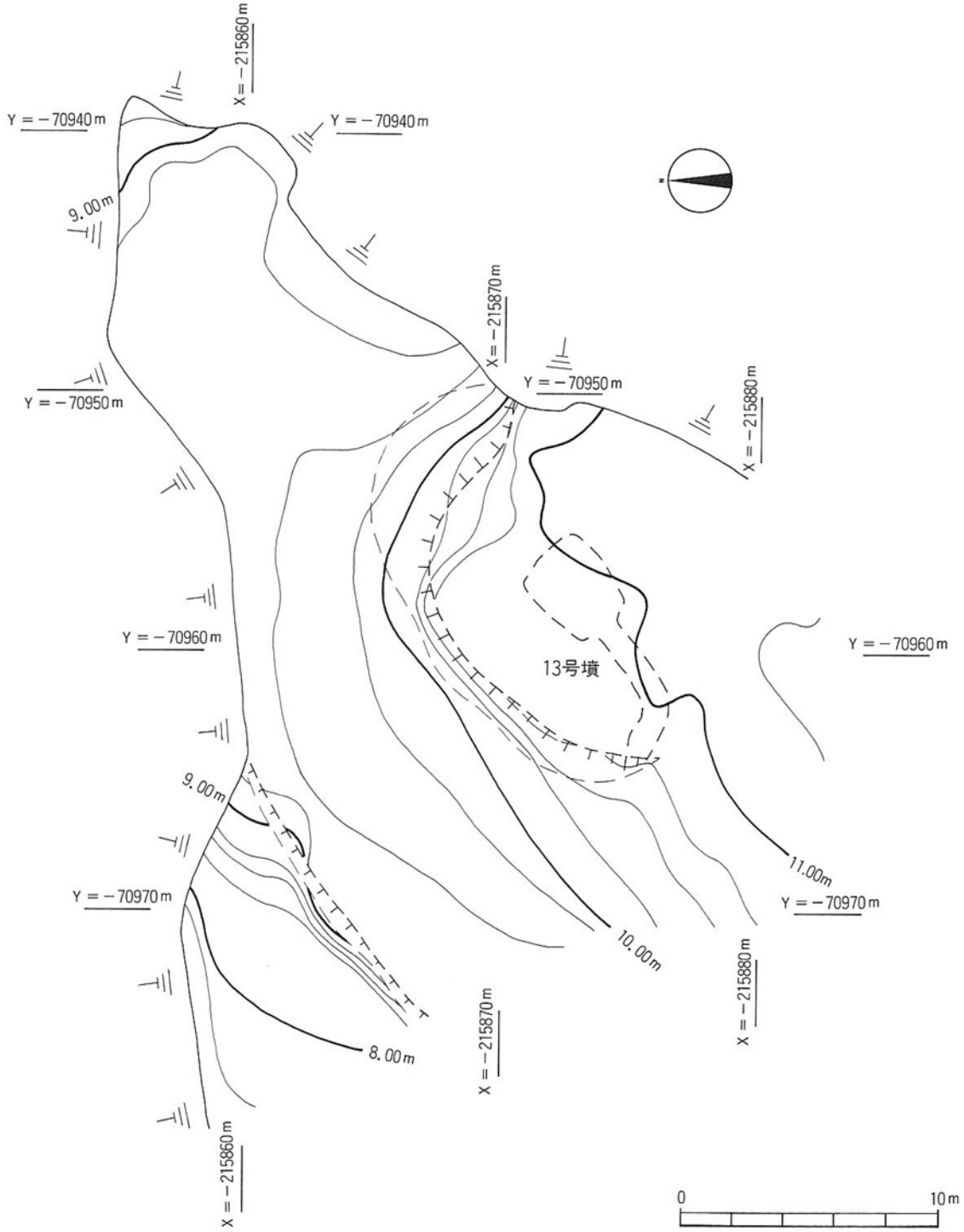
石室内掘込

現地説明会

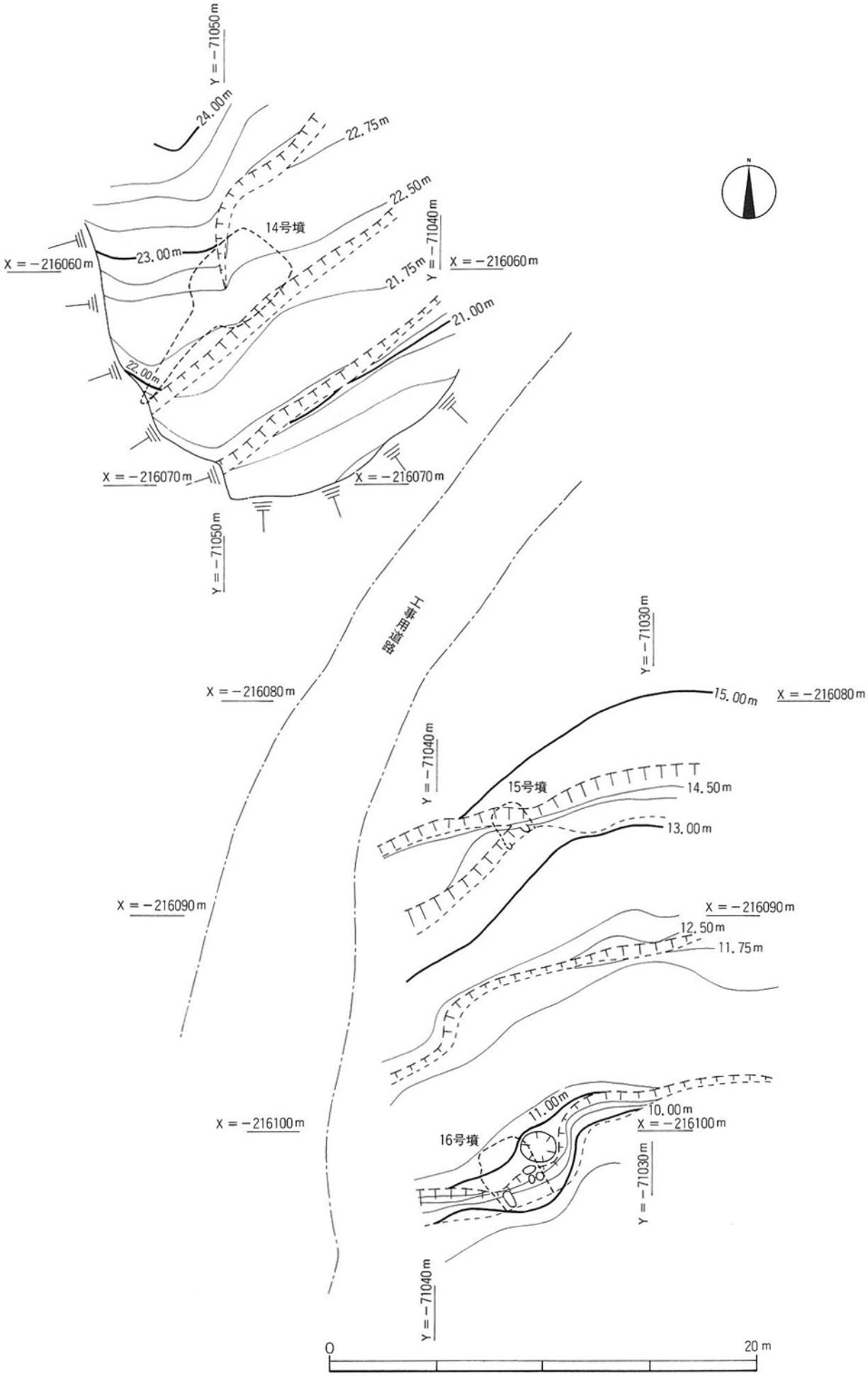
空中撮影

Ⅳ地区については、取り付け道路を挟んで2ヶ所に分かれており、予察調査の結果通り、下位側で古墳2基を確認。上位側では、予察段階での発見はされていなかったが、綿密なボーリング探査をしたところ古墳1基を発見し、最終的に上位側から14、15、16号墳と呼ぶことにした。その後、調査前の地形測量を行い、5月21日より各古墳の具体的な調査を開始。ベルトコンベアーを導入するなど、効率的な調査進行に努め、調査は11月12日に完了した。

梅ケ崎古墳群Ⅱ地区については、大浦地区以上に調査対象地が広く、段々畑開墾に伴う地形的変貌も大きかったため、調査が難航したが、トレンチ調査や表土除去に重機を使用するなど、機械力も導入し、円滑な調査進行を図った。結局、予察調査の段階の8基に加えて新たに2基を確認、合計10基（6～15号墳）の調査となり、契約基数が当初の数を超え、途中で契約延長の必要が生じたが、12月28日に、無事全ての調査を終了した。梅ケ崎古墳群Ⅱ地区では、3振りの鉄刀を副葬品に持つ円墳や、県内でも最大級の規模に入る横穴式石室を持つ円墳が発見され、地元の考古学ファンの大きな関心を呼び、10月3日に行った現地説明会では多数の参加者があった。なお、大浦側を含めた遺跡全体の空中撮影は、11月25日に行なわれ、遺跡消滅後も貴重な記録として残ることとなった。(大村)



第 3 図　大浦古墳群Ⅲ地区調査前地形測量図



第４図　大浦古墳群Ⅳ地区調査前地形測量図

第３章　調査の成果

第１節　大浦古墳群

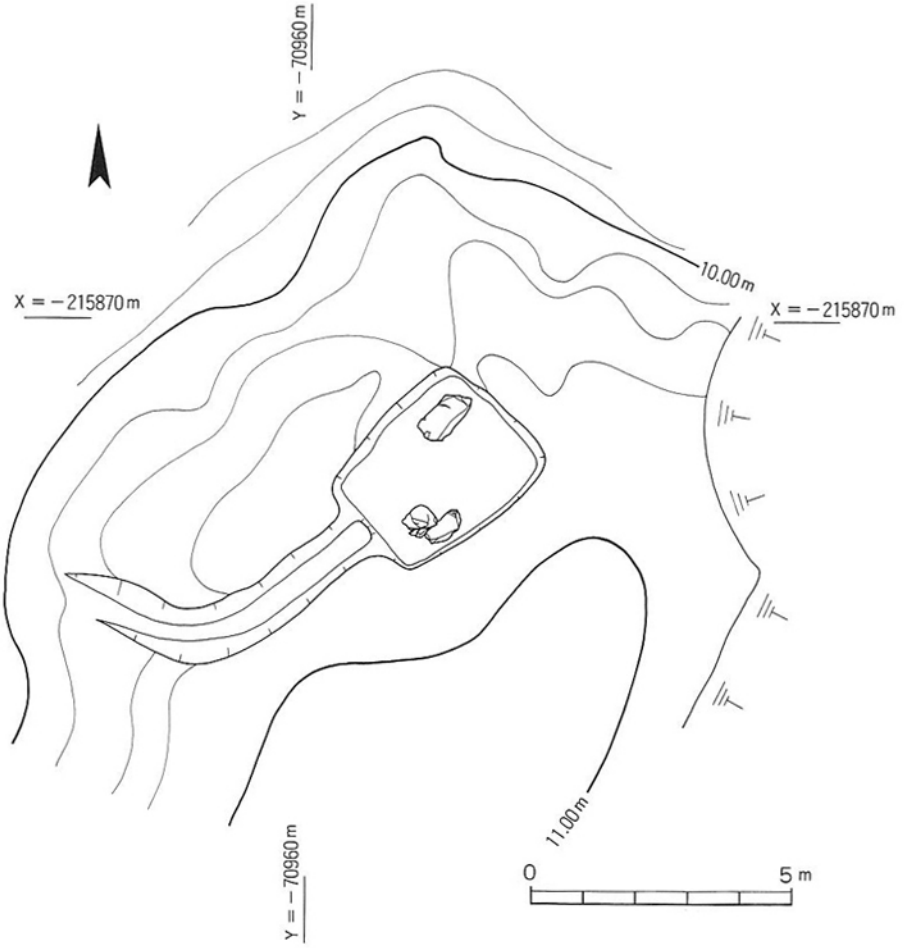
１．13号墳

（１）調査前の状況

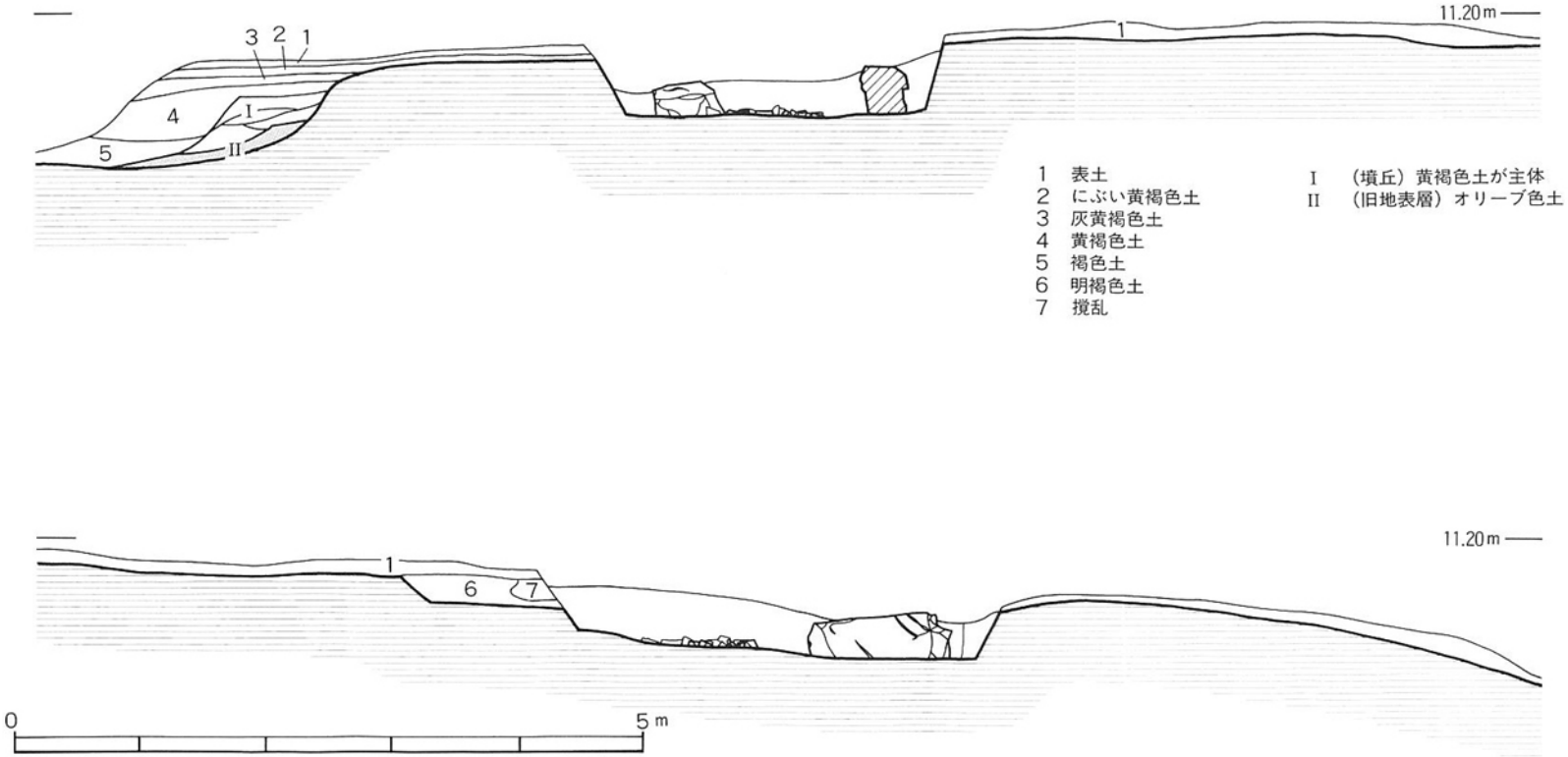
13号墳は、昨年度調査を行った大浦Ⅱ地区と大きな谷を隔てて相対しており、相原山（標高98m）から北東に張り出す丘陵の先端付近に位置している。石室付近の標高は約11m。調査前、古墳の周辺は近年まで畑となっており、墳丘の大部分が消失し、その存在を認めることができなかった。しかし、石室中央部付近がやや窪んでおり、ボーリング探査及びトレンチ調査を行った結果、古墳であると確認した。

（２）墳丘

４本設定したトレンチのうち、北トレンチの土層断面にのみ、墳丘封土と思われる版築の土層が一部認められた。墓坑端から約2.3m地点までの間は、地山が標高約10.8mのレベルまで、ほぼ平坦に削平されており、そこから先は地山が下方に約0.8m落ち込む崖面となっていた。さらに、そこから約1.5m先の地点までの間に、築造当時の旧表土が最大で厚さ15cmほど残り、その上に墳丘封土が厚さ40cmほど残存していた。墳丘径を求める手がかりは、この北トレンチ一本しかなく、推定することも難しい



第５図　13号墳調査後地形測量図



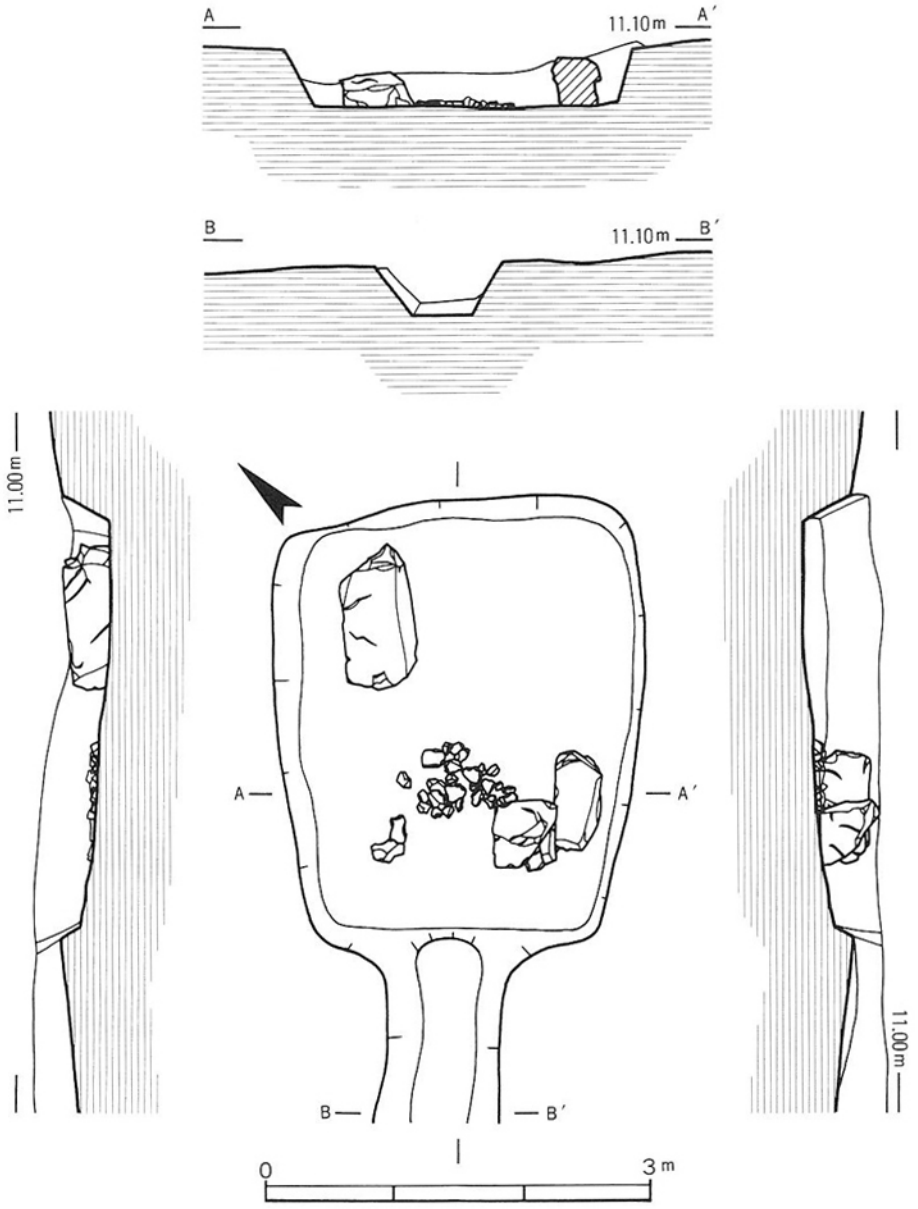
第 6 図　13号墳墳丘土層断面図

が、墳丘立ち上がりラインが石室中心から約4.7mのところに確認されたことから、墳丘は直径10m弱の円墳であった可能性がある。また、いずれのトレンチの土層断面にも周溝は確認できなかった。

（3）石室

墓坑は隅丸長方形で、長さ3.5m、奥壁側幅2.85m、玄門側幅2.3mを測る。後世の撹乱時、奥壁側の床面が若干削り取られた可能性があり、現存する墓坑の深さは、奥壁側で0.38m、玄門側で0.14mを測る。主体部の主軸はN43°Eを示し、ほぼ南西に開口する。石室及び羨道は大部分の石材が抜き取られており、著しく撹乱を受けていた。石材の石質は花崗岩である。

玄室　玄室内には、右袖部付近に腰石２石と人頭大の角礫の詰め石が３石、左壁側奥の腰石１石が残っていただけで、玄室の大きさ及び形状等は不明である。ただし左壁側腰石は、116×50×42cm程度の石材が使用されているが、長辺を軸に90度回転し、原位置から動いている可能性がある。玄室床面には敷石が敷いてあり、石室中心よりやや玄門寄りにわずかに残っていた。敷石の大きさは大部分が径10～20cm前後のやや小型の塊石であった。そして剝ぎ取られたとみられる敷石の一部が、玄室内北



第７図　13号墳石室実測図

西区の左腰石近くに集められ、厚さ25cm程度に積み重なっている状態で検出された。撹乱時に投げ捨てられたものと思われる。

羨道　玄室前面に短い羨道壁が取り付き、ほぼ南西に向かって伸びていたと考えられるが、石材は全く残っておらず、抜き取り痕らしい浅い窪みが右壁側にわずかに検出された。地山の形状及び抜き取り痕などから、羨道幅は墓道の幅とほぼ同じ70cm前後と狭く、長さも非常に短いものであったと推定される。

墓道　墓道は全長約6.2m検出され、断面形は逆台形に近い形状であった。羨道部の端と思われる地点から、南西方向に約３mまっすぐ伸び、そこから西へ約45度、緩やかにカーブしながら約3.2m続いていた。羨道部の端近くで、上端幅1.16m、底幅0.40m、残存する深さ0.14m。羨道部の端から３mの地点で、上部幅1.13m、底面幅0.41m、残存する深さ0.48mを測る。玄門側の墓坑の端から平均斜度６°前後で、墳丘裾部に沿って緩やかに下り、最後は海抜標高10.3m付近で終結していた。墓道の長さについては、ほぼ完存していると思われる。当時は海面レベルが現在よりも数m高く、東側の大きな谷は穏やかな細い入り江になっていたと考えられることから、付近に舟で着岸し、そのあたりから登ってきたものと思われる。当古墳の墓道は、過去３年間に調査された大浦・梅ヶ崎古墳群の中では、最もよく残っていたということで特筆されよう。

（４）遺物

出土状況　墳丘南西区の裾部付近から、坏身、広口壺、椀等の須恵器片を検出したが、復元できるものではなかった。これらの他に、玄室内北西区で積み重なって検出された敷石の中から、土玉１点が２つに割れた状態で出土した。

出土遺物

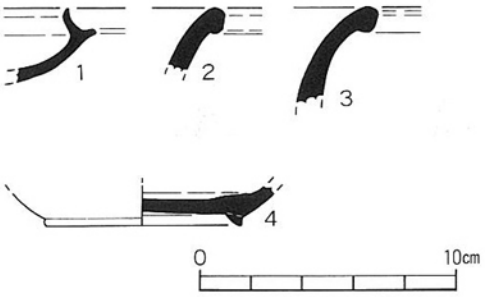
土器（第８図　図版５）

坏身（１）は、口径、器高不明。受け部の立ち上がりは短く、やや外反気味に開く。調整は外面底部はヘラケズリ、他は回転ナデ。ロクロは右回転。色調は外面は灰オリーブ、内面は灰色。墳丘南西部の裾部より出土。

広口壺（２）は、口径、器高不明。調整は内外面ともに回転ナデ。色調は外面が灰オリーブ色、内面は鈍い黄色。径４㎜前後の砂粒含む。墳丘南西部の裾部より出土。

広口壺（３）は、口径、器高不明。調整は内外面ともに回転ナデ。色調は外面が灰色、内面は灰色オリーブ色。広口壺（２）と同一個体の可能性もある。墳丘南西部の裾部より出土。

椀（４）は、口径、器高不明。高台部径7.6cm。低い貼り付け高台で、高台はやや丸みをもって外方に開く。調整は外面底部はヘラケズリ、他は回転ナデ。ロクロは右回転。色調はオリーブ灰色。この１点は奈良時代末～平安時代初頭頃のものとみられ、後世の混入品であろう。墳丘南西部の裾部より出土。



第８図　13号墳出土土器実測図

玄室内から出土した土玉は、直径６㎜、孔径２㎜前後とみられる。色調は黒褐色。　（奥原）

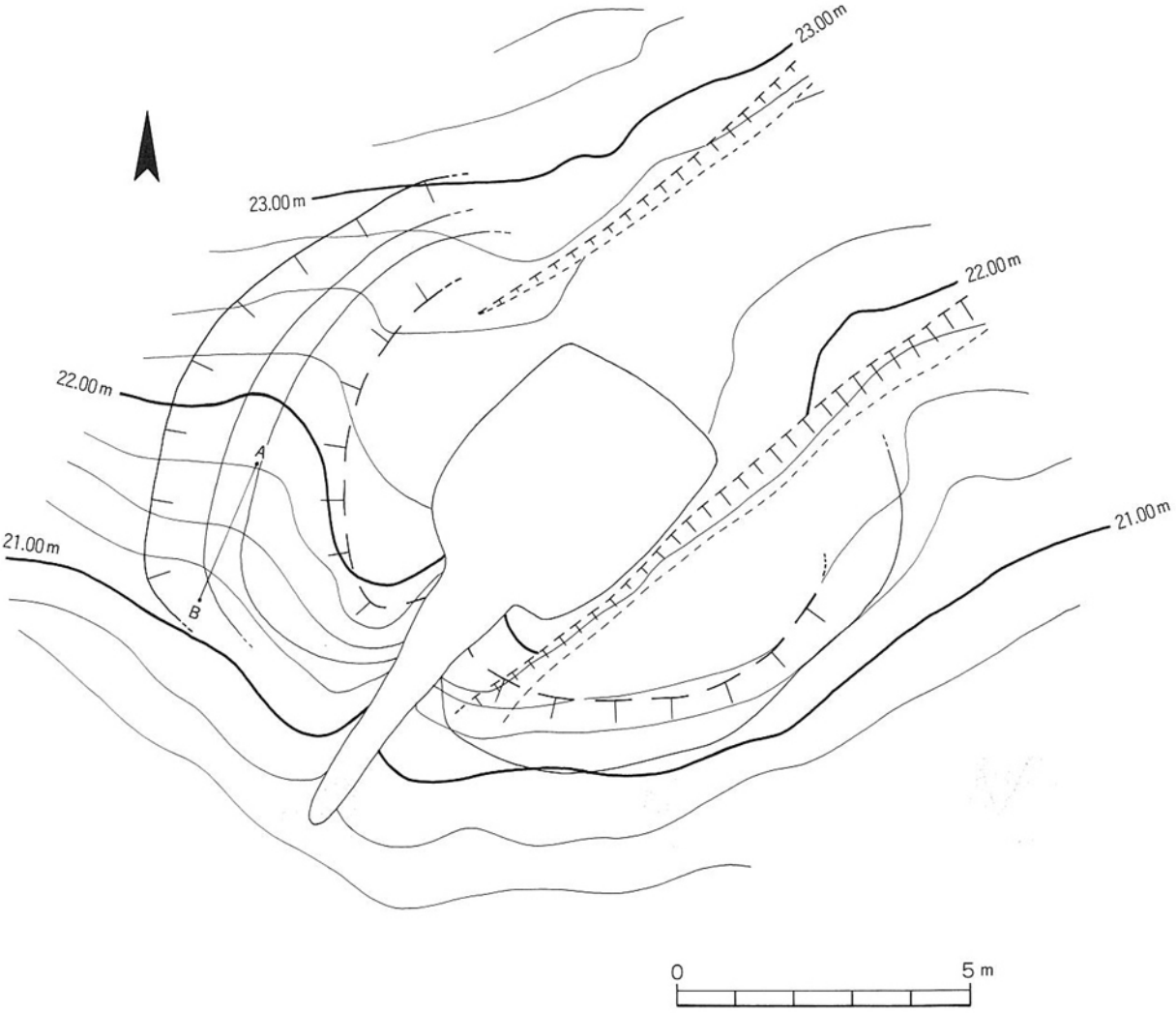
2．14号墳

（1）調査前の状況

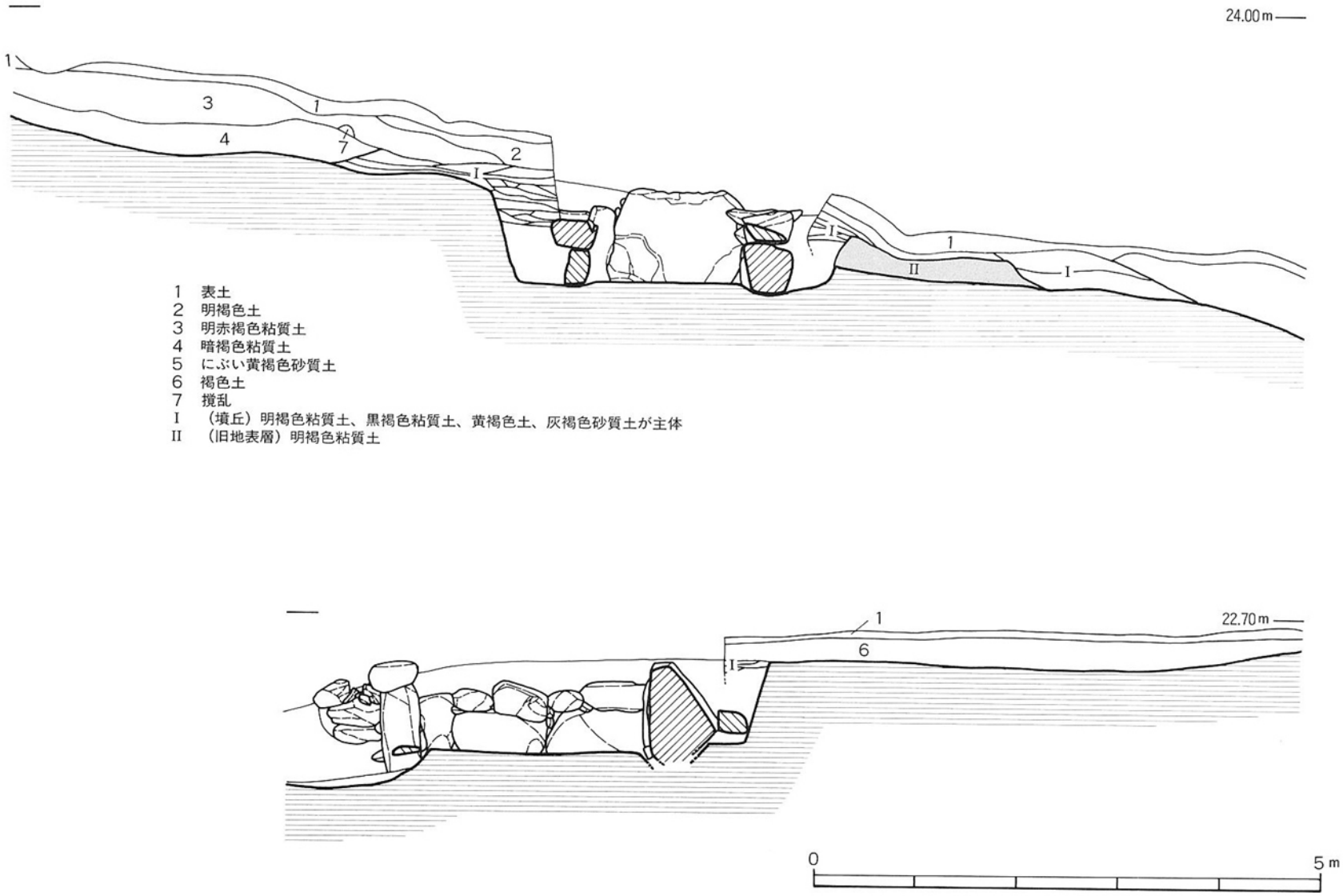
大浦古墳群Ⅳ地区は、ほぼ東西方向に延びる相原山の主丘陵のほぼ東南端に位置する。付近一帯は、北西から南東方向に浸食する谷の縁辺であり、等高線の間隔が比較的緩やかになる傾斜変換点にもあたっている。

大浦古墳群Ⅲ地区から梅ケ崎古墳群にかけての相原山の山裾のほとんどは、標高で見るとおよそ30m以下の緩斜面が、近世後半頃から徐々に畑として開墾されてきており、当然、それに伴って相当数の古墳が破壊されたものと推定される。その状況の中で、Ⅳ地区の調査区内で確認した合計３基の古墳中、14号墳は比較的遺存状況がよく、玄室内の遺物の出土状況も良好であった。とは言っても、畑の開墾による破壊は石室上部と墳丘の大半にまで及んでおり、畑として平坦化されていた調査前の地形は、視覚的に古墳の存在を確かめることを不可能にしていた。さらに、Ⅳ地区の他の２基の場合は、石室主体部の石材の一部が露呈していたのに対して、14号墳の石室近辺にそれらしい石は見あたらず、古墳の発見は一段と困難な状況であった。

その様な状況下での唯一の手がかりは、石室中心部付近から約７m南東方向に離れた地点に露出して



第９図　14号墳墳丘遺存状況図



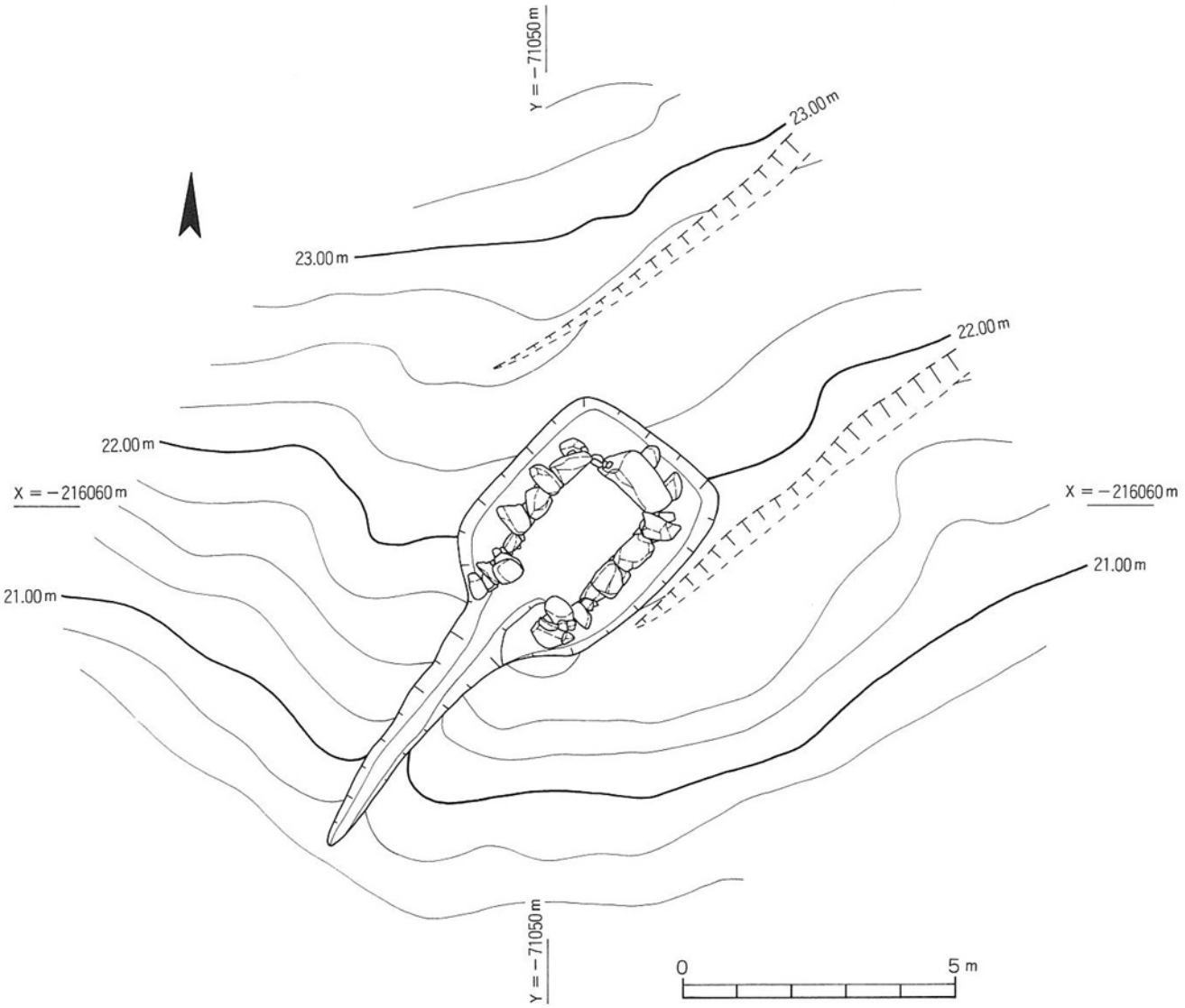
第10図　14号墳墳丘土層断面図

いた、幅50㎝、長さ100㎝程度の石で、念のため付近一帯のボーリング探査を行った結果、古墳発見に繋がったものである。

なお、14号墳の標高は石室中心部で22mを測り、最も近くに隣接する南東下位側方向の15号墳とは、標高差で８m、直線距離で約27m離れている。昨年度までの大浦古墳群の各古墳の展開状態と比べてみると、２基の間隔が少し離れすぎている感は否定できないが、石室の大きさ等に大きな差異が見られることから、15号墳から時期決定ができる遺物が出土していないものの、築造時期に若干の開きがあることも考えられる。

（２）墳丘

14号墳は、北東から南西に緩やかに続く丘陵端の地形を利用して築かれており、墳丘基底面の整形に際しても、通常の場合と同様、斜面上位側を中心に地山整形されたことは間違いない。それは、北から北東方向の墳丘及び周溝が、畑として開墾された段階で著しい削平を受けていたものの、北西方向には周溝と墓坑掘り方に続く墳丘基底面がはっきりと検出でき、南から南東方向は、墳丘裾部の削り出しと旧地表面を平坦にした基底面が確認できたことから明らかである。ただ、周溝について言えば、斜面上位の北東側が削平のため検出できなかっただけでなく、斜面下位にあたる南側でも確認で



第11図　14号墳調査後地形測量図

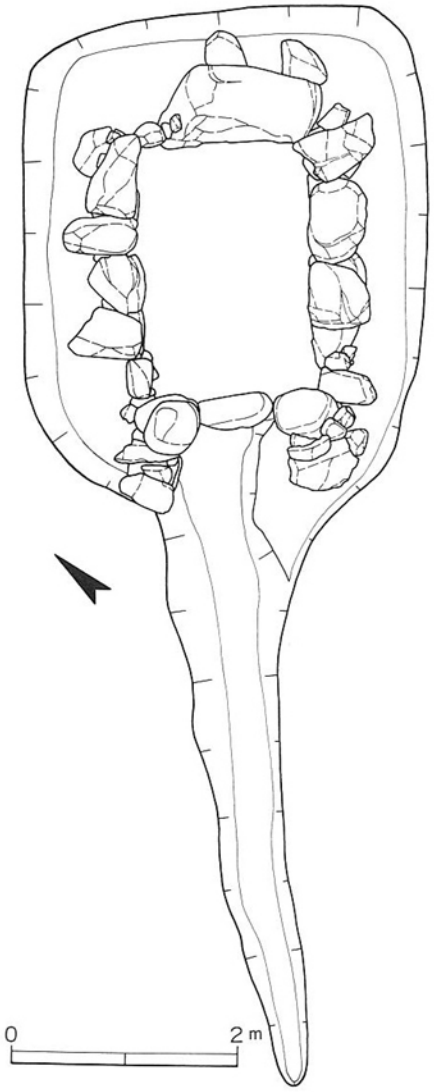
きておらず、一般的な形態のように馬蹄形に巡るのではなく、北西から北東にかけての斜面上位側のみに三日月形に掘られていた可能性がある。

墳丘の遺存状況も、斜面下位側にあたる南東方向以外は極めて悪く、石室構築に伴う版築の様子も、墓坑内の裏込めで確認できただけであった。残りのよい南東部と北西側の周溝をもとにすると、墳丘規模は直径10m前後、整形された基底面がほぼ円形であることから推定して形状は円墳であろう。

（3）石室

隣接する15・16号墳とは異なって、石室は等高線に平行に構築されており、開口方向も唯一南西である。石室の大きさに比べてゆとりを持って掘られている墓坑は、平面形はほぼ隅丸長方形で、左壁側4.3m、右壁側4.5m、幅は3.6mを測る。深さは、地山面から掘り込んだ最も深い北側の隅で68cm、築造時の地表面から掘り込んだ南側ではその半分の34cmであった。

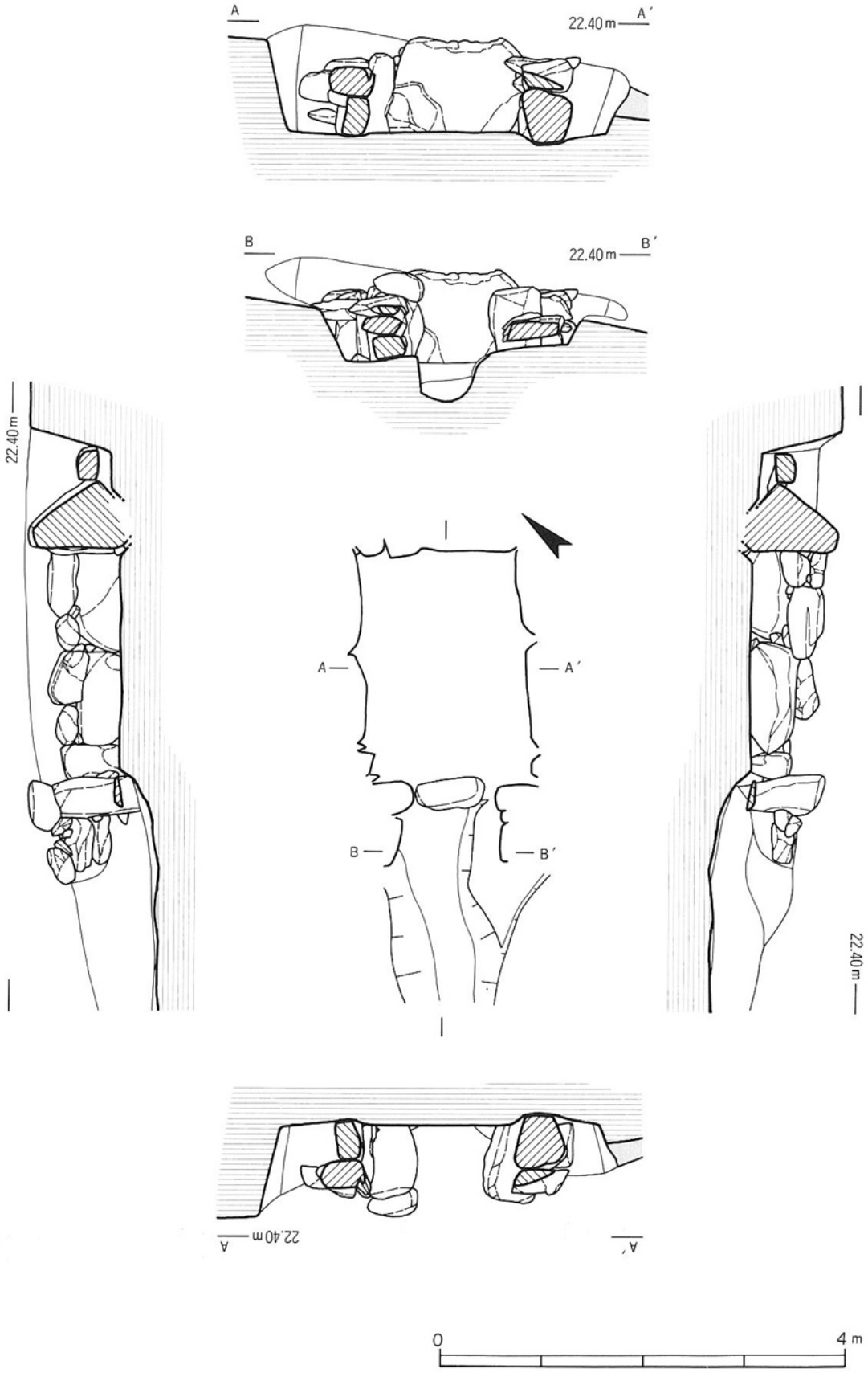
主体部は主軸をN50°Eにとり、南西方向に開口する両袖単室の横穴式石室である。天井石、楣石、奥壁の2石目以上、両側壁の3石目以上が失われていたが、石室及び墓道の検出の際、石室奥壁側で力石らしき石を2石、墓道部の撹乱層の下から楣石と推定される長さ140cm程度の柱状の石を検出した。石室の全長は左壁側3.4m、右壁側3.1m、石材は花崗岩である。



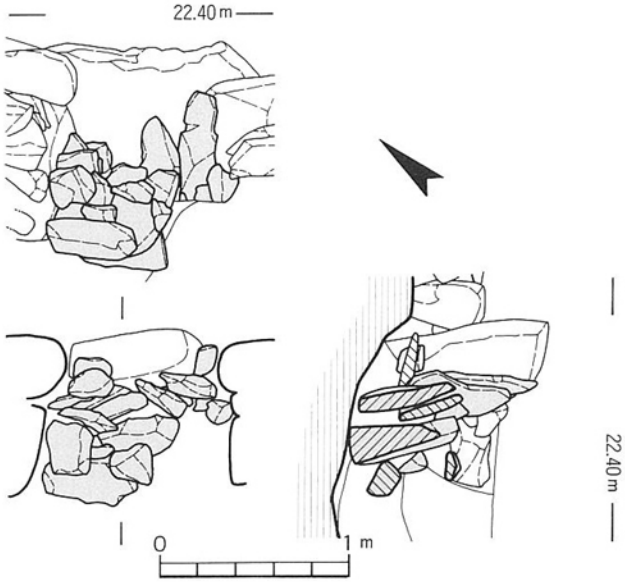
第12図　14号墳石室平面図

玄室　奥幅1.56m、中央部幅1.62m、前幅1.6m、左壁長2.20m、右壁長2.26m、奥壁から框石まで2.22mを測り、平面形はわずかに胴張りの長方形プランである。奥壁は、向かって右側に横幅約140cm、高さ約100cmの底部が分厚い断面三角形の大型の石を据え、その左側に幅25cm、高さ85cm程度の細長い柱状の石を並べている。大型の石の左隣に細長い柱状の石を立てる奥壁の構築方法は、隣接する梅ケ崎古墳群の石室でも何例か確認されており、鏡石と言ってもよいほどの大きさの石の隣にあえてもう一石立てるのには、玄室幅の確保以外の意味を持たせている可能性も否定できない。

両側壁は、奥壁側に50×90cm前後の石を2石それぞれ横長に据え、袖石側に柱状の石を1石据えて基部石とする。右壁側の基部石3石の上面のレベルは同じだが、左壁側は柱状の石が横長の2石より高いため、横長の石の上にやや小振りの石を4石並べて横目地をそろえている。いずれにしても、側壁の2石までの床面からのレベルは左右ほぼ同じで、隙間には小さな塊石をきっちりと詰め込んでおり、石の組み方も比較的丁寧な印象を受ける。また、基部石はいずれも石を縦置きに用いているのに対し、2石目の石はいずれも横置きに用いており、これは明らかに持ち送りを意識したものであろう。なお、側壁



第13図　14号墳石室実測図



第14図　14号墳閉塞施設実測図

の残存高は、左壁、右壁とも床面から約70cm前後であった。玄門部は両袖で、左袖は、幅50cm、厚さ40cm、長さ95cm程度の石を、玄室床面より24cm下から心持ち羨道側に傾けて立て、その上に厚さ30cmの角のとれた石を重ねて88cmの高さを確保する。対して右袖は、幅50cm、厚さ40cm、長さ90cmの石を玄室床面より14cm下から直立させているが、２石目は欠失している。左袖の高さから勘案して、右袖にも厚さ20cm程度の２石目の石を乗せ、同じ高さを確保したものと考えられ、楣石は２石目の上に据えられていたとみて間違いないであろう。なお、玄門幅は床面付近で最も広く88cmを測った。

一方、框石は最大幅32cm、長さ68cmの板状の１枚石が横長に置かれていたが、玄門閉塞施設の検出の際に、羨道部に流入した埋土を除去していった段階で、框石が玄室床面には載っていないことが判明した。おそらく框石は、閉塞を行った段階で設置されたものと思われ、これは後述する特異な羨道床面の形態と併せて興味深い資料である。

なお、玄室には床面近くまで多量の流入土が堆積していたが、玉類等の遺物を検出した面は、赤褐色の地山土を含む厚さ数mmの砂礫層であった。床面に砂礫を敷く例は、昨年度までの大浦古墳群の調査でも例があり、当玄室の床面も、地山まで掘り込んだ床面に直接砂礫が敷かれていたと考えたい。

羨道　石室前面に、袖石に続いて左壁長1.2m、右壁長0.84mの短い羨道側壁が付く。平面形は「ハ」の字状を呈し、羨道の平面形だけをとれば大浦古墳群Ⅱ地区の９～11号墳の羨道形態と近似し、同じく竪穴系横口式石室の系譜を引く可能性がある。しかし、そのまま長い墓道に直結する羨道床面は、玄室床面端から約30°の角度で傾斜しながら下がり、最低面で30cm余りも玄室より低いという、極めて特異な形態を示す。羨道に続く墓道も緩傾斜で下がっていることから、石室の排水性の向上のためという説明もできるが、30cmもの高低差を必要とするだけの説得力はなく、意図は不明である。

閉塞施設（第14図　図版３）　前述の特異な羨道床面から玄門部にかけて、閉塞施設を検出した。閉塞石は大小併せて18石使われており、その中で閉塞の中心となるのは合計５石の板石である。それらの板石は羨道手前から玄室側に立てかけるようにして階段状に積み上げられていた。ただ、左側で顕著なように、肝心の玄門部の閉塞が曖昧な感があり、玄門部の閉塞に使われた板石は抜かれている可能性もある。なお、板石の隙間を埋めたり、板石を押さえつけるために大小の塊石が使われていた。閉塞施設の最下位レベルと最上位レベルの比高差は約１mである。

墓道　墓坑に続いて、地山を掘り込んだ長さ約５mの墓道が、南西方向に延びていた。羨道付近は断面逆台形で、上端幅は最大で1.6m、底部幅は0.4m、深さ82cmを測る。一方、墓道先端部は、皿状の断面形を呈した後終結していた。

（4）遺　物

出土状況

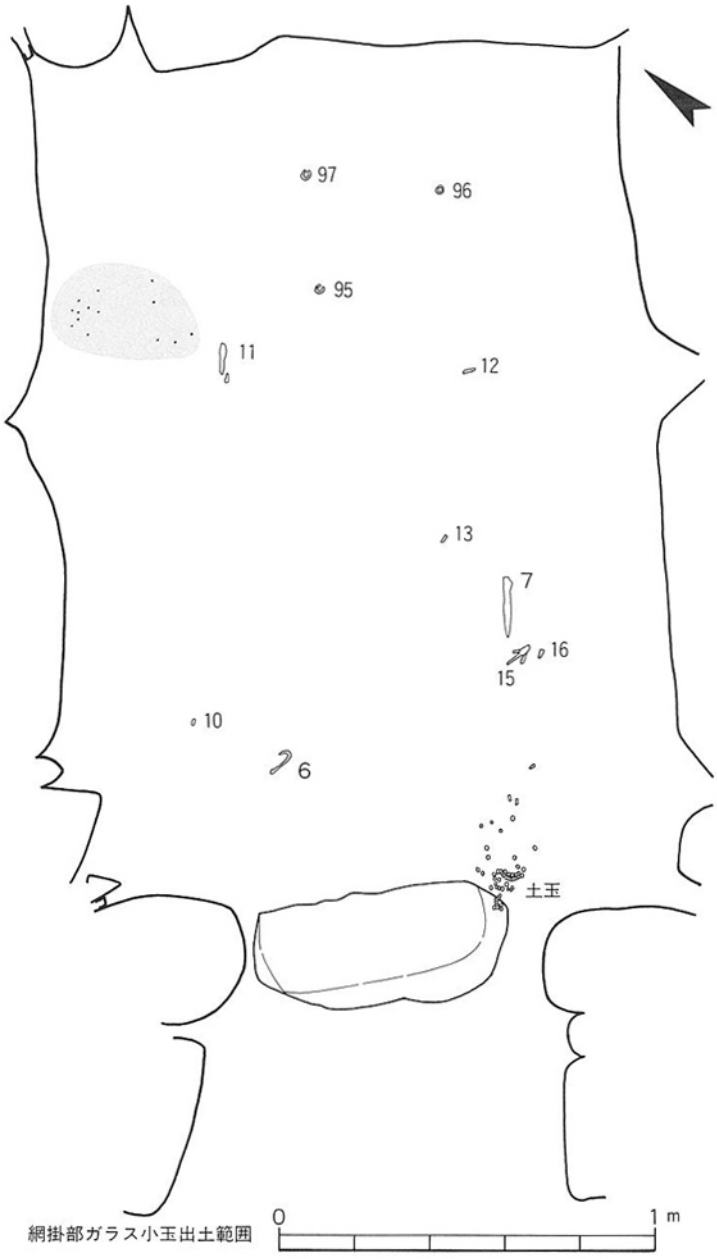
14号墳の遺構の上部に堆積していた厚さ１m近い畑の客土を除去する際、多数の近世後半期の陶磁器片に混じって須恵器片も数多く見つかったが、14号墳に伴うもののほとんどは、墓道内、玄室内、そして北西周溝部の３ヶ所で出土している。

墓道部では、南西方向に傾斜する地形に合わせて16層の堆積土が確認できた。この堆積土は、北側の土層確認用トレンチで見られた、時期の異なる２層の赤褐色の地山系の客土とは明らかに異なって、黒褐色系の粘質土を中心にするものである。玄門部に近いあたりに大きな撹乱層があり、その底には楣石らしき大型の石が落ち込んでいたが、それ以外は、長期間にわたる腐植土の流入の結果を示すものと思われる。出土した遺物はその堆積土の下層部から出土しており、１・２の須恵器坏蓋と４・５の須恵器坏身の合計４点である。床面からの出土ではないが、古墳築造時を推定する有力な手掛かりになるものと言ってよかろう。

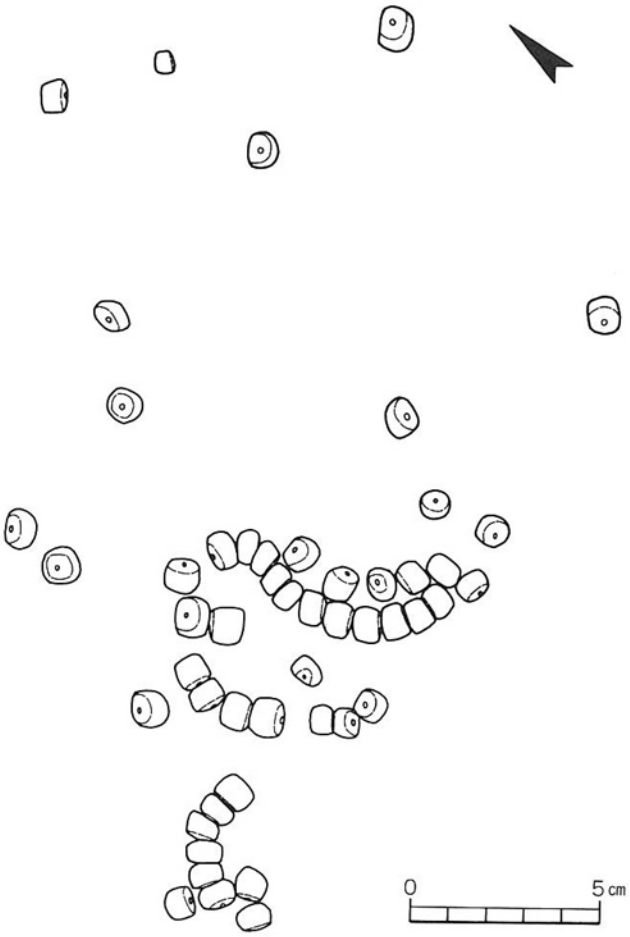
玄室内からは、鉄製品と装身具が多量に出土した（第15図　図版３）。これらは、玄室上部に堆積していた褐色系の流入土を、４分法で慎重に除去していった最終段階で検出した、赤褐色系の薄い砂礫層に載っていたものである。結果的に、砂礫層の下は赤褐色の地山土であったことから、遺物の出土した砂礫層が玄室の床面であると判断した。

まず装身具は、玄門部右袖石の近くで、土製の小玉を破片を含めて56点検出したが、そのうちちょうど50点を原位置で確保した（第16図　図版３）。大部分がつながった状態で出土しており、つながりの長さから腕飾りあるいは足飾りとして使われた可能性を窺わせる貴重な資料である。

一方、玄室の中央部やや奥壁寄りの左壁側で、ガラス製の小玉を破片を含めて合計21点検出した。出土場所が、土玉と対照の位置となっており、しかも、土玉とガラス玉が完全に別の場所で出土していることから、



第15図　14号墳石室内遺物出土状況図



第16図　14号墳石室内土玉出土状況図

後述する刀子の出土状態と合わせて、埋葬された人数の推定の手がかりとなるものである。

また、耳環3点は、玄室奥壁寄り中央部で検出した。大きさから見て、95と96は対の個体であろう。

鉄製品は、釣針と大型の刀子の完形品の他、多数の破片が出土した。そのうち、6の完形の釣針は、玄室左前隅、左袖石から約35cmの地点で、ちもとを左壁側にして出土。刀子は、7が土玉に近い場所で、11がガラス玉に近い場所で、ともに石室主軸に平行した状態で出土した。茎端部が互いに向き合うことと合わせて、前述した土玉とガラス玉同様の対照的な出土状態は、耳環数とも相俟って被葬者が少なくとも2体であることを窺わせるものである。

なお、北西周溝部からも、甕を中心とす

第17図　14号墳北西側周溝部遺物出土状況図

る須恵器片が多数出土したが、残念ながら実測可能な状態に復元できたものはない。出土レベルも、周溝床面より５～20cm高く、上位からの流れ込みの可能性が高い。

出土遺物

土器（第18図　図版５）　観察表は第１表に掲げる。

１の須恵器坏蓋は、天井部と体部の境に沈線を巡らし、体部から口縁部にかけてやや開く。口縁部は鋭く尖り、内側に段を持つ。また、体部内面には「ハ」の字状のヘラ記号が２ヶ所見られる。

２の坏蓋は、緩やかな曲線を描く天井部を持ち、１と同じく口縁部はやや開き気味である。口縁端部は丸く、口縁部外側にはヘラによる刻み目が入っているが、刻み目は長さ、角度、間隔とも不規則である。

３の坏蓋は墳丘南側の裾部で出土した。２と同様に、天井部との境に沈線を持ち、口縁部内側に段を持つが、体部が長めで、口縁部端がやや丸い点に相違点がある。

４の坏身は、やや厚めの直線的に内傾する立ち上がりを持ち、受部は若干の凹状を呈する。底部は丸い。

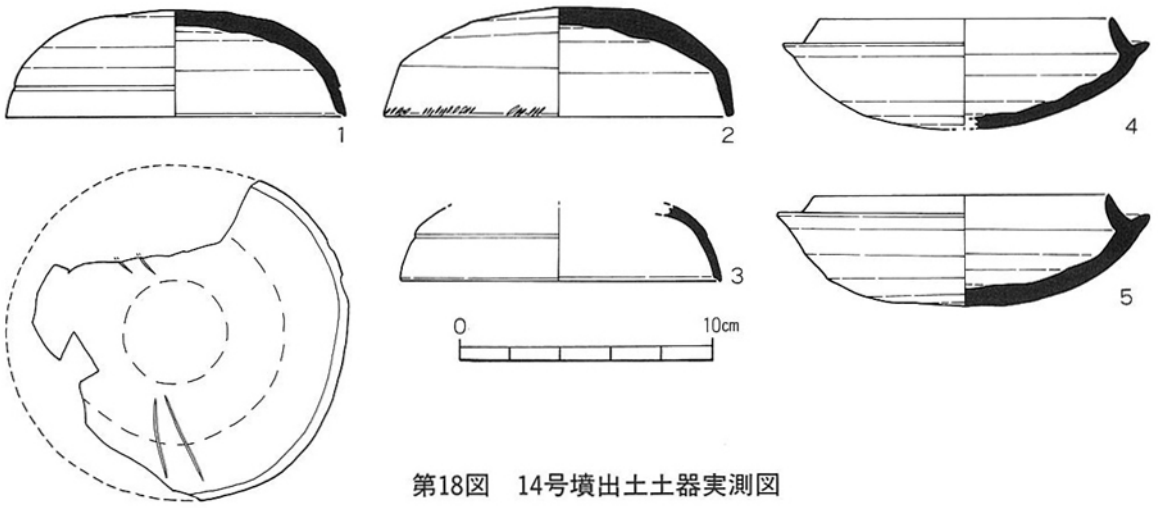
５の坏身は、立ち上がり先端部が尖り気味にやや外湾し、受部の凹状はやや深目である。底部は、４に比べると平底に近い。

鉄製品（第19図　図版５）

玄室内から破片を含めて多数の鉄製品が出土したが、結果的に種類が特定できたものは14点だけであった。

第１表　14号墳出土土器観察表

挿図 図版	器種	出土位置	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
18－1 5－1	坏蓋 須恵器	墓道内	口径 13.1 器高 4.2	外面天井部はケズリ。体部上半部は回転ヘラケズリ。内面天井部は静止ナデ。他は回転ナデ。ロクロ左回転。	密	良好	外 灰オリーブ色 内 灰オリーブ色	
18－2 5－2	坏蓋 須恵器	墓道内	口径 11.5 器高 (4.4)	外面天井部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ左回転。	砂粒含	良好	外 灰白色 内 灰白色	
18－3 5－3	坏蓋 須恵器	墳裾部 (南西)	口径 12.5 器高 不明	残存部は内外面とも回転ナデ。ロクロ右回転。	密	良好	外 灰オリーブ色 内 オリーブ灰色	
18－4 5－4	坏身 須恵器	墓道内	口径 13.2 器高 4.4	外面天井部は回転ヘラケズリ。内面天井部は静止ナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	密	良好	外 オリーブ灰色 内 オリーブ灰色	
18－5 5－5	坏身 須恵器	墓道内	口径 11.6 器高 4.4	外面天井部は回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	砂粒含	良好	外 青灰色 内 青灰色	



第18図　14号墳出土土器実測図

釣針（6）　高さ6.6cm、ふところ幅2.2cm、身は径0.45cmの断面円形を呈す。曲がりは、錆ぶくれにより明確ではないが、長径0.5cmの断面楕円形と思われる。ちもとは身と比べ細くあごは持たない。ちなみに、山口県内の古墳からの釣針の出土は、山口市の天神山８号墳での５点と豊浦町甲山古墳群W－７号墳で１点の出土が知られているが、それらに次ぐ出土例である。

刀子（７～11）

７は完形の両関の刀子。全長15.7cmと比較的大型で、先細りの身部の幅は関部で最大となり1.6cm、身の厚さは0.45cmを測る。長さ5.9cmの茎は尻部に向かい次第に細くなる。

８も身部先細りの両関の刀子。全長11.3cm、身の長さ6.8cmで刃の部分のほとんどを欠失している。長さ4.5cmの茎は最大幅0.9cm、厚さ0.35cmを測る。

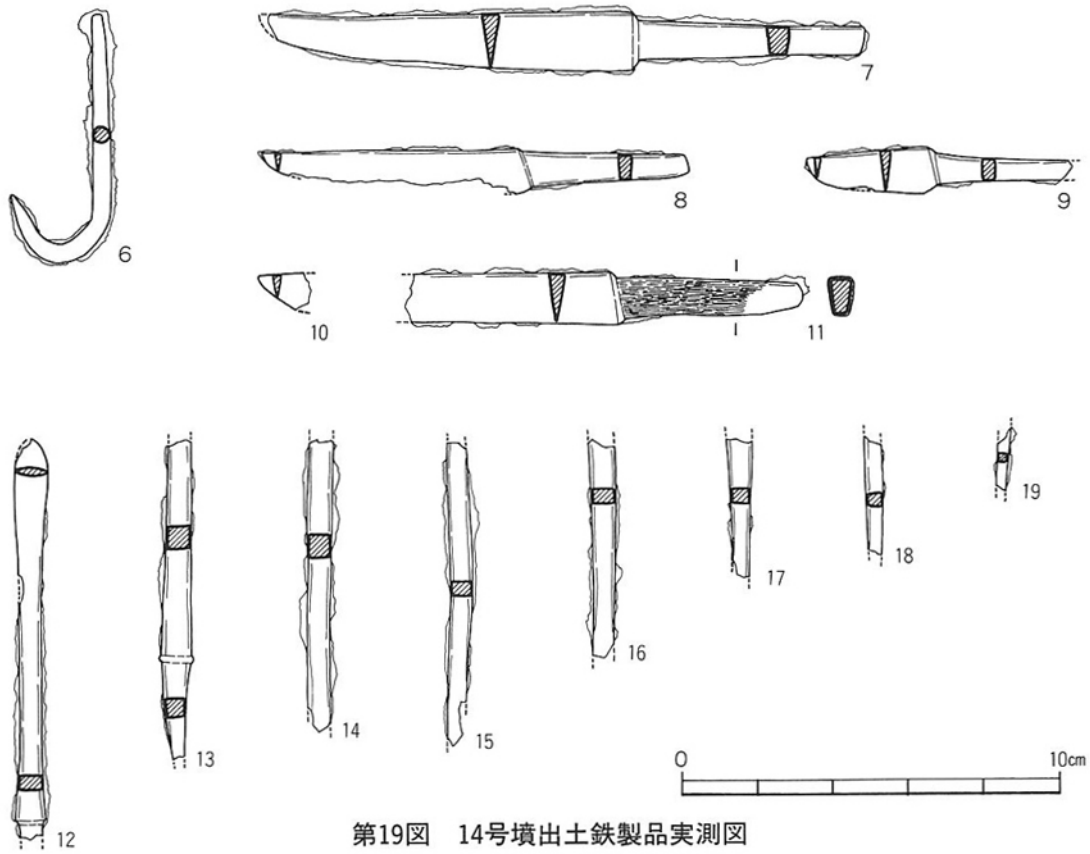
９の身部は3.5cmと極めて短く、幅は両関部で最大となり1.2cm、厚さ0.3cm。茎部は尻部端が錆ぶくれのため不明瞭だが残存長3.4cm、幅0.7cm、厚さ0.3cmを測る。

10も形状と断面形から刀子の切先部と思われる。

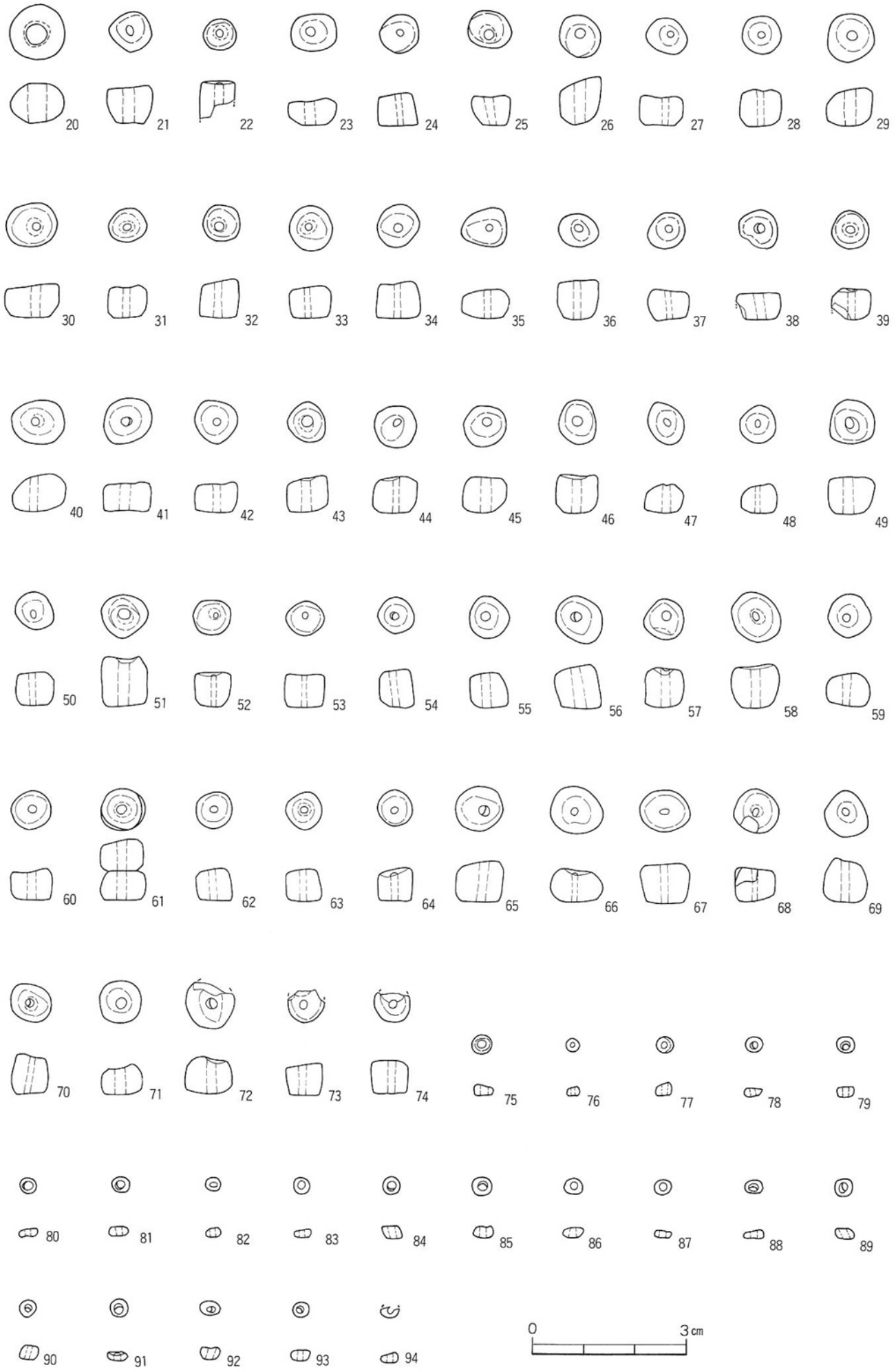
11は身部の前半部を欠失する刀子。両関の身部は身幅1.4cm、厚さ0.4cm。長さ4.5cm、幅1.1cm、厚さ

第２表　14号墳出土鉄鏃計測表　　（　）は残存値　単位はcm

挿図	図版	出土位置	全長	身部		箆被部		茎部		備考
				長さ	幅	長さ	幅	長さ	幅	
19－12	5－12	玄室内	(10.5)	不明	0.9	不明	0.6	(0.5)	0.6	鑿箭式　茎部欠損
19－13	5－13	玄室内	(8.4)	－	－	(8.4)	0.7	(2.5)	0.5	
19－14	5－14	玄室内	(7.7)	－	－	(7.7)	0.6	－	－	
19－15	5－15	玄室内	(8.0)	－	－	(8.0)	0.6	－	－	
19－16	5－16	玄室内	(5.8)	－	－	(5.8)	0.65	－	－	
19－17	5－17	玄室内	(3.6)	－	－	－	－	(3.6)	0.6	
19－18	5－18	玄室内	(3.1)	－	－	－	－	(3.1)	0.45	
19－19	5－19	玄室内	(1.6)	－	－	－	－	(1.6)	0.3	



第19図　14号墳出土鉄製品実測図



第20図　14号墳出土小玉実測図

第３表　14号墳出土小玉計測表

挿　図	直径mm	孔径mm	厚さmm	材　質	色・調
20－20	10.3	3.8	7.5	ガラス	コバルトブルー
20－21	8.1	2.0	7.1	土	黒褐色
20－22	7.0	1.5	(6.9)	土	黒褐色
20－23	8.9	2.1	4.9	土	黒褐色
20－24	7.4	1.1	5.8	土	黒褐色
20－25	7.2	2.1	5.8	土	黒褐色
20－26	8.3	2.0	8.9	土	黒褐色
20－27	8.2	1.2	5.9	土	黒褐色
20－28	7.9	1.5	7.0	土	黒褐色
20－29	9.2	1.9	7.2	土	黒褐色
20－30	10.5	1.8	6.9	土	黒褐色
20－31	7.2	1.4	6.1	土	黒褐色
20－32	7.2	1.8	7.1	土	黒褐色
20－33	9.0	1.3	6.0	土	黒褐色
20－34	8.5	1.8	6.9	土	黒褐色
20－35	9.0	1.5	5.8	土	黒褐色
20－36	8.1	1.3	7.2	土	黒褐色
20－37	7.5	1.8	5.8	土	黒褐色
20－38	8.5	2.0	5.0	土	黒褐色
20－39	7.0	1.8	5.4	土	黒褐色
20－40	10.0	1.7	7.1	土	黒褐色
20－41	9.0	1.8	5.6	土	黒褐色
20－42	9.2	1.5	5.8	土	黒褐色
20－43	8.2	2.0	6.5	土	黒褐色
20－44	9.2	1.4	6.5	土	黒褐色
20－45	9.0	1.9	7.0	土	黒褐色
20－46	8.0	2.1	6.5	土	黒褐色
20－47	8.0	1.8	5.1	土	黒褐色
20－48	7.9	1.2	5.5	土	黒褐色
20－49	7.2	2.2	7.2	土	黒褐色
20－50	8.1	1.8	6.8	土	黒褐色
20－51	9.1	2.1	8.9	土	黒褐色
20－52	8.7	1.1	6.8	土	黒褐色
20－53	6.5	1.2	6.2	土	黒褐色
20－54	7.9	1.8	7.2	土	黒褐色
20－55	8.1	2.0	6.5	土	黒褐色
20－56	8.1	2.1	8.1	土	黒褐色
20－57	8.9	2.0	7.2	土	黒褐色
20－58	9.9	1.9	8.1	土	黒褐色
20－59	8.2	1.5	6.9	土	黒褐色
20－60	8.1	1.6	6.0	土	黒褐色
20－61	8.2	2.0	11.9	土	黒褐色
20－62	7.2	1.5	6.1	土	黒褐色
20－63	8.0	1.4	6.1	土	黒褐色
20－64	7.2	1.5	6.0	土	黒褐色
20－65	9.0	2.1	7.8	土	黒褐色
20－66	10.0	1.3	6.8	土	黒褐色
20－67	9.3	1.6	7.2	土	黒褐色
20－68	8.8	1.5	6.6	土	黒褐色
20－69	8.6	1.7	7.0	土	黒褐色
20－70	7.2	1.6	7.5	土	黒褐色
20－71	8.5	2.0	5.9	土	黒褐色
20－72	9.5	1.9	7.0	土	黒褐色
20－73	7.2	1.6	6.5	土	黒褐色
20－74	7.6	1.6	(7.2)	土	黒褐色
20－75	3.8	1.8	2.1	ガラス	黄緑色
20－76	2.4	1.1	1.9	ガラス	黄緑色
20－77	3.4	1.4	2.2	ガラス	スカイブルー
20－78	3.1	1.5	1.5	ガラス	スカイブルー
20－79	3.2	1.6	1.9	ガラス	コバルトブルー
20－80	2.9	1.8	1.3	ガラス	コバルトブルー
20－81	3.5	1.6	1.8	ガラス	スカイブルー
20－82	2.9	1.6	1.5	ガラス	スカイブルー
20－83	2.6	1.8	1.6	ガラス	スカイブルー
20－84	3.6	1.8	2.2	ガラス	スカイブルー
20－85	3.4	2.0	2.1	ガラス	スカイブルー
20－86	3.2	1.3	2.1	ガラス	スカイブルー
20－87	2.9	1.4	1.5	ガラス	スカイブルー
20－88	3.6	1.6	1.3	ガラス	スカイブルー
20－89	3.3	1.7	2.1	ガラス	コバルトブルー
20－90	3.3	1.2	2.9	ガラス	黄緑色
20－91	3.4	2.0	1.6	ガラス	スカイブルー
20－92	3.8	1.8	2.3	ガラス	スカイブルー
20－93	3.1	1.8	2.0	ガラス	スカイブルー
20－94	3.2	1.5	1.9	ガラス	黄緑色

0.5cmの茎部の大部分には木質が残る。

鏃（12～19）

計測表は、第２表に掲げる。

12は断面レンズ形の身部を持つ鑿箭式の鉄鏃。錆のため関部は不明だが、身部と箆被部を含めた長さは10.1cm。茎部のほとんどは欠失する。

13は箆被部と茎部で、ともに断面形は方形。

14～16の３点は鏃の箆被部。

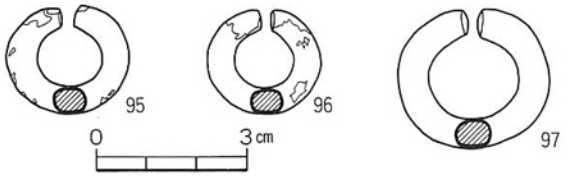
17～19は形状から鏃の茎部と思われる。

装身具（第20・21図　図版５・６）

小玉（20～94）　20のガラス玉が墓道埋土中から出土した他は、全て玄室内で検出した。なお、計測表は第３表に掲げる。

耳環(95～97)　95は外法径2.40×2.14cm、内法径1.28×1.16cm。0.63×0.58cmの断面は楕円形で突合部幅0.22cmを測る。96は外法径2.29×2.09cm、内法径1.20×1.13cm。断面は0.62×0.58cmの楕円形を呈し突合部幅0.20cm。出土した3個体の中で最も大きい97の外法径は3.01×2.74cm。内法径0.71×0.68cm、断面は0.71×0.68cmで、突合部幅0.61cmを測る。

（大村）



第21図　14号墳出土耳環実測図

3．15号墳

（1）調査前の状況

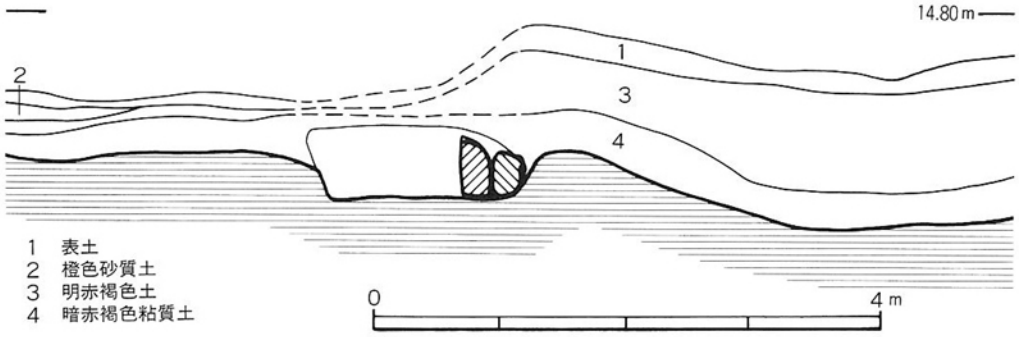
15号墳は14号墳の南東約27m、標高14mの丘陵緩斜面に位置しており、ほぼ真南の方向に同じ開口方向を持つ16号墳が隣接している。調査前の現況は、Ⅳ地区の他の２基と同じく畑であったが、畑の段落ちに石室の石材と思われる石が２石露呈しており、それが唯一の古墳の存在を推測させる手かがりであった。

（2）墳丘

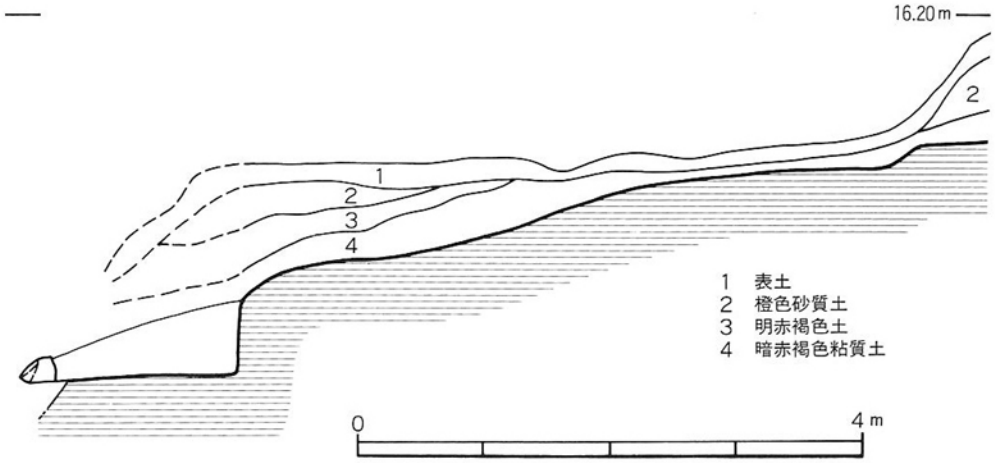
石室中央部がちょうど畑の段落ちに当たっており、畑の開墾に際して、石室中央部から前半分を完全に削りとったものと思われる。一方、斜面上位側に残された石室後半部の周囲も、地山面まで削平され、墳丘と思われる土盛りは全く確認できなかった。破壊の程度が著しく、墳丘形状は不明である。ただ、隣接する16号墳との距離は、石室中心部間を測ると約16mであり、15号墳の墓坑が16号墳のそれより一回り小さいことと、16号墳の北側の土層観察用トレンチには明確な切り合い関係が確認できなかったことから、円墳とした場合の墳丘規模は、直径８mを超えることはないと思われる。

（3）石室

極めて遺存状況の悪い中で、石室後半部の掘り方を手がかりにすると、石室の開口方向は南東で、等高線に直交するかたちで築かれたものと思われ、ほぼ真南に隣接する16号墳と全く同様と言ってよい。残された墓坑の平面形は、隅丸方形の形状を呈し、残存長は左壁側が1.5m、右壁側が1.4mであっ



第22図　15号墳Ｗトレンチ・Ｅトレンチ土層断面図



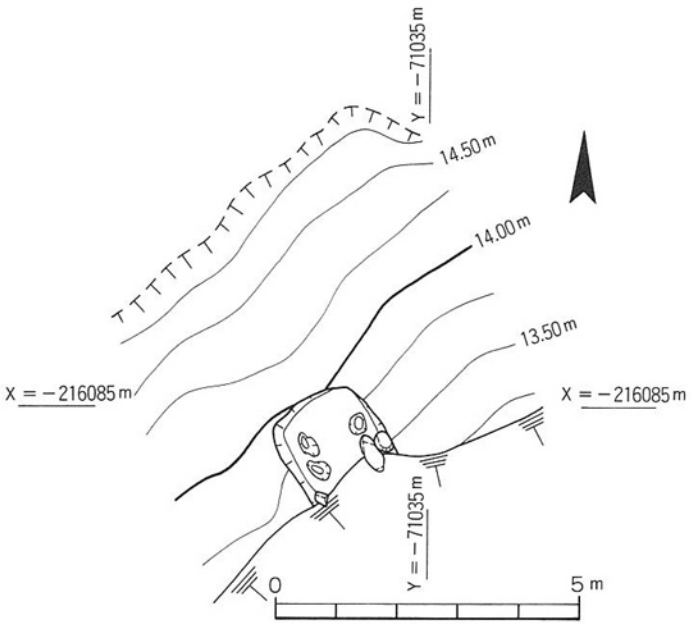
第23図　15号墳Ｎトレンチ土層断面図

た。

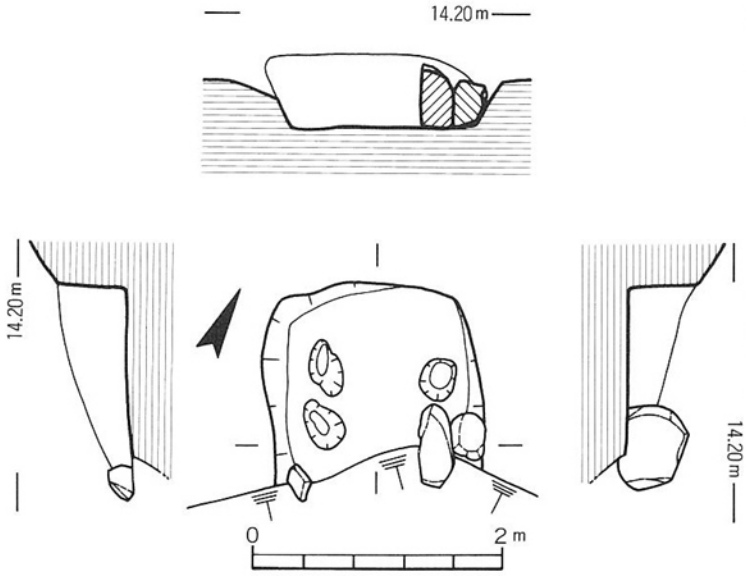
主体部の主軸は、墓坑をもとにするとN 27° Wとなり、16号墳とほぼ同方向である。墓坑の大きさは一回り小さいものの、石室形態が類似する可能性がある。石室長は不明。残った石室の石材は、花崗岩であった。

玄室　玄室床面検出に際して、大小７石の塊石と割石を検出したが、いずれも床面上に散乱した状態であった。また、墓坑掘り方の地山面で、石室石材の抜き取り痕を３ヶ所検出した。位置関係から見て、側壁の抜き取り痕と思われる。唯一、石室構築時の状態のままと思われる石は、右壁側で検出した一石の基部石のみである。高さ約55cm、幅約65cmで、石室の基部石の大きさとしては小振りの部類に入る。

玄室長は不明だが、左壁側に２ヶ所残された抜き取り痕と、右壁側に残された基部石をもとにすると、極めて幅の狭い玄室であり、石室形態、築造時期ともに興味深い古墳である。



第24図　15号墳調査後地形測量図



第25図　15号墳石室実測図

（４）遺物

出土状況

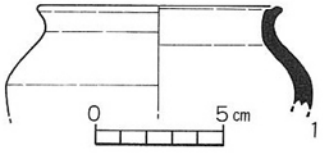
右壁側に残存する基部石直上の暗赤褐色堆積土から、須恵器の短頸壺と土錘が各１点出土した。堆積土は、畑の最も古い段階の客土であり、遺物が15号墳に伴うものかどうか確定する決め手はない。

土器（第26図　図版６）

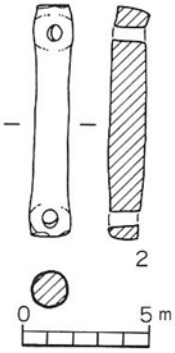
須恵器短頸壺（１）　口径9.0cm。厚めの口縁部はやや外反して短く立ち上がり、内側に浅い段を持つ口縁端部は丸く外に突き出す。体部はなで肩である。

土製品（第27図　図版６）

土錘（２）　断面形がほぼ円形を呈する両端穿孔の棒状の土錘で、出土したときは中央部で２つに折れていたが、完形品である。長さ9.1cm、幅1.5cm前後、重さ24.0gを測る。両端から５～７mmのところに直径６mm前後の円孔を焼成前に穿っている。胎土は精選され、土師質である。　（大村）



第26図　15号墳出土土器実測図



第27図　15号墳出土土錘実測図

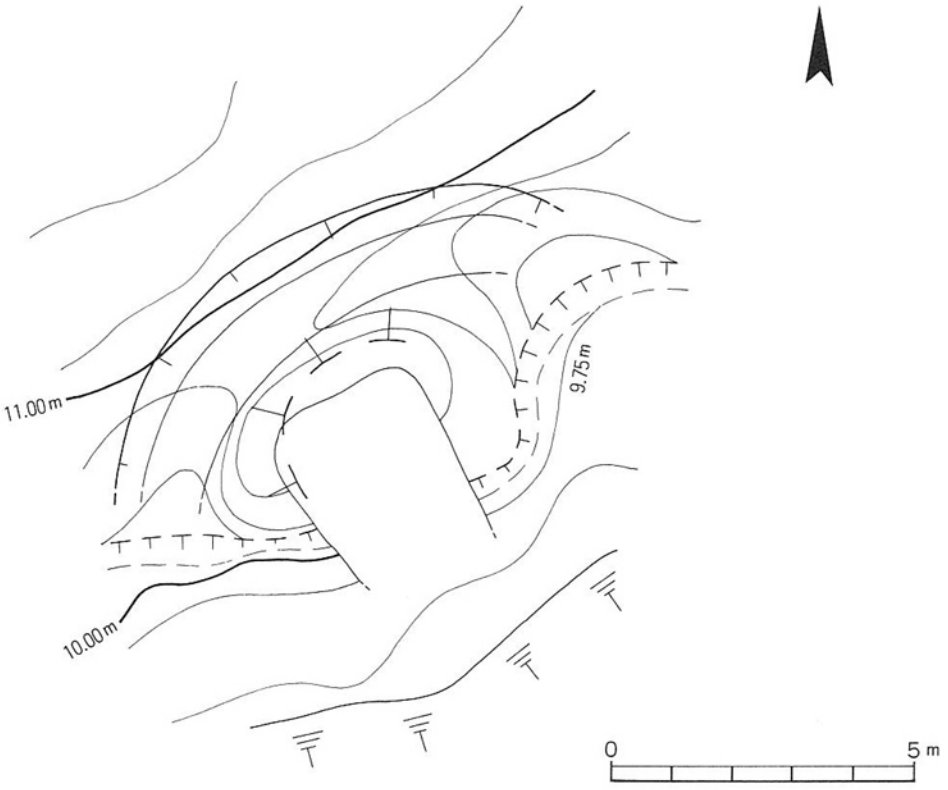
4．16号墳

（1）調査前の状況

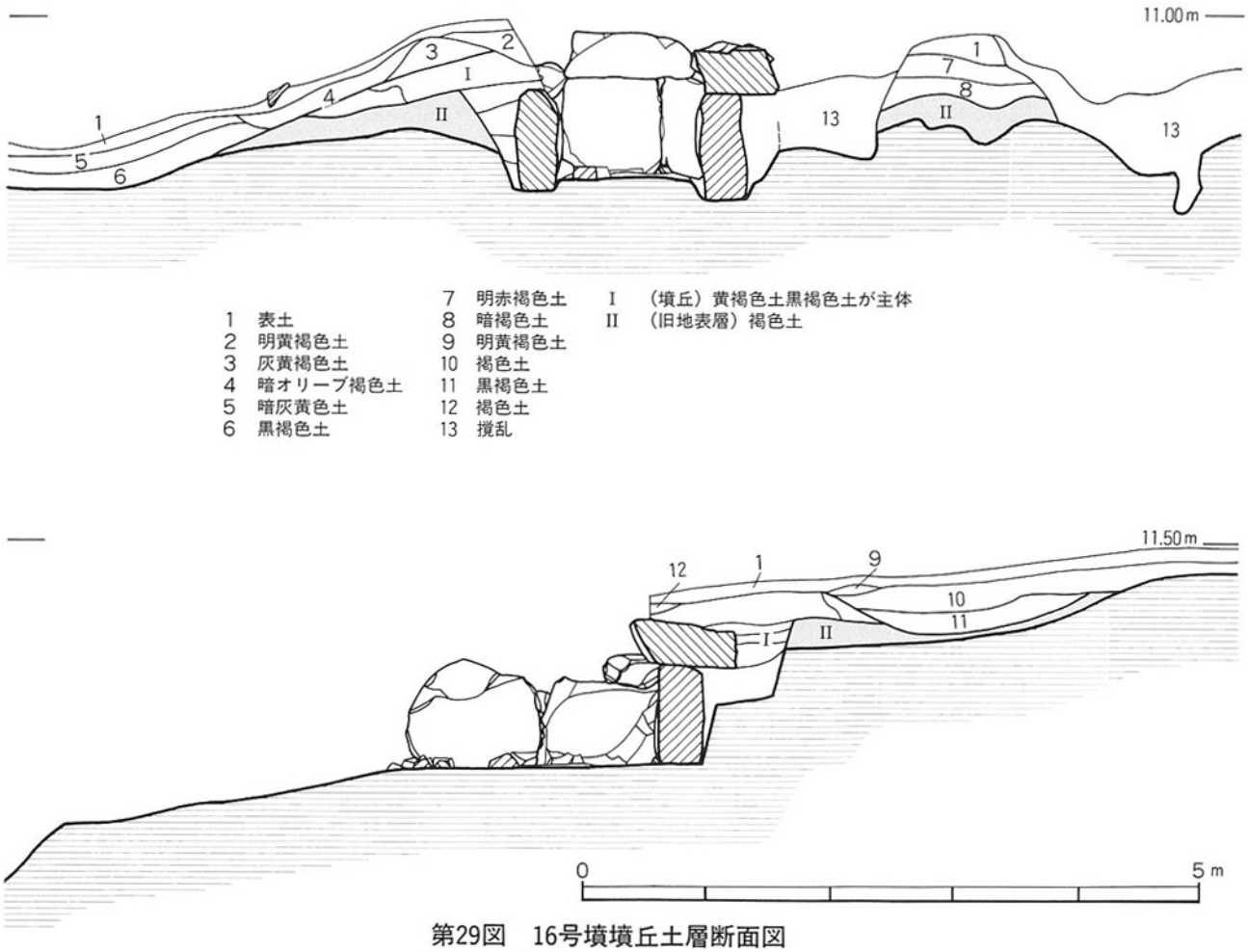
16号墳は、相原山から北東に伸びる丘陵南斜面上に並ぶ大浦Ⅳ地区の古墳群の中で、最も南に位置している。16号墳からやや離れた斜面上位の北側に15号墳が隣接している。石室付近の標高は約10m。付近は段々畑として利用されてきたため、調査前、古墳の墳丘は外見上は確認できず、畑の崖面に石室を構築する石材の一部が露出している状態であった。また当古墳のすぐ東側には、径0.7×0.6m、深さ0.5m程度のほぼ円形の掘り込みがあり、後世の撹乱坑であると思われる。開口部の方向である南東側は削平を受け、墳丘もろとも石室の半分以上が消失していた。

（2）墳丘

設定したトレンチの土層観察から、墳丘封土は斜面上位の北東側から西側にかけて一部残っており、それが確認できたのは、西トレンチと北トレンチであった。西トレンチでは、墳丘が最大で厚さ約0.9m、北トレンチでは築造当時の地表面から最大で厚さ約0.3m残っていた。斜面上位の北東側から西側にかけては、上端幅1.3～1.8m、底幅0.9～1.1m、深さ0.2～0.4m程度の周溝が確認された。周溝の断面形は浅い皿状を呈する。検出された北東側から西側にかけての形状や、斜面を利用して築造している古墳の一般的な例から推測すると、形状は馬蹄形であった可能性が高い。周溝内の堆積土は上位から褐色土、黒褐色土。古墳の周辺部、すなわち尾根の斜面の広い範囲にわたっては、近世以降とみられる畑の開墾時に大規模な客土が盛られており、２層または３層の異なる種類の土を厚さ60cm以上入れて整地していた。東トレンチの土層観察では、明赤褐色土と暗褐色土からなる２層の客土層は認められたが、著しく撹乱を受け、墳丘封土及び墳丘立ち上がりラインは確認できなかった。墳丘径は推定で東西８m前後、南北６m前後で、平面形は東西にやや長い円墳であったと推定される。



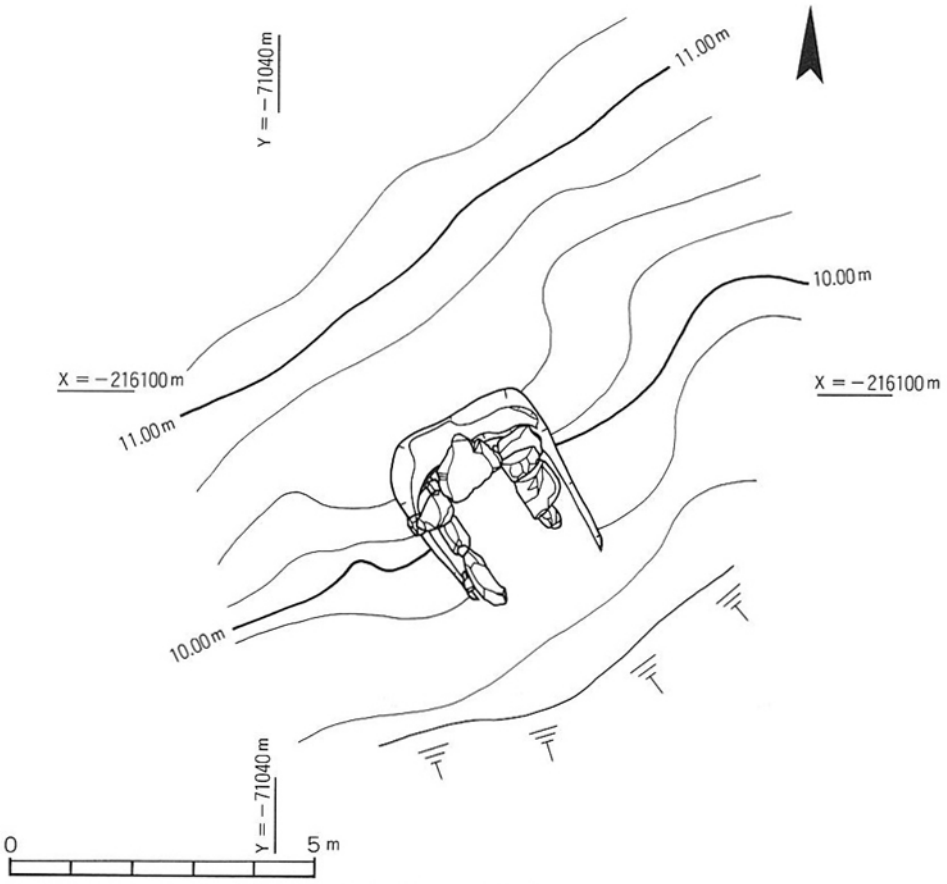
第28図　16号墳墳丘遺存状況図



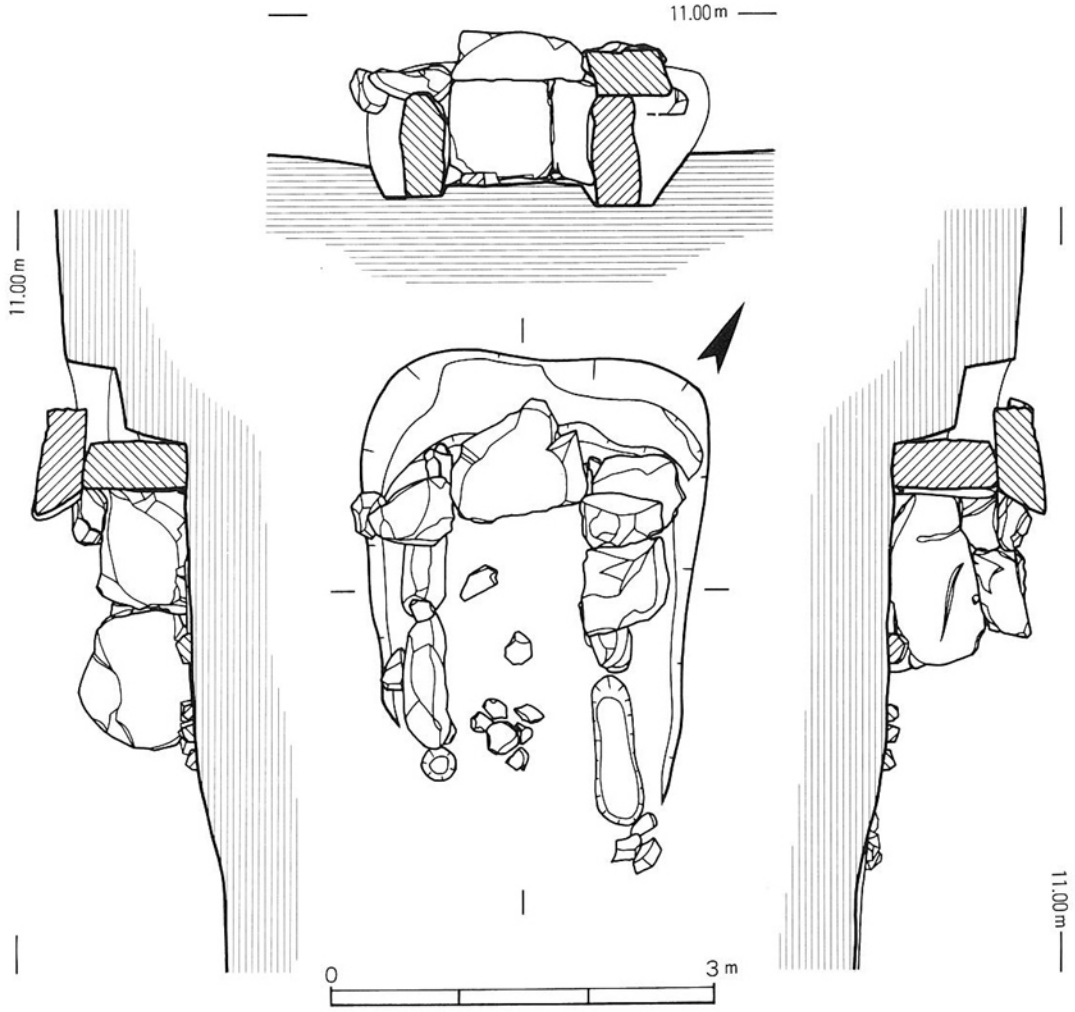
1 表土
2 明黄褐色土
3 灰黄褐色土
4 暗オリーブ褐色土
5 暗灰黄色土
6 黒褐色土
7 明赤褐色土
8 暗褐色土
9 明黄褐色土
10 褐色土
11 黒褐色土
12 褐色土
13 撹乱

I （墳丘）黄褐色土黒褐色土が主体
II （旧地表層）褐色土

第29図　16号墳墳丘土層断面図



第30図　16号墳調査後地形測量図



第31図　16号墳石室実測図

（3）石室

墓坑は奥壁側の半分程度しか残存していなかったが、平面形は奥壁側の幅がやや広い隅丸長方形である。築造時の地表面から掘り込んだ深さは、斜面上位の奥壁中央付近が最も深く、0.94mを測る。主体部の主軸は、N33°Wを示す。石室は開口部側が欠失していたが、玄室の最大幅が約1.35mと狭いことから、南東に開口する竪穴系横口式石室であった可能性もある。石室内には大量の土砂が流入しており、側壁の一部とみられる3石の大きな石が崩落していた。右壁側の床面には、縦長に据え置かれていたと思われる115×94×32cm程度の腰石が左壁側に向かって倒れているのを検出した。石室の平面プランはほぼ長方形に近い形状であったと推定される。石材の石質は花崗岩である。

玄室　玄室は、残存長2.0m、奥壁幅1.2m、残存最大幅1.35mを測る。奥壁には、80×76×40cm程度の石材を墓坑基底面にほぼ垂直に据え、その右側に82×40×36cm程度の石材を据えていた。2石とも床面からの高さをほぼ0.8mのレベルに揃え、その上に上面が113×92cm、厚さ48cmの逆台形の石材を横長に載せ、持ち送り状に積んでいた。左壁側は2石、右壁側には1石の大きめの石材を腰石として横長に据えている。残存高は、奥壁1.20m、右壁0.90m、左壁1.13m。側壁は、左右それぞれ現状で4°ほど内傾させて据えていた。玄室床面も著しく撹乱を受けていたが、床面中央部から西側にかけて、長径20cm前後の敷石と思われる平たい角石が8石ほど検出された。

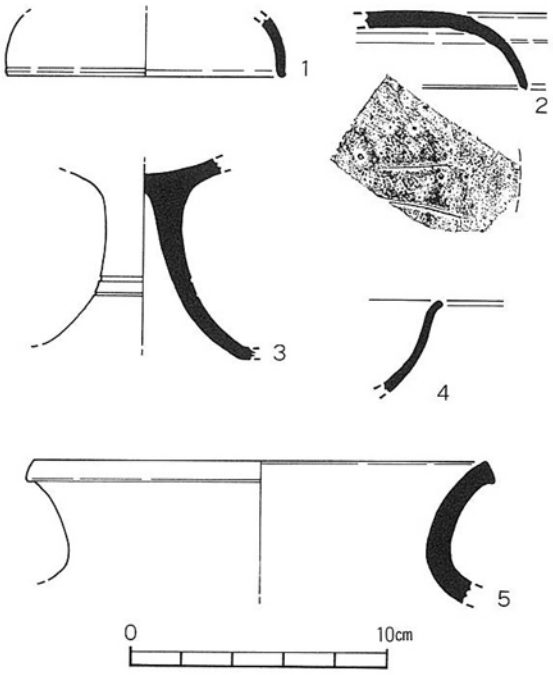
（4）遺物

出土状況　玄室内から坏蓋、坏身、甕、南西区墳丘裾部からは高坏。南東区墳丘裾部からはヘラ記号が刻まれた坏蓋。北東区周溝内からは甕、土錘、南トレンチからは坏蓋が出土した。土師質の土錘を除いては、他はすべて須恵器である。

出土遺物

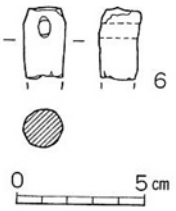
土器（第32図　図版６）

坏蓋（１）は、口径10.6cm、器高不明。調整は内外面ともに回転ナデ。ロクロは右回転。口縁部は内湾し、端部がわずかに外反する。色調は内外面ともに灰色。径２～３㎜程度の砂粒含む。玄室内南西区の敷石上面より出土。



第32図　16号墳出土土器実測図

坏蓋（２）は、口径不明、器高3.0cm。調整は外面天井部は回転ヘラケズリ。内面と外面端部は回転ナデ。外面肩の部分に細い沈線が巡る。口縁端部内面に稜の痕跡がある。ロクロは右回転。天井部内面に「ハ」の字状のヘラ記号が刻まれている。これと類似したヘラ記号が刻まれた須恵器の坏蓋が、斜面上位の大浦14号墳からも１点出土している。色調は外面は灰黄色、内面は黄灰色。径３～４㎜程度の砂粒含む。南東区墳丘裾部より出土。



第33図　16号墳出土土錘実測図

高坏（３）は、脚部の中程に２本の沈線が巡っており、調整は内外面ともに回転ナデ。色調は外面はオリーブ黒色、内面は灰色。南西区墳丘裾部より出土。

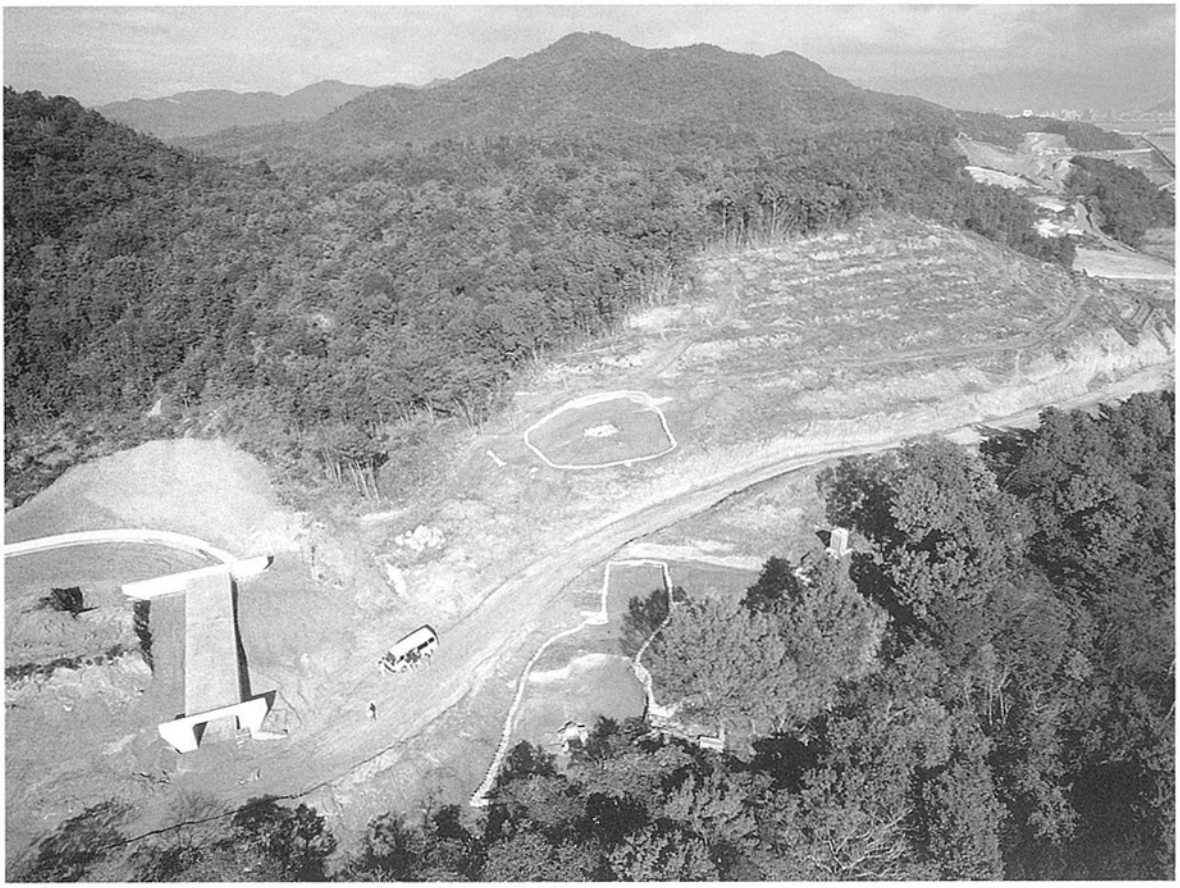
坏身（４）は、口縁部がやや内湾して立ち上がり、端部で外反する。口縁端部はやや丸みをもち薄く仕上げている。調整は内外面ともに回転ナデ。ロクロは右回転。色調は外面は灰色、内面はオリーブ灰色。玄室内南西区の敷石上面より出土。

甕（５）は、口径19.8cm。還元不良による生焼須恵器。口縁端部に面をもち、下端をわずかに斜め下方につまみ出す。調整は内外面ともに回転ナデ。ロクロは右回転。色調は外面は灰赤色、内面は明赤褐色。同一個体でありながら、直線距離で約４m離れた玄室内北西区の敷石上面と北東区周溝内の黒褐色土中より出土しており、一度破砕した土器を人為的に移動した可能性もある。

土製品（第33図　図版６）

土錘（６）は、北東区周溝付近の黒褐色土中より検出。約⅔を欠失。残存長2.8cm、径1.6×1.5cm。孔径0.4～0.6cm。色調は鈍い黄橙色。　（奥原）

大浦古墳群Ⅲ地区全景



大浦古墳群Ⅳ地区全景

図版 2

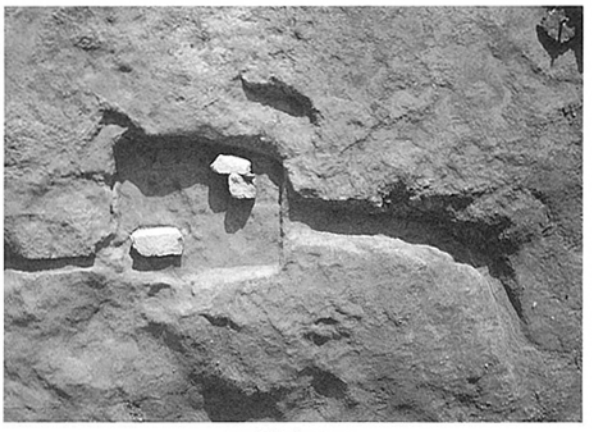
13号墳調査前

13号墳玄室内敷石

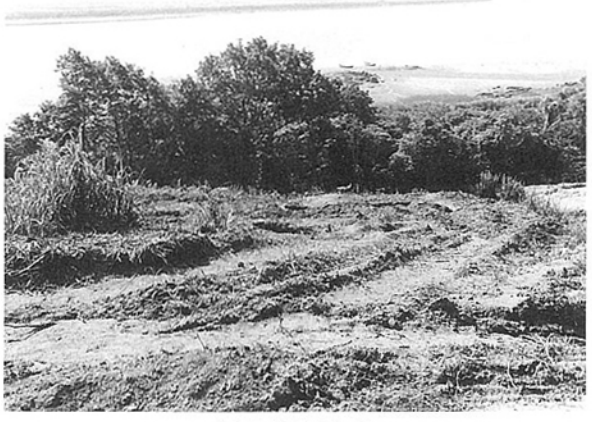
13号墳石室完掘

13号墳墓道検出状況

13号墳全景



13号墳全景



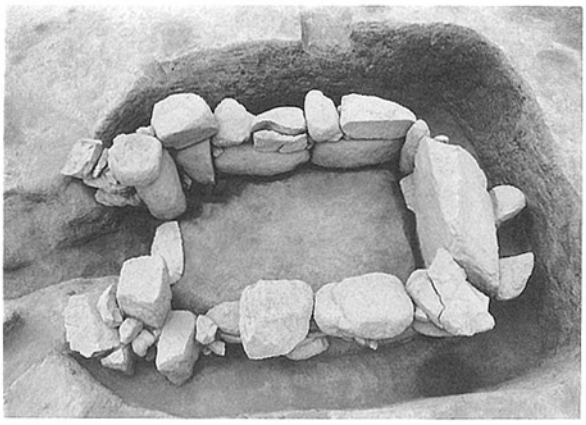
14号墳調査前

14号墳トレンチ完掘

14号墳北西側周溝部遺物出土状況

14号墳墳丘検出状況

14号墳石室完掘



14号墳石室完掘

14号墳玄門閉塞

14号墳玄門閉塞除去後

14号墳石室内遺物出土状況

14号墳石室内土玉出土状況

15号墳調査前

15号墳床面検出状況

16号墳調査前

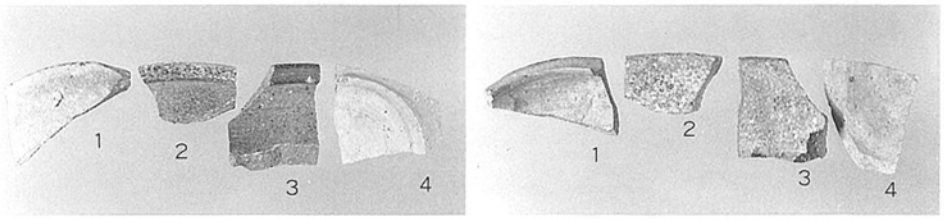
16号墳崩落石検出状況

16号墳トレンチ完掘

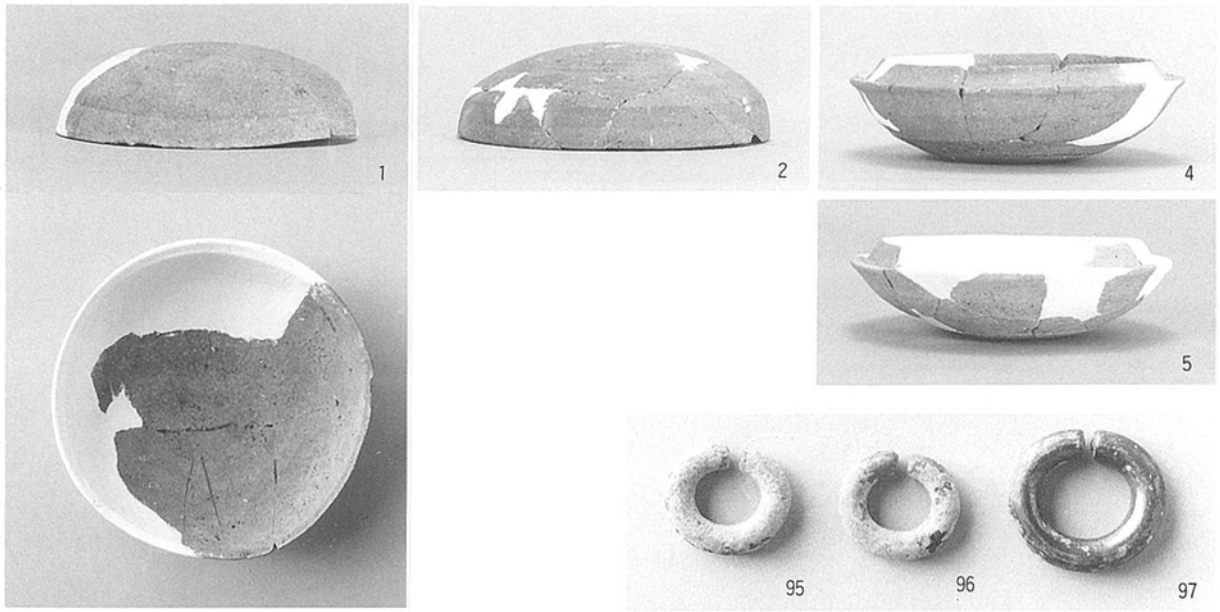
16号墳墳丘

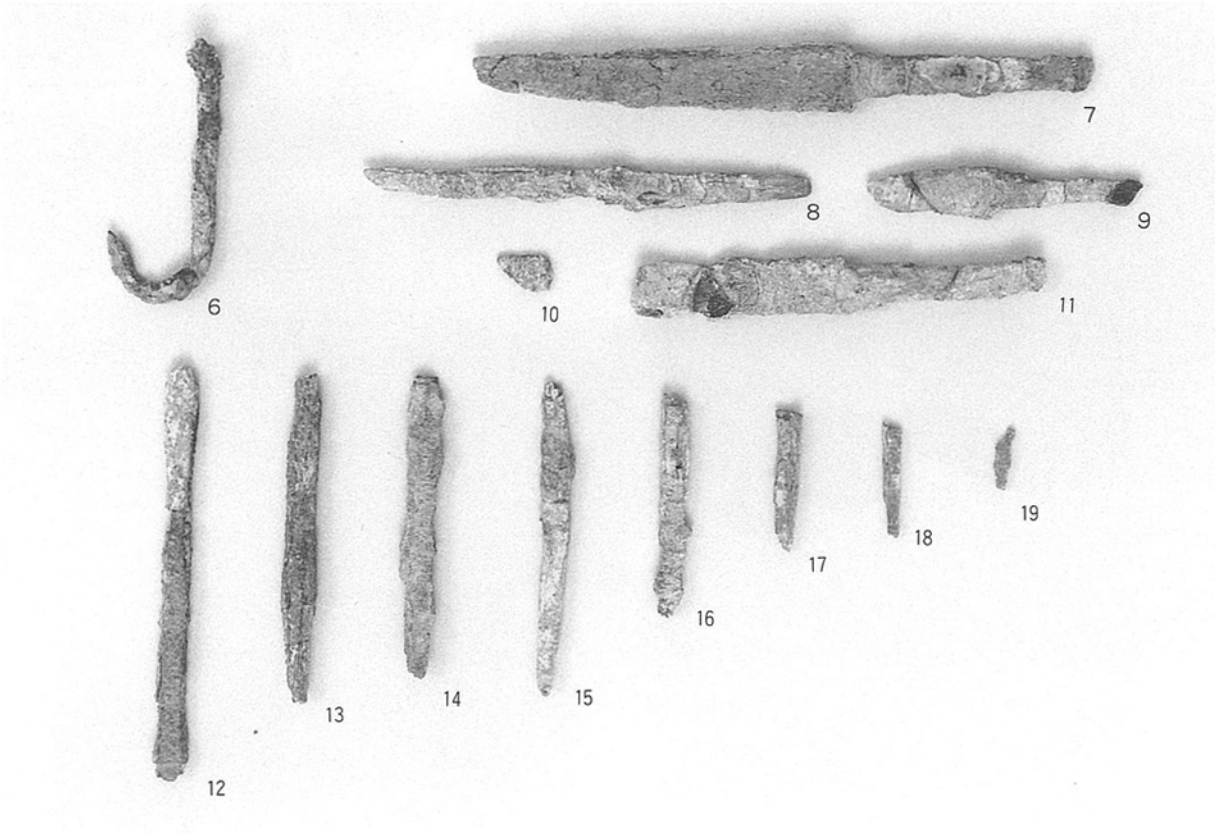
16号墳玄室内敷石

16号墳石室完掘



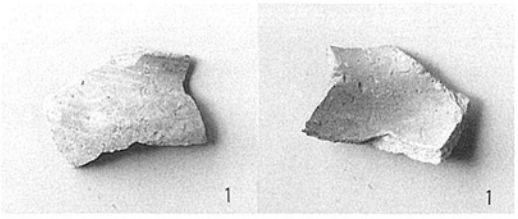
大浦13号墳出土遺物



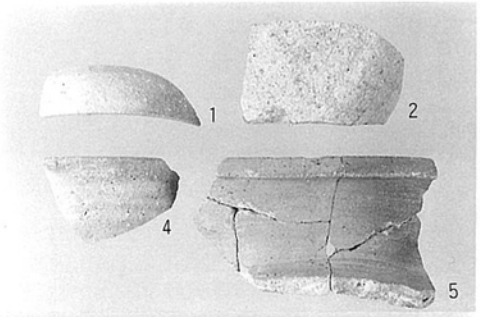


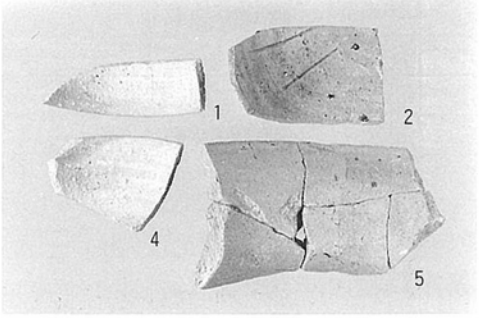
大浦14号墳出土遺物①

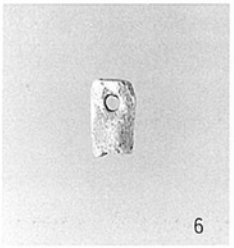
大浦14号墳出土遺物②



大浦15号墳出土遺物







大浦16号墳出土遺物

第２節　梅ケ崎古墳群

１．６号墳

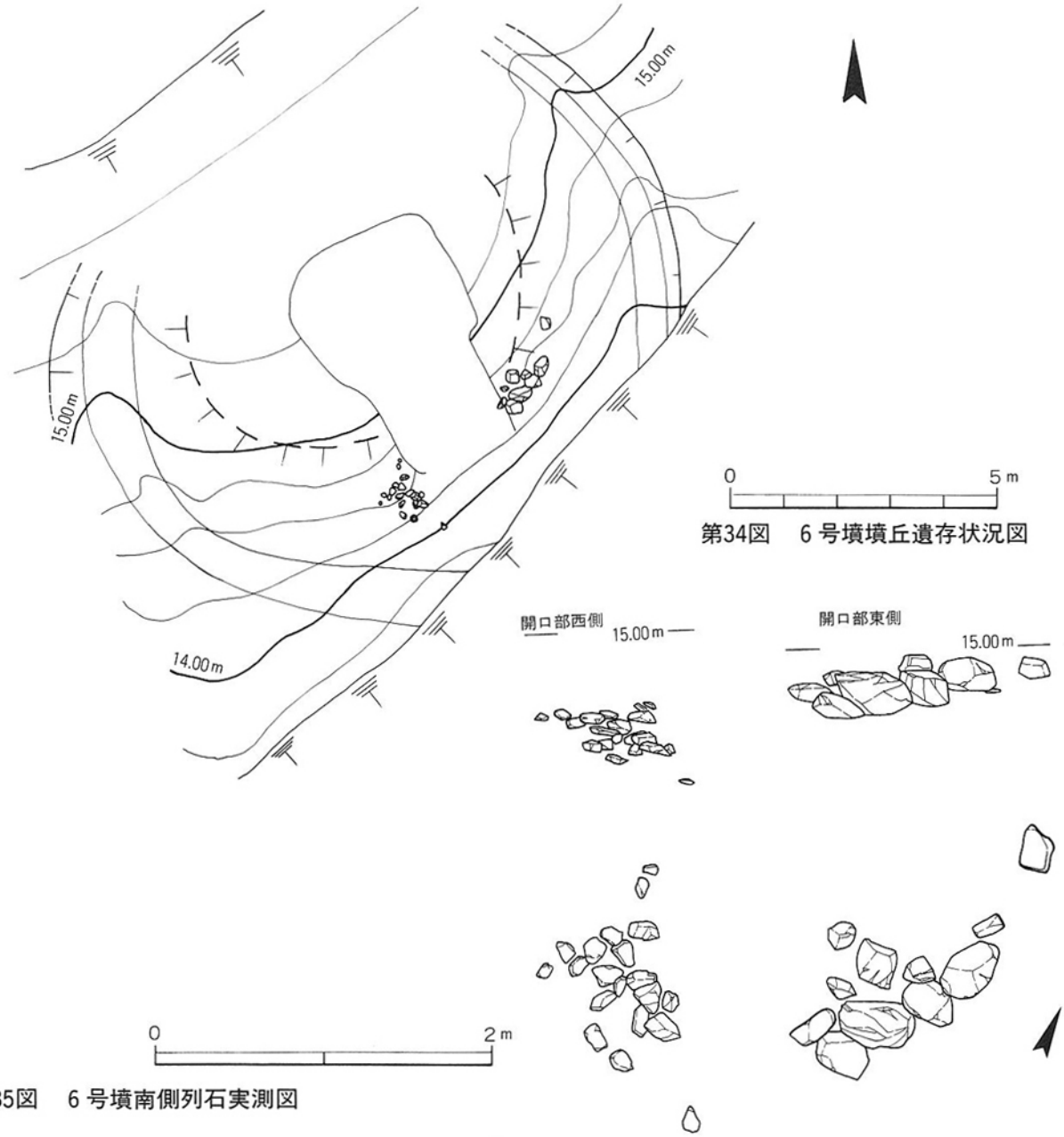
６号墳は調査区の南端に位置し、標高は約15mである。西に５号墳、北に９号墳が隣接する。６号墳は、５号墳とともにⅡ地区で最下位に位置する古墳である。

調査前は畑で地表面はほぼ水平であり、墳丘の高まりは全く認められず、石材の抜き取りによる陥没や石材の露出も見られなかった。そのため表面観察では、古墳の存在は認められなかった。当古墳はトレンチ調査の結果、新たに発見されたものである。

（１）墳丘

墳丘の頂部と北側は削平が著しく、旧状をとどめていない。残存する墳丘は、東西方向の土層観察により直径約10m、石室床面からの残存高が約１mとなる。

墳丘の基本的な築造方法は、その土層観察によると、まず、斜面上位の北側の地山整形を行い、墓



第34図　６号墳墳丘遺存状況図

第35図　６号墳南側列石実測図

坑を掘り込む。羨道部にあたる斜面にはその土を用いて平坦面を造る。石室を構築しながら、盛土を行い、東西側については、古墳築造時の地表面から周溝を掘り込んでいる。また、羨道の右壁中央部から30×20cmの角石が、墳丘を巡るように東側に約2mほどのびている。これは墳丘盛土の流出を防ぐための内護列石と思われる。

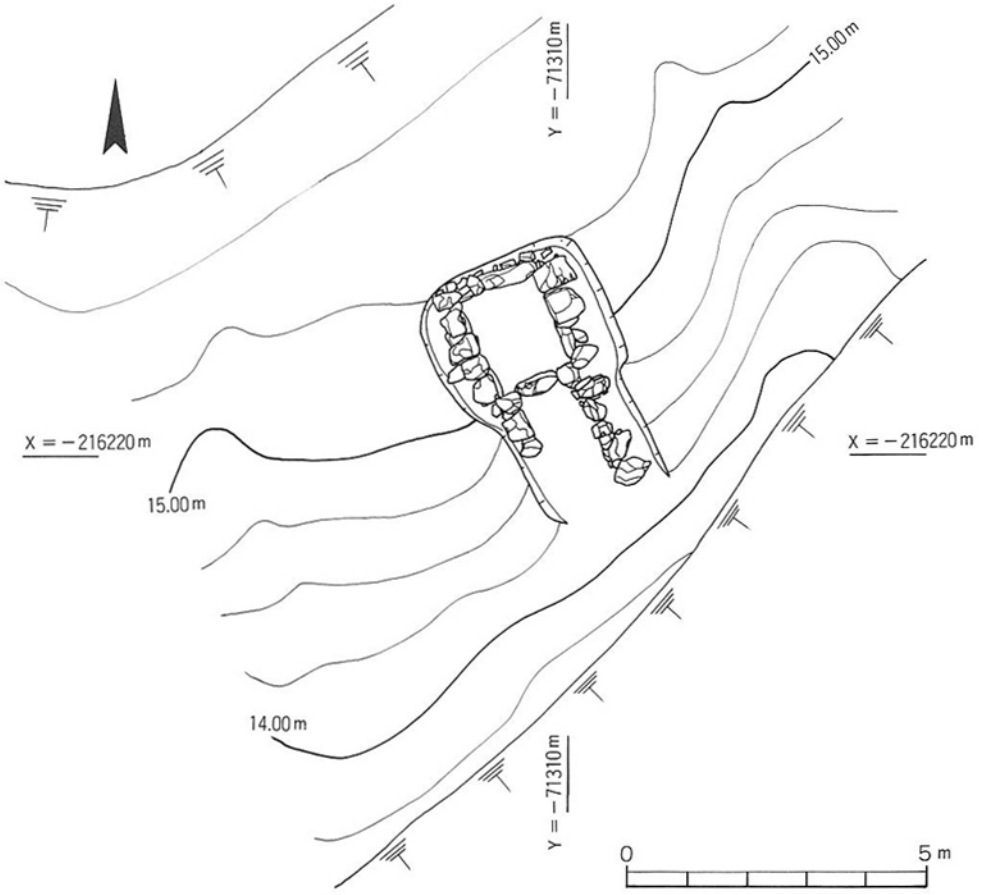
一方西側には、10×20cmほどの扁平な石が葺石のような状態で施されていた。東側の内護列石とは使用されている石材の形状は異なるが、施された目的は同様に墳丘盛土の流出を防ぐことにあった可能性が高い。東西側とも、列右もしくは葺石状の石を施しながら墳丘を完成させていったと思われる。

周溝は畑の開墾によって削平され、北側と南端を欠失しているが、残存している周溝は幅1.2m、深さ25cm、断面形は浅い皿状を示す。形状は、北側が削平されているため断定はできないが、残存する形状と、墳丘が斜面を利用して築造している古墳の一般的な例から考えると馬蹄形であった可能性が高い。

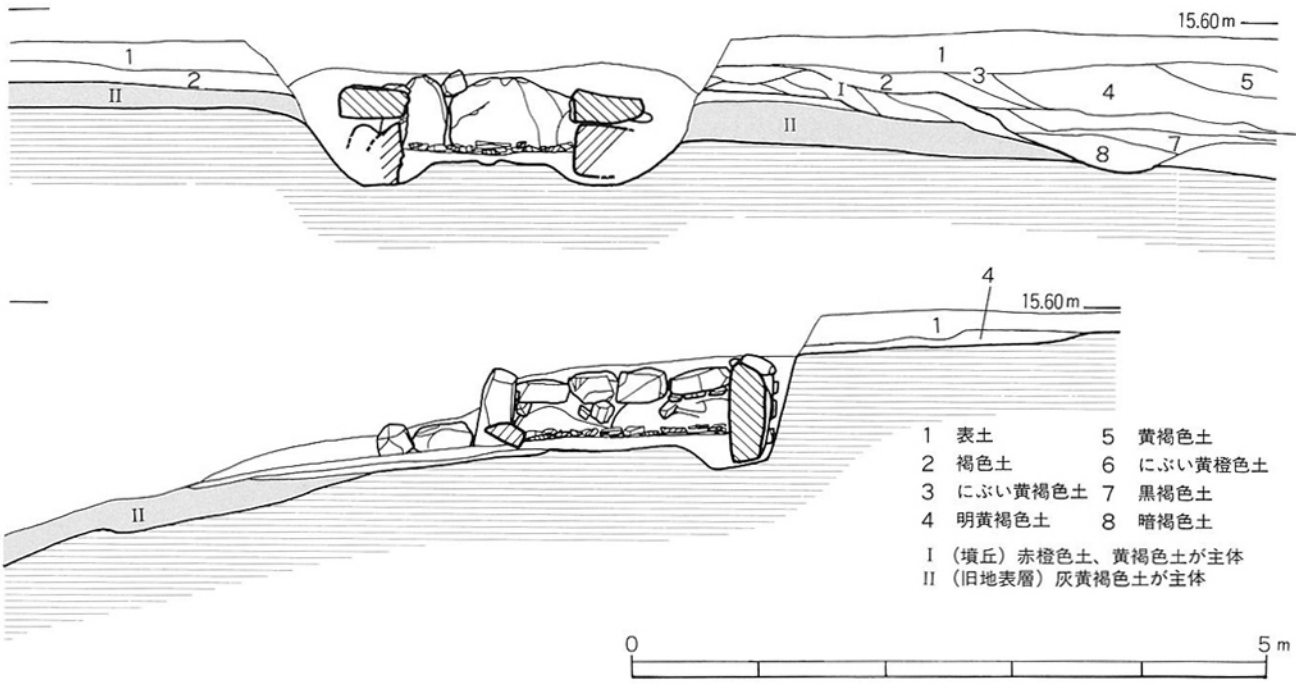
（2）石室

内部主体は、ほぼ南東に開口する両袖式の横穴式石室である。石室は単室構造で、主軸はN24°Wを示す。長方形の玄室に長い羨道が付設する平面形で、石室の全長4.4mを測る。

玄室内は多量の土砂と崩落した石材が散在しており、全体的に袖石の高さまでしか残存していなかった。



第36図　6号墳調査後地形測量図



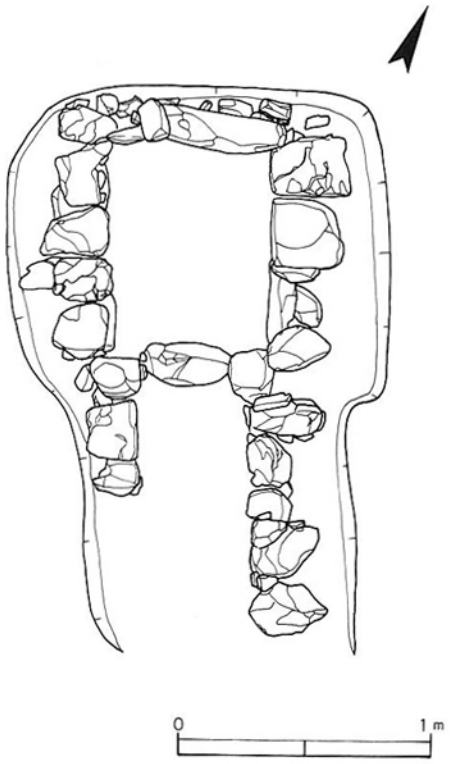
第37図　6号墳墳丘土層断面図

墓坑は、北側の地山整形を施した後、地山より掘り込み、東西側は古墳築造時の地表面から約1m掘り込んでいる。形状は玄室部分は長方形を呈し、玄門部分で細くなり、羨道端で消滅する。長さは約4.5m、幅は玄室部分で3.1m、羨道部で2.2mを測る。

石室の裏込めには、墓坑を掘り込んだ際の土と思われる橙色土が埋められており、版築などは確認できなかった。

玄室　玄室の平面形はほぼ長方形で、長さは玄室中央と右壁側で1.5m、左壁側で1.8m、幅は奥壁側と玄室中央で1.4m、玄門側で1.2mを測る。

奥壁は地山を約20cm掘り下げて140×90cmの板石を横長に、30×100cmの柱状の石を縦長に用いて奥壁を構成している。奥壁は床面に対してほぼ垂直に立てている。



第38図　6号墳石室平面図

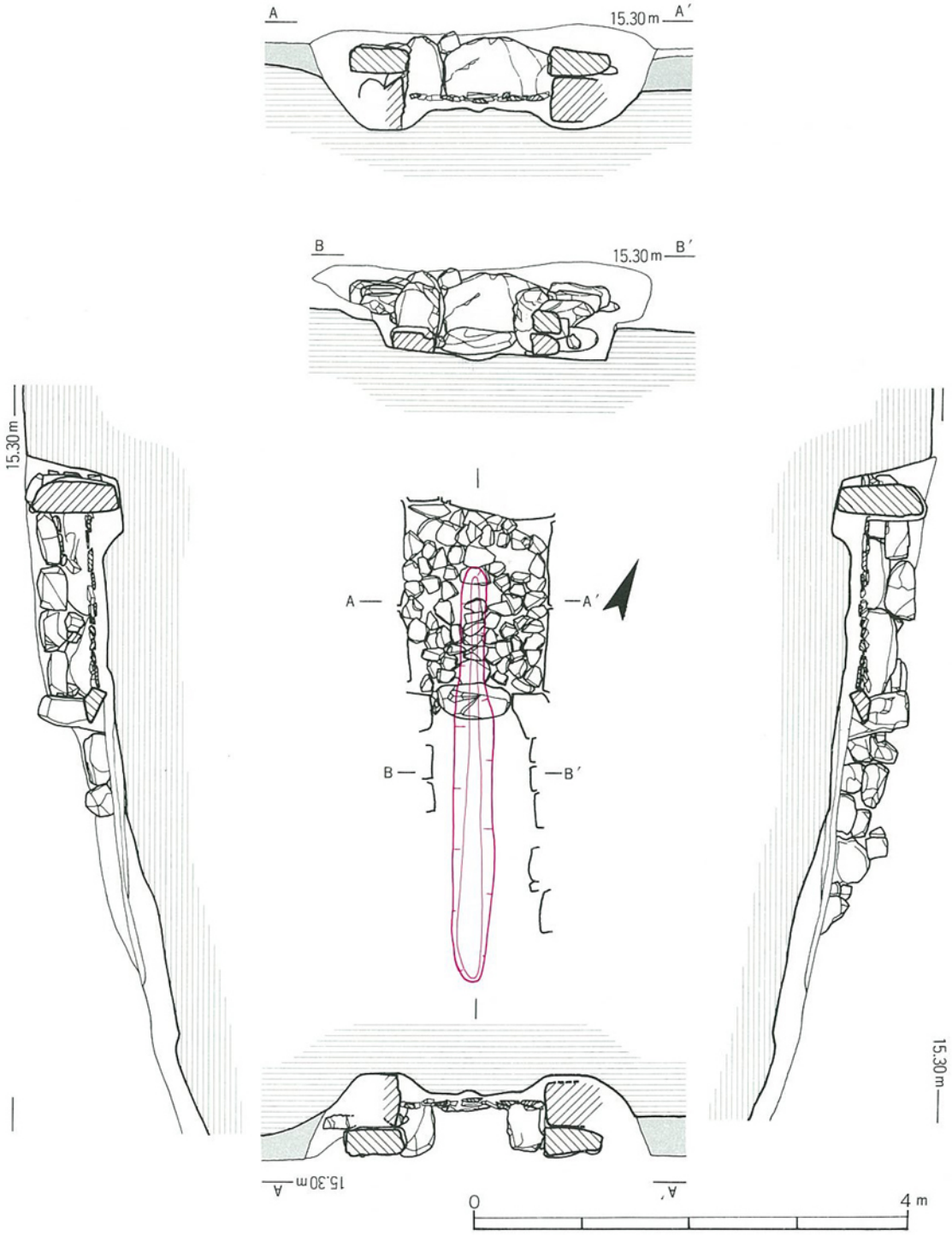
側壁の基部石は左右とも80～100×50cmの石を横長に2石用いて腰石としている。その上部には50×30cmほどの石を横長に積み上げている。基部石はほぼ垂直に立てているが、2石目からは若干の持ち送りが確認できる。

敷石は腰石のほぼ中央の高さに施されており、一部は攪乱を受けて消失しているがほぼ全面より検出された。敷石のほとんどは20cm程度の平たい角石を用い、整然と敷かれている。玄室中央では長径が30cm程度のやや大きな石を含んだ敷石が主軸に沿って一列に並んでいる。

玄門は左右に約30×60cm程度の石を縦長に用いて袖石とし、その間に0.3×0.7cmの石を置き、框石としている。楣石は残存していない。玄門幅は0.8mである。

また、玄室内側の掘り方内には、10×20cm程度の角石をほぼ全面に詰め石として施している。

羨道　羨道は、古墳築造時の地表面の上に墓坑を掘った際の土を盛ることで平坦面を造り、構築されている。左壁側は2石しか残存していないが右壁側は比較的よく残っている。石材の積み方も、使用されている石材も玄室とは異なり、約20×40cmから約20×25cm程度の角石を用いている。これらの石材は、左側の内護列石に用いられている石材と同様の石材である。玄室側は水平方向に目地をそろえ



第39図　6号墳石室実測図

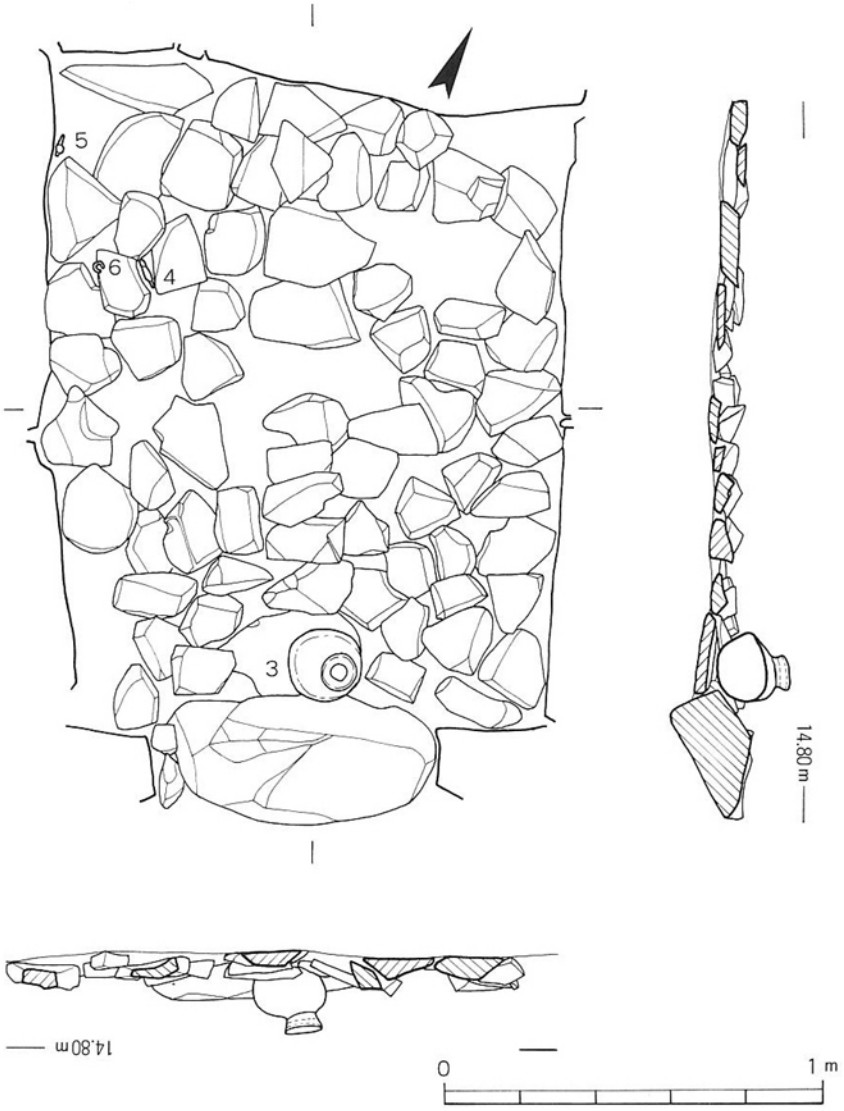
ているが羨道側はそろっていない。

排水施設　玄室中央のやや奥壁側に寄ったところから羨道端へと、ほぼ中央部に排水施設を施してあった。玄室内では敷石が一列に並び、框石の下をトンネル状に掘り抜き、羨道部に至る。玄室内では、敷石を一列に並べ蓋石としているが、羨道部では蓋石は見られなかった。羨道部では平坦面を造るために盛った橙色土を掘り込んで排水溝を設けている。玄室内では幅20cm、深さ10cm、羨道部では幅30cm、深さ５cmであり、玄室から羨道までの排水溝の長さは3.9mである。

（３）遺物

出土状況　玄室内からは敷石上面から土器・鉄製品・装身具が出土した。出土した土器は平瓶で、玄室内で框石に接するようにし、敷石上面に口縁部を上に向けて置かれていた。出土状況から、原位置を保っていると考えられる。土器を除いた鉄製品・装身具は奥壁寄りの左壁側から出土している。鉄製品は刀子２点、装身具は耳環１点である。

石室外では、開口部西側の墳丘裾部から須恵器の坏身（１）と坏蓋（２）を含む須恵器片が出土し



第40図　６号墳石室内遺物出土状況図

ている。また、羨道部の埋土中から土玉が１点出土しているが、玄室内からは出土しなかった。

出土遺物

土器（第41図　図版19）

坏（１・２）　１は坏蓋で口径12.2cm、器高4.1cm。口縁部は外下方に開いた後やや外反しながら丸い端部に至る。外面天井部は回転ヘラケズり。内面は回転ナデである。ロクロ回転は右である。２は坏身で、口径12.0cm、受部径14.1cm、器高3.8cm。底部は比較的平坦で、体部はやや内傾しながら外上方に開き、受部に至る。受部は内湾しながら立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は細くやや鋭い。内面は、平坦な底部から内湾しながら体部が立ち上がり、ほぼまっすぐに口縁部に至る。外面底部は回転ヘラケズり、他は回転ナデである。

平瓶（３）　３は平瓶である。口径9.8cm、器高12.3cm、体部最大径19.1cmを測る。体部は最大径をやや上位に持ち、体部の片寄った位置に太い口頸部を持つ。口頸部は外傾しながら口縁部に至る。体部は回転ヘラケズりを行った後、口頸部から体部全体にカキ目調整を施している。体部の下位では一部は回転ナデによってカキ目調整を消している。体部中央には粘土塊が付着している。

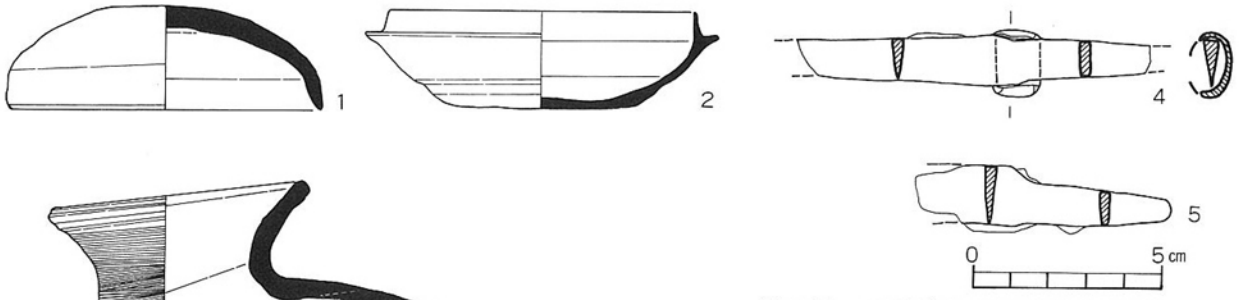
鉄製品（第42図　図版19）

刀子（４・５）　４は両関の刀子で、責金具が残る。身部及び茎部の両端を欠損している。残存長は8.4cmで、そのうち、身部は6.2cm、茎部は2.2cmである。背の厚さは身部・茎部ともに0.3cmである。５も両関の刀子で残存長は6.8cmを測る。そのうち身部は2.8cm、茎部は4.0cmである。背の厚さは身部で0.3cm、茎部で0.25cmである。

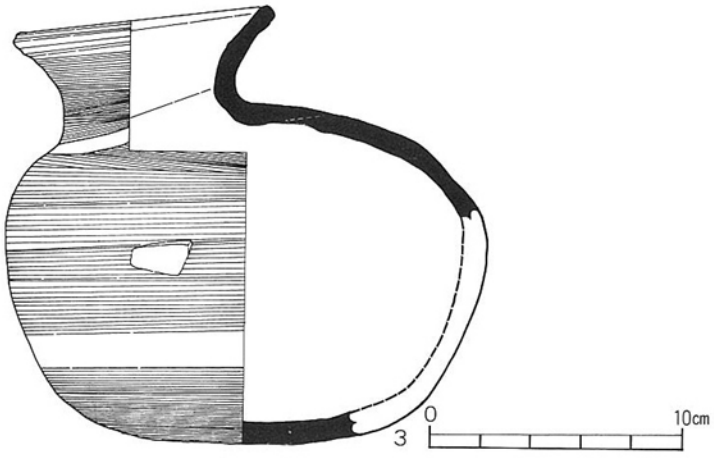
装身具（第43図　図版19）

耳環（６）　６は銅芯部しか残っていない。外法径2.61×2.53cm、内法径1.86×1.83cm、断面径0.39cm、突合部は0.2cmを測る。

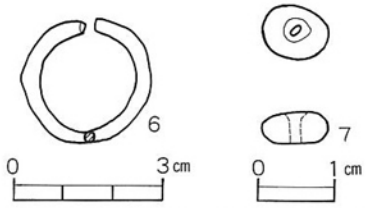
土玉（７）　直径8.1mm、孔径1.1mm、厚さ4.8mm、黒褐色を呈する。　（安部）



第42図　６号墳出土鉄製品実測図



第41図　６号墳出土土器実測図



第43図　６号墳出土装身具実測図

2．7号墳

7号墳は南にのびる尾根の西側に位置し、東側に8号墳が隣接する。標高は約19mでcm地区（9年度調査）で同レベルに存在する3号墳とは約40m離れている。

調査前は畑の開墾の際に削平を受けており墳丘の高まりなどは確認できなかった。わずかに石材が露出していたのでトレンチ調査を行ったところ、当古墳の存在が明らかとなった。

（1）墳丘

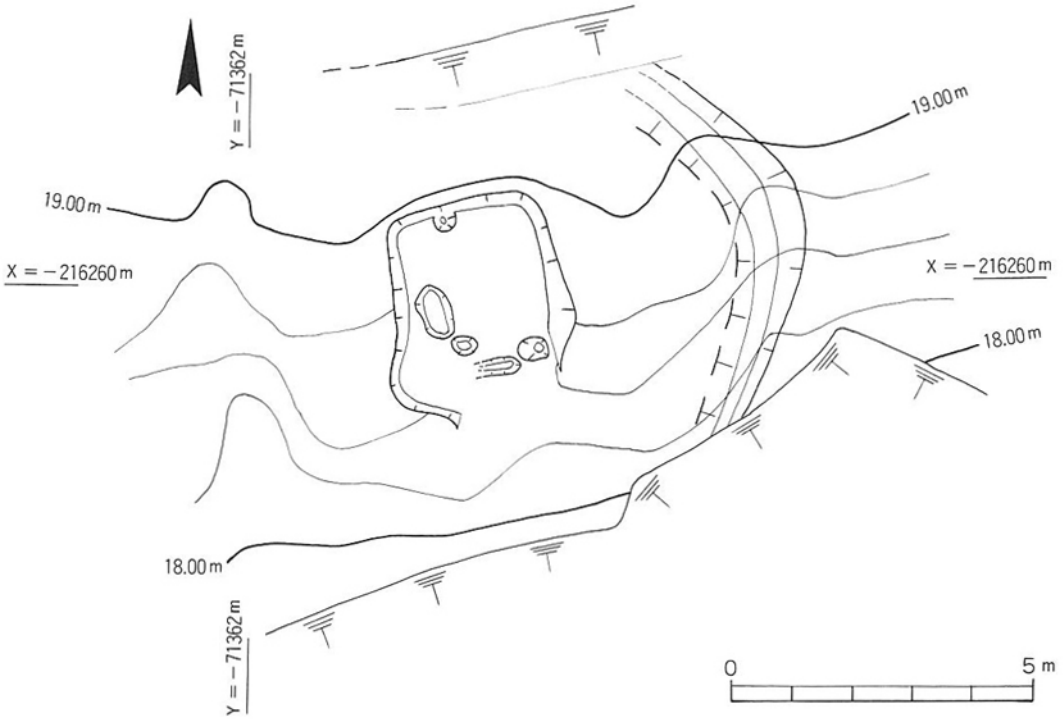
墳丘は削平により全く残存しておらず、東側に周溝を掘り込んだ際の地山整形が確認されたのみである。その形状から直径11m程度の円墳ではなかったかと推定される。

墳丘の遺存状況が悪いため、古墳の築造方法については明確なことが確認できないが、わずかに残る土層の観察などによれば、地山整形を行ったのち、墓坑を掘り込み、石室を構築する。そして墳丘に盛土を施し、最後に周溝を掘り込んだと思われる。

周溝は東側にわずかに検出され、幅1.2～0.75m、深さは20cm程度で断面形は浅い皿状を示す。

（2）石室

内部主体を構成する石材は羨道の側壁1石のみが残存し、他は全く残っておらず、墓坑のみが検出された。墓坑幅から割り出した主軸はN14°Wを示す。墓坑は東西側は古墳築造時の地表面から掘り込まれており、北側は地山から掘り込まれている。墓坑内には玄室の側壁を構成していたと思われる石材が2石倒れ込み、他は石の間の詰め石か敷石程度の大きさの石が散在していた。墓坑内で検出された石材の抜き取り痕や、他の古墳の例から考えると両袖式の横穴式石室であった可能性が高いが断定

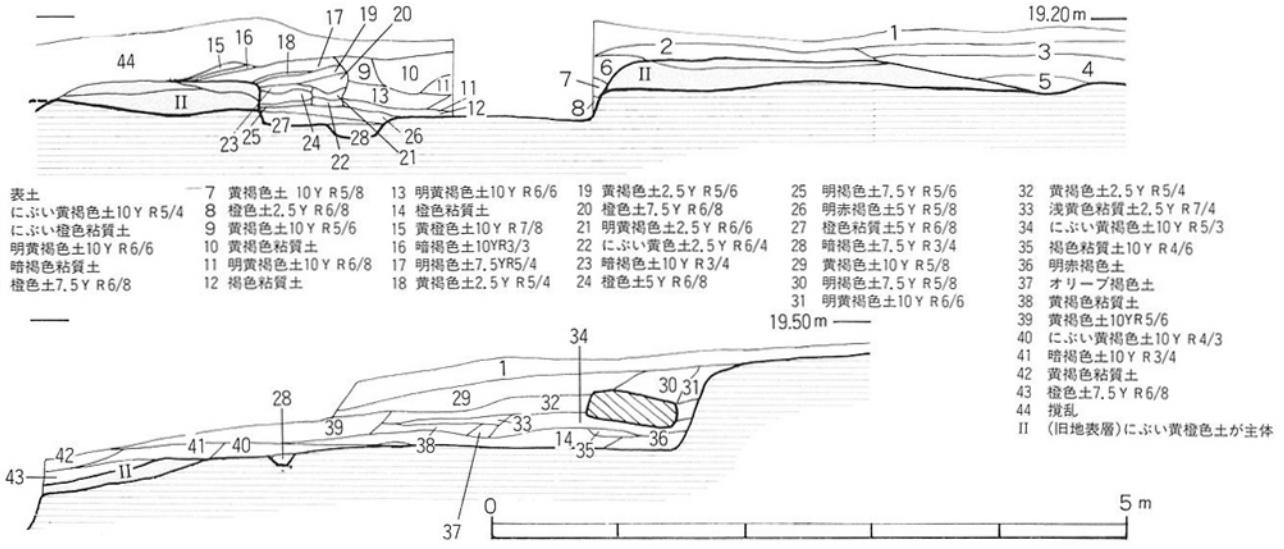


第44図　7号墳調査後地形測量図

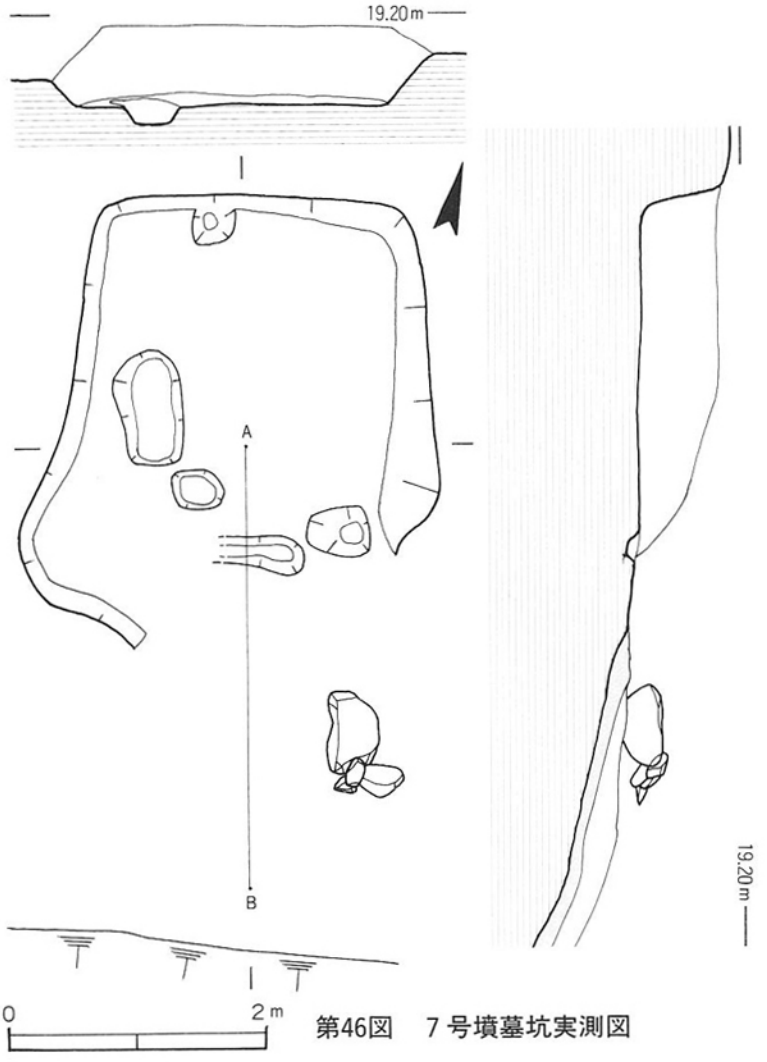
はできない。

墓坑は不整長方形である。墓坑の深さは約60cm、幅は奥壁側で2.7m、玄室中央とみられるところで2.9m、玄門とみられるところで3.4mと、いったん広がってからすぼまる。

羨道部は盛土を施して平坦面を造り、床面としている。



第45図　7号墳トレンチ土層断面図



第46図　7号墳墓坑実測図

（3）遺物

出土状況　出土遺物には、須恵器の坏蓋、坏身、高坏、平瓶、そして耳環がある。ほとんどの須恵器が羨道部と思われる部分から出土しており、玄室内と思われるのは第47図の７．８のみである。

羨道部の須恵器は宝珠つまみ付きの坏蓋を中心とする一群である。この一群は床面よりもやや浮いた状態の暗褐色土から出土しているが、とりわけ第47図１～６の一群は追葬時の一括品の可能性が強いとみられる。

出土遺物

土器（第48図、図版19）

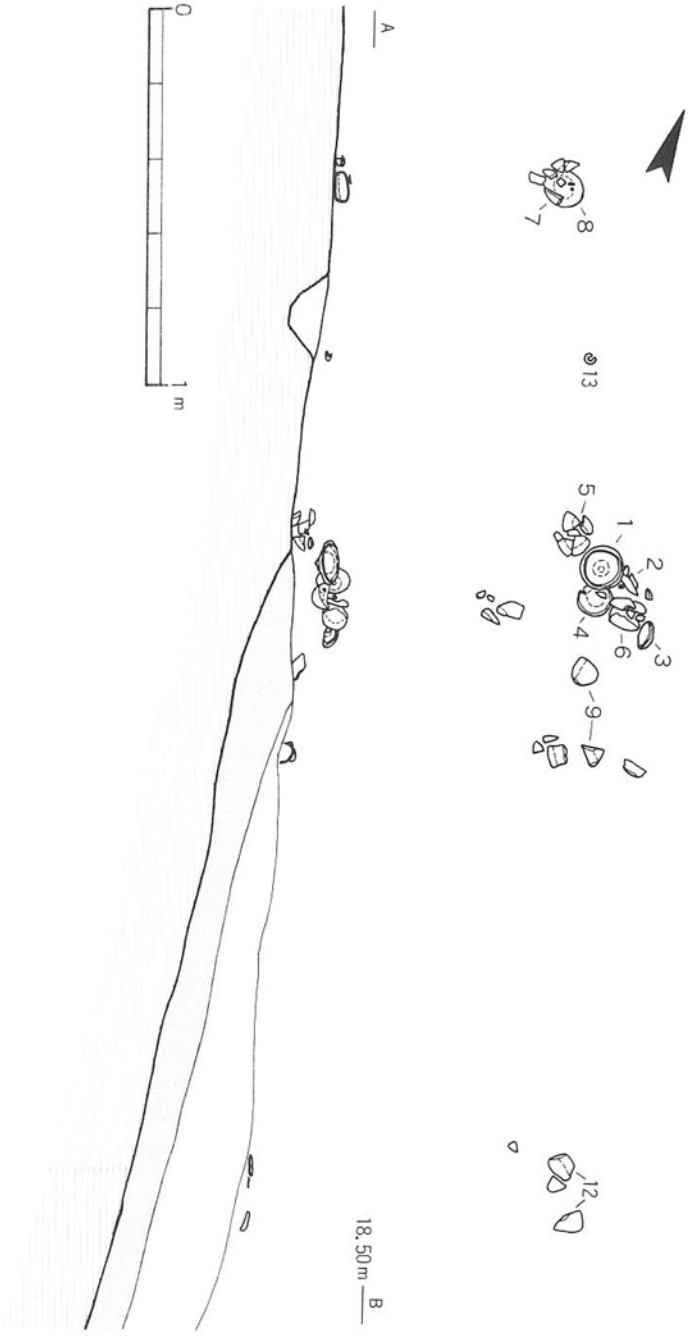
坏（１～10）　１～３は宝珠つまみ付き坏蓋である。すべてつまみの張り付け部はくびれており、天井面はやや平坦でやや内湾気味に下り、口縁部に短い返りがつく。４～６は１～３とセット関係にあると思われる坏身である。底部はほぼ平坦で、外傾しながら外上方に伸び、口縁部の手前でわずかにくびれ、さらに外傾しながら口縁部に至る。口縁端部は丸い。７・８は全体的に体部が丸みを帯びていて肩に段を有しない。内湾しながら口縁端部に至る。７の上に８が覆い被さるようにして出土した。９の坏身は墓坑の埋土中から出土し、天井部が平坦で、肩に段を有する。口縁端部は鋭い。

高坏（11）　坏部は内湾しつつ口縁が立ち上がる。口縁端部は丸い。脚はやや低脚である。脚部に透かし等はない。

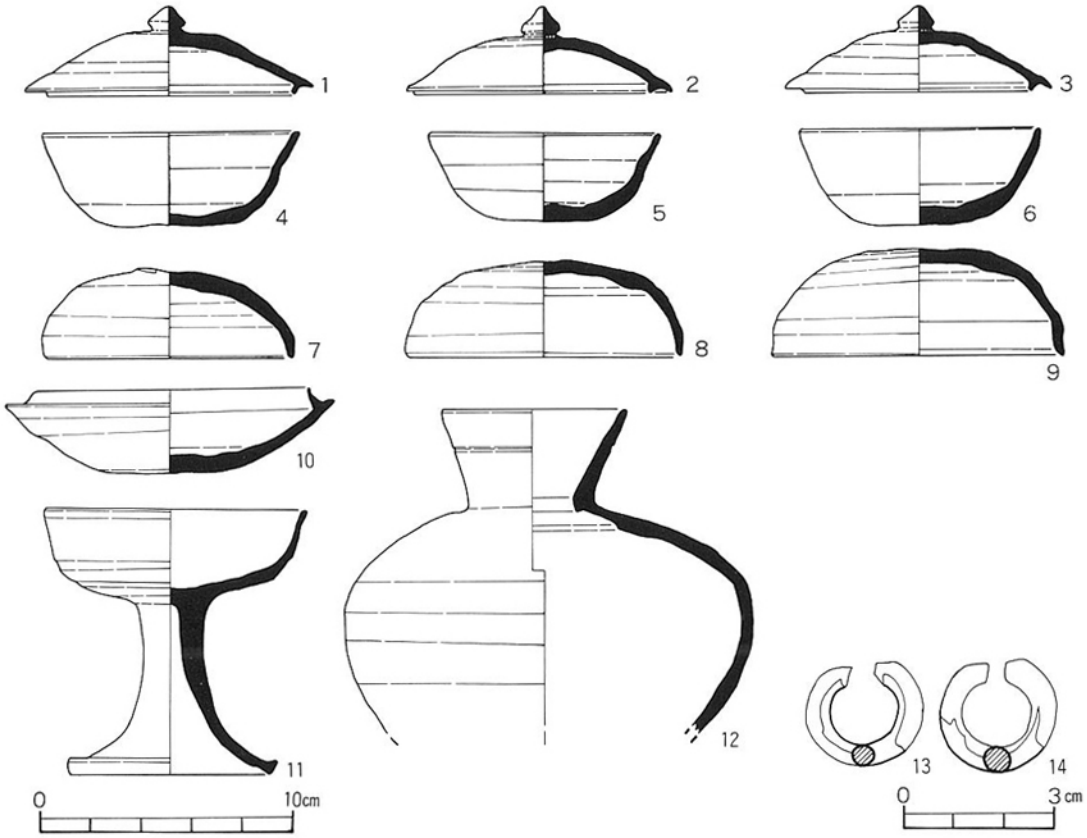
平瓶（12）　口頸部は体部のほぼ中央から立ち上がり、外上方に立ち上がる。口縁端部は丸い。体部は最大径を中央よりやや上位に持つ。計測表を第４表に掲げる。

装身具（第48図　図版19）

耳環（13，14）　いずれも銅芯銀張で、13は外法径2.28cm、内法径1.42cm、断面径0.6×0.46cm、４は外法径2.35×2.25cm、内法径1.37×1.30cm、断面径0.6×0.49cmを測る。いずれも突合部は欠損しているため計測できない。（安部）



第47図　７号墳遺物出土状況図



第48図　7号墳出土土器・耳環実測図

第4表　7号墳出土土器観察表

挿図 図版	器種	出土位置	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
48－1 19－1	坏蓋 須恵器	墓坑内	口径 9.0 受部径 8.6 器高 3.4	外面は回転ヘラケズリのち回転ナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	密	不良	外 灰白色 内 灰白色	
48－2 19－2	坏蓋 須恵器	墓坑内	口径 10.5 受部径 8.4 器高 3.5	外面は回転ヘラケズリのち回転ナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。 宝珠つまみはハリツケ。	密	不良	外 灰白色 内 灰白色	
48－3 19－3	坏蓋 須恵器	墓坑内	口径 11.4 受部径 9.8 器高 3.6	外面は回転ヘラケズリのち回転ナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。 宝珠つまみはハリツケ。	密	不良	外 灰白色 内 灰白色	
48－4 19－4	坏身 須恵器	墓坑内	口径 8.4 器高 3.8	外面底部は回転ヘラケズリのち回転ナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	密 含砂粒多	不良	外 灰色 内 灰色	
48－5 19－5	坏身 須恵器	墓坑内	口径 9.0 器高 3.5	外面1／2から底部まで回転ヘラケズリのち回転ナデ。外面底部はヘラ切りのち静止ナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	密	不良	外 灰色 内 灰色	
48－6 19－6	坏身 須恵器	墓坑内	口径 10.0 器高 3.7	外面は回転ヘラケズリのち回転ナデ。内面は回転ナデ。ロクロ右回転。	密	不良	外 灰白色 内 灰白色	
48－7 19－7	坏蓋 須恵器	墓坑内	口径 9.6 器高 3.6	外面天井部はヘラケズリ。他の外面は回転ヘラケズリのち、回転ナデ。内面は回転ナデ。天井部はそののち静止ナデ。ロクロ右回転。	密	不良	外 褐灰色 内 褐灰色	焼きひずみあり
48－8 19－8	坏蓋 須恵器	墓坑内	口径 10.7 器高 3.7	外面は回転ヘラケズリのち回転ナデ。内面は回転ナデ。外面天井部ヘラ切り。ロクロ右回転。	密	良好	外 褐灰色 内 褐灰色	
48－9 19－9	坏蓋 須恵器	墓坑内	口径 11.5 器高 4.4	外面は回転ヘラケズリのち回転ナデ。内面は回転ナデ。ロクロ右回転。	密	良好	外 褐灰色 内 褐灰色	
48－10 19－10	坏身 須恵器	墓坑内 埋土中	口径 13.2 受部径 11.0 器高 3.3	外面は回転ヘラケズリのち回転ナデ。ロクロ右回転。	密	良好	外 褐灰色 内 褐灰色	
48－11 19－11	高坏 須恵器	表採	口径 10.3 器高 10.6 脚部径 7.1	坏部内面底部は回転ナデのち静止ナデ。外面は回転ヘラケズリのち回転ナデ。脚部内外面とも回転ナデ。脚部はハリツケ。	密	不良	外 灰白色 内 灰白色	
48－12 19－12	平瓶 須恵器	墓坑内	口径 7.2 体部最大径 16.4	外面体部は回転ヘラケズリ。口頸部から内面は回転ナデ。口頸部の中央に1条の沈線巡る。ロクロ右回転。	密	良好	外 褐灰色 内 褐灰色	

3．8号墳

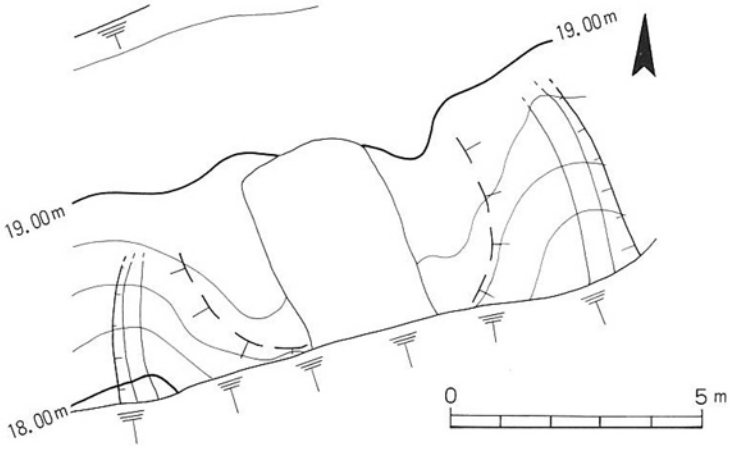
（1）調査前の状況

8号墳は梅ヶ崎古墳群II地区の南側、標高19mの地点に位置する。東西方向に並んで築造された西隣の7号墳、梅ヶ崎古墳群I地区の3号墳、東隣の9号墳とほぼ同じ等高線上に位置する。一方、斜面上位側に14号墳が位置し、比高差はほぼ5mである。梅ヶ崎古墳群II地区一帯は標高27mあたりから下の丘陵斜面が、段々畑として開墾されていて、標高19m付近に位置する8号墳は、墳丘上部が削平され畑として使われていた。南東側の崖面に石材の一部が露呈していたため、トレンチを設定し試掘したところ、石室の石材及び墓坑を検出し、古墳の存在を確認した。

（2）墳丘

墳丘は、後世の畑の開墾時の削平により大部分が消失していた。特に北側は地山まで完全に削平され、耕作土が1層確認できただけである。土層確認のトレンチを観察した限りでは、東西方向も築造時の地表面上にわずかに暗褐色土及び黄橙色土の墳丘盛土がみられるだけであるが、墓坑内では石材との間に暗褐色土と黄橙色土を交互に積み上げた版築が確認された。

また南側は、奥壁中央部から3.6mのところで畑の崖面となっており羨道が欠失していた。周溝は西側と東側で確認できたが、その幅・深さはそれぞれ、西側で0.9m・0.2m、東側で0.8m・0.2mを測る。断面形はともに浅い皿状である。周溝をもとにすると本古墳は、直径約8m程度の円墳と推定される。

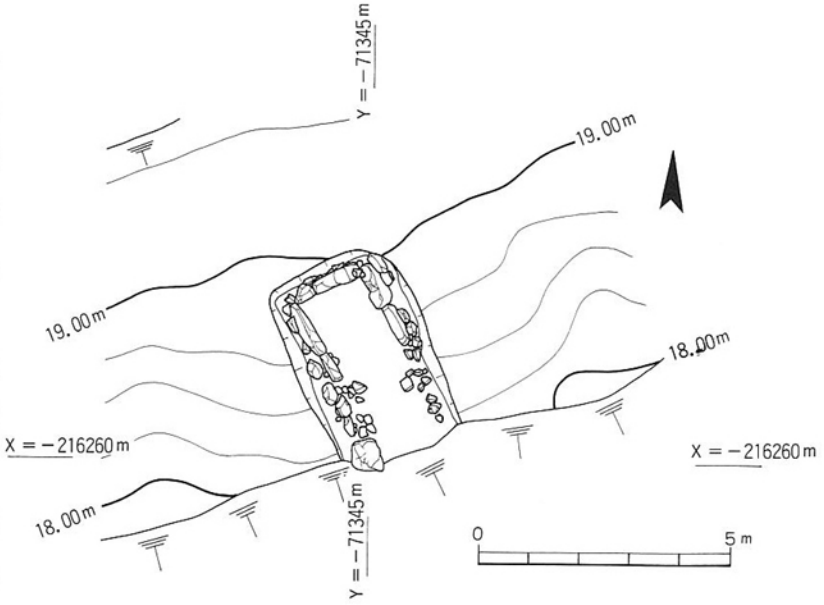


第49図　8号墳墳丘遺存状況図

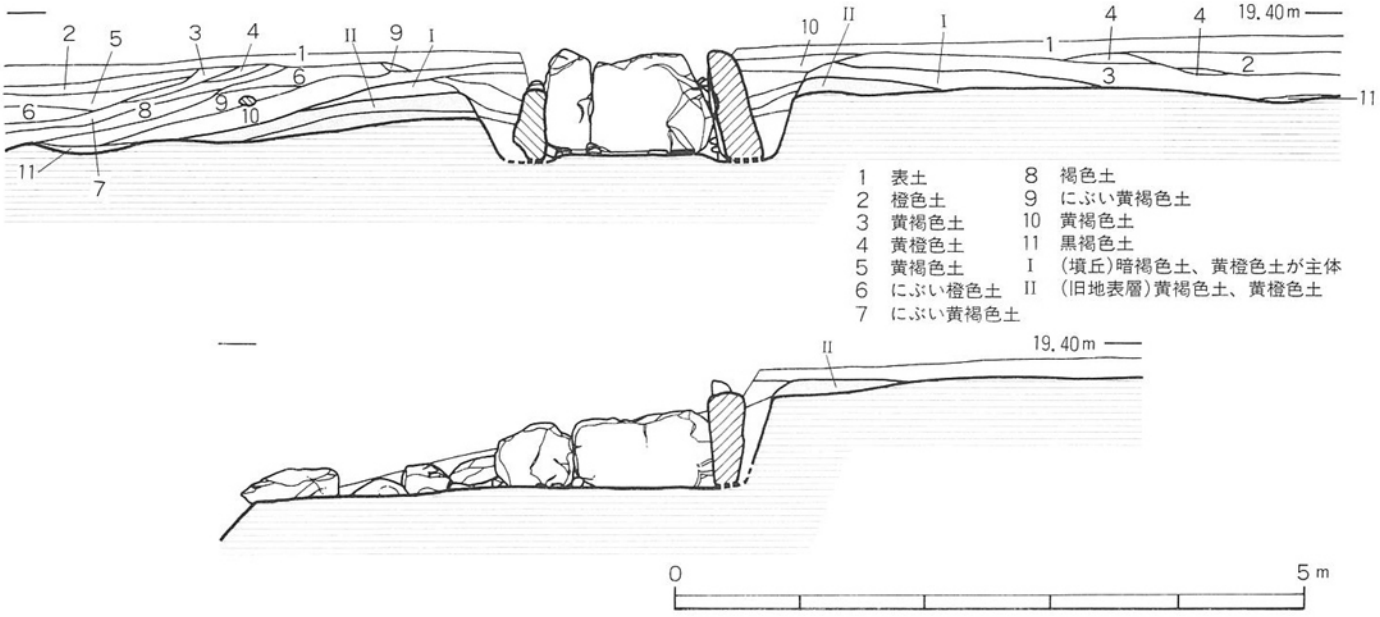
（3）石室

梅ヶ崎古墳群の他の古墳と同様に、石室は等高線に直交して構築されており、ほぼ南に開口する横穴式石室である。主軸はN28°Wを示す。畑の造成に伴い石材の大半を失っており、わずかに奥壁及び側壁の基部石が2石ずつ残るのみである。羨道部もまた削平により欠失するが、石室残存長は約3.7mである。

墓坑は、東から西へなだらかに下る築造時の地表面から、斜面上位の右壁側で深さ約0.8m、左壁側で約0.6



第50図　8号墳調査後地形測量図

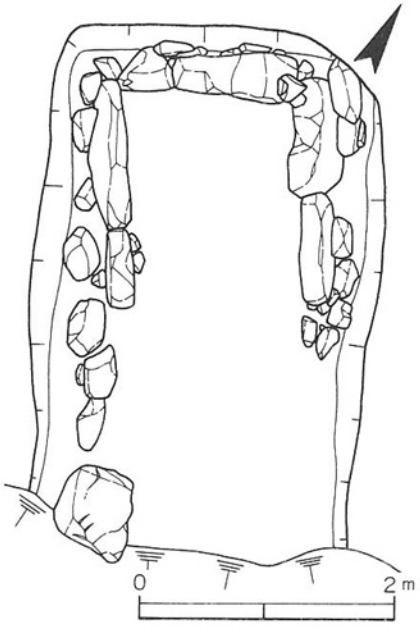


第51図　8号墳墳丘土層断面図

m掘り込まれ、平面形は幅約2.7mのほぼ長方形を呈す。

玄室　奥幅1.50m、前幅1.45m、残存する左壁長1.85m、右壁長1.70mを測り、平面形はほぼ長方形である。奥壁は40×90cm、95×85cmの2枚の比較的薄い板石を地山に据え置き腰石とする。側壁は左右とも2石の大振りな石を横長に据えて腰石とする。これらの腰石は内傾している。腰石から2石目以上の石は全く残っていないため上部構造は不明だが、他の古墳同様、横長の石材を積み重ねていたものと考えられる。残存高は、床面から奥壁0.9m、左壁0.5～0.6m、右壁は0.5～0.8mである。玄門部は袖石が抜き取られ、その痕跡もはっきりしないため不明である。なお、石室に用いられている石材は花崗岩である。

羨道　後世の削平により完全に側壁は失われていた。ただ、左壁側で検出された裏込めの石と思われる数石と、側壁が倒れたとも考えられる石の位置から、比較的幅の広い羨道であった可能性もあると同時に、当古墳群において唯一の無袖の石室、あるいは複室構造の石室の可能性も考えられるが、石材の残存状況からは断定することはできない。



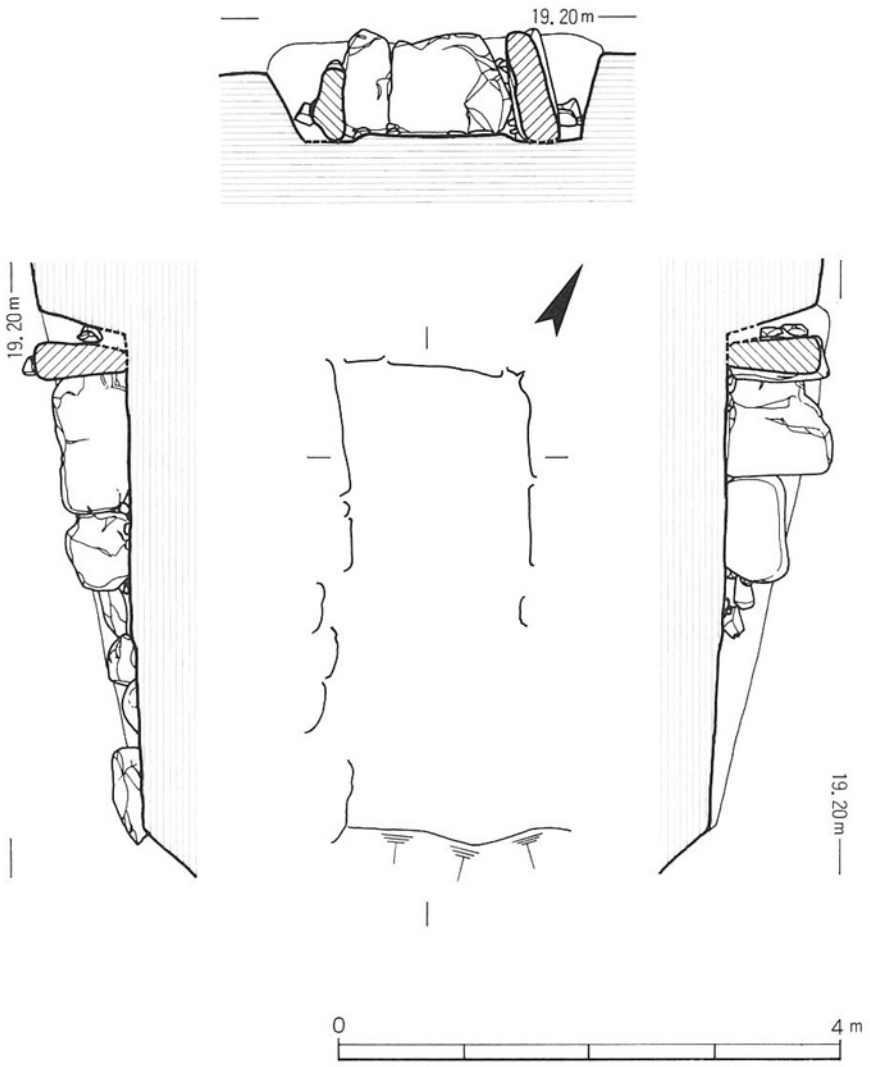
第52図　8号墳石室平面図

（4）遺物

出土状況　玄室内の崩落石の隙間から完形の須恵器坏蓋2点（第55図2・3）、奥壁に近い床面から土師器坏2点（11・12）が出土した。土師器坏は、当古墳が後世において再利用されたことを示すものである。

1～3は須恵器坏蓋。1は周溝内、2・3は玄室内より出土。

1は天井部が丸みをもち、体部と天井部の稜は不明瞭である。口縁部はやや内傾気味に下り、端部にわずかに段を有する。口縁の一部には自然釉が認められる。天井部はヘラケズリ。他は回転ナデ。口径11.4cm、器高3.6cm。ロクロ右回転。内外面ともに灰色



第53図　8号墳石室実測図

を呈す。

2は天井部は丸みをもち、丸みをもって体部に移行する。口縁端部11.4cm、器高3.6cm。ロクロ右回転。内外面ともに灰白色を呈し、2mm大の砂粒を含む。

3はやや平たい天井部をもち、体部にかけての境は不明瞭。口縁部は内湾気味に下り端部は丸くおさめる。天井部から体部にかけての外面はヘラケズリの後回転ナデ、他は回転ナデ。内外面ともに灰白色を呈す。口径12.3cm、器高3.8cm。

4～6は須恵器坏蓋形土器。周溝内より出土。分厚い器壁と天井部に近い位置に径1cm程度の穿孔を施されるところが共通している。また、胎土は粗であり砂粒を多く含む。当古墳の上位にある14号墳からも穿孔を有する類例が出土している。形状は坏蓋に近いが、器壁の厚さや穿孔を有する点などにおいて通常の坏蓋と異なり、その用途は不明である。内外面ともに褐灰色を呈す。口径11.8～14.2cm、器高4.3～5.4cm。

7は須恵器坏身。周溝内より出土。受部の立ち上がりは低く内傾する。底部外面はヘラケズリ、他は回転ナデ。底部が欠失しており、有蓋高坏の坏部の可能性もある。内外面ともに灰褐色を呈す。口

第54図　8号墳石室内遺物出土状況図

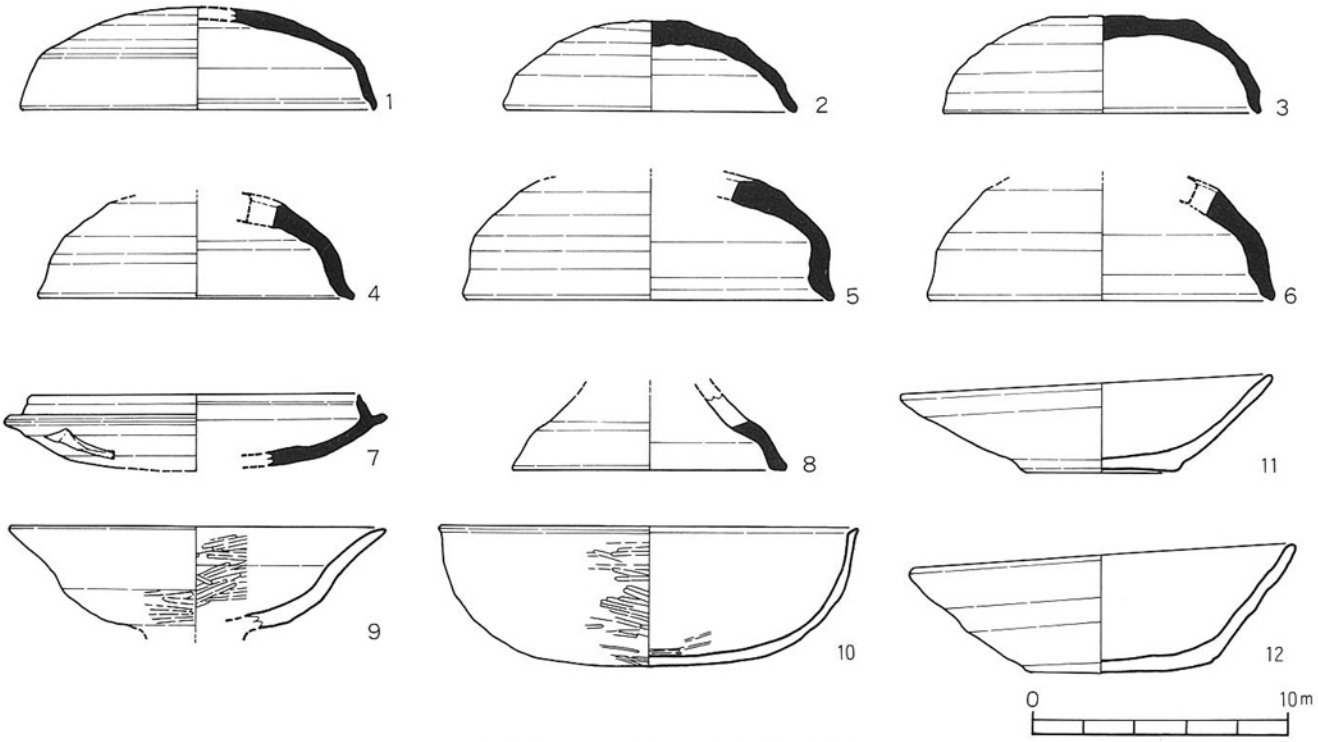
径13.5cm、受部径16.0cm。

8は脚付短頸壺等の脚部と思われる。内外面ともに回転ナデ。1方向の透かし孔が残る。脚部径10.7cm。内外面ともに褐灰色を呈す。

9は土師器高坏の坏部。口径14.8cm。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。内外面ともに明赤褐色、ミガキが残る。

10は土師器杯。口径16.7cm、器高5.5cm。底部外面はケズリ後ミガキ。口縁端部はナデ。他はミガキ。外面には丁寧なミガキが施されているが、内面については、器面剥離のためミガキの痕跡がわずかに認められる程度である。内外面ともに橙色を呈し、若干の砂粒を含む。法量、器形とも飛鳥II期杯Cに類似する。

11・12は土師器坏。口径・底径・器高はそれぞれ、11は14.5cm・6.0cm・3.5cm、12は14.7cm・6.5cm・4.3cm。11は内外面ともに浅黄橙色、1～3mm大の砂礫を多く含む。器面剥離により調整不明。12は底部が明赤褐色、他は浅黄橙色を呈し、2mm大の砂粒を含む。胎土は粗。焼成はやや不良である。ともに13世紀後半～14世紀前半代と比定される。（河村）



第55図　8号墳出土土器実測図

4．9号墳

（1）調査前の状況

9号墳は調査区の東側、昨年度調査の5号墳の北側に位置する。標高は19～20m、昨年度調査の3号墳、今年度調査の7号墳・8号墳・11号墳とほぼ同じ等高線上にある。後世の畑の造成により、石室の石材も墳丘も表面上は全く見当たらなかったが、5号墳調査の際、斜面上位より多量の土器片が検出されたこともあり、古墳の存在を想定、トレンチを設定し試掘したところ、耕作土の下約1mから石材を検出し古墳であることを確認した。表土面は樹木伐開を行った重機により、木材等を踏み込んで堅く締まっていたため、人力での除去作業は困難と判断し、重機により表土及び客土を除去した後、人力での発掘作業に移った。

（2）墳丘

墳丘の墳丘頂部及び北側は、後世の削平を受け大半が消失していたが、東側及び西側については比較的遺存状況は良好であった。トレンチ調査による土層観察から、墓坑端から西側に約1.7m、東側に1.5mの範囲に築造時の地表面がほぼ平坦面となって残っており、さらにその上には、黄橙色土と灰黄褐色土が主体の土盛りが確認された。また、畑の削平にも関わらず、南側では墳丘裾部が確認でき、土層観察と考え合わせると、当古墳は墳丘径約10mの円墳と推定され、東側・西側に残る周溝は、幅1.5m、深さ0.2mで断面形は浅い皿状を示す。

（3）石室

内部主体は南に開口する単室の両袖横穴式石室である。主軸はN26°Wである。石室はすでに天井部及び腰石から上の壁体の石積みの大部分を失っている。長方形プランの玄室に比較的長い羨道が連接するが、羨道の先端は後世の削平による崖になっており、石室の残存長は4.9mを測る。石室内には大量の土砂が流入し、側壁の石材と思われる石が散在していた。墓坑は、古墳築造時の地表面から約100cm掘り込んでおり、平面形は長円形である。

玄室　奥幅1.55m、前幅1.45m、左壁長2.40m、右壁長2.35mを測り、平面形はほぼ長方形である。

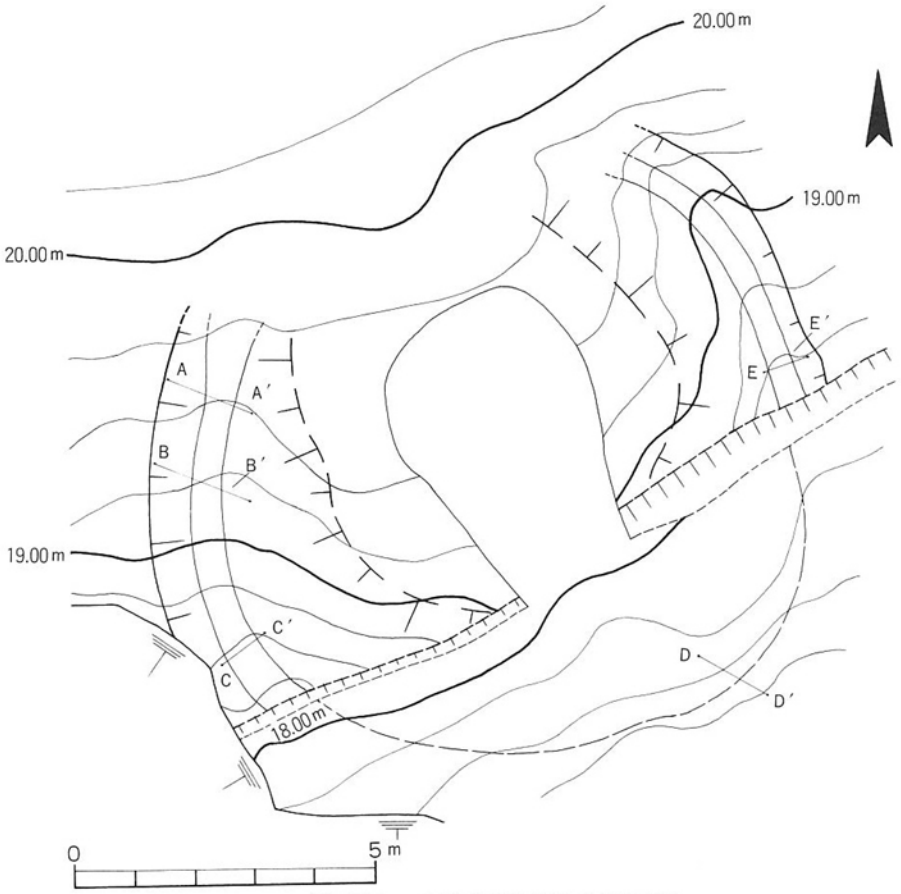
奥壁は30×70cmと120×70cmの2枚の板石を並べ、腰石とする。側壁は左右とも3石の大振りな石材を横長に据えて腰石とする。奥壁とほぼ同じ高さである右壁側の奥壁に接する1石を除いては、高さは0.4～0.5mと半分程度であり、その上に横長の石材を積み重ね、水平方向に目地をそろえている。残存高は床面から奥壁は0.8m、左壁は0.5～0.9m、右壁は0.4～0.9mである。

床面には敷石が施されており、一部は撹乱を受けて消失しているが、ほぼ全面より検出された。敷石のほとんどは、長径20cm前後の平たい角石を用いている。

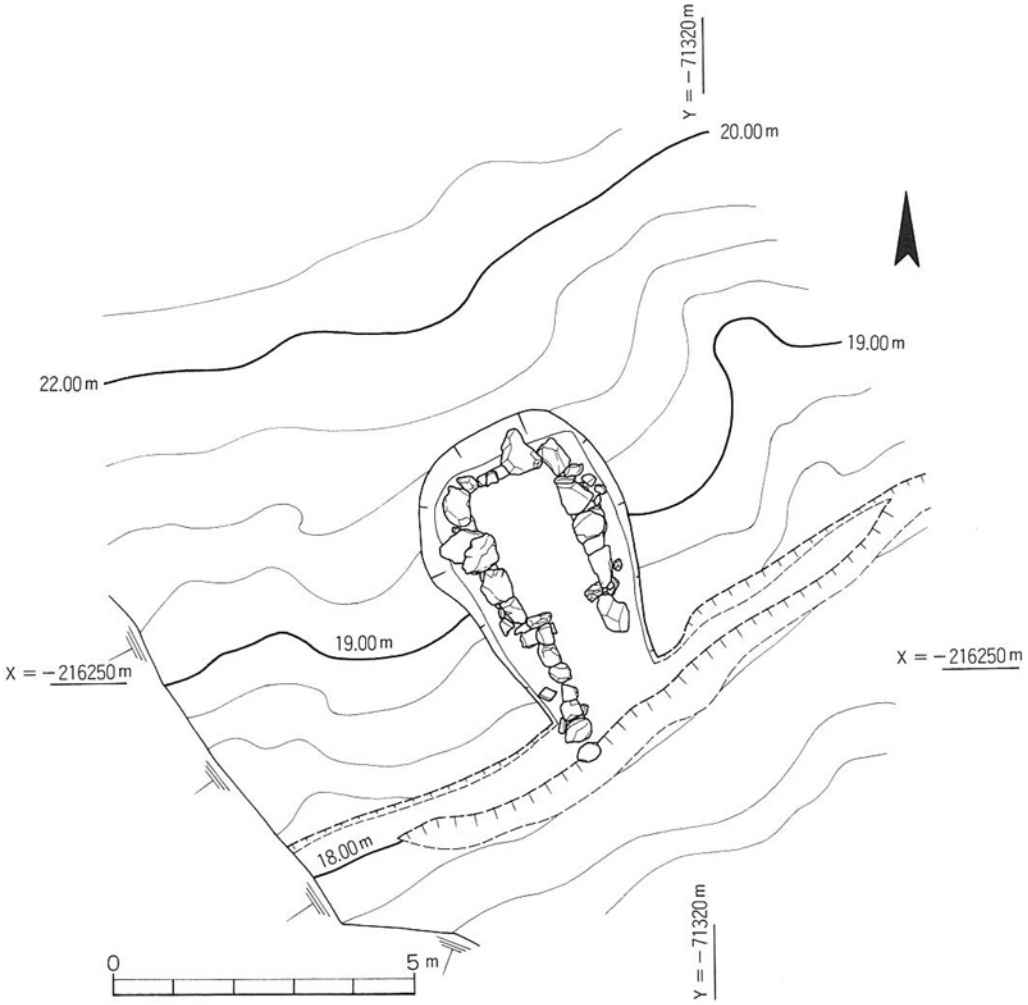
玄門は、左右に約0.8mの石材を縦長に用い袖石とするが、右壁側の袖石の上部は削平時に壊され残存高は0.5mである。袖石の幅は、左袖は40cm、右袖は35cmを測る。袖石間は0.7mであるが、框石は確認されなかった。

羨道　削平により基部石のみが残る羨道部は、左壁側は袖石から2.6m残存するが、右壁側は石材が1石のみ確認されただけであった。

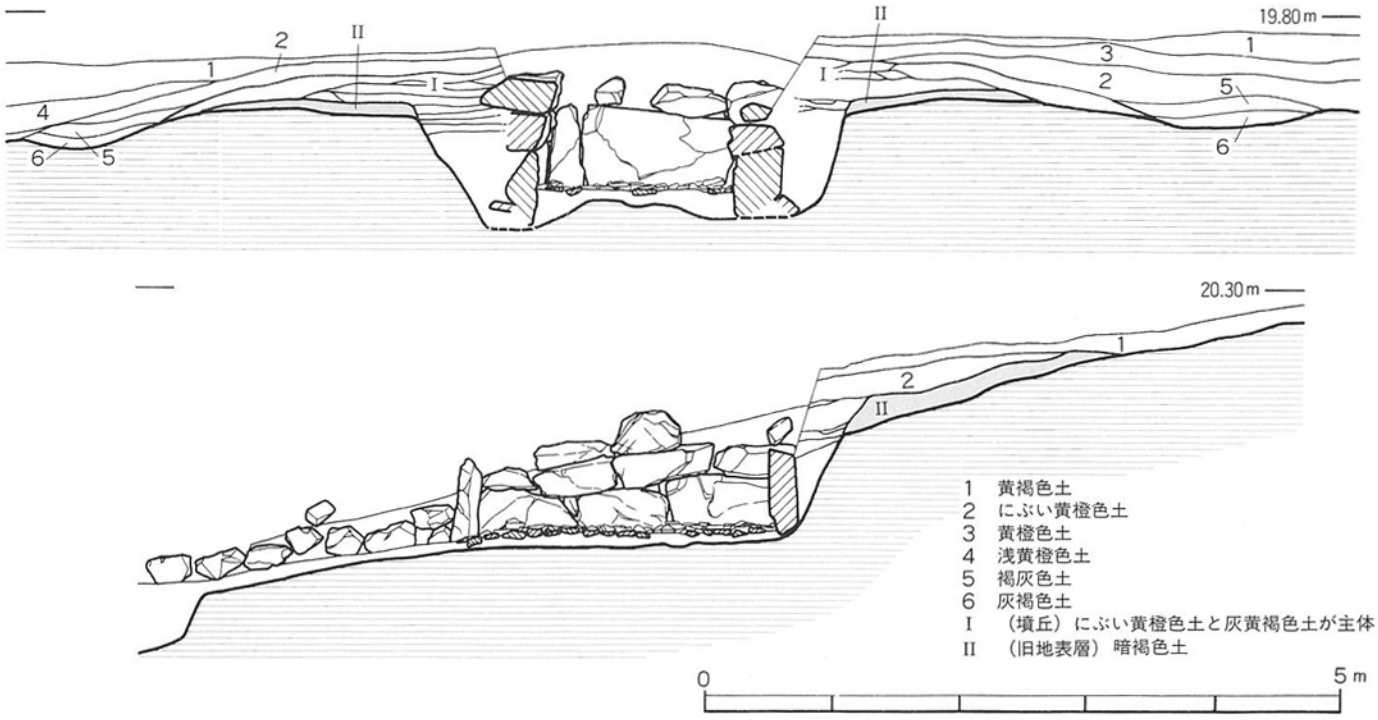
閉塞施設　玄門部から約0.5m離れた羨道部に径20～40cmの塊石4つと、詰石と見られる小石数石が弓状に並ぶことが確認された。羨道部の側壁と同様、削平により基部のみが残った閉塞施設と考えられる。



第56図　9号墳墳丘遺存状況図



第57図　9号墳調査後地形測量図

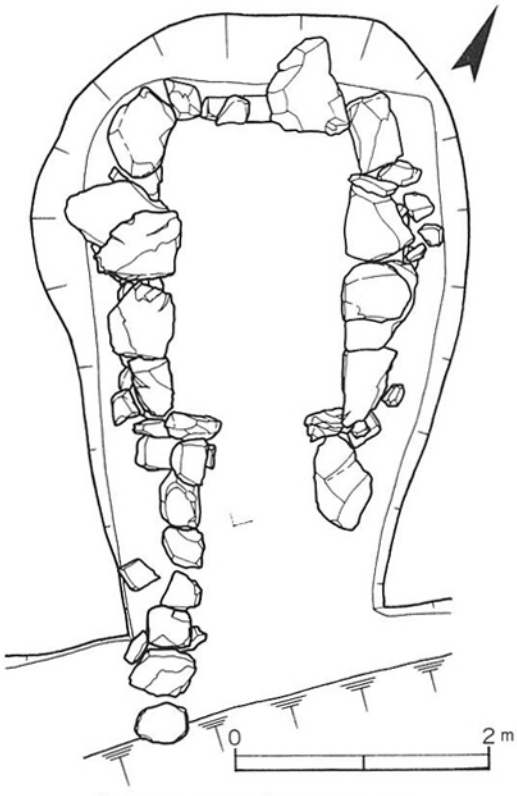


第58図　9号墳墳丘土層断面図

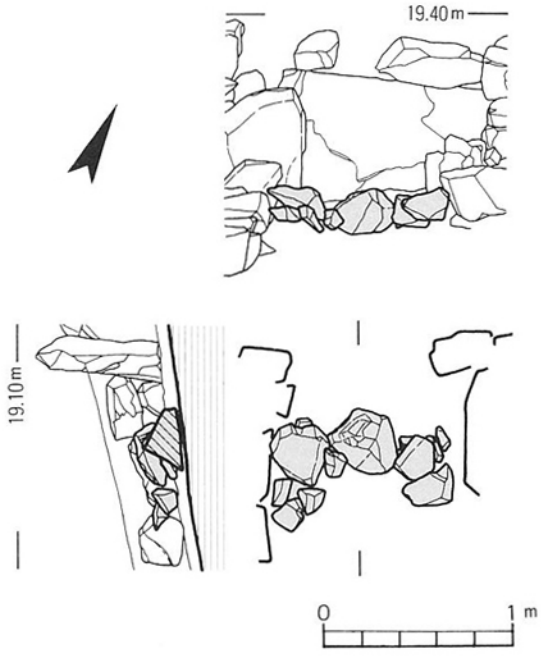
排水施設　玄室のほぼ中央部に排水施設が施されていた。敷石が一列に並び、その下を幅20cm、深さ10cm前後掘り込む。U字形の断面形を示す。

（4）遺物

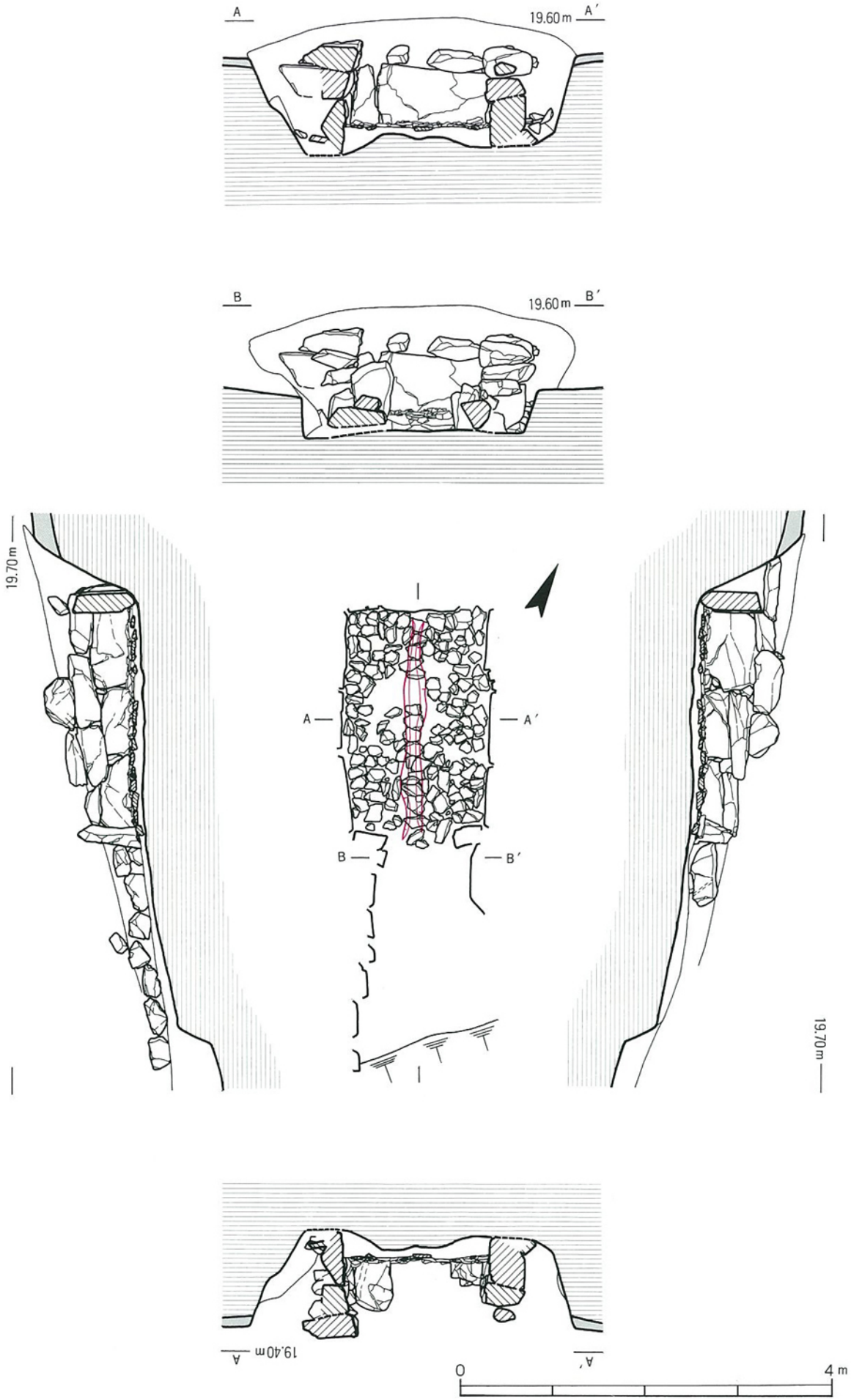
出土状況　玄室内からは、敷石上面より耳環2点と鉄製品が出土した。西側周溝部と東側周溝部からは土器片が多数検出されたが、その大部分は須恵器甕片であり、5cm程度の小片で出土した。また、開口部東側の墳丘裾部と思われる位置から、土師器高坏と須恵器坏がまとまって出土した。古墳築造時



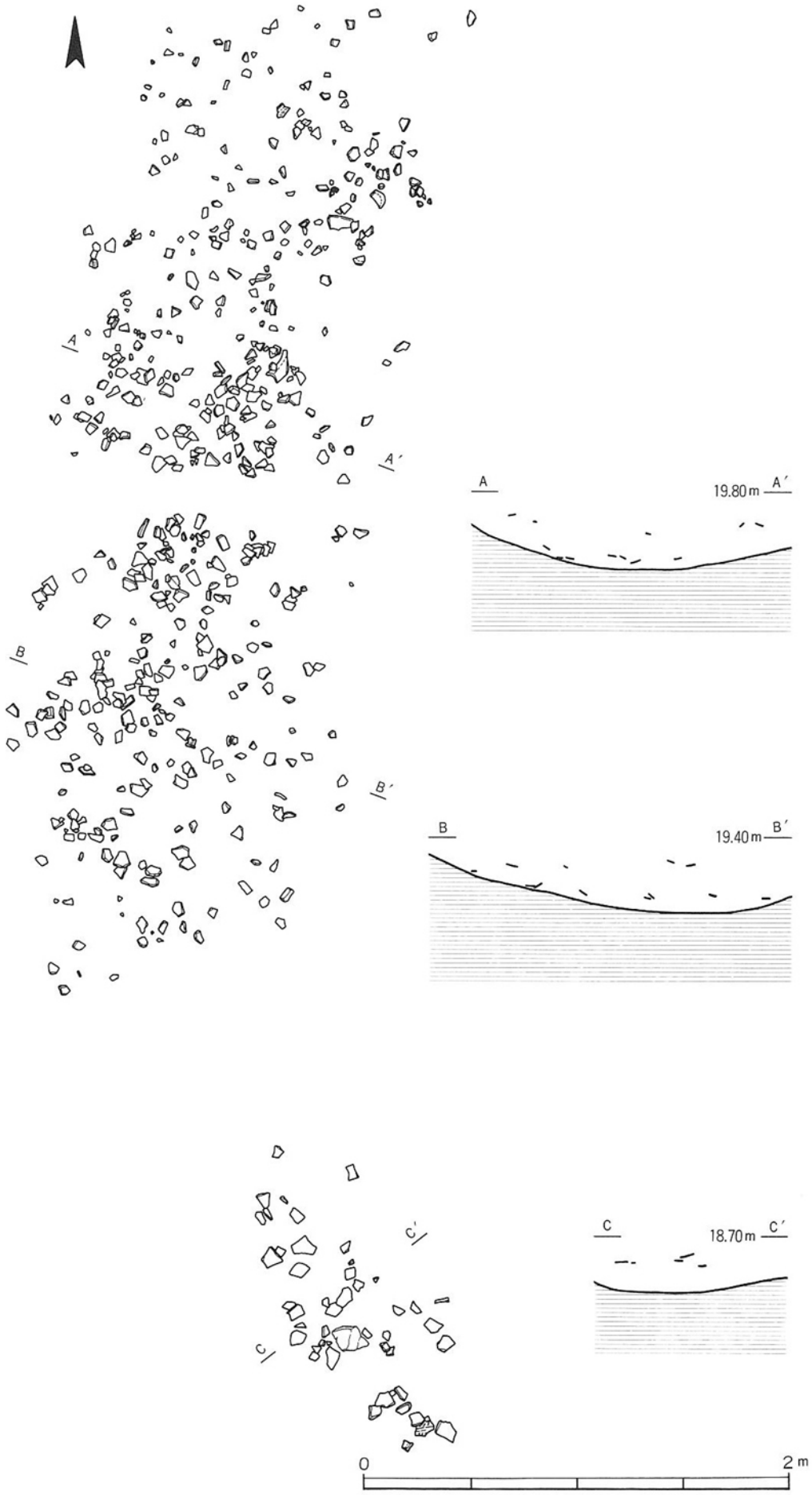
第59図　9号墳石室平面図



第60図　9号墳閉塞施設実測図



第61図　9号墳石室実測図



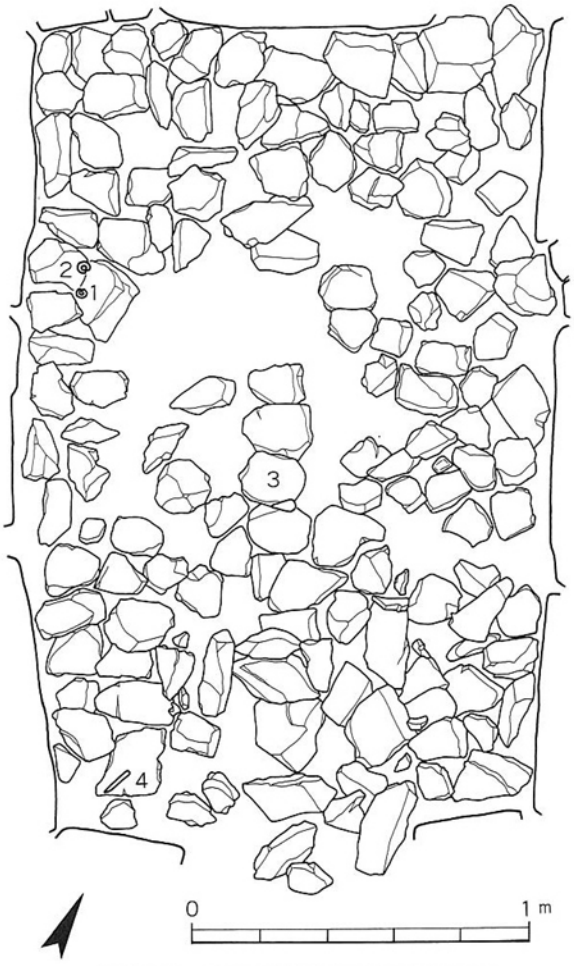
第62図　9号墳遺物出土状況図①

あるいは追葬時の祭祀に関わるものと考えられる。

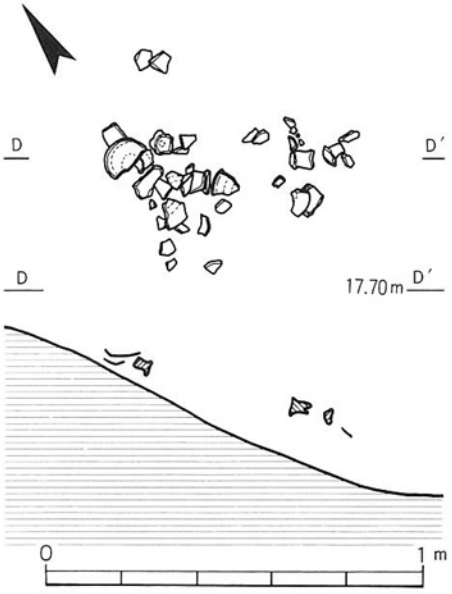
出土遺物

土器（第67図　図版21）　須恵器の坏蓋・坏身、高坏、瑳、短頸壺、壺、甕、土師器の高坏など、他の古墳に比べ出土土器は器種に富む。

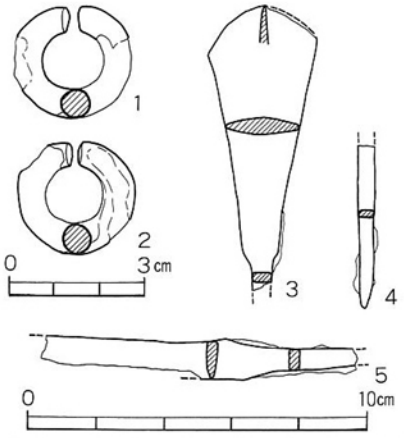
須恵器坏蓋（6・7）　開口部東側出土。6の口縁部は外下方へ下った後、やや内側に屈曲し、端部に至って外反する。7の口縁部は内湾しながら開き、端部は丸い。ともに天井部はやや内湾気味。



第63図　9号墳遺物出土状況図②

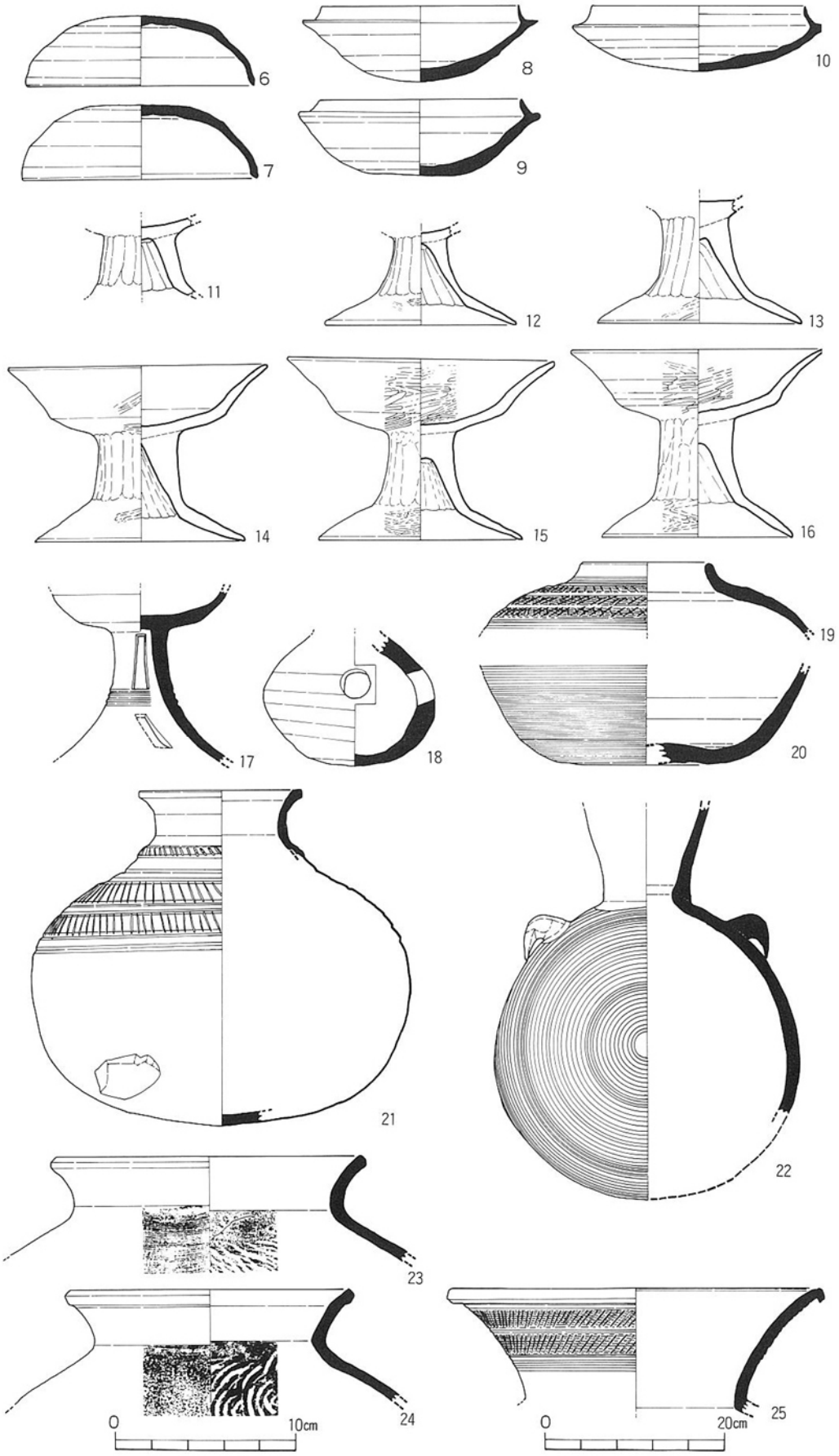


第64図　9号墳遺物出土状況図③



第66図　9号墳出土耳環・鉄製品実測図

第65図　9号墳遺物出土状況図④



第67図　9号墳出土土器実測図

第5表　9号墳出土土器観察表

挿図 図版	器種	出土位置	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
67－6 21－6	坏蓋 須恵器	墳丘上 (開口部東)	口径 12.8 器高 3.9	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰色 内 灰色	
67－7 21－7	坏蓋 須恵器	墳丘上 (開口部東)	口径 13.2 器高 4.2	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰色 内 黄灰色	
67－8	坏身 須恵器	墳丘上 (開口部東)	口径 9.8 器高 4.3 受部径 12.1	底部外面は回転ヘラケズリ。内面底部は静止ナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	密	良好	外 黄灰色 内 灰色	
67－9 21－9	坏身 須恵器	墳丘上 (開口部東)	口径 11.3 器高 4.3 受部径 13.7	底部外面は回転ヘラケズリ。内面底部は静止ナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰色 内 黄灰色	焼きひずみ・焼きぶくれ有り。
67－10	坏身 須恵器	周溝内 (南西)	口径 12.0 器高 3.7 受部径 14.2	底部外面は回転ヘラケズリ。内面底部は静止ナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	密 含砂粒多	良好	外 褐灰色 内 灰色	
67－11	高坏 土師器	墳丘上 (開口部東)		脚筒部内面は、ヘラケズリ。外面は、ミガキ。	密 含砂粒少	やや良	外 橙色 内 橙色	
67－12	高坏 土師器	墳丘上 (開口部東)	裾部径 10.6	脚筒部内面は、ヘラケズリ。脚裾部内面は、静止ナデ。他はミガキ。	密 含砂粒少	やや良	外 橙色 内 橙色	
67－13	高坏 土師器	墳丘上 (開口部東)	脚裾部径 11.5	脚筒部内面は、ヘラケズリ。脚裾部内面は、静止ナデ。他はミガキ。	密 含砂粒少	やや良	外 橙色 内 橙色	
67－14 21－14	高坏 土師器	墳丘上 (開口部東)	口径 14.4 器高 9.8 脚裾部径 11.8	脚筒部内面は、ヘラケズリ。脚裾部内面は、静止ナデ。坏部内・外面及び脚筒部外面・裾部外面は、ミガキ。	密	良好	外 明赤褐色 内 明赤褐色	
67－15 21－15	高坏 土師器	墳丘上 (開口部東)	口径 14.9 器高 10.1 脚裾部径 11.5	脚筒部内面は、ヘラケズリ。脚裾部内面は、静止ナデ。坏部内・外面及び脚筒部外面・裾部外面は、ミガキ。	密	良好	外 赤褐色 内 赤褐色	
67－16	高坏 土師器	墳丘上 (開口部東)	口径 14.1 器高 10.5 脚裾部径 10.7	脚筒部内面は、ヘラケズリ。脚裾部内面は、静止ナデ。坏部内・外面及び脚筒部外面・裾部外面は、ミガキ。	密 含砂粒少	やや良	外 橙色 内 橙色	
67－17	高坏 須恵器	周溝内 (南西)		坏底部は、回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。脚部に3本の沈線を境に、2段2方向の透かし孔有り。	密	良好	外 灰色 内 灰色	
67－18	甕 須恵器	周溝内	体部最大径 9.5	外面底部は、回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。	密	良好	外 灰色 内 灰色	
67－19 21－19	短頸壺 須恵器	周溝内 (北西)	口径 7.0	内外面とも回転ナデ。肩部にカキ目調整を施した後、4条の凹線を巡らせ、その間に凹線により斜線部を3段施す。ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外 灰赤色 内 赤褐色	20と同一個体の可能性有り。
67－20	短頸壺 須恵器	周溝内 (北西)		底部外面は、回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。外面はカキ目調整。	密	良好	外 灰赤色 内 赤褐色	
67－21 21－21	壺 須恵器	周溝内 (南東)	口径 9.3 器高 19.8 体部最大径 21.0	外面底部は、回転ヘラケズリ後回転ナデ。他は回転ナデ。口頸基部の凸帯に刺突文有り。肩部に6条の凹線を巡らせ、その間に斜線文を2段施す。ロクロ左回転。	密 含砂粒多	良好	外 灰黄褐色 内 灰黄褐色	外面下位に土器片付着。自然釉。
67－22	提瓶 須恵器	周溝内 (南西)	体部最大径 17.5	体部外面正面は、カキ目調整。他は回転ナデ。ロクロ右回転。カギ状把手貼り付け。				
67－23 21－23	甕 須恵器	周溝内 (南西)	口径 16.7	口頸部内外面は、回転ナデ。肩部外面は、タタキ後カキ目。内面にタタキの際の当て具痕残る。	密	良好	外 明黄褐色 内 黄灰色	焼きひずみ有り。
67－24 21－24	甕 須恵器	周溝内 (北西)	口径 15.5	口頸部内外面は、回転ナデ。肩部外面は、タタキ後カキ目。内面にタタキの際の当て具痕残る。	密	やや良	外 黄色 内 浅黄色	
67－25 21－25	甕 須恵器	周溝内 (北西)	口径 41.8	口頸部内外面は、回転ナデ。外面は、カキ目調整の後、2条の沈線を3段に巡らせ、その間に斜線文を施す。	密	良好	外 オリーブ黒 内 オリーブ黄	

須恵器坏身（8・9・10）　8・9は開口部東側出土。8の立ち上がりは外反気味に内傾し端部は尖る。受部は短く外上方に延び端部は尖る。9の立ち上がりは大きく内傾し厚い。受部はやや厚く外上方に延び端部は丸い。底部は平底に近い丸底。10は周溝南西部出土。立ち上がりは外反気味に内傾し端部は尖る。受部は外上方に延び端部は丸い。底部は内湾気味に立ち上がる。

土師器高坏(11～16)　開口部東側からの一括出土。口径約15cm、器高約10cm、脚裾部径約11cmと法量は似通っている。杯部口縁部は、底部との間に明確な稜を作ってやや外反気味に立ち上がり、端部は丸く納める。脚筒部外面は縦方向に、坏部内外面・脚裾部外面は横方向にミガキが施される。

須恵器短頸壺（19・20）　同一個体か。底部から口頸基部までカキメ調整、その後体部肩部に凹線を4条巡らし、その間に、上段は1方向から、2・3段は2方向から交差する斜線文を施す。

須恵器壺（21）　丸底気味の底部から体部は大きく内湾しながら立ち上がり、口頸部は外湾しながら端部に至る。口頸基部の凸帯に刺突文を施す。肩部に2条の沈線を3段巡らせ、斜線文を2段施す。

鉄製品(第66図　図版21)　3は圭頭式鉄鏃。残存長8.4cm、身部の長さ7.5cm、幅3.2cm。4は茎部。残存長4.8cm。5は刃部及び茎部の端を欠失した刀子。残存長9.4cm。

装身具(第66図　図版21)　1・2は銅芯銀張の耳環。外径・内径・突合部の幅はそれぞれ、1が、2.8×2.4cm・1.3×1.2cm・0.2cm、2が、3.6×3.5cm・1.4×1.3cm・0.3cm。断面形は円形。　(山本)

5．10・11号墳

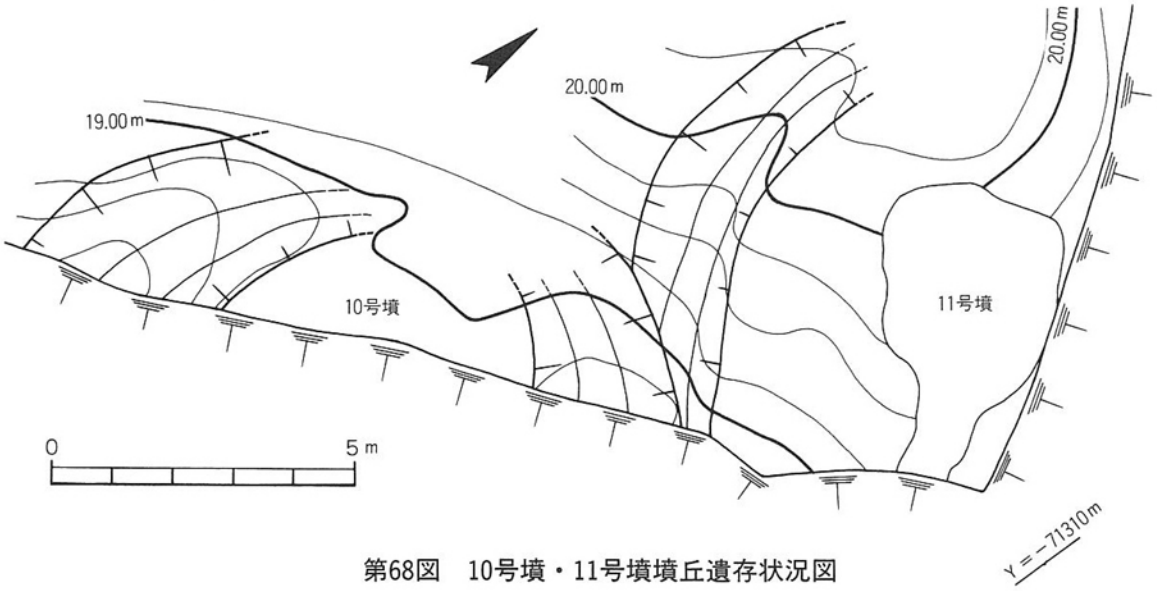
（1）調査前の状況

10・11号墳は調査区の東端、標高20m辺りに位置する。9号墳と同様、後世の畑の造成による削平及び盛土により表面上は古墳の痕跡を全く留めていなかった。周囲の古墳からの位置関係を基に、トレンチを設定し試掘したところ、地表面から約1m下で、11号墳の側壁と墓坑の一部を確認した。また、10号墳は重機を使ってのトレンチ調査の際、地表面から約1.7m下で周溝の一部を検出した。10号墳は後世の開墾により、石室まで完全に失われており、わずかに周溝が残るだけである。6号墳の斜面上位の畑の崖面には、土止めのために、古墳の石材と思われる石が並べられているが、それらの一部は10号墳のものであった可能性が高い。また、当古墳群では唯一、10号墳と11号墳の周溝部に切り合いがみられるが、土層観察により11号墳が10号墳に先行して築造されたものと考えられる。

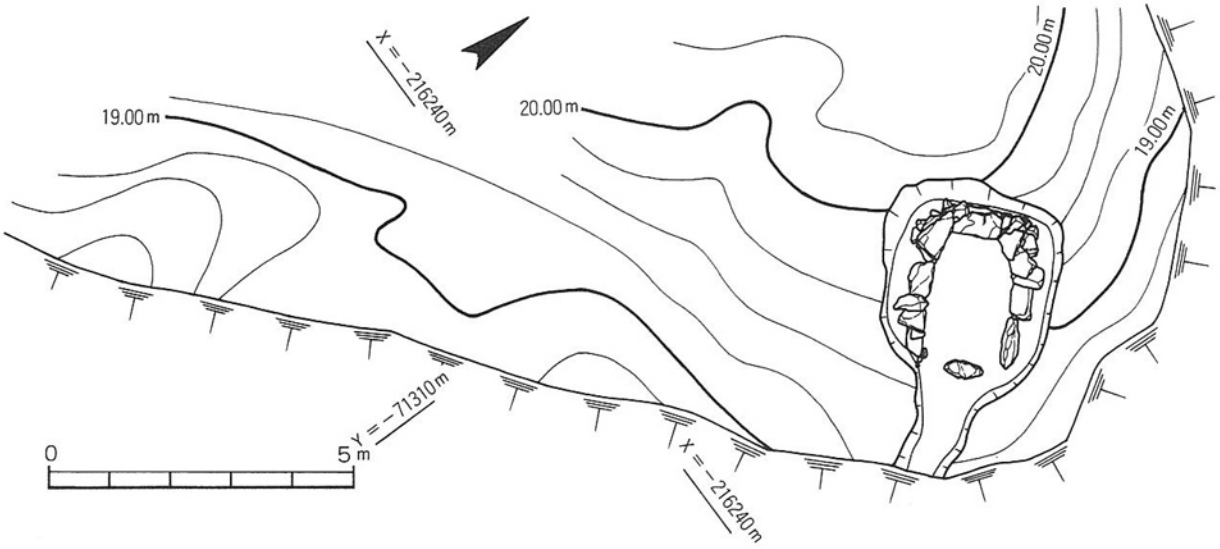
以下、11号墳について述べる。

（2）墳丘

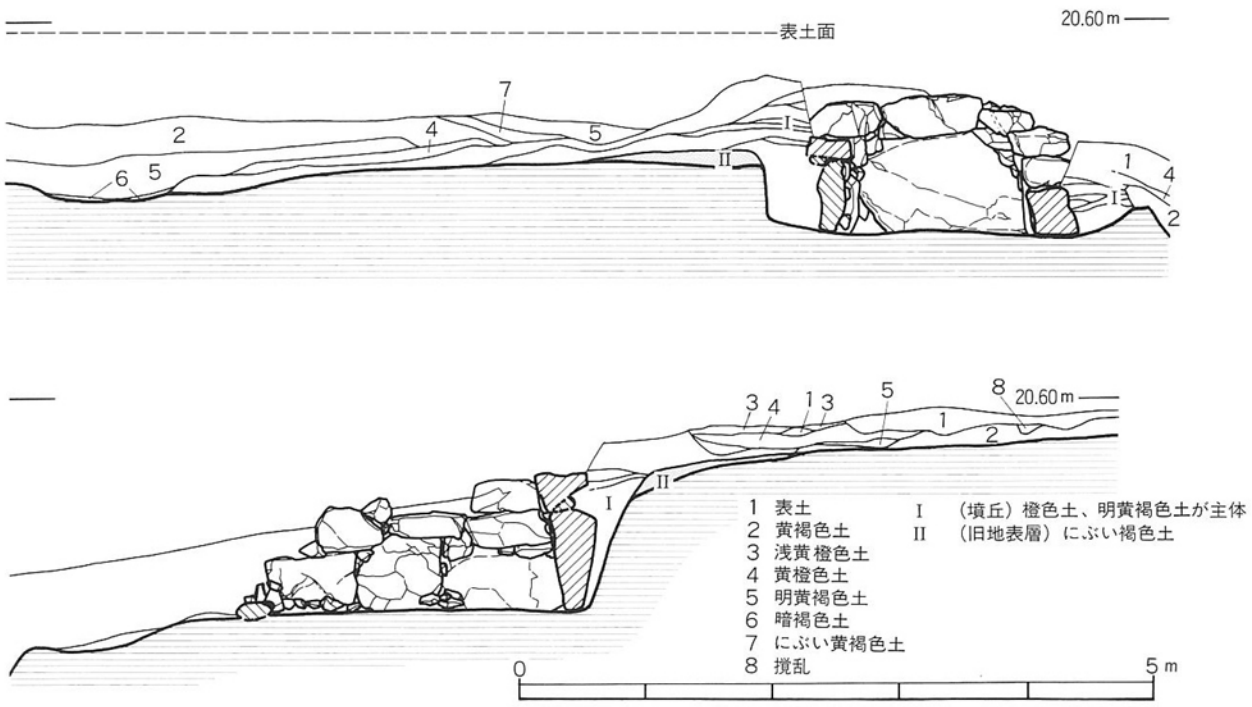
墳丘は後世の削平により大部分が消失していたが、南西側については比較的遺存状況は良好であっ



第68図　10号墳・11号墳墳丘遺存状況図



第69図　10号墳・11号墳調査後地形測量図

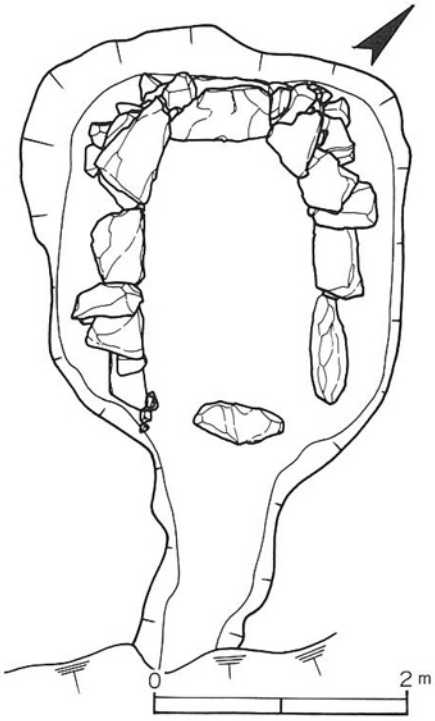


第70図　11号墳墳丘土層断面図

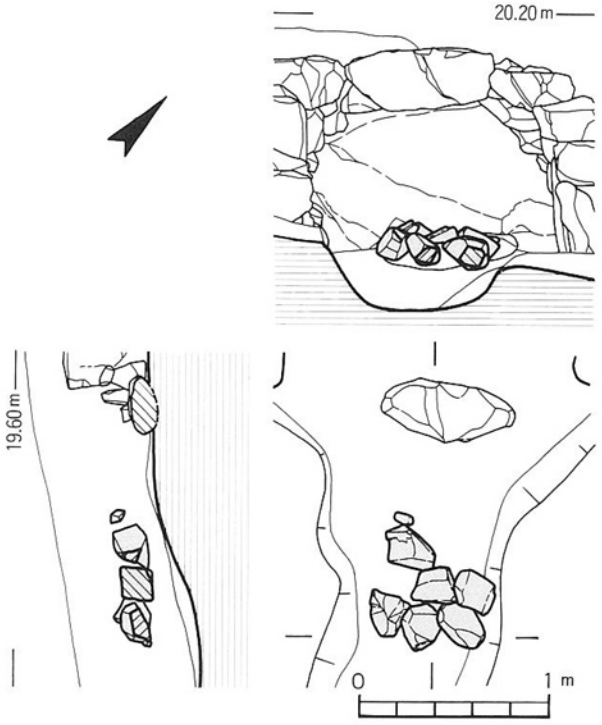
た。土層観察から、墓坑端から西側に約1.4mの範囲に築造時の地表面がほぼ平坦面となって残っており、さらにその上には、黄橙色土と灰黄褐色土が主体の土盛りが確認された。当古墳は墳丘径約10mの円墳と推測され、西側に残る周溝は幅1.1m、深さ0.2mで断面形は浅い皿状を示す。

（3）石室

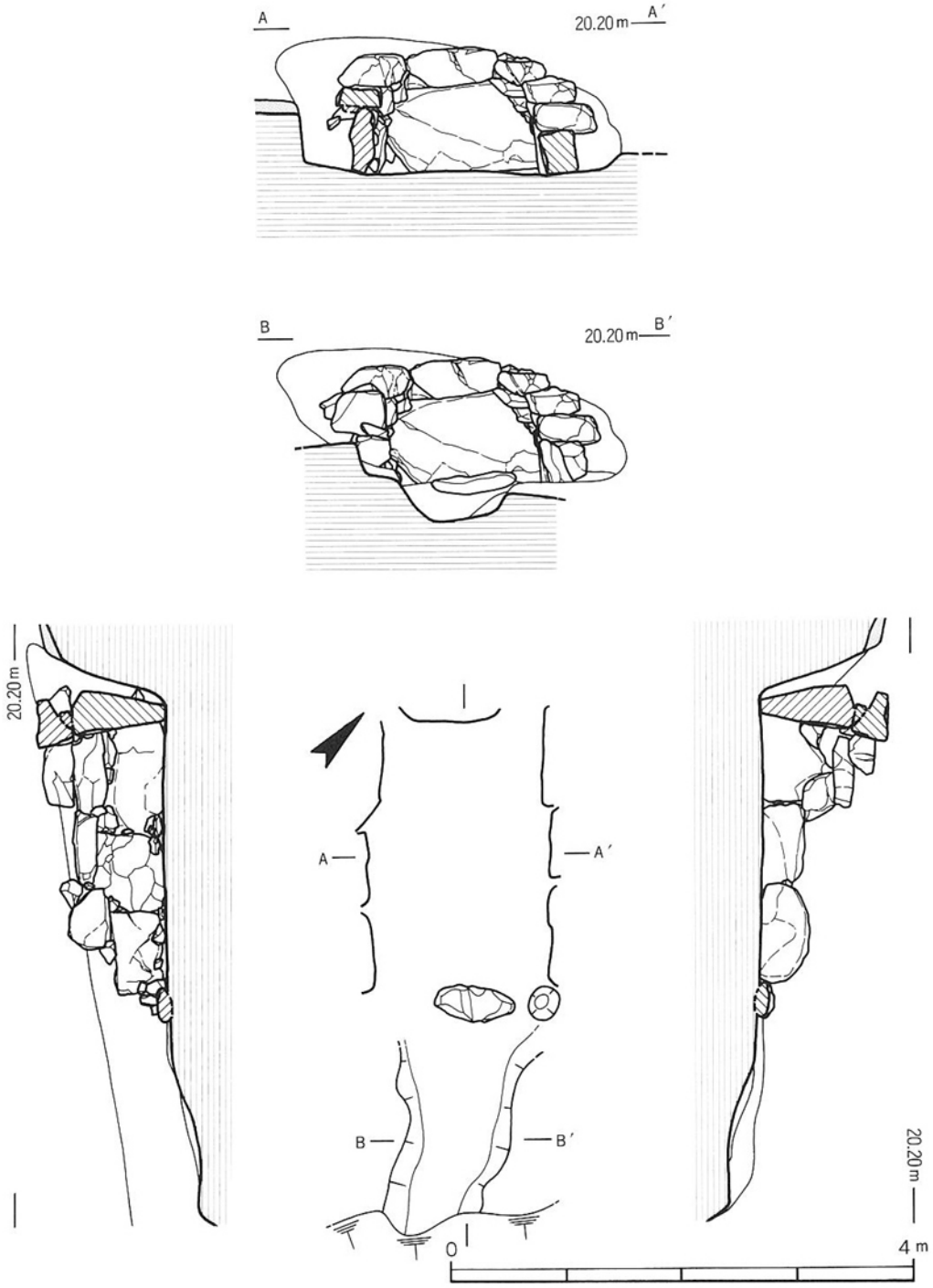
内部主体は南に開口する横穴式石室。袖石から羨道部にかけての石材は欠失しているが、框石の位置から両袖式と考えられる。長方形プランの玄室に羨道が連接すると思われるが、羨道部については



第71図　11号墳石室平面図



第72図　11号墳閉塞施設実測図



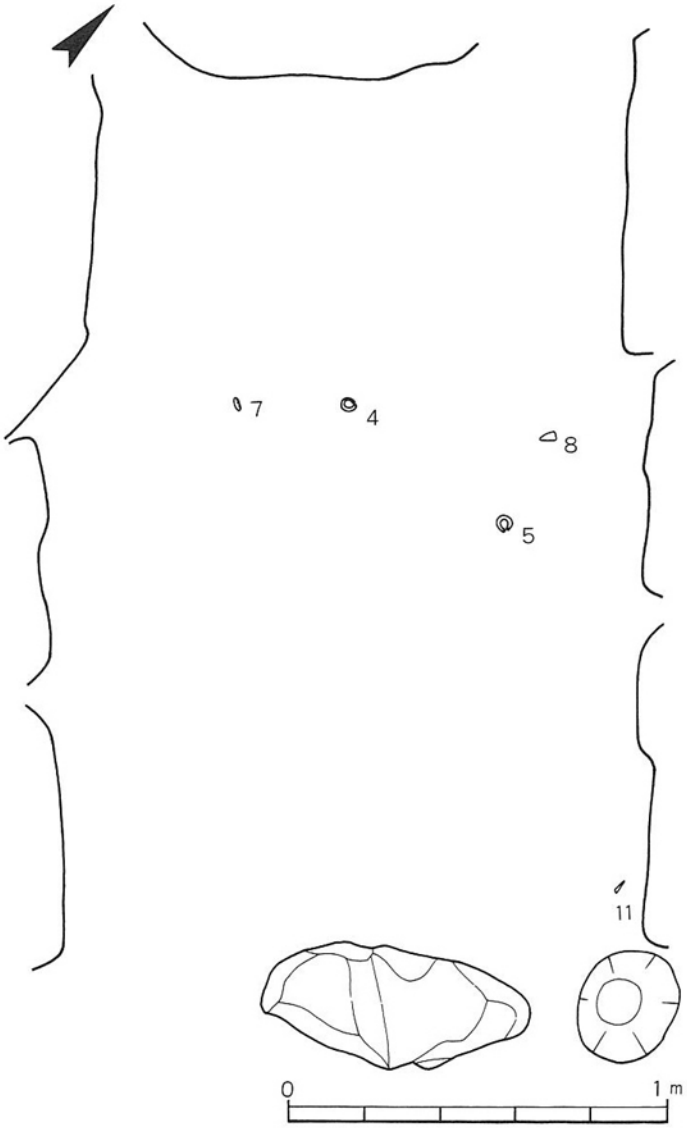
第73図　11号墳石室実測図

不明。ただ、奥壁中央部から3.5m辺りに閉塞石があり、その位置まで羨道は続いていたと考えられる。主軸はN43°W。墓坑は、北側で約120cm、西側で60cm掘り込んでおり、平面形はほぼ隅丸方形である。

玄室　奥幅1.40m、前幅1.50m、左壁長2.40m、右壁長2.35mを測り、平面形はほぼ長方形である。

奥壁は140×80cmの板石を地山に据え置き鏡石とする。側壁は左右とも3石の大振りな石材を横長に据え腰石とする。遺存状況の良好な左右奥壁寄りを観察すると、腰石の上に横長の石材を3段に水平方向に目地をそろえながら積み重ね持ち送る。残存高は床面から奥壁は1.2m、左壁は0.5～1.2m、右壁は0.4～1.0mである。玄門部には、奥壁中央部から2.3mの位置に長さ70cm、幅30cmの框石が残る。

羨道　床面は奥壁中央部から3.1mで緩やかに傾斜し、3.5m辺りで再び平らになる。



第74図　11号墳遺物出土状況図

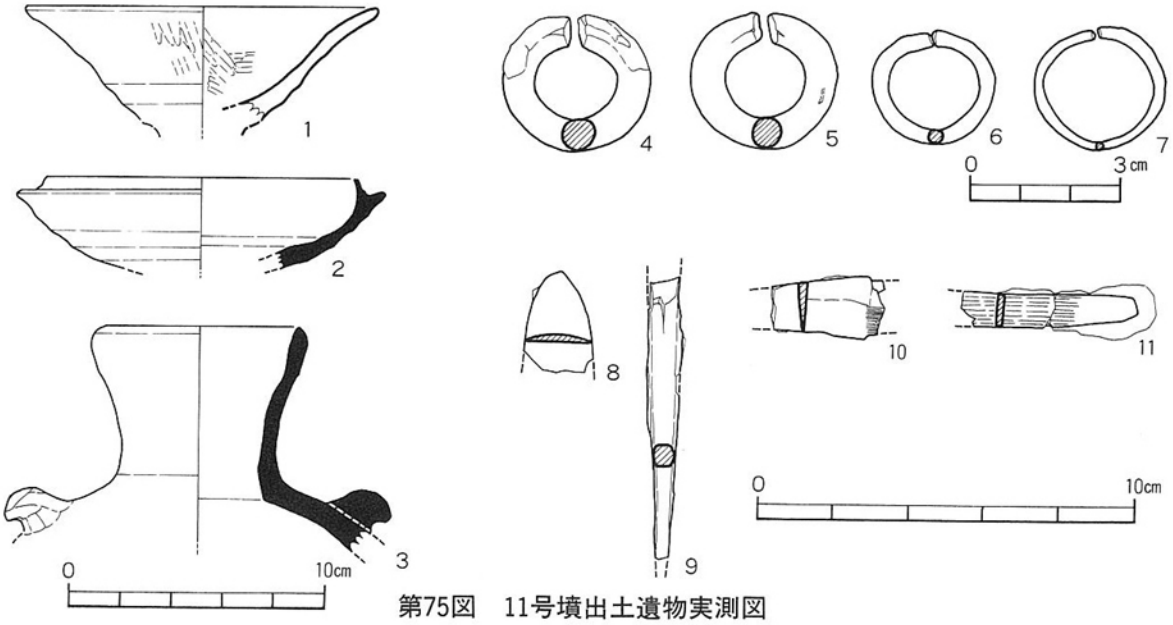
閉塞施設　羨道床面の傾斜部に、径20～30cmの塊石６つが確認された。９号墳で確認された羨道部の閉塞石と同様のものと考えられる。

（４）遺物

出土状況　玄室内床面より耳環３点（４・５・７）及び鉄製品が出土した。

出土遺物（第75図　図版20）

１は土師器高坏の坏部。口径13.8cm。体部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。内外面ともミガキが残る。２は須恵器坏身。受部の立ち上がりは低く内傾する。３は提瓶。口径7.4cm。カギ状把手が貼り付けられる。４～７は耳環。４・５は銅芯銀張で、外径・内径はそれぞれ、４が3.0×2.6cm・1.6×1.4cm、５が2.9×2.7cm・1.7×1.4cm。断面は円形である。６・７は銅芯部のみ残る。８は鉄鏃の身部の先端、幅1.8cm、厚さ0.3cm、残存長2.6cm。９は鉄鏃茎部。断面は方形、残存長7.4cm。10・11は刀子。　（山本）



第75図　11号墳出土遺物実測図

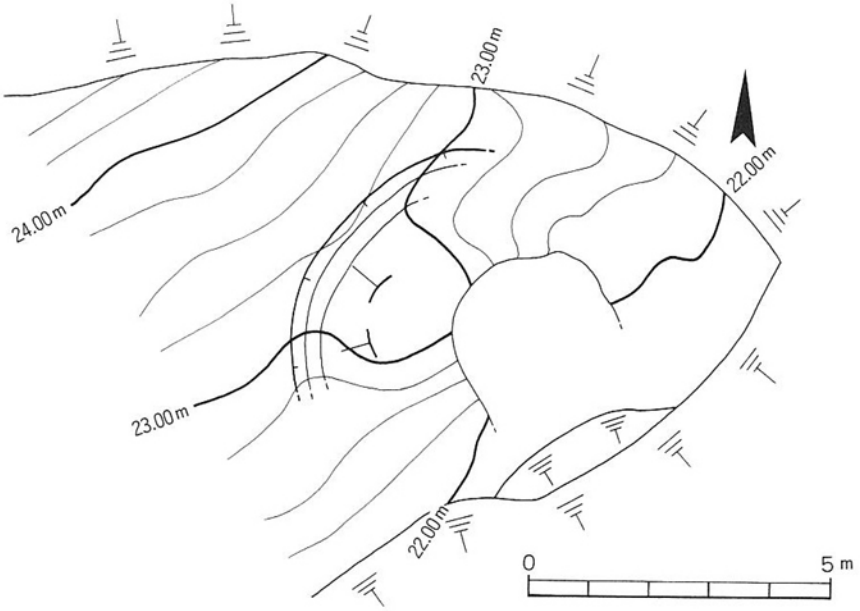
6．12号墳

（1）調査前の状況

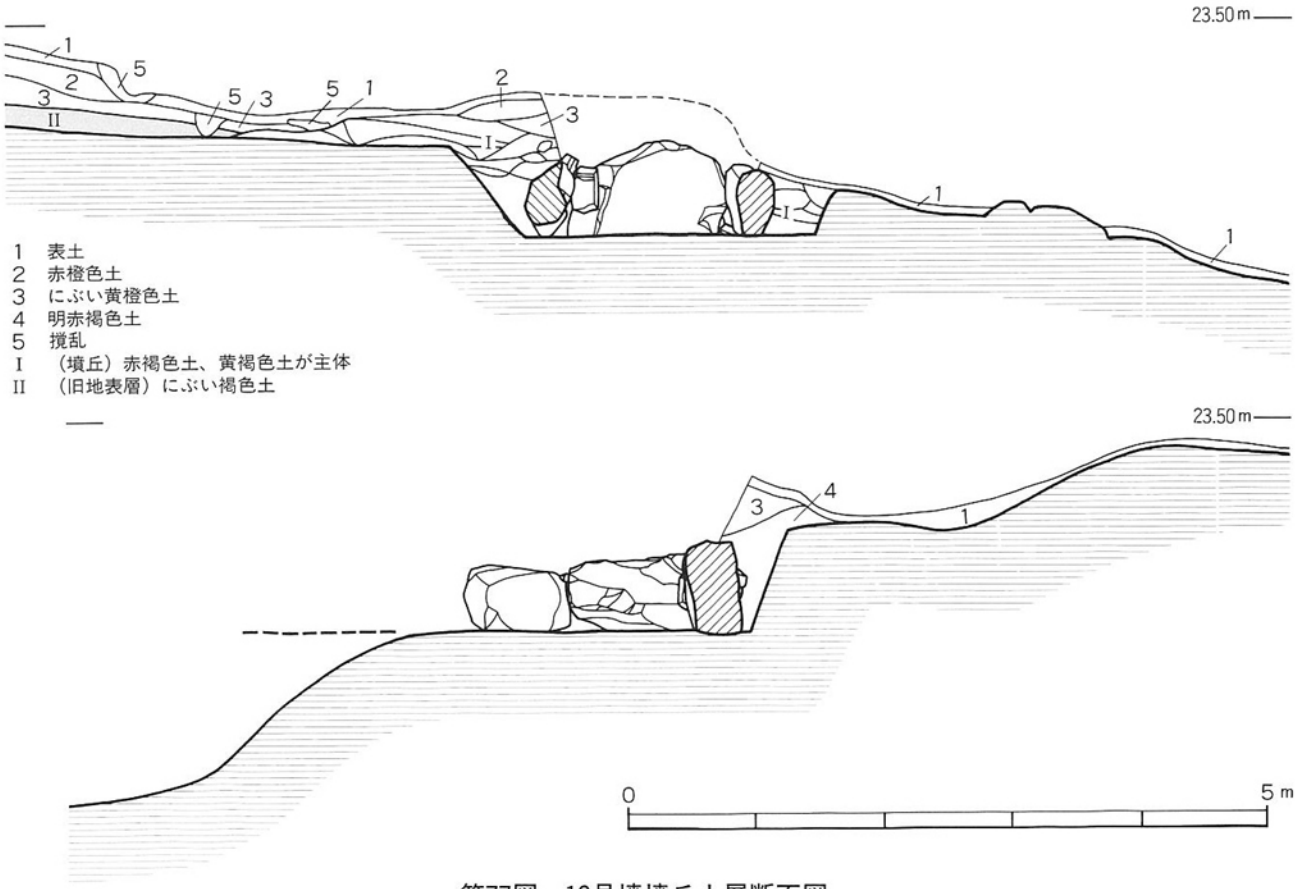
12号墳は、調査区の東寄りに位置する小円墳である。石室付近の標高は約22m。当古墳の西側には、ほぼ同じ高さで13号墳が隣接し、斜面下位の南東方向には10号墳と11号墳が、南西方向には9号墳が位置している。古墳の北側は、幅約2m、深さ約3.5mの細い谷筋で、東側も大きく深い谷となり、どちらも自然地形で急な崖面となっていた。南側は地山を削り出し、段々畑の崖面に整形されており、西側は13号墳に向かって緩やかに上る斜面であった。調査前、古墳の周辺は雑草が生い茂っており、緩斜面上に石室を構築する石材がわずかに露出していた。

（2）墳丘

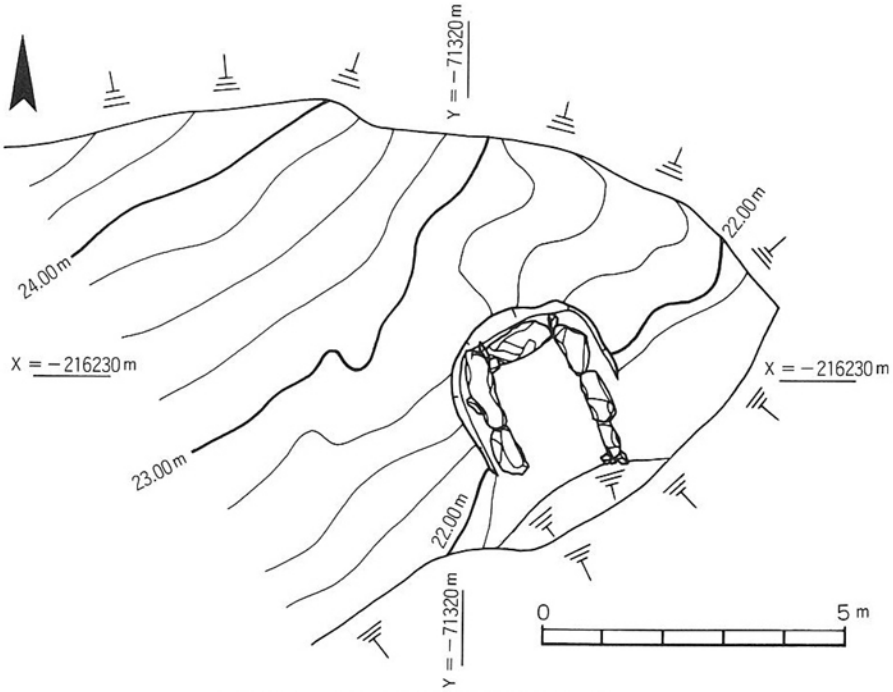
墳丘は、⅔程度消失しており、北西側の一部分しか残存していなかった。4本設定したトレンチのうち、西トレンチを除く3本のトレンチには地山と岩盤が露出し、わずかに表土が覆い被さっていた。南側は、奥壁から2.3m付近で畑の崖面になっており、東側も谷底まで下る急な崖面であった。北トレンチでは、墓坑端から1.3m地点に周溝と思われる地山を掘り込んだ跡が検出されたが、墳丘は削平を受けており、立ち上がりラインについては確認できなかった。墳丘裾部が確認されたのは、西トレンチだけで、墓坑の端から1.7m地点で、地山からの墳丘立ち上がりラインが確認された。周溝は、斜面上位の北～西側にかけて、上端幅0.5～0.7m、底幅0.25～0.35m、深さ0.25m程度で巡っているのが確認された。検出された北西部の形状や斜面を利用して築造している一般的な例から推測すると、形状は馬蹄形であった可能性が高い。付近の標高は古墳の北西側が最も高く、南東側が低いことから、周溝も北西部付近が最も深かったと思われる。周溝内の堆積土は上位から褐色土、鈍い黄褐色土。墳丘の規模については、西トレンチの土層断面での墳丘の立ち上がりが、石室の中心から3.4m地点であったことから、直径7m前後であったと推定され、残存している古墳の中では、最も小規模な例である。しかし、古墳が斜面に築造されているため、斜面の下から見上げると、その規模に比べてかなり雄大な感じを与えたとみられる。墳丘の最大残存高は、斜面上位の北西側で地山から約35cmであった。



第76図　12号墳墳丘遺存状況図



第77図　12号墳墳丘土層断面図



第78図　12号墳調査後地形測量図

（3）石室

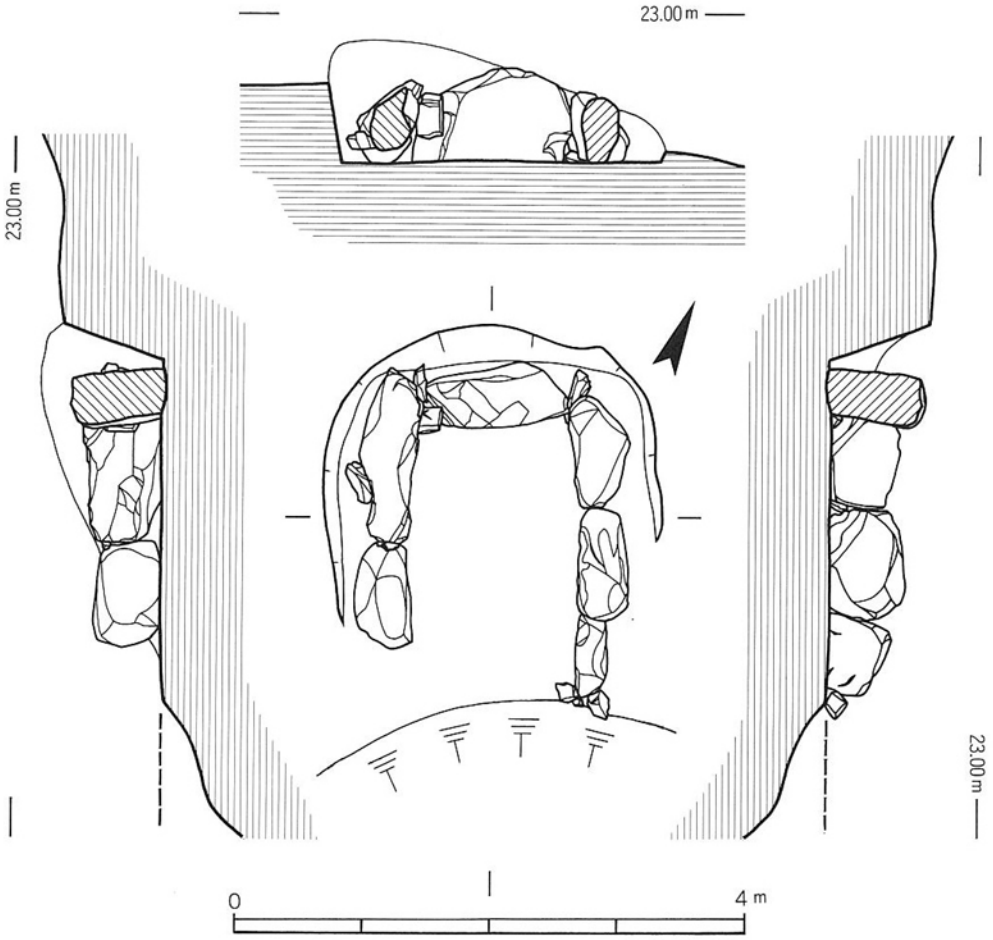
墓坑の形状は隅丸長方形に近く、斜面下位の開口部側は削平を受け、半分程度消失していた。墓坑の残存長約2.5m、最大幅約2.7mを測る。地山から掘り込んだ深さは、斜面上位の奥壁西側が最も深く約0.8m、下位の右側壁側で約0.2mであった。主体部の主軸はN24°Wを示し、ほぼ南東に開口する横穴式石室であったと推定される。石室の平面プランもほぼ長方形であった可能性が高い。石材の石質

は花崗岩である。

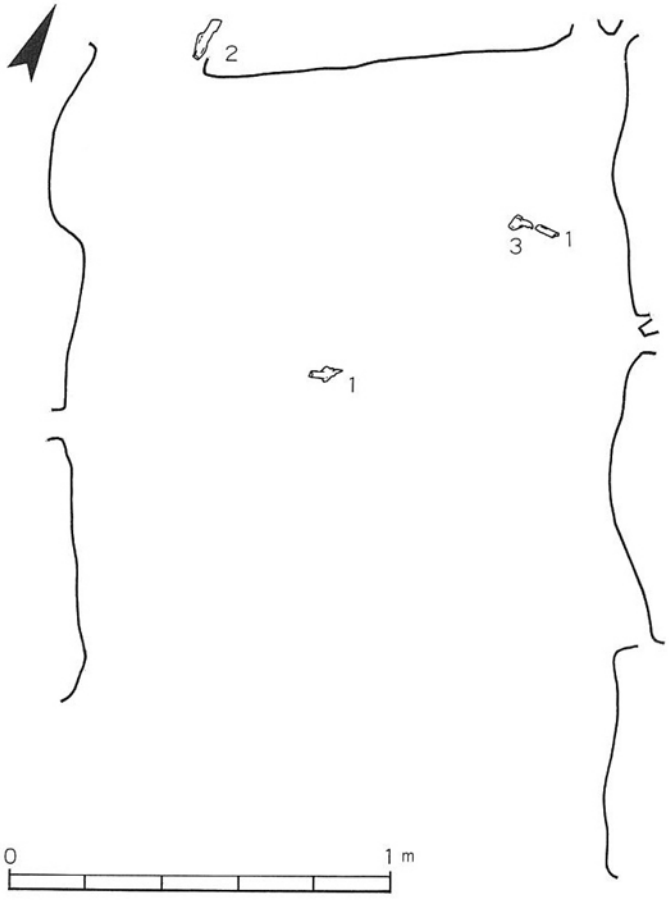
玄室　残存長約2.2m、奥壁幅約1.5mを測る。奥壁は114×72×54cmほどの石材を横長に10度ほど内傾させて据えていた。また左壁奥の腰石との間に、46×21×20cmほどの柱状の石材を床面から約20cm浮かせた高さで、詰め石として縦長に入れて赤褐色の粘土塊で固めていた。左右側壁の腰石は、左壁が２石、右壁が３石ほど残っており、すべて横長に据え置かれていた。詰め石は欠失していたが、腰石上面レベルは床面から左右それぞれ約0.6mに揃えられていた。側壁内傾角度は現状では左壁側13度、右壁側15度であった。玄室床面も撹乱を受けており、敷石は確認できなかった。

（４）遺物

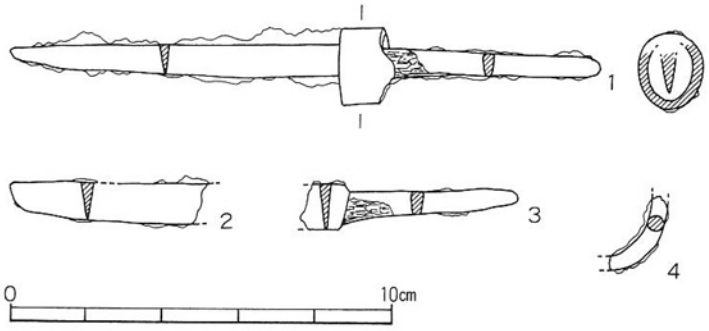
出土状況　墳丘上や周溝内からの出土遺物はなく、玄室内から刀子３点、鉄製釣針１点の合計４点を検出した。玄室内も著しく撹乱を受けており、遺物はすべて小さく割れた状態で、完全な形を保っているものはなかった。また、遺物は玄室内各所に散在して検出されたことから、原位置を留めているものもないと思われる。



第79図　12号墳石室実測図



第80図　12号墳石室内遺物出土状況図



第81図　12号墳出土鉄製品実測図

出土遺物

鉄製品（第81図　図版20）

刀子（1）は、ほぼ完形。責金具が残る。長さ15.6cm、最大幅0.8cm、身部長9.3cm、茎部長6.3cm、身の厚さ0.25cm、茎の厚さ0.3cmを測る。責金具の内部及び茎部に木質が残存している。刃部の断面形は二等辺三角形に近く、茎部の断面形は長方形に近い。身の部分は玄室内北東区及び南西区より２つに折れた状態で、また茎の部分は玄室内北西区の、それぞれ黒褐色の埋土中より出土した。

刀子（2）は、身部のみ残存し、関部と茎部は欠失。残存長5.2cm、残存最大幅1.0cm、身の厚さ0.25cm。刃部の断面形は二等辺三角形に近い。玄室内北西区の黒褐色の埋土中より出土した。

刀子（3）は、関部と茎部のみ残存し、身部の大半は欠失していた。残存長5.8cm、残存最大幅1.25cm。両関。関部の身の厚さ0.3cm、茎部の身の厚さ0.3cm。刃部の断面形は二等辺三角形に近い。茎部の断面形は長方形に近く、茎部の幅は端部に向かって狭まり木質が残存している。関の部分は玄室内北東区から、茎の部分は玄室内北西区の、それぞれ黒褐色の埋土中より出土した。

釣針（4）は、曲がりの部分とみられる。全体が錆びついているが、断面の形状は円形に近いと思われる。玄室内北東区の黒褐色の埋土中より出土した。大きさ・形状ともほぼ同じ釣針が、大浦14号墳から１点出土している。

（奥原）

7．13号墳

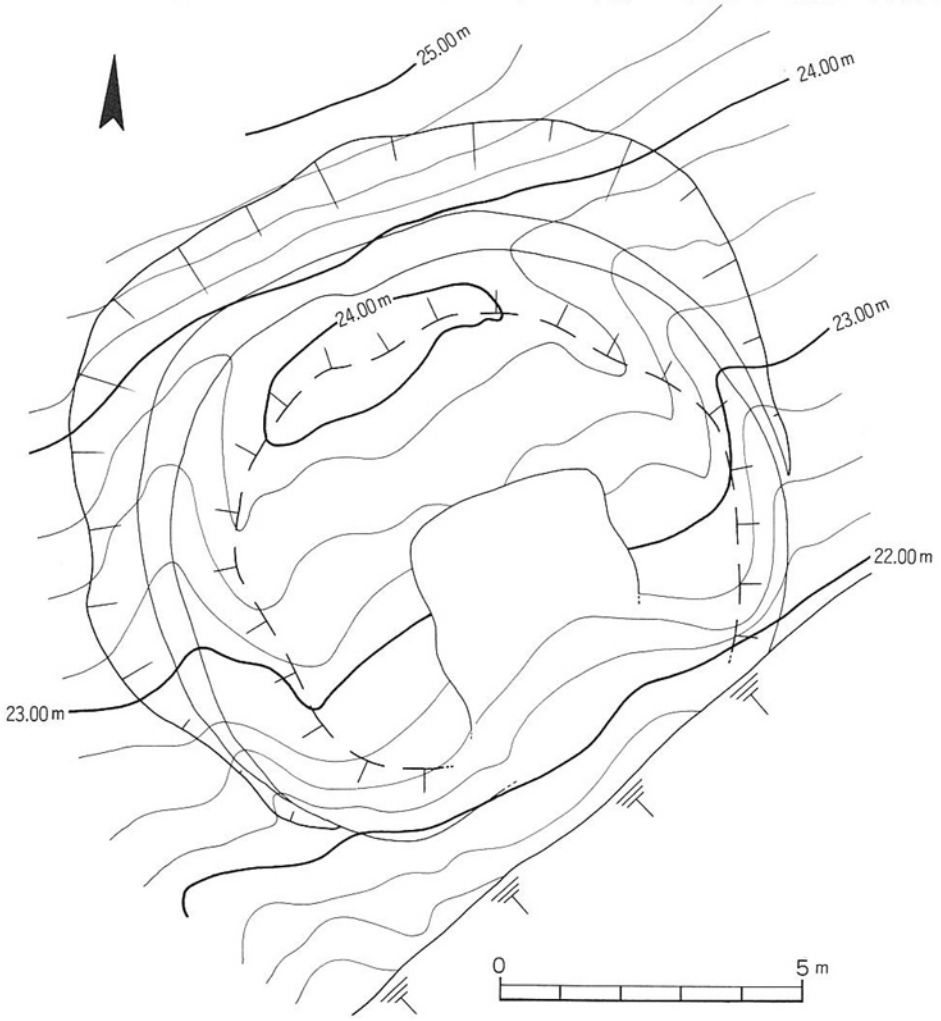
（1）調査前の状況

梅ケ崎古墳群II地区の東側、標高24mの地点に位置する13号墳は、西隣の14号墳、東隣の12号墳とほぼ同じ等高線上に並んで位置し、斜面下位の南側に9号墳、5号墳が続いている。下位側の2基との比高差はそれぞれほぼ4mである。梅ケ崎古墳群II地区一帯が、段々畑として開墾された中で、12号墳と13号墳の周辺だけは、畑の開墾の際の土取りによる削平は受けているものの、畑として利用された跡は見られなかった。そのため、わずかではあるが墳丘の高まりが見られ、II地区の他の古墳に比べると比較的容易に古墳の存在を確認することができた。

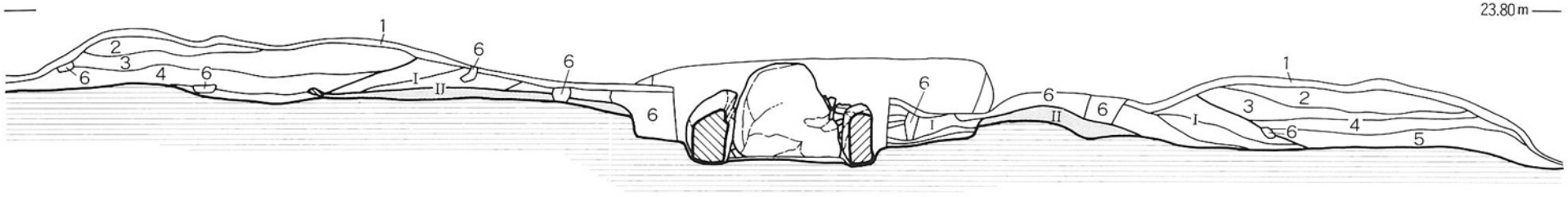
（2）墳丘

13号墳は、標高37mを頂部とする北西から南東に続く丘陵の、傾斜変換点よりやや下位側の緩斜面上に築かれている。墳丘は、13号墳の下位側の畑開墾の際の客土として、その大部分を削り取られており、特に南側はその形を全くとどめていない。しかしながら、幸い東西と北の3方向では、墳丘の立ち上がりを確認することができた。

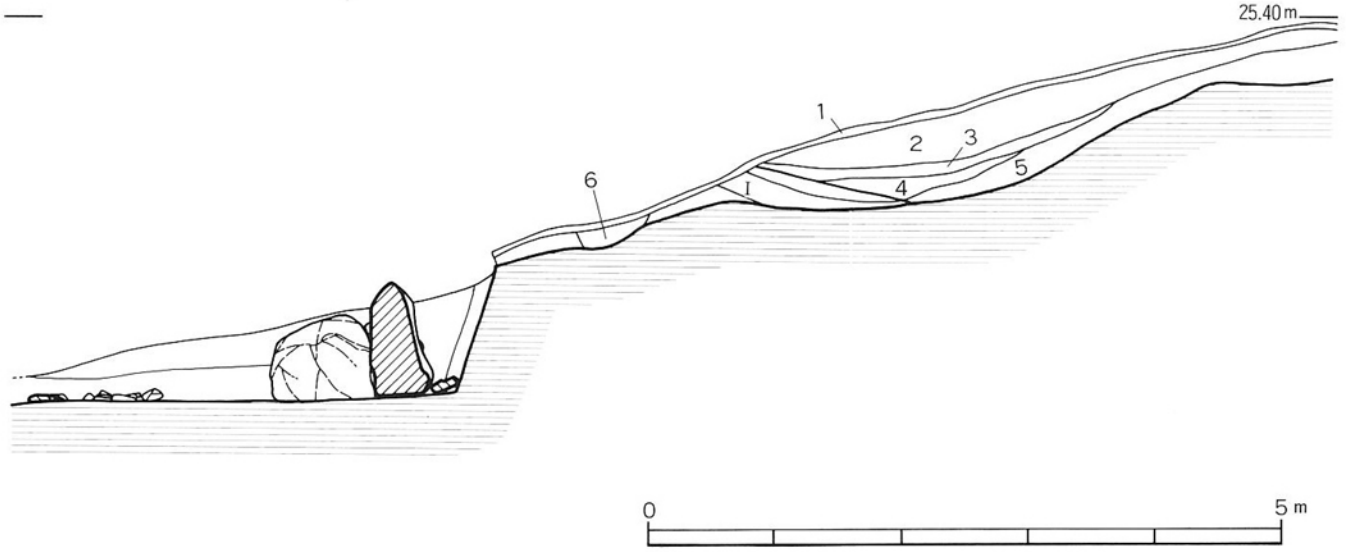
それに対して、南西から北東にかけて馬蹄形に巡る周溝は、地山を掘り込んだその形状をしっかり残しており、特に斜面上位の北側では残存する周溝幅は3.3m、深さは60cmを測った。周溝と、土層観察用トレンチで確認した墳丘立ち上りラインをもとにすると、墳丘は直径10m程度の円墳と思われる。



第82図　13号墳墳丘遺存状況図



1　表土
2　赤橙色土
3　にぶい橙色砂質土
4　にぶい黄橙色土
5　にぶい黄褐色土
6　撹乱
I　(噴丘)明赤褐色粘質土、にぶい褐色土、明黄褐色砂質土が主体
II　(旧地表層)にぶい褐色土



第83図　13号墳墳丘土層断面図

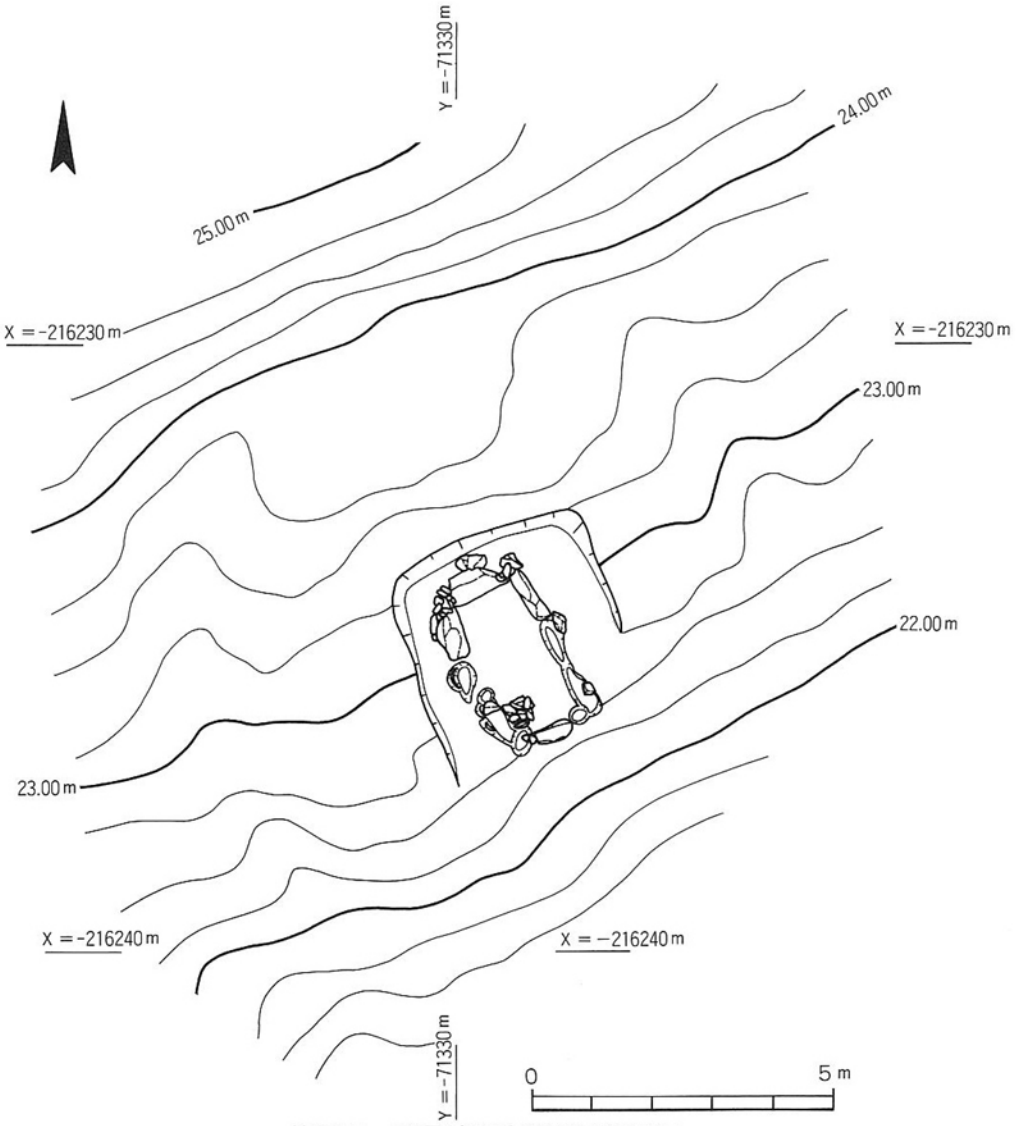
なお、墳丘基底面の整形は、北側の上位側は地山まで整形し、石室付近から下位側は築造時の地表面を整形したものと推定される。

（3）石室

II地区の他の古墳と同様に、石室は等高線に直交して構築されており、開口方向も南東である。

墓坑は、前半部が削平されているため長さは不明だが、幅は約3.6m、深さは最深部の北東隅で80cmを測り、幅に関しては、石室の2倍近く掘られているのが特徴である。平面形は隅丸長方形と見て大過なかろう。北側は整形された地山から直接掘り込まれ、東西方向と南側は築造時の地表面から掘り込まれていた。主体部は、石室の前半部と上部の石材を欠失するため、石室構造に関する情報は十分ではなく、羨道部と墓道部については全く手がかりがない。ただ、石室石材の抜き取り痕が検出できており、残った石材と合わせて考えると、主体部は南東に開口する両袖単室の横穴式石室と思われる。石室主軸はN26°Wにとり、石室石材は花崗岩である。

玄室　奥幅1.03m、中央部幅1.22m、抜き取り痕から推定した前幅約1.1mの胴張りプランを持つ。左右の壁長は左壁が推定で2.2m前後、右壁が同じく2.3m前後。石室前半部で唯一欠失を免れた框石と奥壁の間の長さは2.4mを測り、玄室幅に比べて玄室長が長めである。奥壁は、上部幅60cm、下部幅104



第84図　13号墳調査後地形測量図

cm、高さ92cm、厚さ最大で40cm程度の台形状の１枚石を基部石とする。石自体は小振りだが、玄室幅から見ると鏡石と呼ぶべきであろう。側壁は、左右とも奥壁側の基部石が１石ずつ残存。幅は80cm程度で同じだが、左壁の石が14cmほど高く、２石目以上の石で高さ調節をしたことを窺わせる。なお、右壁側では残存する基部石に接して、玄室側に横倒しになった長さ80cm程度、幅60cm程度の石と、それに続く石材抜き取り痕を１ヶ所検出。左壁側でも、残存する基部石に続く抜き取り痕を２ヶ所検出したことから、もともとの側壁の基部石は３石ずつとみて間違いない。玄門部は、最大幅33cm、長さ66cmの框石しか残っていないが、框石の右側に直径約35cmの円形の抜き取り痕と、左側に長径約50cm、短径約30cmの楕円形の抜き取り痕が残っており、袖石が抜かれた跡と思われる。

なお、玄室床面の左玄門部で15～25cm程度の石を７石検出した。隙間なく密集した出土状態からみて、敷石と判断した。

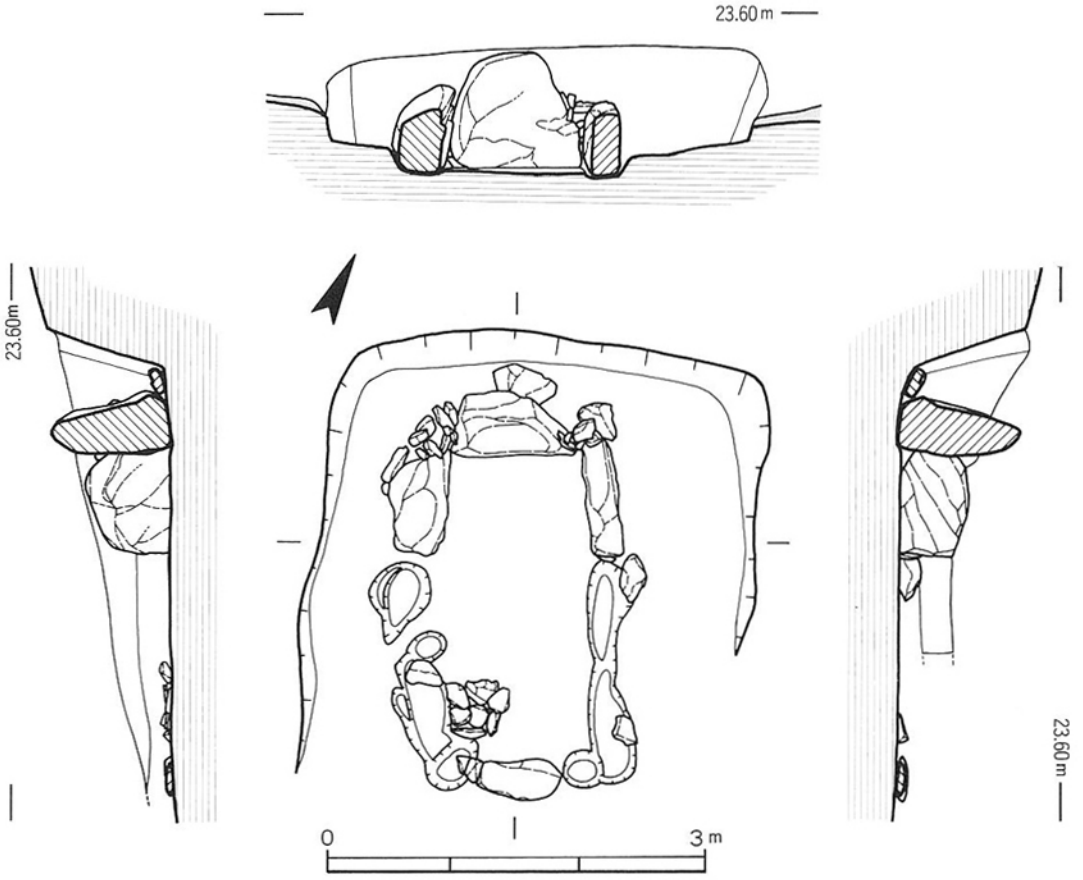
（４）遺物

出土状況

14号墳に伴う遺物は、須恵器片、土師器片、鉄製品、そして耳環である。そのうち土器片は、北西側周溝部と南西側墳丘裾部で出土した。一方、鉄製品と耳環は、全て玄室内から出土したが、敷石の残存状況から見て、玄室内は相当の撹乱を受けた可能性が高い。

出土遺物

土器（第87図　図版22）　いずれも欠失部分が多く、復元した口径には若干の誤差があるおそれがあるが、残存部分の観察表は第６表の通りである。



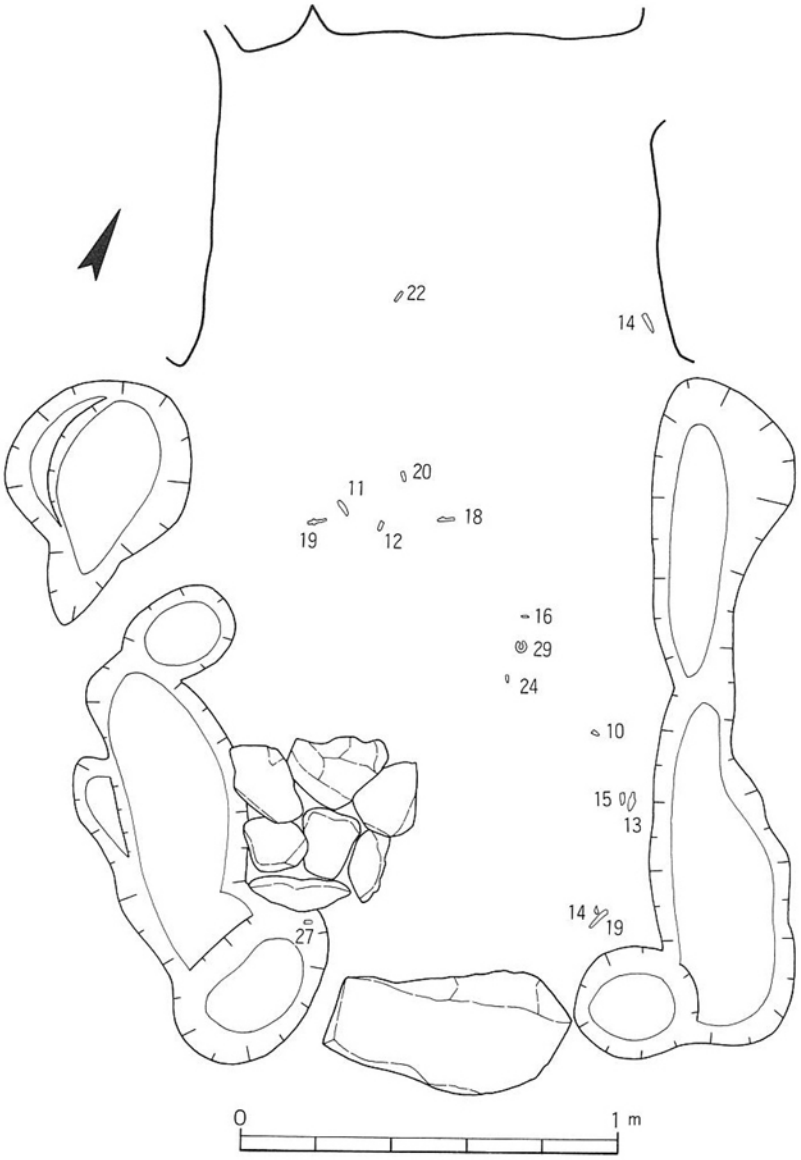
第85図　13号墳石室実測図

1は須恵器坏蓋。口縁端部はわずかに内傾。2～5はいずれも須恵器坏身で、2は立ち上がり先端部がやや外湾し、受部の凹部は浅い。3の受部はほぼ水平で、直線的な立ち上がりの先端部は尖る。4の受部は3と同様だが、立ち上がりが厚めでやや外湾する点に違いがある。5は水平な受部と外湾する立ち上がりがともに厚めである。6は須恵器高坏の脚部で4方向の透かしを持つ。7と9はともに須恵器の甕で、9は外面にカキメ調整の跡が残る。

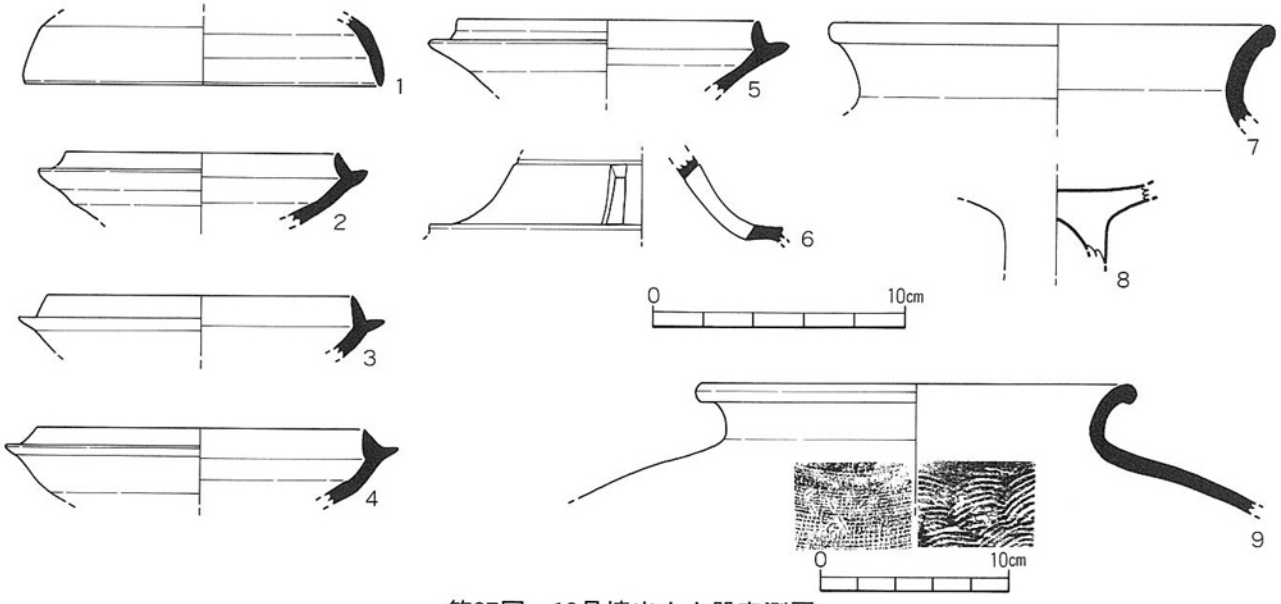
8は土師器高坏の脚部の一部。北西周溝部で同一の器形と思われる破片が多数出土したが、摩耗が激しく復元不可能であった。

鉄製品（第78図　図版22）

いずれも玄室内から出土。



第86図　13号墳石室内遺物出土状況図



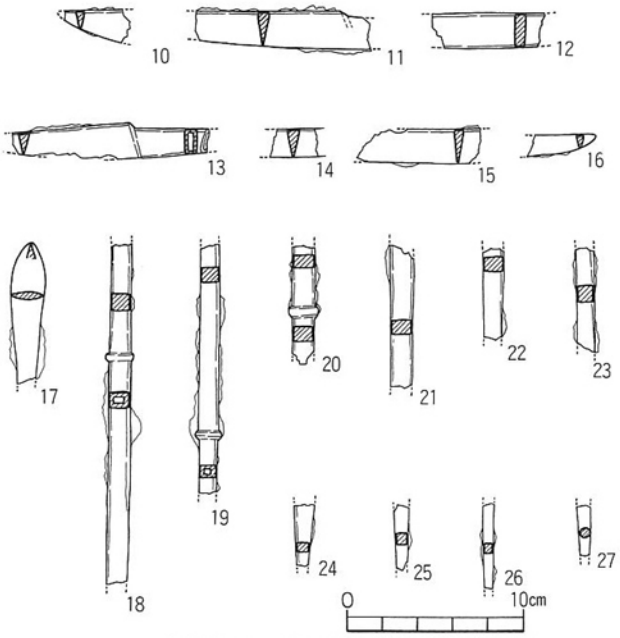
第87図　13号墳出土土器実測図

第6表　13号墳出土土器観察表

挿図 図版	器種	出土位置	法量 (cm)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
87－1 22－1	坏　蓋 須恵器	墳裾部 (南西)	口径　13.7 器高　不明	残存部は内外面とも回転ナデ。ロクロ右回転。	密	良好	外　灰色 内　灰色	
87－2 22－2	坏　身 須恵器	墳裾部 (南西)	口径　10.1 器高　不明	残存部は内外面とも回転ナデ。ロクロ右回転。	密	良好	外　灰色 内　灰色	
87－3 22－3	坏　身 須恵器	墳裾部 (南西)	口径　11.8 器高　不明	残存部は内外面とも回転ナデ。ロクロ右回転。	密	良好	外　灰白色 内　灰白色	
87－4 22－4	坏　身 須恵器	墳裾部 (南西)	口径　12.7 器高　不明	残存部は内外面とも回転ナデ。ロクロ右回転。	砂粒含	良好	外　青灰色 内　青灰色	
87－5 22－5	坏　身 須恵器	墳裾部 (南西)	口径　12.0 器高　不明	残存部は内外面とも回転ナデ。ロクロ右回転。	密	良好	外　灰色 内　灰色	
87－6 22－6	高　坏 須恵器	墳裾部 (南)	口径　不明 器高　不明	残存部は内外面とも回転ナデ。ロクロ右回転。	密	良好	外　青灰色 内　青灰色	
87－7 22－7	甕 須恵器	墳裾部 (南西)	口径　16.4 器高　不明	口頸部内外面は回転ナデ。ロクロ右回転。	密	良好	外　灰白色 内　灰白色	
87－8 22－8	高　坏 土師器	周溝部 (北西)	口径　不明 器高　不明	摩耗が著しく不明。	密	良好	外　赤褐色 内　赤褐色	
87－9 22－9	甕 須恵器	周溝部 (北西)	口径　22.2 器高　不明	口頸部内外面は回転ナデ。体部はタタキの後カキメ。	密	良好	外　オリーブ灰色 内　暗灰色	

刀子（10～16）　10は刀子の切先。11は身部と茎部の一部で片関の身の幅は1.0cm。12は茎部で幅は1.0cm。13の片関の刀子の身部は先細りで最大幅1.0cm、長方形の茎部は中空。14と15も残存部が少ないものの、断面形状から見て刀子であろう。16は刀子の茎端部。

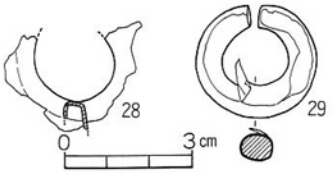
鏃（17～27）　計測表は、第7表に掲げる。17は断面レンズ形の身部を持つ鑿箭式の鉄鏃。身部の最大幅は0.9cm。18～20は箆被部と茎部の一部。形状から見て鑿箭式鏃の一部の可能性がある。21～23は箆被部、24～27は茎部と思われる。



第88図　13号墳出土鉄製品実測図

装身具（第79図　図版22）

耳環（28・29）　28は銅芯銀張り中空の耳環。破片で出土したが、復元した内法径は1.9cmで、大浦8号墳出土の中空の耳環と近似する。29も銅芯銀張りで、剥離した銀張り部が残存する良好な資料である。外法径2.80×2.61cm、内法径1.52×1.45cm。0.71×0.62cmの断面は楕円形で突合部幅0.21cmを測る。（大村）



第89図　13号墳出土耳環実測図

第7表　13号墳出土鉄鏃計測表

（　）は残存値　単位はcm

挿図	図版	出土位置	全長	身部		箆被部		茎部		備考
				長さ	幅	長さ	幅	長さ	幅	
89－17	22－17	玄室内	(4.0)	2.0	0.9	(2.0)	0.5	－	－	鑿箭式
89－18	22－18	玄室内	(9.6)	－	－	(3.3)	0.5	(6.3)	0.6	
89－19	22－19	玄室内	(7.1)	－	－	(5.3)	0.5	(1.8)	0.5	
89－20	22－20	玄室内	(3.4)	－	－	(3.4)	0.6	(1.5)	0.6	
89－21	22－21	玄室内	(4.1)	－	－	(4.1)	0.6	－	－	
89－22	22－22	玄室内	(2.7)	－	－	(2.7)	0.6	－	－	
89－23	22－23	玄室内	(2.9)	－	－	(2.9)	0.6	－	－	
89－24	22－24	玄室内	(1.8)	－	－	－	－	(1.8)	0.5	
89－25	22－25	玄室内	(1.9)	－	－	－	－	(1.9)	0.4	
89－26	22－26	玄室内	(2.3)	－	－	－	－	(2.3)	0.3	
89－27	22－27	玄室内	(1.4)	－	－	－	－	(1.4)	0.3	

8．14号墳

（1）調査前の状況

本古墳群の中で最も墳丘と石室の遺存状況の良好な14号墳は調査区のほぼ中央、標高24m辺りに位置する。調査区最高位の15号墳から水平距離で約50m、標高差で約12m離れており、当古墳の東側には12・13号墳、西側には昨年度調査の１号墳がほぼ同じ標高を保ちながら、東西方向に並ぶ。

畑の造成に伴い墳丘の頂上部は削られているが、南側から東側にかけての畑の崖面は弧を描きながら緩やかに傾斜しており、良好に墳丘の形状を残していた。また、地表面には石室内に崩落した天井石の一部が露呈していた。

（2）墳丘

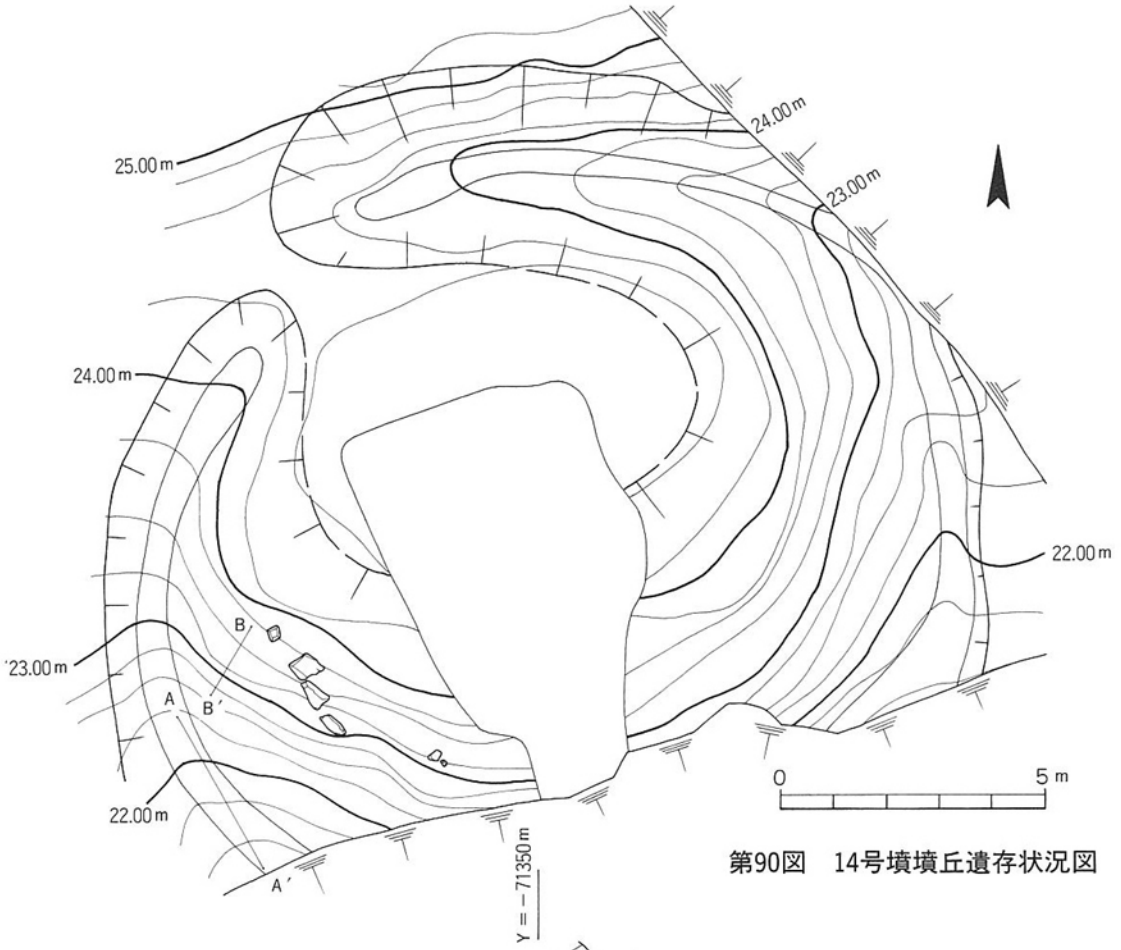
墳丘の頂上部及び南側・東側の裾部は後世の削平により消失していたが、比較的遺存状況は良好であった。トレンチ調査による土層観察によると、北側では墓坑端から2.8mまで地山の傾斜に沿ってほぼ水平に整形し、その先は周溝を幅約３m、深さ約0.6mまで掘り込む。また、東西方向には、墓坑端から東側で約3.5m、西側で約２mほど築造時の地表面が残っている。東側においては、その先を北側とほぼ同じ規模で周溝を掘り込み、西側では幅約3.5m、深さ約0.7mと一段と大きく地山を掘り込んでいるが、周溝とは認められず、墳丘の盛土採取のためと思われる。石室構築に伴う一次墳丘は、橙色の粘質土とにぶい橙色の砂質土を主体に版築状に積み上げられ、墳丘の形を整える最終墳丘は黄褐色の粘質土を加え積み上げられる様子が各トレンチで確認された。これらをもとに、当古墳は墳丘径約14mの円墳と考えられる。また、南西部の墳丘内では、盛土の流出を防ぐために並べた石（内護列石）を検出した。

（3）石室

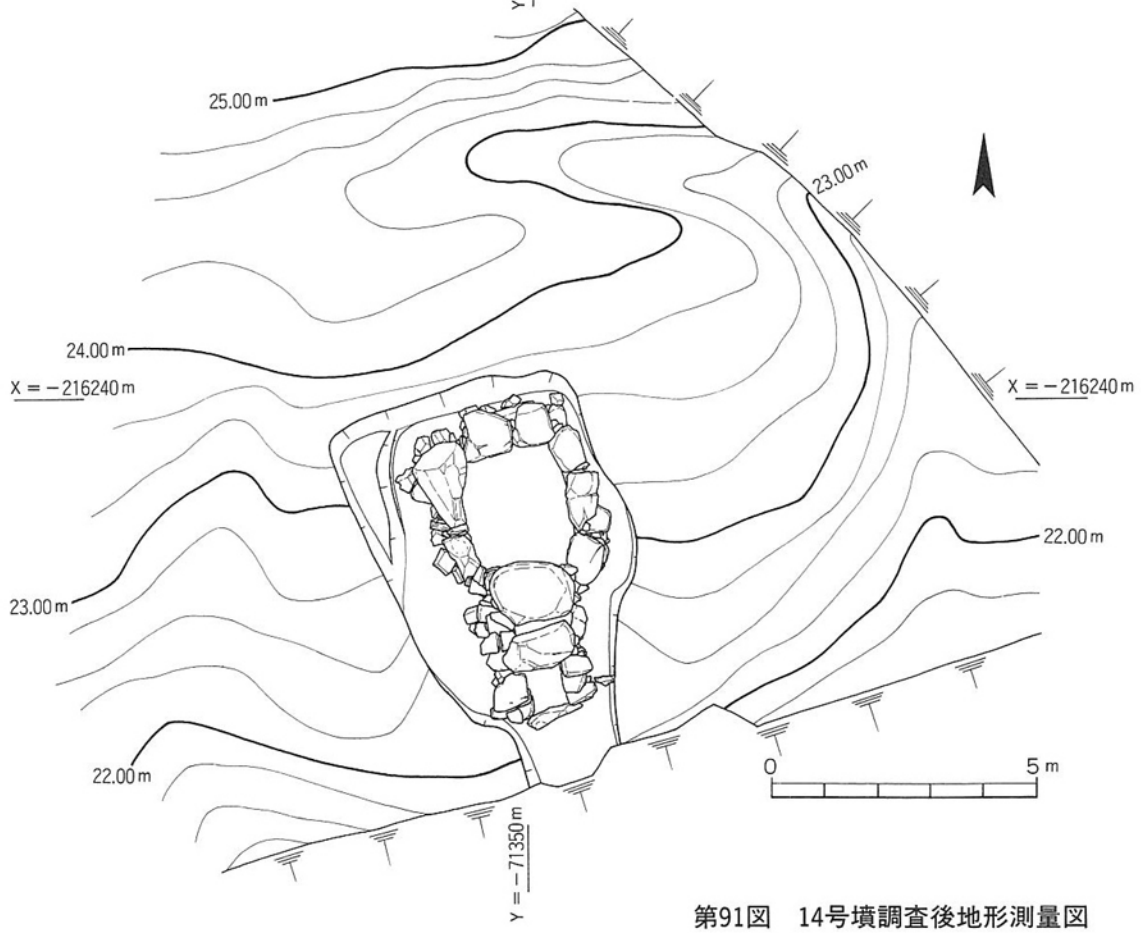
内部主体は南に開口する単室の両袖横穴式石室である。主軸はN10°Wである。石室内は天井石や側壁の崩落に伴い流入した土により埋没しており、楣石と羨道部の天井石１枚はほぼ現位置を留めていた。石室内はすでに盗掘による撹乱を受けており、特に玄室内においては、原位置を保つ遺物はほとんどない。石室は方形プランを有する玄室に比較的長い羨道を連接する。石室の全長は5.2mを測る。墓坑は、古墳築造時の地表面から北側で約120㎝、西側・東側それぞれで約80㎝掘り込まれる。また北東隅は巨大な側壁を据えるために当初の墓坑を掘り広げたと思われ、２段に掘り窪められている。そのため平面形は不整形であるが、ほぼ隅丸方形のプランと考えられる。

玄室　奥幅1.95m、前幅1.80m、左壁長2.30m、右壁長2.75mを測り、平面形は右壁側が長い台形を呈する。奥壁は215×130㎝の板石を地山に据え置き鏡石とする。奥壁と接する左壁の石材は190×190㎝の巨大なものを用いるが、その上部は玄室側に緩やかに内湾しており、石室構築の際の持ち送りを兼ねている。その他の側壁には３石の大振りな石材を横長に据えて腰石とする。その上に横長の石材を積み重ね、水平方向に目地をそろえている。残存高は床面から、奥壁は1.7m、左壁は1.2～1.9m、右壁は1.2～1.6mである。

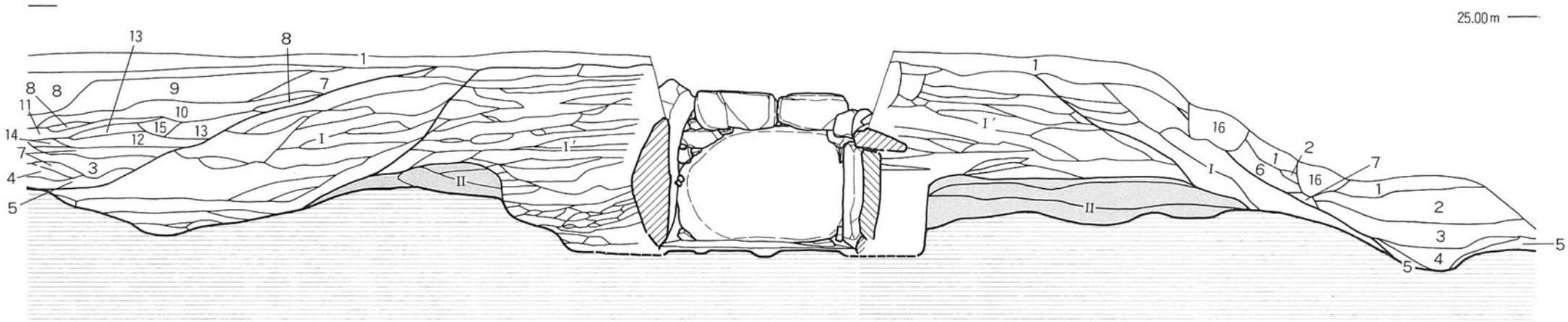
玄門は、左袖に約100㎝、右袖に約130㎝の方柱状の石材を用い袖石とする。左右の長さが異なるため、左袖では右袖の高さに合わせて横長の石を積み重ね、その上に楣石を架構する。袖幅は左袖が0.5m、右袖が0.6mを測り、袖石間は約0.7mである。



第90図　14号墳墳丘遺存状況図

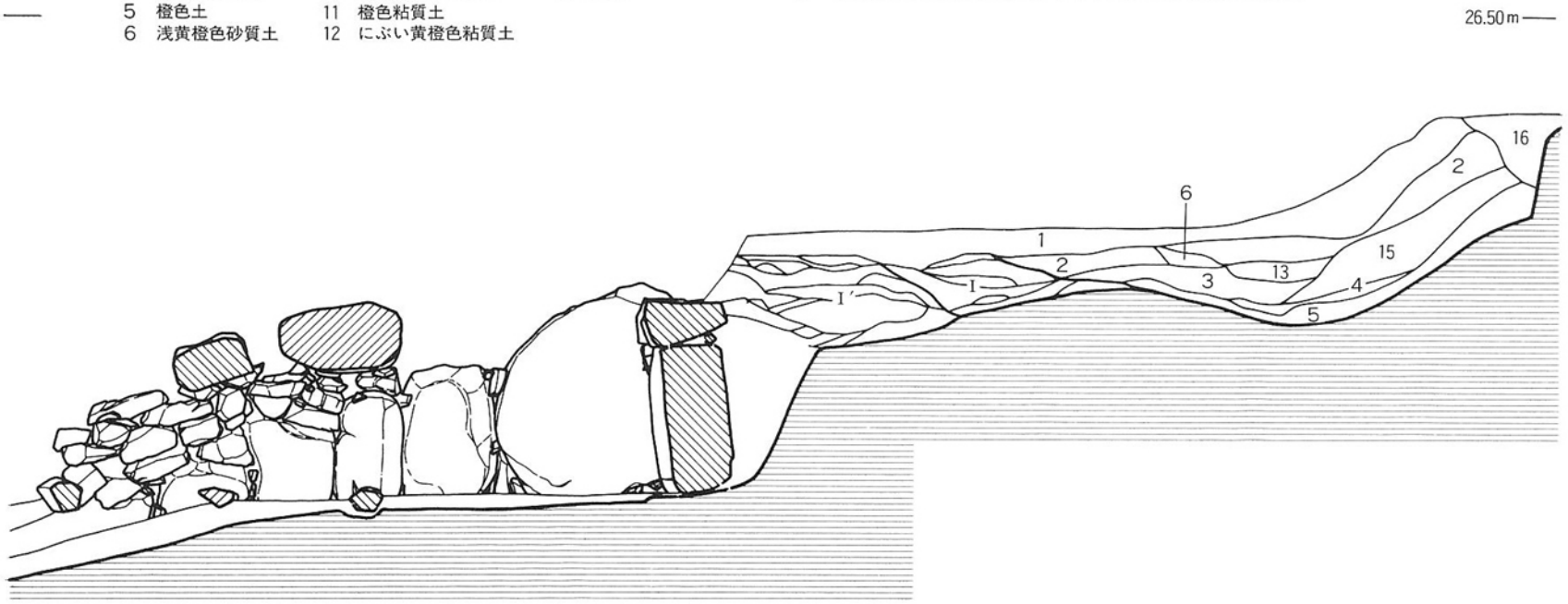


第91図　14号墳調査後地形測量図



1　表土
2　橙色砂質土
3　明黄褐色砂質土
4　黄褐色砂質土
5　橙色土
6　浅黄橙色砂質土
7　にぶい黄橙色土
8　にぶい黄褐色土
9　明赤褐色粘質土
10　にぶい橙色砂質土
11　橙色粘質土
12　にぶい黄橙色粘質土
13　褐色粘質土
14　赤褐色土
15　にぶい褐色粘質土
16　撹乱

I　（最終墳丘）橙色砂質土、にぶい橙色粘質土、にぶい黄褐色粘質土が主体
I′　（一次墳丘）にぶい橙色砂質土、橙色粘質土が主体
II　（旧地表層）暗褐色粘質土、にぶい黄褐色土、暗褐色粘質土



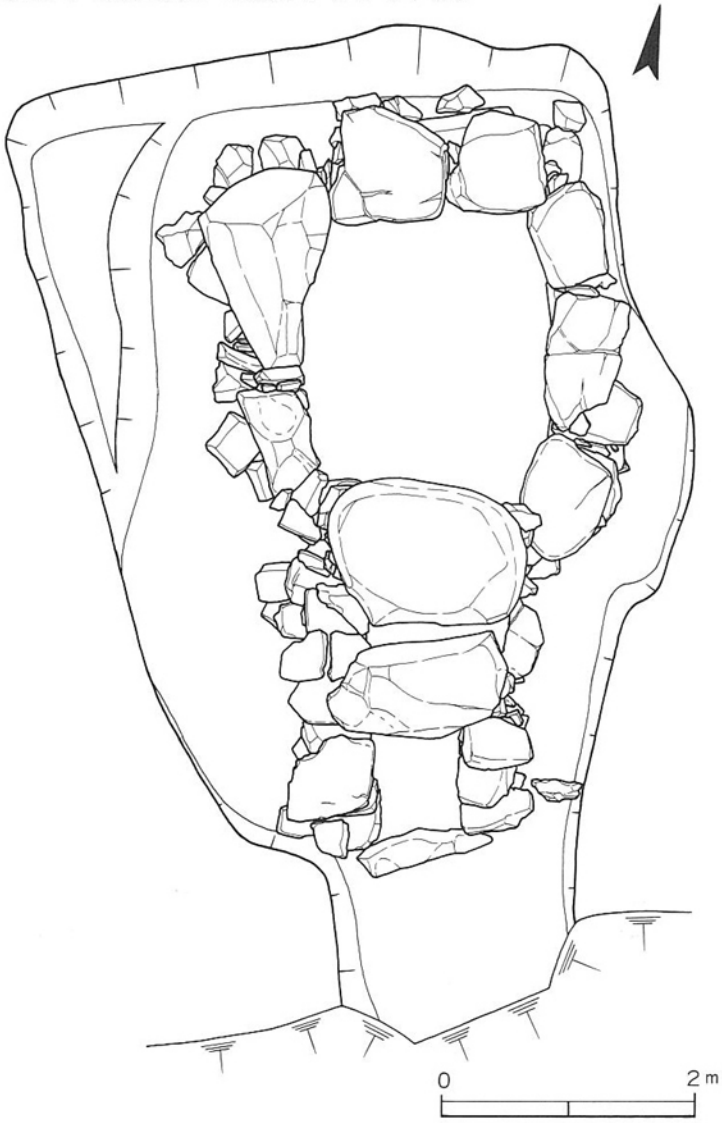
第92図　14号墳墳丘土層断面図

0　5m

羨道　天井石１枚を残す羨道部は、袖石に接する右壁側の基部石が傾いているものの、比較的良好な状態で残っている。羨道長は左壁で2.70m、右壁で2.60mを測る。また、奥幅は第３框石の部分で0.75m、第１框石の部分で0.80mを測る。壁体の構成は、大ぶりの石材を横位に配して腰石とし、その上にやや大きめの割石を２～３枚横積みにして天井石を架構する。

床面には３ヶ所に框石を配する。第１框石は羨道先端の石に接するように据えるため主軸に対して直交していない。第２框石は他の２石に比べやや平たい石を用い水平を保つため下部に詰め石を施す。第３框石は玄門幅に合わせるように、西側に小振りの石を詰石として用いる。第２、第３框石の高さに比べ、第１框石は若干高い。土層観察によれば、第２框石の上面に堅く締めた土を貼り、第１框石と高さを揃えていることから、築造時には第２、第３框石のみが置かれ、追葬時に床面に盛り土をして第１框石を配したものと考えられる。奥壁中央部から框石前面まではそれぞれ2.50m、3.75m、5.10mを測る。

閉塞施設　第２框石を根石とした閉塞施設の存在を示す石が羨道内で検出された。基部に用いられる大きさではないが、追葬時に第１框石を据える際、取り除かれた閉塞石の残りと考えられる。羨道床面はこの閉塞部から傾斜をもって下る。

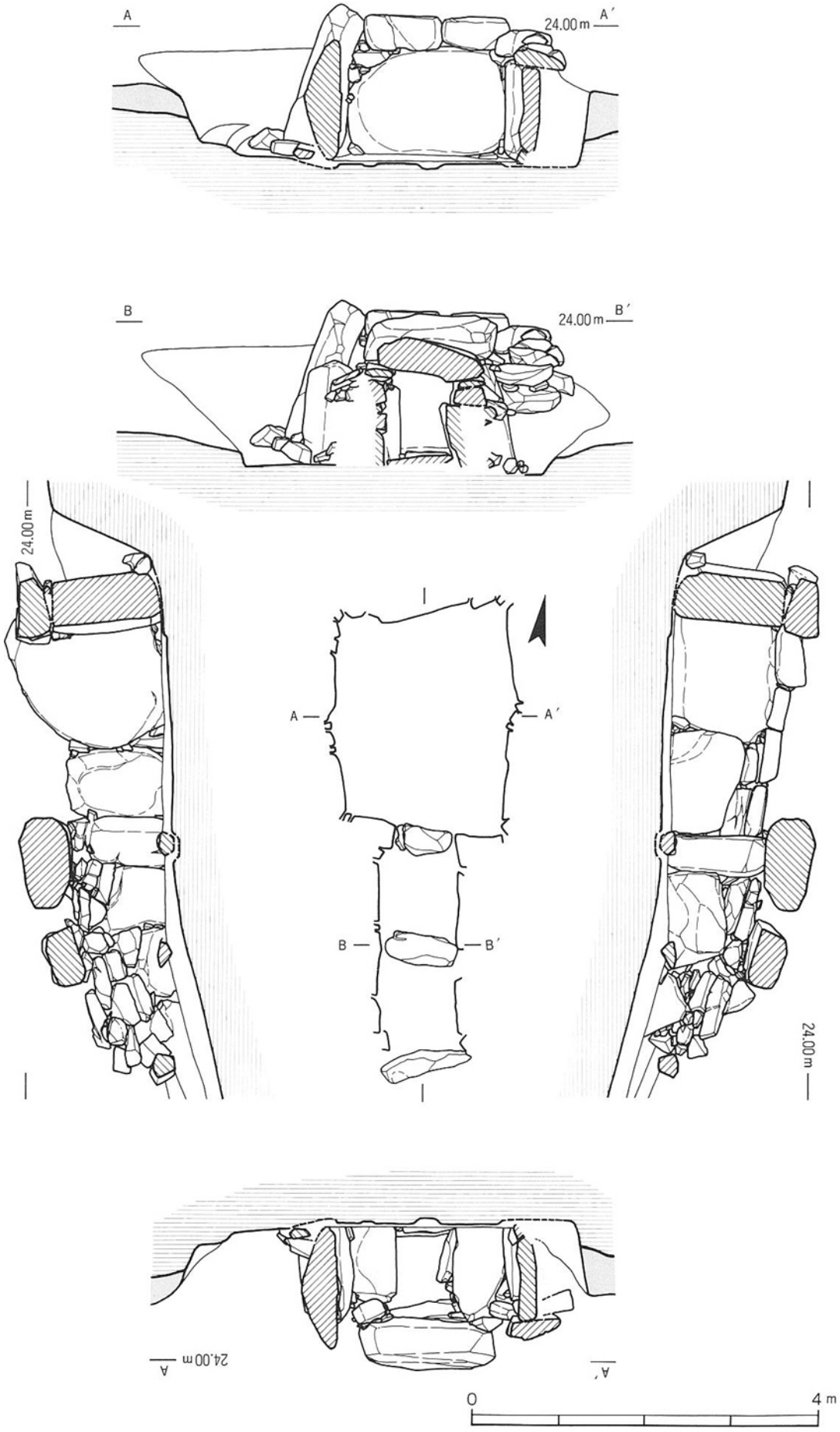


第93図　14号墳石室平面図

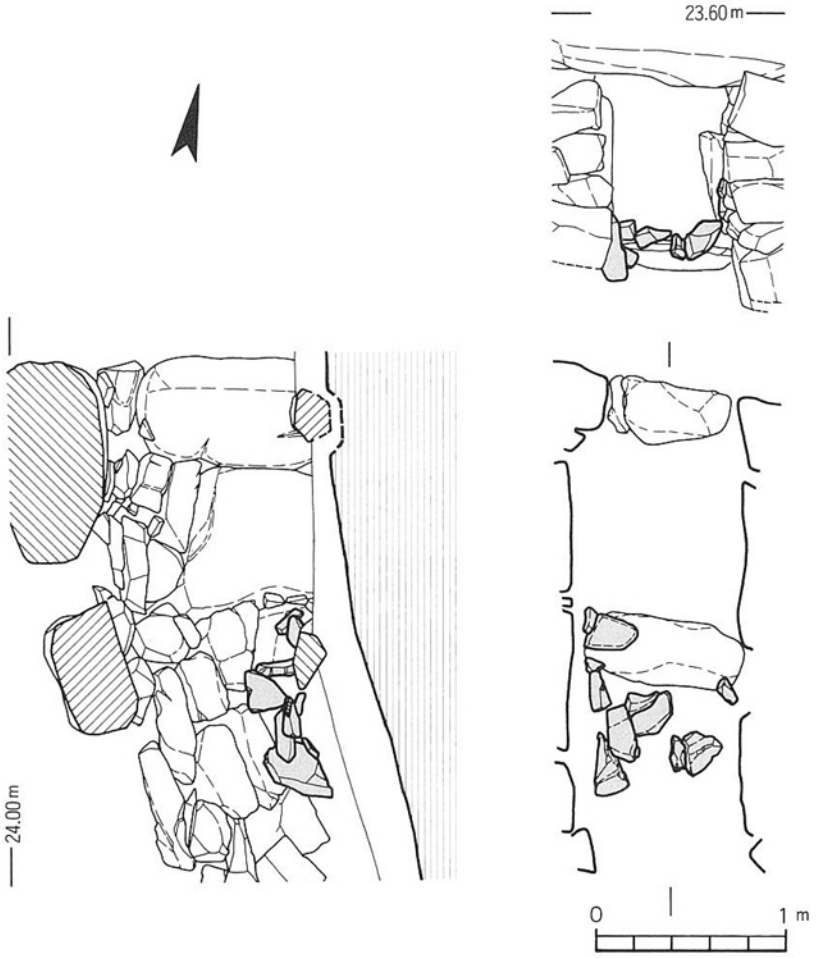
排水施設　玄室内及び第３框石と第２框石までの羨道部に排水施設が施されていた。玄室内は中央部と、左壁に沿うように西側に巡り第３框石の手前で合わさり、第３框石の下を潜り、羨道部中央やや西側の排水施設に続く。羨道部は蓋石が整然と残るのに対し、玄室内は西側に一部残るのみである。しかし、埋土中の石材から判断すると、盗掘の際に剝ぎ取られたものと考えられる。幅20cm、深さ15cm前後地山を掘り込んだ溝の断面は台形を呈す。

（４）遺物

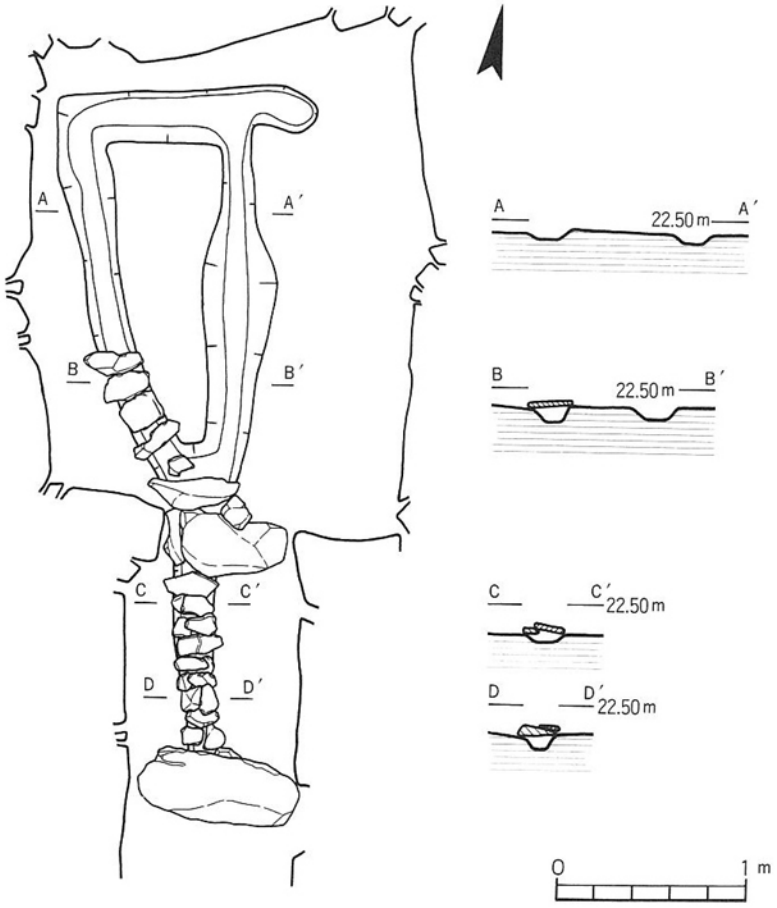
出土状況　玄室内からは、鉄刀片・鉄鏃・両頭金具などの鉄製品と玉類が出土した。東半部に片寄ってはいるが、原位置を留めるものは少なく盗掘の際撹乱されたものであろう。羨道部では右壁に沿うように須恵器高坏（３）・鉢（７）が据えられた状態で出土した。また、開口部埋土



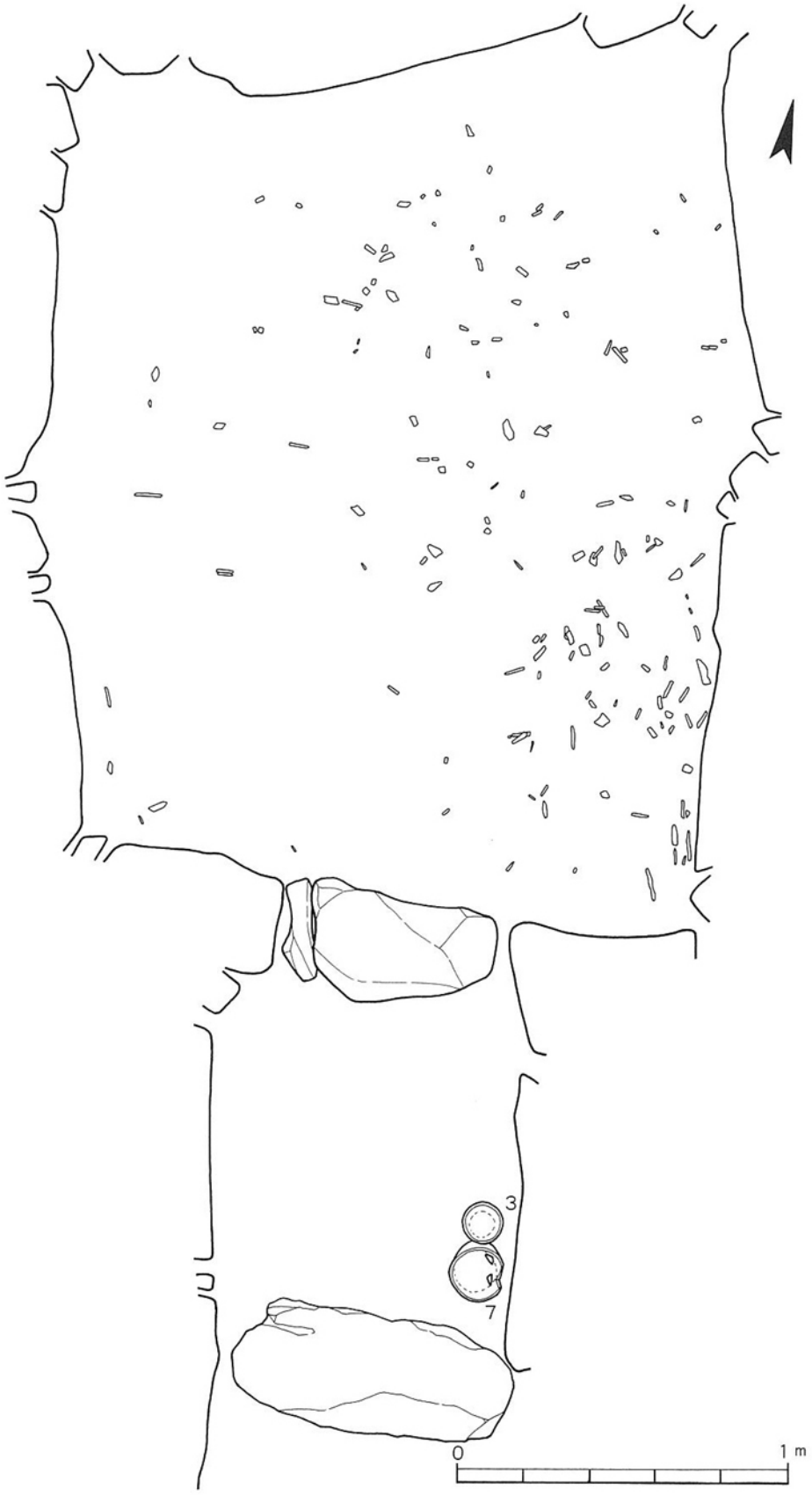
第94図　14号墳石室実測図



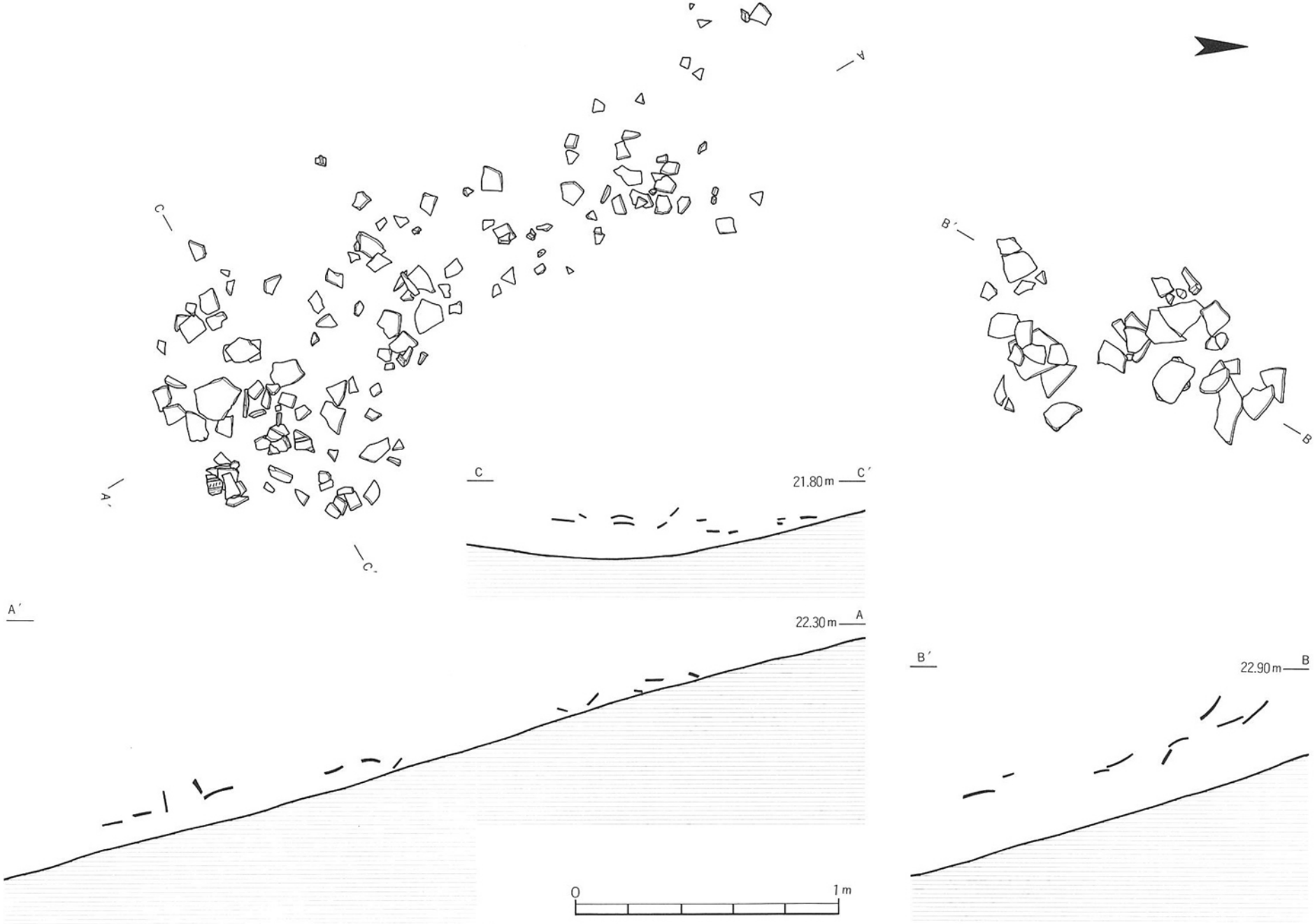
第95図　14号墳閉塞施設実測図



第96図　14号墳石室内排水施設実測図

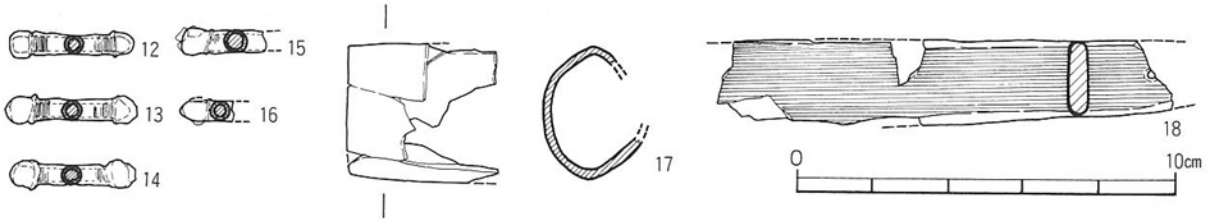


第97図　14号墳石室内遺物出土状況図



第98図　14号墳東側周溝部遺物出土状況図

第99図　14号墳出土土器実測図



第100図　14号墳出土鉄製品実測図①

第８表　14号墳出土土器観察表

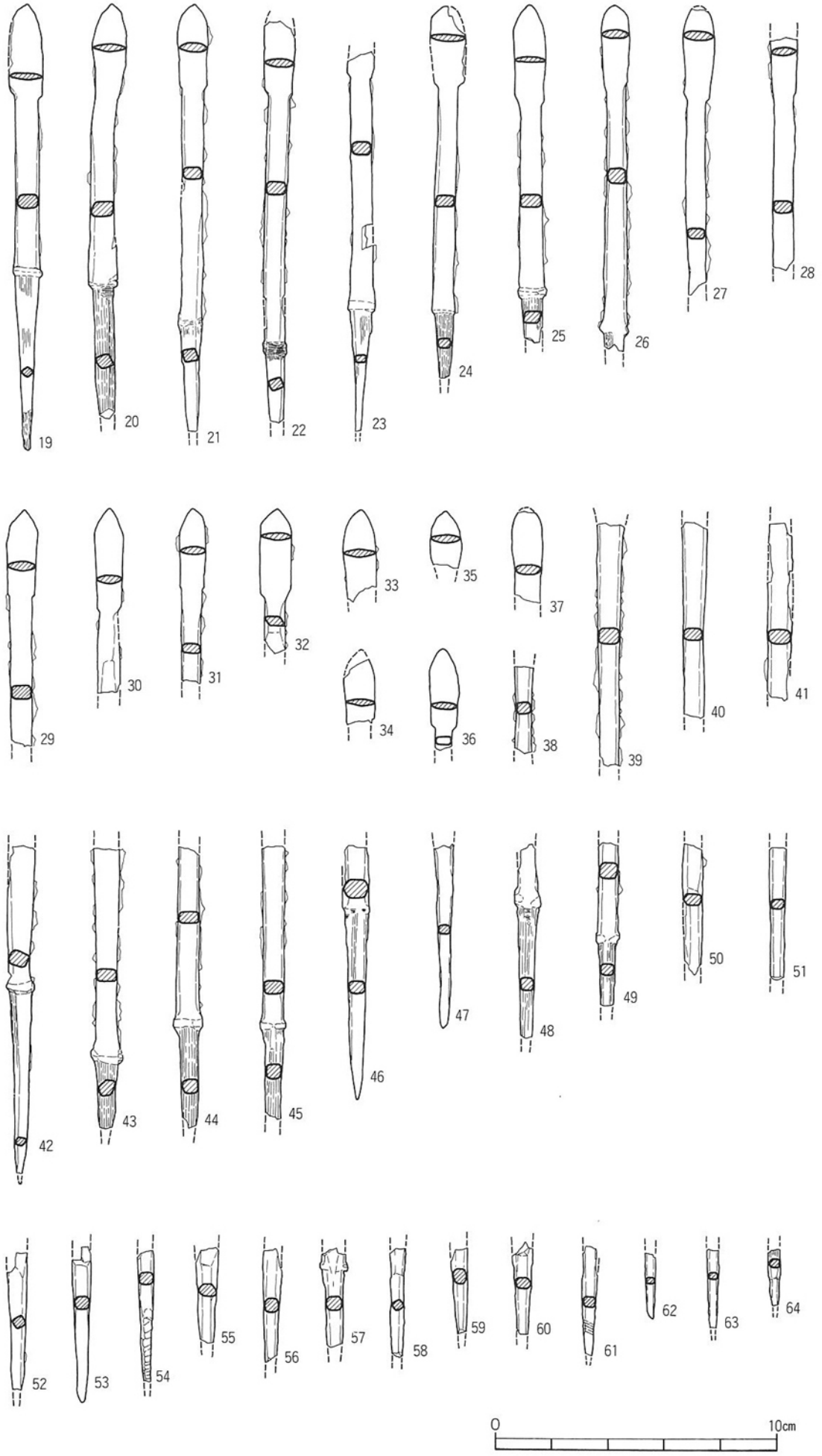
挿図 図版	器種	出土位置	法　量 (cm)	手　法　の　特　徴	胎土	焼成	色調	備考
99－１ 23－１	坏　身 須恵器	開口部	口径　10.0 器高　4.4 受部径　12.1	底部外面は、回転ヘラケズリ。内面底部は、静止ナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外　褐灰色 内　灰色	焼きひずみ有り。
99－２ 23－２	坏　身 須恵器	周溝内 (北西)	口径　11.8 器高　3.2 受部径　13.6	底部外面は、回転ヘラケズリ後回転ナデ。内面底部は、静止ナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	密	やや良	外　灰色 内　灰色	焼きひずみが激しい。
99－３ 23－３	高　坏 須恵器	羨道部	口径　12.2 器高　14.8 脚裾部径　11.0	坏底部は、回転ヘラケズリ後カキ目。他は回転ナデ。脚部に、２条の凹線を境に、２段２方向の透かし孔有り。坏部に２条の沈線が巡る。ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外　褐灰色 内　褐灰色	
99－４ 23－４	有蓋高坏 須恵器	開口部	口径　13.6 受部径　16.1	坏底部は、回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。脚部に、２条の凹線を境に、２段３方向の透かし有り。ロクロ右回転。	密 含砂粒少	良好	外　灰白色 内　灰白色	脚部に自然釉。
99－５ 23－５	坏　蓋 須恵器	周溝内 (北西)	口径　13.7 器高　4.8	外面天井部は、回転ヘラケズリ。他は回転ナデ。天井部に、径1.3cm程度の穿孔を施す。ロクロ右回転。	密 含砂粒少	不良	外　灰白色 内　灰色	焼きひずみ有り。
99－６ 23－６	高　坏 須恵器	開口部	口径　12.5 器高　6.1 脚裾部径8.2	坏底部は、回転ヘラケズリ後回転ナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	密	良好	外　褐灰色 内　褐灰色	
99－７ 23－７	鉢 須恵器	羨道部	口径　17.3 器高　11.9	底部外面は、回転ヘラケズリ。内面底部は静止ナデ。他は回転ナデ。ロクロ右回転。	密	良好	外　黒褐色 内　褐灰色	底部に焼きひずみ有り。
99－８ 23－８	甕 須恵器	周溝内 (北東)	口径　17.3 体部最大径　25.4	口頸部内外面は、回転ナデ。体部外面は、タタキ後カキ目。内面にタタキの際の当て具痕が残る。	密	不良	外　浅黄色 内　黄色	
99－９ 23－９	甕 須恵器	周溝内 (南西)	口径　41.5	口頸部内外面は、回転ナデ。外面には２条の沈線を２段に巡らせ、その間に斜線文を施す。	密	良好	外　褐灰色 内　褐灰色	
99－10 23－10	甕 須恵器	周溝内 (南西)	口径　37.2	口頸部内外面は、回転ナデ。外面に、２条の沈線を２段に巡らせ、その間に櫛歯文を施す。	密	良好	外　褐灰色 内　褐灰色	
99－11 23－11	甕 須恵器	周溝内 (南西)	体部最大径　67.6	体部外面はタタキ。内面にはタタキの際の当て具痕が残る。	密	良好	外　灰色 内　灰色	焼きひずみ有り。

中から、須恵器坏身（１）、須恵器高坏（４・６）が出土。その状況から、築造時に近い時期の遺物と考えられる。西側周溝内からは須恵器甕片が検出された。10～20cmのかなり大きめの破片であり、古墳築造時あるいは追葬時の祭祀に用いられたものを投棄したと考えられる。

出土遺物

土器（第99図　図版23）

１・２は須恵器坏身。１は開口部出土。口縁の立ち上がりは低く内傾する。２は周溝北西部出土。焼成時の焼き歪みが激しい。見込み部に５つの刺突文らしきものが刻まれる。３は須恵器無蓋長脚高坏。羨道部右壁側から完形で出土。脚部に２段２方向の長方形の透かし孔を施す。中位には２条の沈線が巡る。坏部はカキメ調整を施し、底部に２条の沈線が巡る。４は須恵器有蓋高坏。脚部に２段３方向の長方形の透かし孔を有する。坏部は比較的浅く、口縁の立ち上がりは低く内傾する。５は須恵器坏蓋形土器。周溝北西部出土。焼き歪みが激しい。器壁は分厚く、天井部に径1.3cm位の穿孔が施されていたと思われ、焼成時に割れが広がったのか、３cm程度の穴が認められる。６は須恵器無蓋高坏。開口部出土。低脚であり、比較的深い坏部を有する。坏部の回転ヘラケズリの跡もナデによって消され、全体的に丁寧な仕上げである。７は須恵器鉢。羨道部右壁側より完形で出土。体部はわずかに内傾しながら直線的に立ち上がって、口縁部に至り、端部は丸くおさめる。底部に焼成時にできた凹みあり。花ヶ池窯跡(山口県宇部市)、御薗宇龍王山古墳(広島県東広島市)に類例をみることができる。８は須恵器甕。周溝北東部出土。口径は17.3cmと小型である。口頸部は外湾して立ち上がり、口縁端部は折り返して厚い玉縁状をなす。９・10は口径40cm程度の大型の須恵器甕。周溝南西部出土。ともに口頸部は大きく外反し、端部は丸く納め凸線を持つ。９は外面上位に２段の斜線文と２条の沈線を



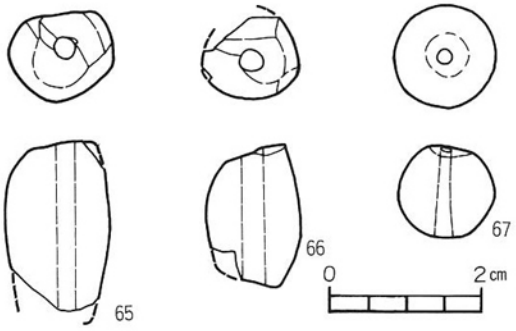
第101図　14号墳出土鉄製品実測図②

第9表　14号墳出土鉄鏃計測表

（　）は残存値　単位はcm

挿図	図版	出土位置	全長	身部		箆被部		茎部		備考
				長さ	幅	長さ	幅	長さ	幅	
101－19	24－19	玄室内	15.8	3.3	1.1	6.2	0.7	6.3	0.4	柳葉式
101－20	24－20	玄室内	(14.6)	3.3	1.2	6.5	0.7	(4.8)	0.5	柳葉式
101－21	24－21	玄室内	(15.2)	3.0	1.1	8.2	0.7	(4.0)	0.5	柳葉式
101－22	24－22	玄室内	(14.3)	(2.2)	1.0	9.1	0.7	(3.0)	0.4	柳葉式
101－23	24－23	玄室内	(14.5)	(1.0)	0.9	8.1	0.7	(5.4)	0.4	柳葉式
101－24	24－24	玄室内	(13.2)	2.8	1.2	8.0	0.7	(2.4)	0.5	柳葉式
101－25	24－25	玄室内	(12.1)	3.6	1.1	6.7	0.7	(1.8)	0.6	柳葉式
101－26	24－26	玄室内	(12.3)	2.8	1.0	8.7	0.6	(0.8)	0.6	柳葉式
101－27	24－27	玄室内	(10.3)	(3.3)	1.1	(7.0)	0.6	－	－	柳葉式
101－28	24－28	玄室内	(8.2)	(2.0)	0.9	(6.2)	0.7	－	－	柳葉式
101－29	24－29	玄室内	(8.4)	3.1	1.1	(5.3)	0.7	－	－	柳葉式
101－30	24－30	玄室内	(6.5)	3.6	1.0	(2.9)	0.7	－	－	柳葉式
101－31	24－31	玄室内	(6.2)	2.8	1.0	(3.4)	0.6	－	－	柳葉式
101－32	24－32	玄室内	(5.0)	3.3	1.1	(1.7)	0.6	－	－	柳葉式
101－33	24－33	玄室内	(3.2)	(3.2)	1.1	－	－	－	－	柳葉式
101－34	24－34	玄室内	(2.1)	(2.1)	1.1	－	－	－	－	柳葉式
101－35	24－35	玄室内	(3.3)	(3.3)	1.0	－	－	－	－	柳葉式
101－36	24－36	玄室内	(2.3)	(2.3)	1.0	－	－	－	－	柳葉式
101－37	24－37	玄室内	(3.4)	2.7	1.0	(0.7)	0.7	－	－	柳葉式
101－38	24－38	玄室内	(3.1)	－	－	(3.1)	0.5	－	－	
101－39	24－39	玄室内	(8.6)	－	－	(8.6)	0.8	－	－	
101－40	24－40	玄室内	(7.0)	－	－	(7.0)	0.7	－	－	
101－41	24－41	玄室内	(6.3)	－	－	(6.3)	0.8	－	－	
101－42	24－42	玄室内	(11.6)	－	－	(5.2)	0.7	(6.4)	0.4	
101－43	24－43	玄室内	(9.9)	－	－	(7.6)	0.7	(2.3)	0.5	
101－44	24－44	玄室内	(10.0)	－	－	(6.4)	0.8	(3.6)	0.6	
101－45	24－45	玄室内	(9.7)	－	－	(6.5)	0.7	(3.2)	0.5	
101－46	24－46	玄室内	(9.0)	－	－	(2.3)	0.9	6.7	0.6	
101－47	24－47	玄室内	(6.5)	－	－	－	－	(6.5)	0.4	
101－48	24－48	玄室内	(6.9)	－	－	(2.2)	0.8	(4.7)	0.5	
101－49	24－49	玄室内	(5.8)	－	－	(3.5)	0.7	(2.3)	0.5	
101－50	24－50	玄室内	(4.8)	－	－	－	－	(4.8)	0.6	
101－51	24－51	玄室内	(4.7)	－	－	－	－	(4.7)	0.5	
101－52	24－52	玄室内	(4.9)	－	－	－	－	(4.9)	0.5	
101－53	24－53	玄室内	(5.5)	－	－	－	－	(5.5)	0.5	
101－54	24－54	玄室内	(4.7)	－	－	－	－	(4.7)	0.5	
101－55	24－55	玄室内	(3.4)	－	－	－	－	(3.4)	0.6	
101－56	24－56	玄室内	(4.1)	－	－	－	－	(4.1)	0.5	
101－57	24－57	玄室内	(3.5)	－	－	(0.8)	0.8	(2.7)	0.6	
101－58	24－58	玄室内	(3.9)	－	－	－	－	(3.9)	0.4	
101－59	24－59	玄室内	(3.1)	－	－	－	－	(3.1)	0.5	
101－60	24－60	玄室内	(3.3)	－	－	－	－	(3.3)	0.6	
101－61	24－61	玄室内	(3.9)	－	－	－	－	(3.9)	0.5	
101－62	24－62	玄室内	(2.3)	－	－	－	－	(2.3)	0.4	
101－63	24－63	玄室内	(2.8)	－	－	－	－	(2.8)	0.4	
101－64	24－64	玄室内	(2.0)	－	－	－	－	(2.0)	0.4	

巡らし、10は外面中位に2条の沈線を2段に巡らせ、その間に櫛歯文を施す。11は須恵器の大型甕の体部。9・10とともに周溝南西部出土。外面にはタタキ痕が、内面にはタタキの際の当て具痕が残る。底部に焼き歪みがみられる。



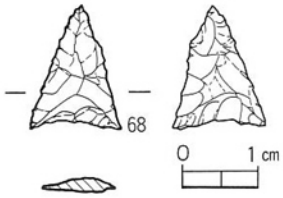
第102図　14号墳出土玉類実測図

鉄製品（第100・101図　図版24）

12～16は飾り弓の止め金具と称される両頭金具である。両頭部は球形を呈し、中間部分の棒状部には、直交する方向の木目が残存する。全長は3.3～3.5cm、頭部径は0.6～0.8cm、棒状部径は0.4～0.6cm。17は鉄製の鞘尻金具と思われる。18は鉄刀の茎部。残存長は12.1cm、目釘穴が1つ確認される。木質が付着。19～64は鉄鏃。身部の確認されるものは全て柳葉式。計測表を第9表に掲げる。

装身具（第102図　図版23）

65・66は棗玉。材質は鈍い茶褐色を呈する琥珀製で、長さ・径はそれぞれ、65は22.2mm・13.6mm、66は19.6mm・12.0mm。中央の孔は楕円形を呈する。67は丸玉。長さ12.2mm、径13.1mm、オリーブ黒を呈する。



その他の遺物（第103図）

67は石鏃。南東部の墳丘盛土中より出土。長さ1.5cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm。

（山本）

第103図　14号墳出土石鏃実測図

15．15号墳

15号墳は6～14号墳の存する尾根の傾斜変換点に位置し、標高は約37mである。下位側の古墳の中で最も近い14号墳とは水平距離で約40m、標高で13m離れており、他の古墳とは孤立した位置に築造されている。

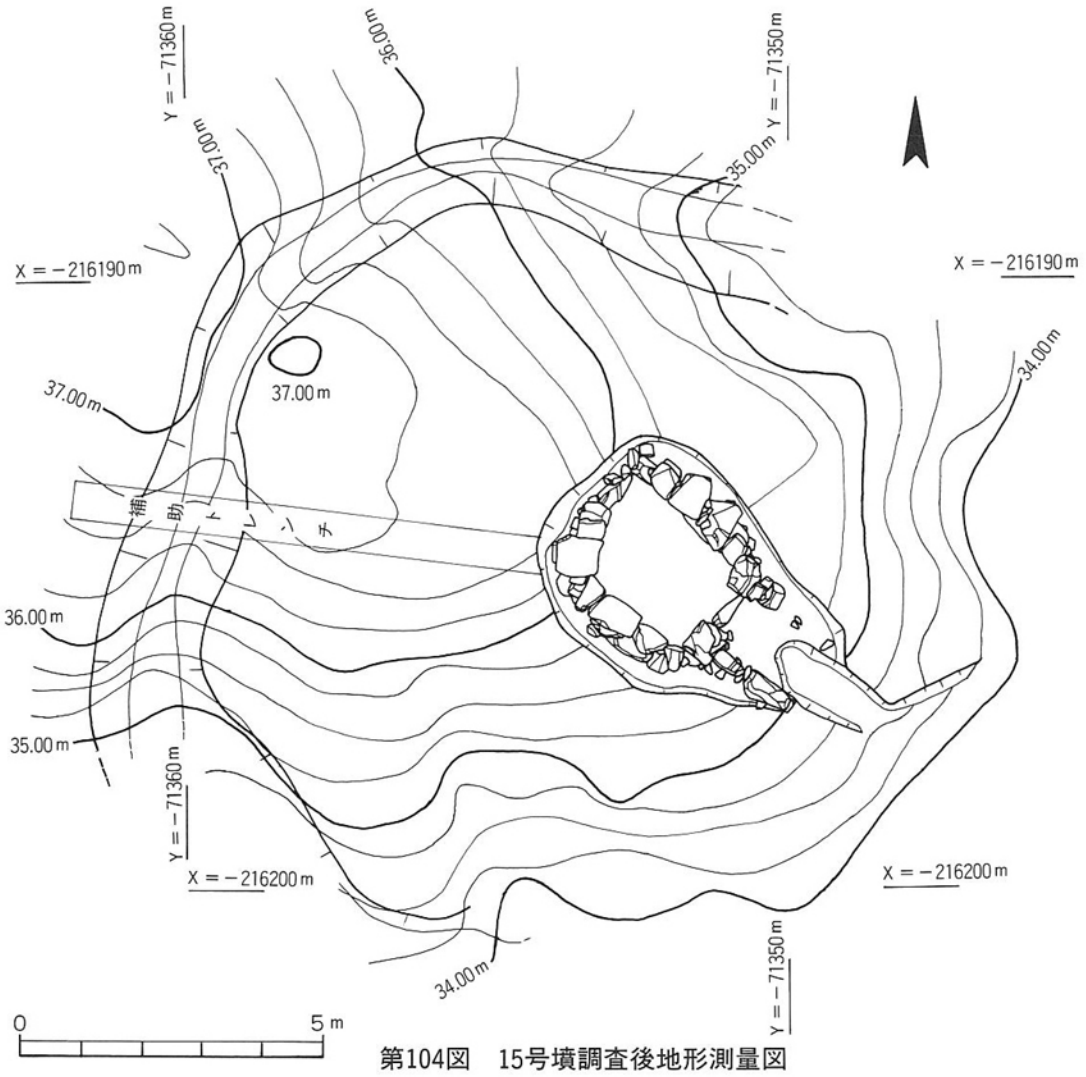
調査前は、墳丘上部が削られた状態で、天井石をはじめ石室の石材が露呈しており、当古墳の存在が容易に確認できた。

（1）墳丘

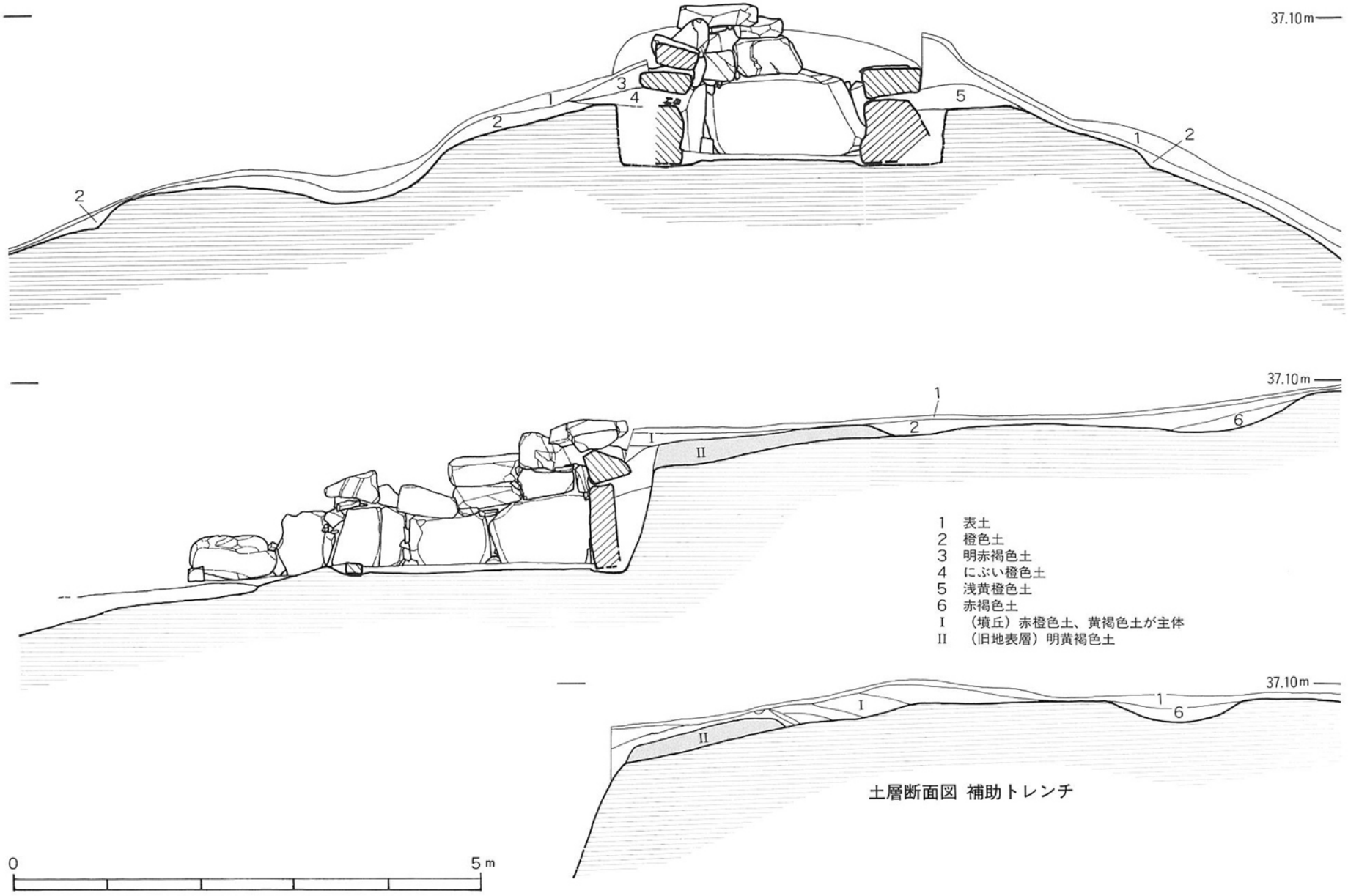
トレンチによる土層観察によると、調査前に墳丘と思われた高まりは地山整形によるもののみで、北西側のごく一部を除いて墳丘盛土は全て流出していた。わずかに墳丘盛土の認められる北西側の補助トレンチの土層観察から直径約15mの円墳であったと思われる。

当古墳の築造方法はまず、斜面上位側の地山整形を行い平坦部を造る。この平坦部は周溝よりもさらに斜面上位側に約10m広がっている。尾根の傾斜変換点に墓坑を掘り込む。石室を構築しながら盛土を行い、その後、斜面上位側から石室の東西側に周溝を掘り込み、斜面下位側の地山を削りだすことによって墳丘をより際立たせ、墳丘を完成させたと思われる。

周溝は斜面上位側は比較的よく残存していたが東西側は谷によって削られたものか、谷を利用して



第104図　15号墳調査後地形測量図



第105図　15号墳墳丘土層断面図

いたものと思われる。残存している周溝は幅1.1～1.5m、深さ20cm、断面形は浅い皿状を示す。

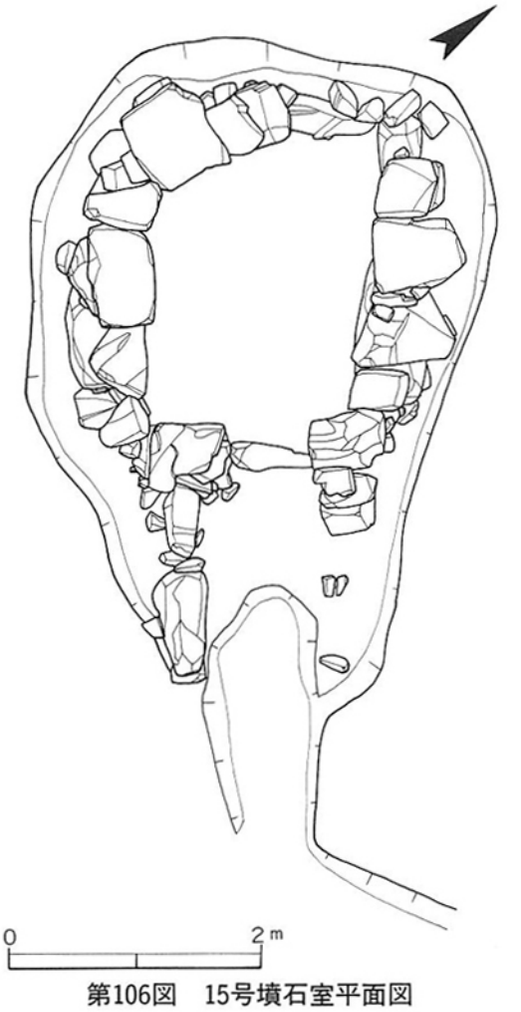
（2）石室

内部主体は、南東に開口する両袖式の横穴式石室である。やや胴張り気味の長方形の玄室に短めの羨道が付設する形態で主軸はN37°Wである。石室内には天井石と思われる巨石が崩落し土砂が充満していた。左壁の奥壁寄りは比較的残存状況が良好で、力石の部位まで残存している。他は基部石と、その上に積まれる一石程度が残るのみである。羨道部の左壁側は羨道端まで残存しているが、右壁側は1石のみ残存し、その先は欠失している。楣石は残存していない。

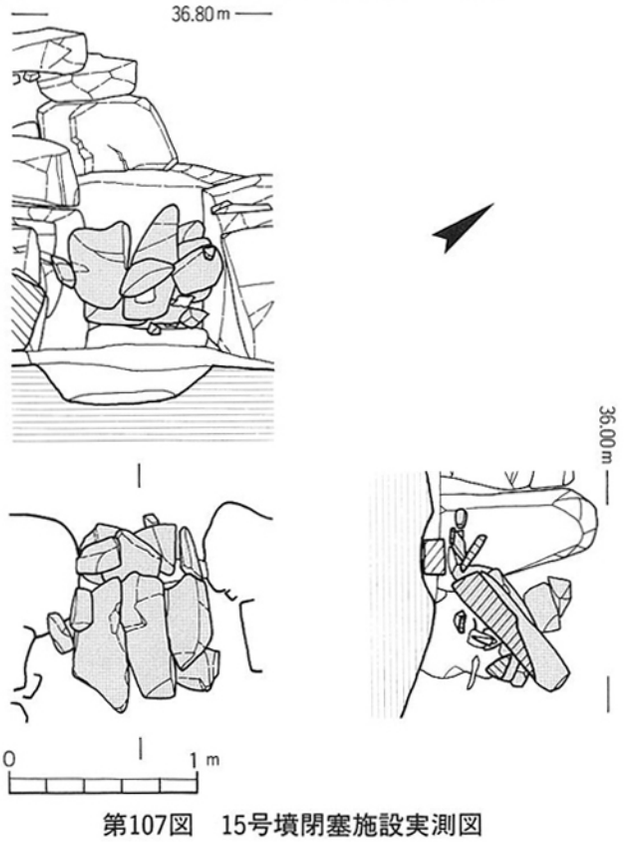
墓坑は石室北側で約1m掘り込み、東西側は約0.7m掘り込んでいる。平面形は玄室部分は玄室の形態に合わせてやや胴張りの方形で、羨道部で細くなり、南北方向に5.2m、東西方向に3.6mを測る。羨道部の先端で終結し、墓道が続く。

玄室　玄室の平面形はやや胴張り気味の方形をなし、長さは2.3m、幅は奥壁側で1.9m、中心部で2.0m、玄門側で1.8m、である。

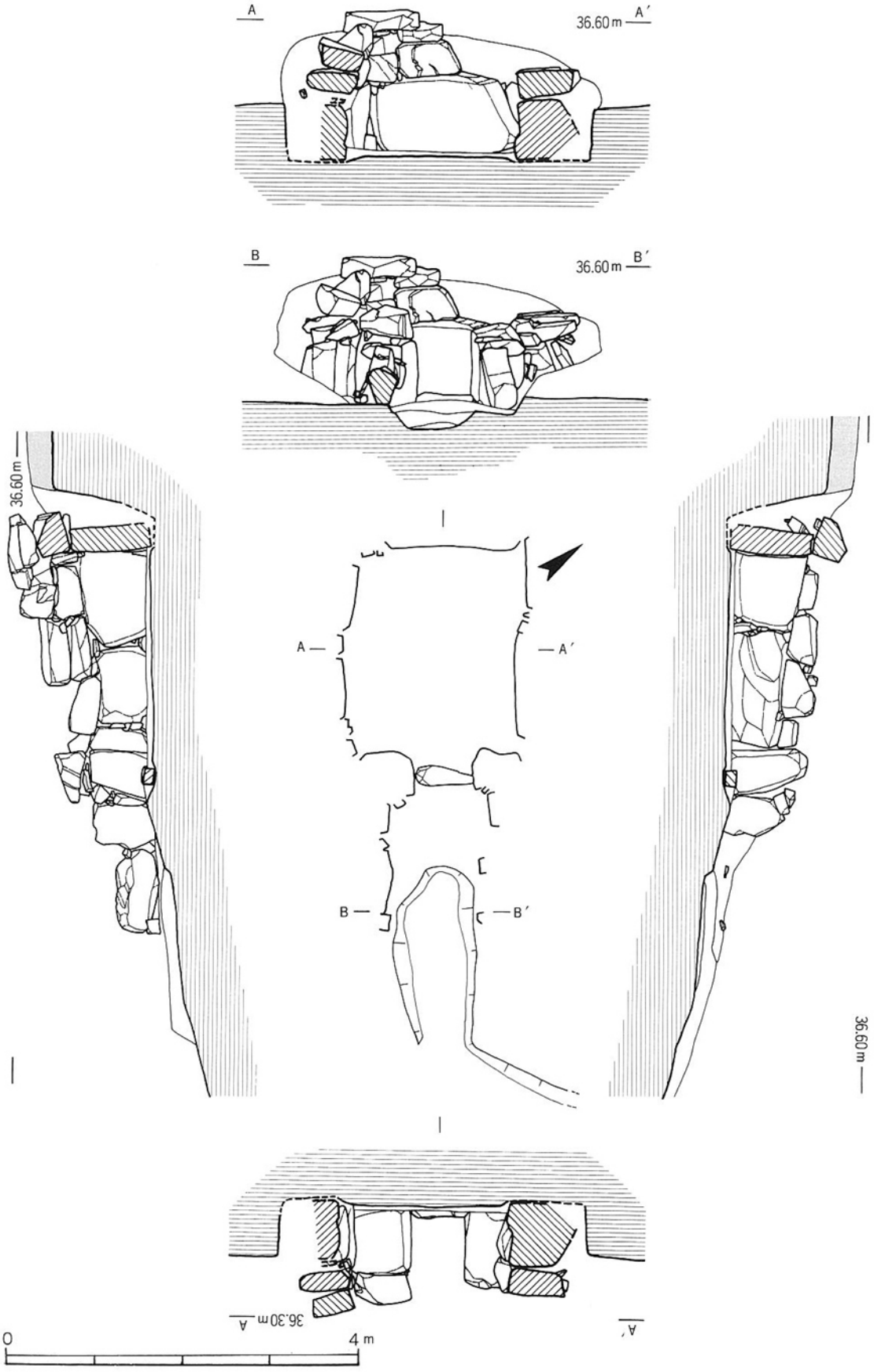
奥壁は180×100cmの板石を横長に用い、鏡石としている。側壁は右壁側は90×80cm、140×70cmの2石を横長に用い腰石とし、左壁側は90×60cm、120×100cmの2石に加え、30×80mの柱状の石材を縦長に用いることで右壁側と長さをそろえている。両側壁とも70×30cm程度の石材を基部石の上に横長に用いて積み、すき間には小石を詰め石として用いている。最も残存状況の良好な左壁の奥壁側は腰石の上に40×60cmの石材を横長に2石積み、さらにその上に20×60cmの石材を持ち送りながら積み、力石としている。持ち送りの角度は約16°である。基部石はすべて約10cmほど地山を掘り下げて据えている。



第106図　15号墳石室平面図



第107図　15号墳閉塞施設実測図



第108図　15号墳石室実測図

それぞれの壁体の床面からの残存高は奥壁側で1.62m、左壁側で2.8m、右壁側で1.0mである。

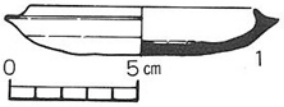
玄門は、左右に約60×80cmの石材を縦長に用い袖石とし、玄門幅は0.7mで、間に24×66cmの平たい石を置き框石としている。

羨道　羨道は両側壁ともまず50×80cmの石を縦長に用い、左壁側では100×50cmの石を横長に用い側壁としている。1石目は地山を掘り込んで据えているが、2石目は地山の上に据え置かれている。右壁側の2石目は残存していないが、左壁側と同様であったと思われる。しかし、抜き取り痕は確認できなかった。

また、羨道は床面、玄門から1.5mのところから断面形U字形の掘り込みが行われており、墓道へと続くと思われる。

閉塞施設　当古墳の閉塞施設は石室が損壊した段階で羨道側に倒れ、原位置では検出できなかったが、框石の上に乗っていた部分については原位置を保っていたと思われる。平らな框石の上に土を盛り、0.3×0.7m程度の大きさの柱状の石材3つを縦長に用いて玄門を閉塞していたと思われ、板石は用いられていない。閉塞石の間からは明らかに詰め込まれたと思われる須恵器の甕の破片が出土して

第109図　15号墳石室内遺物出土状況図



第110図　15号墳出土土器実測図

おり、供献土器の可能性もある。

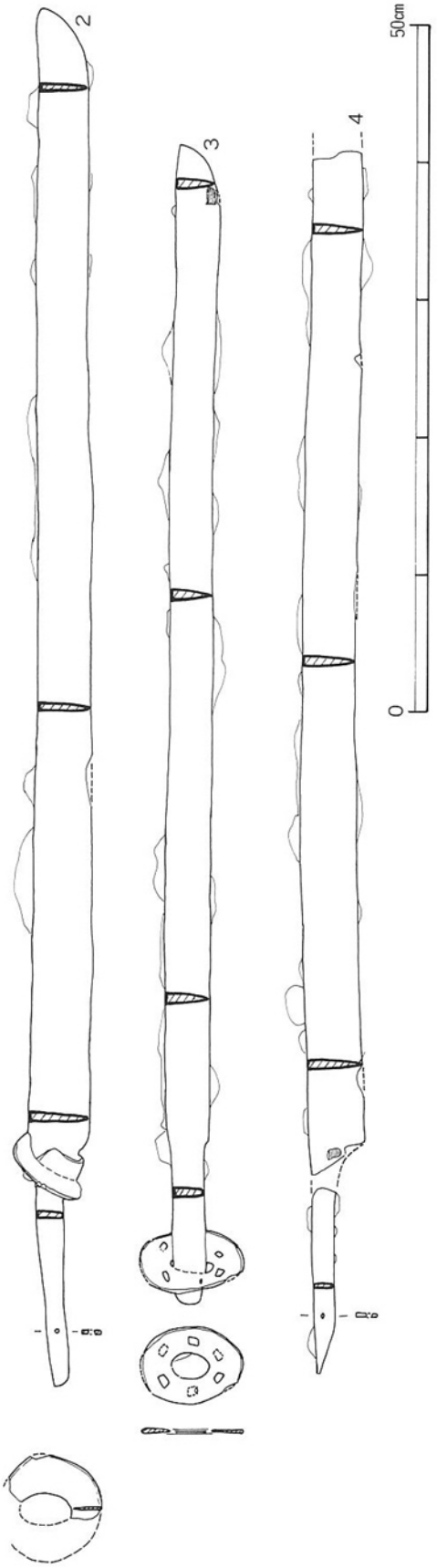
墓道　羨道部の端の東側の墳丘裾部を巡る墓道が設られているが、土砂の流出によって肩を失い、先端を消失している。墓道の残存長は、約4mである。

（3）遺物

出土状況　玄室内からは鉄刀をはじめとした副葬品が出土した。出土した副葬品のうち、鉄刀は3本出土しているが、1本は玄門部で框石と平行に、2本目は右壁側で側壁に沿って、3本目は奥壁側で奥壁に沿って出土している。切先の方向は、玄門側と奥壁側の鉄刀は左壁側に、右壁側の鉄刀は奥壁側に向いている。刃部の向きは、玄関側と奥壁側の鉄刀は玄室の内側を向いているが、右壁側の鉄刀は玄室の外側を向いている。これら3本の鉄刀は、副葬時の原位置をほぼ保っているとみてよい。3本の出土レベルはほぼ同一であり、相互の位置関係は整然としていることからみて、副葬された時期差は短いものとみられ、同時期に副葬された可能性も否定しきれない。

一方、装身具は右壁側に集中している。鉄刀の出土状況と合わせて考えると、遺体は主軸に沿って埋葬されたものと、主軸と直交して埋葬されたものとがあったと推定される。鉄刀の数からみれば3体、耳環の数からすれば少なくとも5体の埋葬がなされていた可能性があろう。なお、3本の鉄刀はそれぞれ刀子を伴って出土している。装身具のうち、勾玉、切子玉、管玉の間にガラス小玉2個を挟むという順序で、連結した状態で出土したものがある。

石室外からの土器の出土はなく、土器は、石室の崩落石の間から須恵器の坏身が1点と須恵器の甕の破片が数点と、前述した通り、閉塞石の間から須恵器の甕の破片が出土しただけである。また、玄室床面からも須恵器の甕の破片が出土している。



第111図　15号墳出土鉄刀実測図

出土遺物

土器（第110図　図版25）

坏（1）　1は須恵器の坏身で、底部は平坦で内湾気味に立ち上がり、外傾しながら受部に至る。口縁部はほとんど形骸化した短い立ち上がりを持つ。口径9.0cm、受け部径11.0cm、器高1.9cm。口縁部に自然釉が認められる。外面底部は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。

鉄製品

鉄刀（第111図　図版26）　2は全長99.2cmで、身の長さ82.2cm、茎部長17.0cmを測る。関付近での身幅4.5cm、茎幅2.0cmで、背の厚さはそれぞれ0.7cm、0.5cmを測る。関は両関で、身の断面形は二等辺三角形を呈する。茎には1カ所目釘穴が確認される。鍔及び鎺は若干ずれていた。鍔の平面形は倒卵形を呈し、透かしは確認できなかった。3は全長83.4cmで身の長さ71.7cmで、茎部長11.7cmを測る。関付近での身幅3.1cm、茎幅2.3cmで、背の厚さはそれぞれ0.8cm、0.7cmを測る。関は両関で、身の断面形は刃部側がやや膨らむ二等辺三角形を呈する。切先に若干の木質が残る。鍔は茎の先端までずれており、平面形は倒卵形、6窓の透かしが確認できた。鎺は残存していない。4は身の切先側と茎と関と接する部分を欠損しており、残存長86.5cm、残存している身の長さ74.3cm、茎の長さ12.2cmを測る。茎には1カ所の目釘穴が確認される。関付近での身の幅さ3.7cm、茎幅1.8cmで、背の厚さはそれぞれ0.7cm、0.6cmを測る。刀身の断面形は細長い二等辺三角形を呈する。関は片関作りである。関の近くに若干の木質が残る。鍔は残存していない。

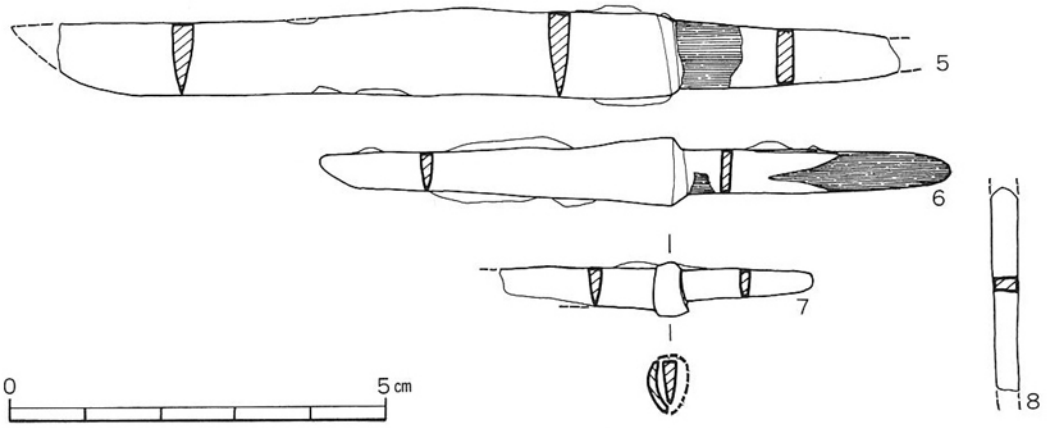
刀子（第112図　図版26）　5は残存長22.2cm、身部の残存長15.4cm、茎部の残存長6.8cmを測る。背の厚さは身部で0.5cm、茎部で0.3cmである。両関で茎部に木質が残る。6は、全長17.2cm、身部長12.9cm、茎部長4.9cm、背の厚さは身部で0.3cm、茎部で0.3cmである。両関で茎部に木質が残る。7は残存長8.3cm、そのうち茎部長3.8cmである。背の厚さは身部で0.4cm、茎部で0.3cmである。両関で関部に責金具が残る。

鉄鏃（8）　8は鉄鏃の箆被部である。残存長は4.9cm。

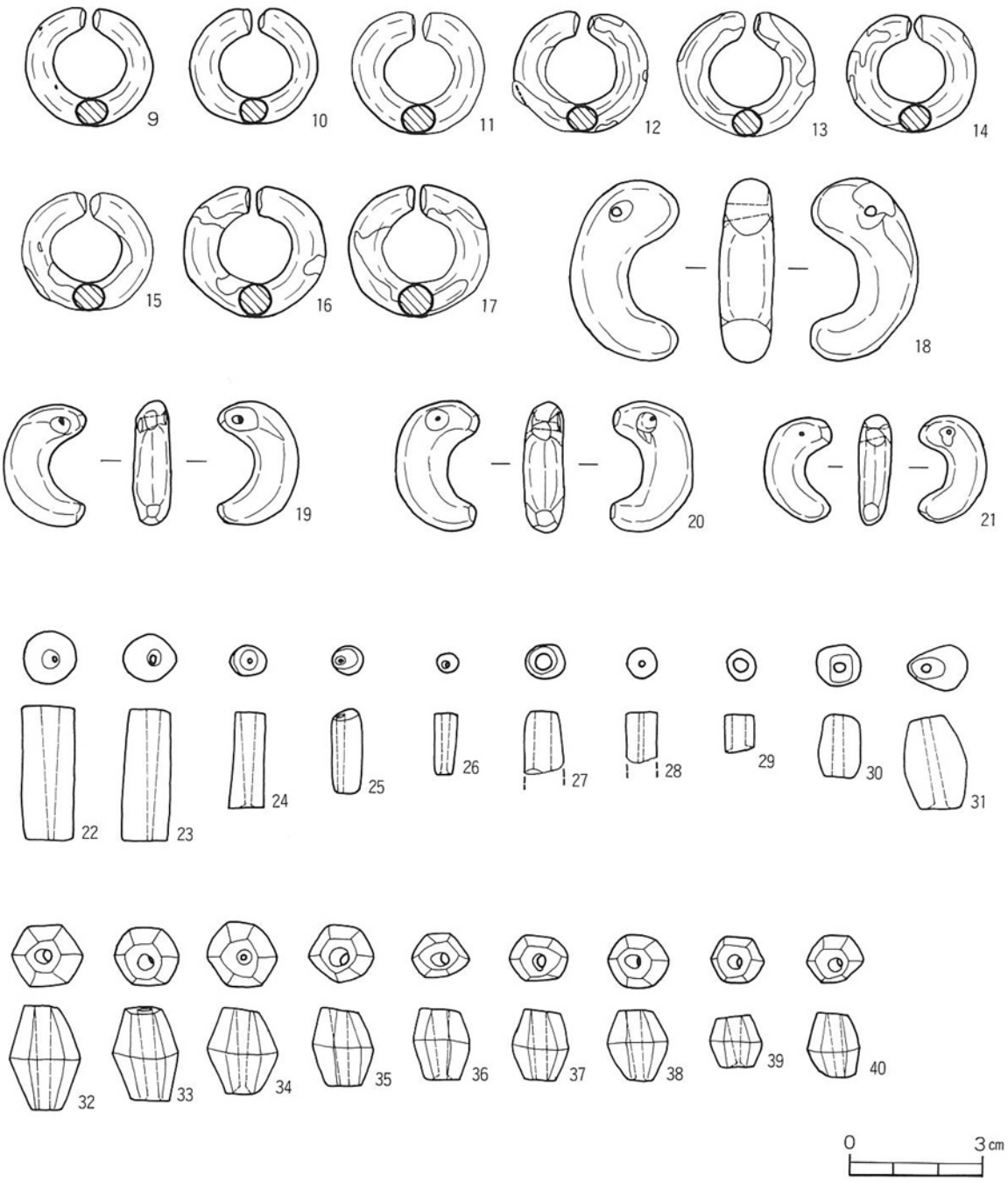
装身具（第113，114図　図版25，26）

耳環（9～17）　9・10は銅芯金張であるが、11から17は銅芯銀張である。計測表を第10表に掲げる。

勾玉（18～21）　材質は18が碧玉、他は瑪瑙である。18は全長4.07cm、厚さ1.25cmで、頭部に片面から穿孔された一孔を持つ。19は全長2.82cm、厚さ0.96cmで頭部に片面から穿孔された一孔をもつ。20は



第112図　15号墳出土鉄製品実測図



第113図　15号墳出土装身具実測図①

第10表　15号墳出土耳環計測表

挿図	図版	外法径(cm) 長径・短径	内法径(cm) 長径・短径	断面径(cm) 長径・短径	突合部(cm) 幅	備考
113－9	25－9	2．92×2．70	1．62×1．48	0．76×0．65	0．10	銅芯金張り
113－10	25－10	2．96×2．70	1．62×1．46	0．65×0．65	0．16	銅芯金張り
113－11	25－11	3．01×2．72	1．55×1．40	0．76×0．75	0．10	銅芯銀張り
113－12	25－12	2．98×2．75	1．74×1．55	0．72×0．66	0．16	銅芯銀張り
113－13	25－13	3．12×2．76	1．70×1．52	0．70×0．70	0．19	銅芯銀張り
113－14	25－14	2．94×2．64	1．60×1．42	0．70×0．66	0．07	銅芯銀張り
113－15	25－15	2．94×2．69	1．60×1．42	0．74×0．68	0．04	銅芯銀張り
113－16	25－16	3．21×2．94	1．70×1．52	0．74×0．73	0．11	銅芯銀張り
113－17	25－17	3．20×2．94	1．74×1．51	0．88×0．74	0．13	銅芯銀張り

全長2.53cm、厚さ0.74cmで頭部に片面から穿孔された一孔をもつ。21は全長3.04cm、厚さ0.80cmで頭部に片面から穿孔された一孔をもつ。

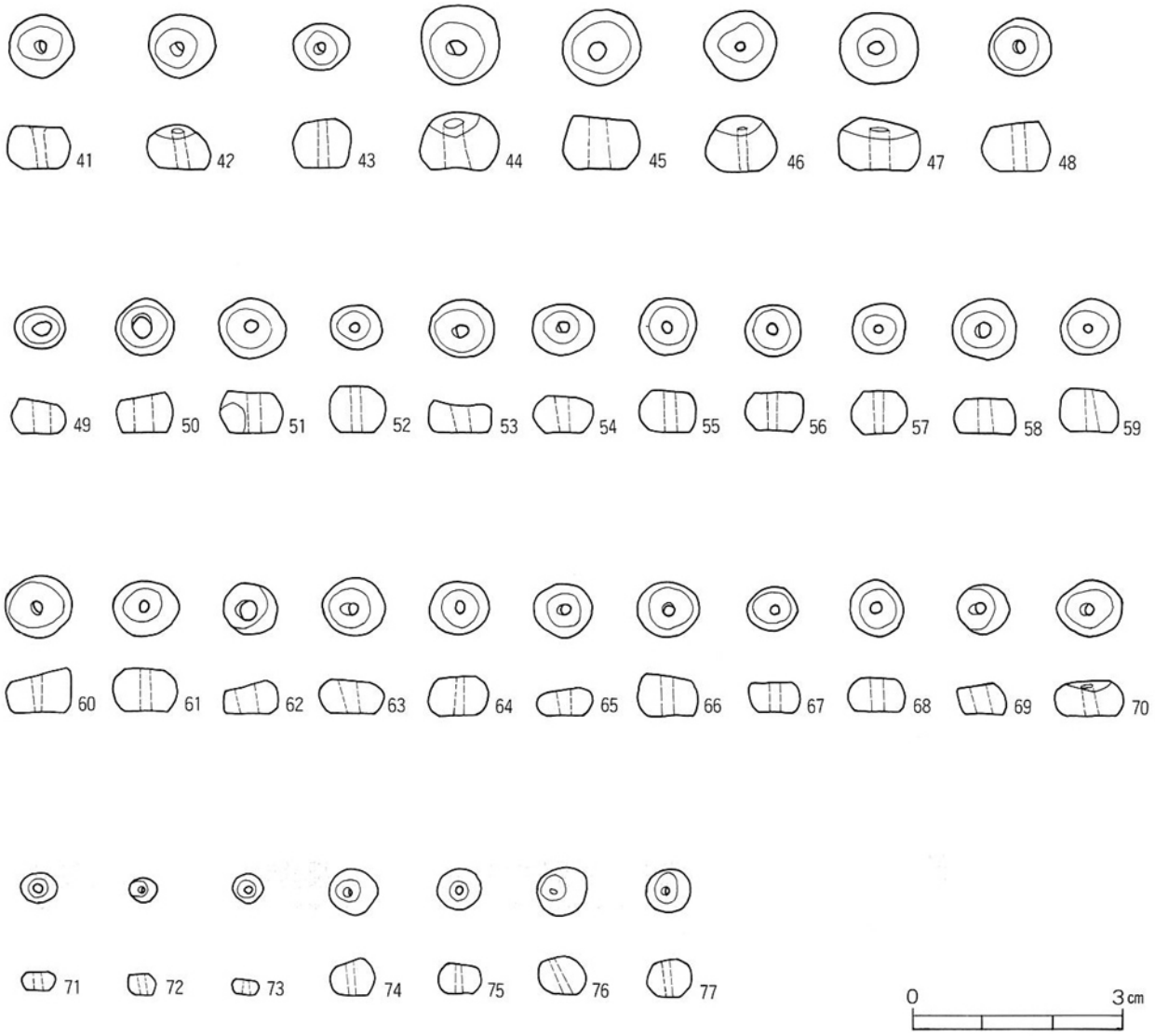
管玉（22～29）　22から24は碧玉製、25は凝灰岩製、26は碧玉製、27・28はガラス製、29は滑石製である。計測表を第10表に掲げる。

棗玉（30・31）　30はガラス製である。31は琥珀製で、片面穿孔である。計測表を第10表に掲げる。

切子玉（32～40）　いずれも水晶製である。計測表を第10表に掲げる。

小玉（41～73）　44は水晶製、46・47は瑪瑙製であり、他はガラス製である。計測表を第11表に掲げる。

土玉（74～77）　いずれも5㎜程度のものである。計測表を第11表に掲げる。　（安部）



第114図　15号墳出土装身具実測図②

第11表　15号墳出土玉類計測表

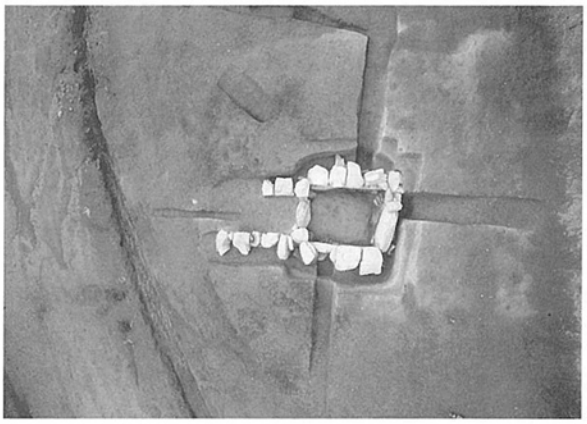
（　）は残存長

挿図	図版	種類	長さ(mm) 厚さ	径 (mm) 長径	短径	孔径(mm) 長径	短径	材質	色調	備考
113－22	25－22	管　玉	30．1	10．5	9．9	上4.0	下1.6	碧　玉	濃緑色	片面穿孔
113－23	25－23	管　玉	30．2	9．8	9．6	上4.0	下1.6	碧　玉	濃緑色	片面穿孔
113，24	25－24	管　玉	21．5	8．0	7．5	上4.0	下1.4	碧　玉	濃緑色	片面穿孔
113－25	25－25	管　玉	18．6	6．9	6．6	上1.8	下1.2	凝灰岩	薄緑色	片面穿孔
113－26	25－26	管　玉	19．1	5．6	4．8	上3.5	下1.8	碧　玉	濃緑色	両面穿孔
113－27	25－27	管　玉	(18．5)	8．3	8．2	上3.5	下3.3	ガラス	スカイブルー	一部欠損
113－28	25－28	管　玉	(10．4)	6．7	6．6	上2.0	下1.8	ガラス	コバルトブルー	一部欠損
113－29	25－29	管　玉	9．0	7．7	6．6	上3.8	下3.5	滑　石	－	両面穿孔
113－30	25－30	棗　玉	24．0	10．1		上3.2	下3.7	ガラス	透　明	
113－31	25－31	棗　玉	21．7	12．8		上2.4	下2.5	琥　珀	茶褐色	片面穿孔、一部欠損
113－32	25－32	切子玉	23．5	15．0		上4.3	下2.2	水　晶	透　明	片面穿孔、一部欠損
113－33	25－33	切子玉	21．0	14．5		上4.7	下1.7	水　晶	透　明	両面穿孔
113－34	25－34	切子玉	19．0	15．1		上3.7	下0.9	水　晶	透　明	両面穿孔
113－35	25－35	切子玉	17．0	13．9		上4.0	下1.7	水　晶	透　明	片面穿孔
113－36	25－36	切子玉	16．9	12．2		上4.1	下2.3	水　晶	透　明	両面穿孔
113－37	25－37	切子玉	16．0	12．5		上3.8	下2.4	水　晶	透　明	片面穿孔
113－38	25－38	切子玉	16．3	12．8		上3.4	下1.6	水　晶	透　明	両面穿孔
113－39	25－39	切子玉	11．7	11．7		上3.8	下2.0	水　晶	透　明	両面穿孔
113－40	25－40	切子玉	13．6	12．1		上4.0	下1.8	水　晶	透　明	片面穿孔
114－41	25－41	小　玉	6．3	8．7		1．6		ガラス	コバルトブルー	
114－42	25－42	小　玉	6．0	9．4		2．2		ガラス	コバルトブルー	
114－43	25－43	小　玉	3．2	7．4		2．3		ガラス	コバルトブルー	
114－44	25－44	小　玉	8．0	12．3		3．0		水　晶	透　明	
114－45	25－45	小　玉	7．2	10．9		2．5		ガラス	コバルトブルー	
114－46	25－46	小　玉	7．9	9．9		1．4		瑪　瑙	オレンジ	
114－47	25－47	小　玉	7．4	10．5		2．4		瑪　瑙	オレンジ	
114－48	25－48	小　玉	7．0	8．6		2．0		ガラス	コバルトブルー	
114－49	25－49	小　玉	4．9	7．5		2．2		ガラス	コバルトブルー	
114－50	25－50	小　玉	5．6	8．0		3．4		ガラス	コバルトブルー	
114－51	25－51	小　玉	5．8	9．2		1．4		ガラス	コバルトブルー	
114－52	25－52	小　玉	6．5	7．5		1．5		ガラス	コバルトブルー	
114－53	25－53	小　玉	4．3	8．8		2．4		ガラス	コバルトブルー	
114－54	25－54	小　玉	5．5	8．2		2．4		ガラス	コバルトブルー	
114－55	25－55	小　玉	5．3	8．4		2．0		ガラス	コバルトブルー	
114－56	25－56	小　玉	5．5	7．9		1．2		ガラス	コバルトブルー	
114－57	25－57	小　玉	5．7	8．3		1．6		ガラス	コバルトブルー	
114－58	25－58	小　玉	4．8	8．8		2．3		ガラス	コバルトブルー	
114－59	25－59	小　玉	6．0	8．0		1．1		ガラス	コバルトブルー	
114－60	25－60	小　玉	6．0	8．5		2．5		ガラス	コバルトブルー	
114－61	25－61	小　玉	6．3	9．4		1．9		ガラス	コバルトブルー	
114－62	25－62	小　玉	4．3	7．5		2．9		ガラス	コバルトブルー	
114－63	25－63	小　玉	4．8	9．0		2．4		ガラス	コバルトブルー	
114－64	25－64	小　玉	5．3	8．1		2．0		ガラス	コバルトブルー	
114－65	25－65	小　玉	4．6	8．2		1．8		ガラス	コバルトブルー	
114－66	25－66	小　玉	6．0	8．1		2．4		ガラス	コバルトブルー	
114－67	25－67	小　玉	4．3	6．2		1．6		ガラス	コバルトブルー	
114－68	25－68	小　玉	3．5	4．8		1．5		ガラス	コバルトブルー	
114－69	25－69	小　玉	2．9	3．6		1．1		ガラス	コバルトブルー	
114－70	25－70	小　玉	2．0	4．0		1．5		ガラス	ダークオリーブ	
114－71	25－71	小　玉	4．7	8．0		1．7		ガラス	コバルトブルー	
114－72	25－72	小　玉	4．4	8．0		2．3		ガラス	コバルトブルー	
114－73	25－73	小　玉	4．6	9．3		2．0		ガラス	コバルトブルー	
114－74	25－74	土　玉	5．2	6．4		1．5		土	黒褐色	
114－75	25－75	土　玉	5．0	6．2		1．3		土	黒褐色	
114－76	25－76	土　玉	4．3	5．7		1．3		土	黒褐色	
114－77	25－77	土　玉	5．4	6．8		1．2		土	黒褐色	

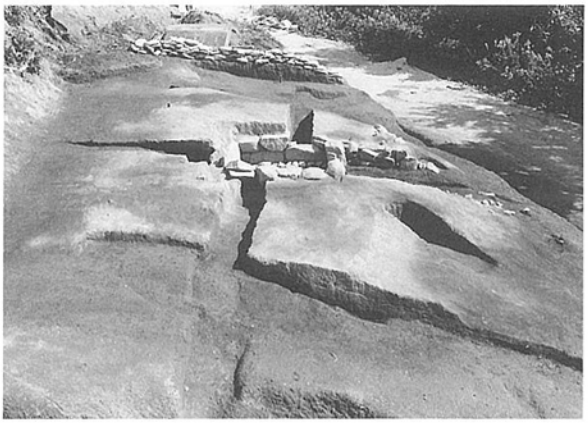
梅ヶ崎古墳群Ⅰ地区全景

梅ヶ崎古墳群Ⅱ地区全景

6 号墳調査前

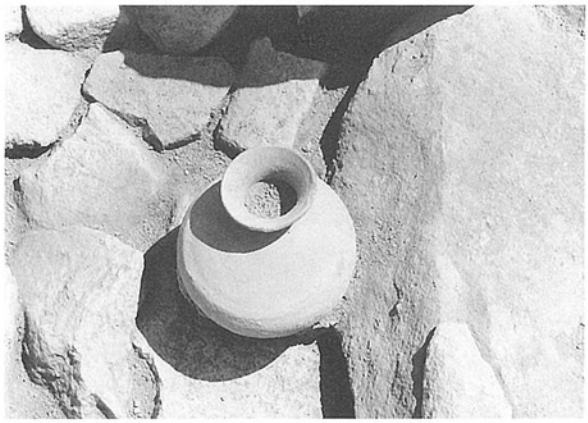


6 号墳全景



6 号墳墳丘

6 号墳玄室内敷石



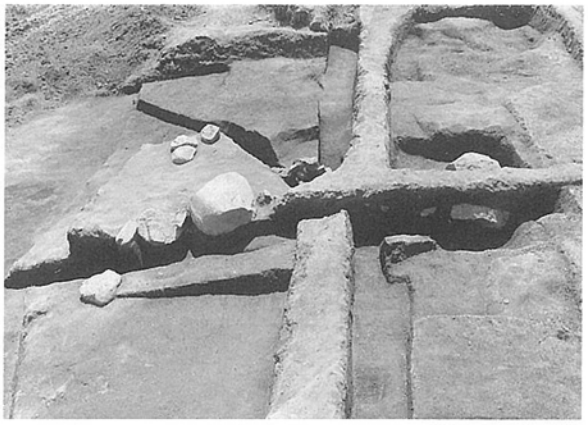
6 号墳石室内平瓶出土状況

6 号墳南側列石

6 号墳石室完掘（西から）

6 号墳石室完掘（南から）

7 号墳全景



7 号墳トレンチ完掘

7 号墳崩落石検出状況

7 号墳遺物出土状況（東から）

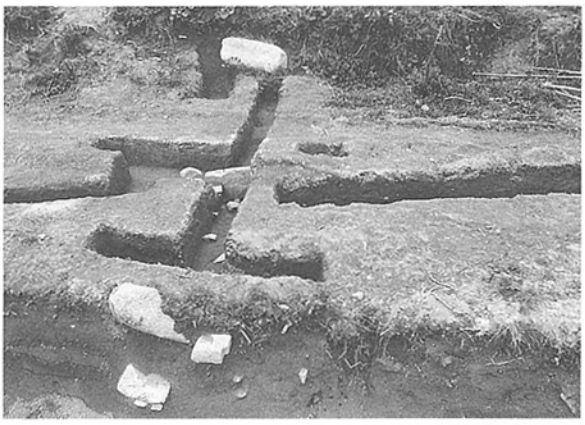
7 号墳遺物出土状況（西から）

7 号墳遺物出土状況（南から）

7 号墳石室内耳環出土状況

7 号墳完掘

8 号墳調査前



8 号墳トレンチ完掘

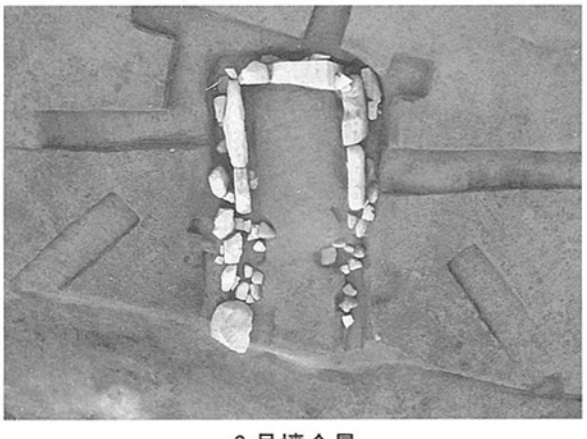
8 号墳墳丘

8 号墳石室内遺物出土状況①

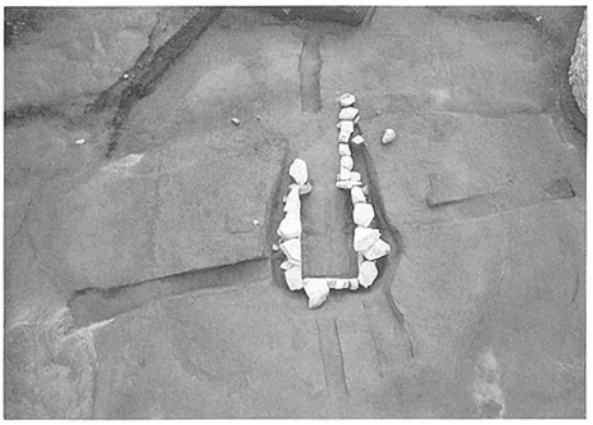
8 号墳石室内遺物出土状況②

8 号墳石室内遺物出土状況③

8 号墳石室完掘（南から）



8 号墳全景



9 号墳全景

9 号墳閉塞施設

9 号墳玄室内敷石

9 号墳墳丘及び周構内遺物出土状況

9 号墳石室内遺物出土状況①

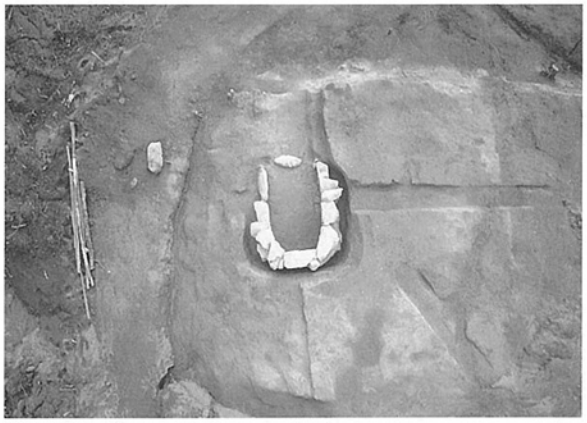
9 号墳石室内遺物出土状況②

9 号墳開口部東側土器出土状況

9 号墳石室完掘

10号墳全景

11号墳崩落石検出状況



11号墳全景

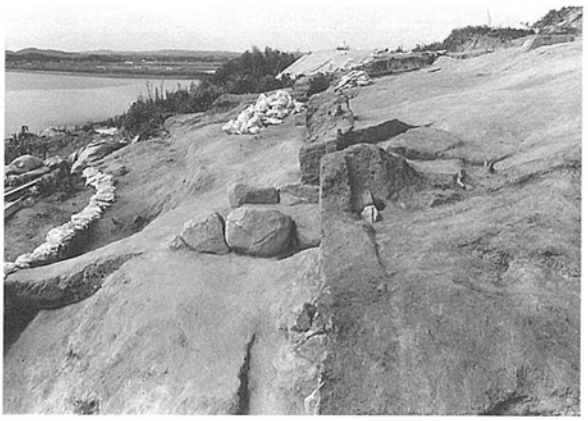
11号墳閉塞施設

11号墳墳丘

11号墳石室内耳環出土状況

11号墳石室完掘

12号墳調査前



12号墳墳丘

12号墳周溝

12号墳石室完掘

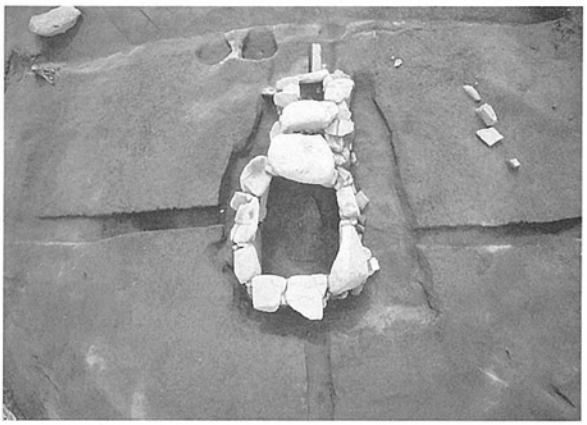
13号墳調査前

13号墳墳丘

13号墳石室内遺物出土状況

13号墳石室完掘

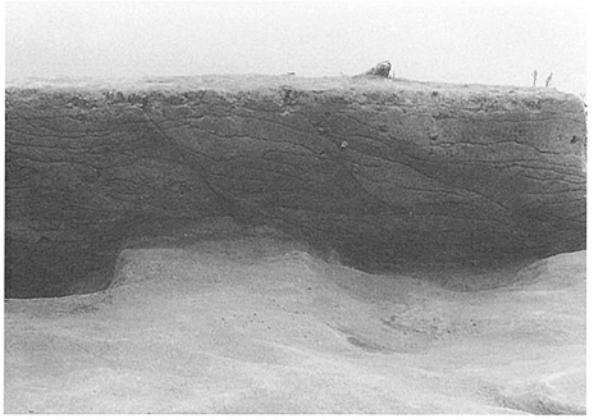
14号墳調査前



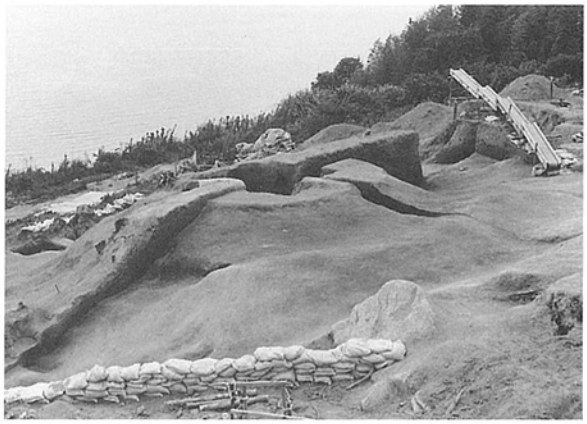
14号墳全景

14号墳崩落石検出状況

14号墳東側墳丘断面



14号墳西側墳丘断面



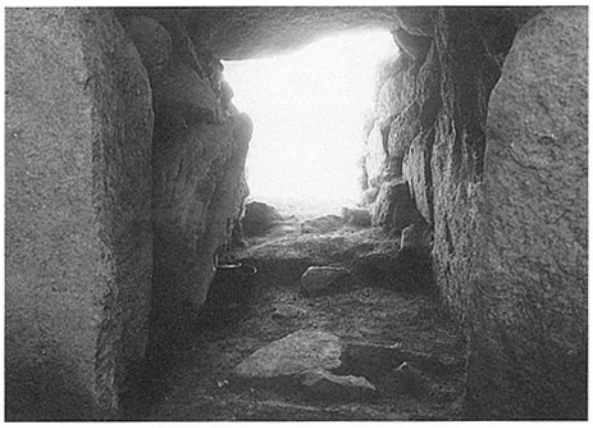
14号墳墳丘（東から）

14号墳墳丘（北から）

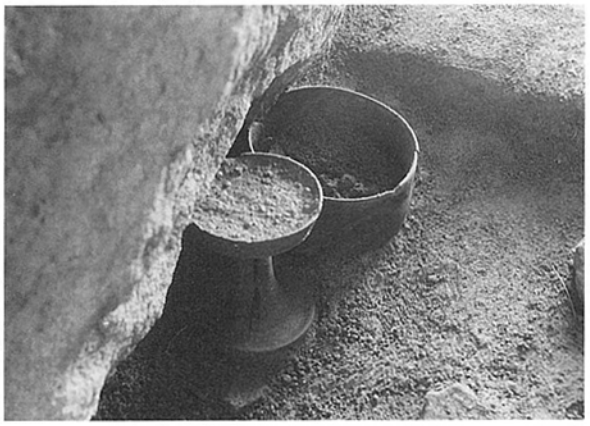
14号墳墳丘除去後

14号墳羨道閉塞

14号墳石室内遺物出土状況



14号墳羨道内遺物出土状況①

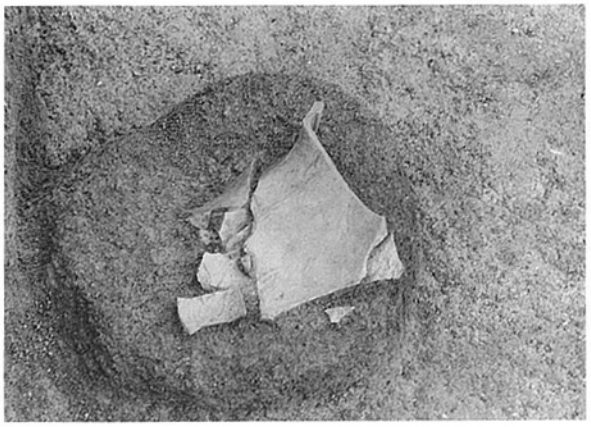


14号墳羨道内遺物出土状況②

14号墳玄室内排水施設

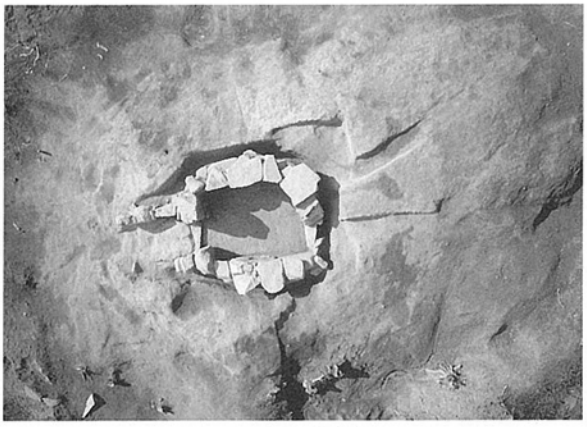
14号墳羨道内排水施設

14号墳東側周溝部土器出土状況



14号墳北側周溝部土器出土状況

15号墳調査前



15号墳全景

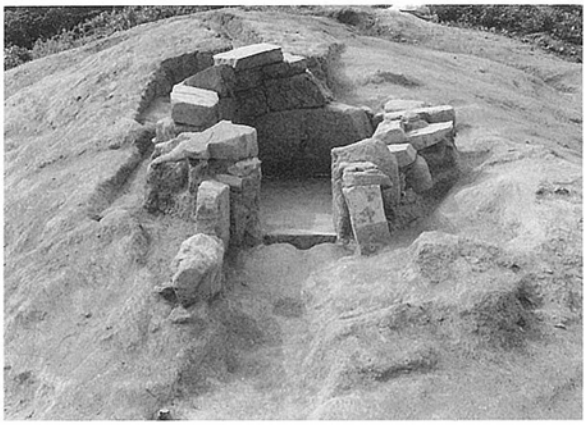
15号墳崩落石検出状況

15号墳玄門閉塞

15号墳玄門閉塞

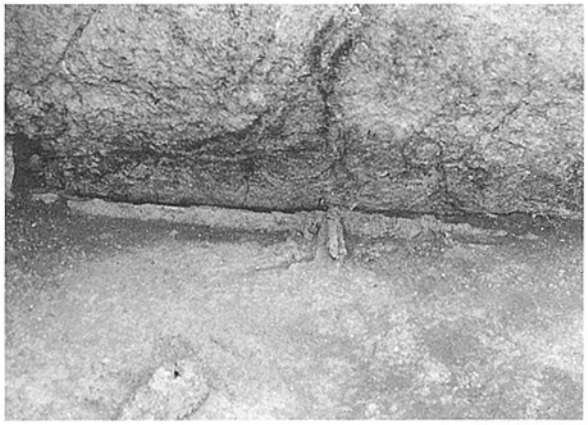
15号墳玄門閉塞除去後

15号墳石室完掘（西から）



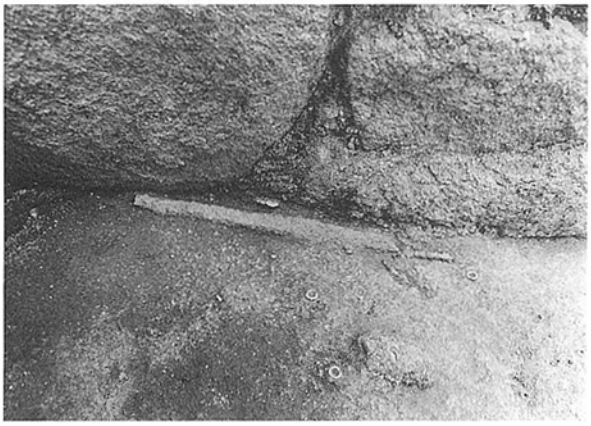
15号墳石室完掘（南から）

15号墳石室内鉄刀出土状況



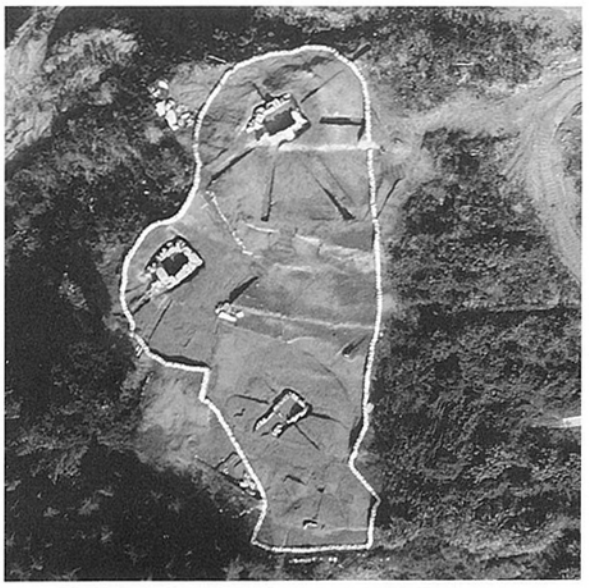
15号墳奥壁側鉄刀出土状況

15号墳玄門側鉄刀出土状況

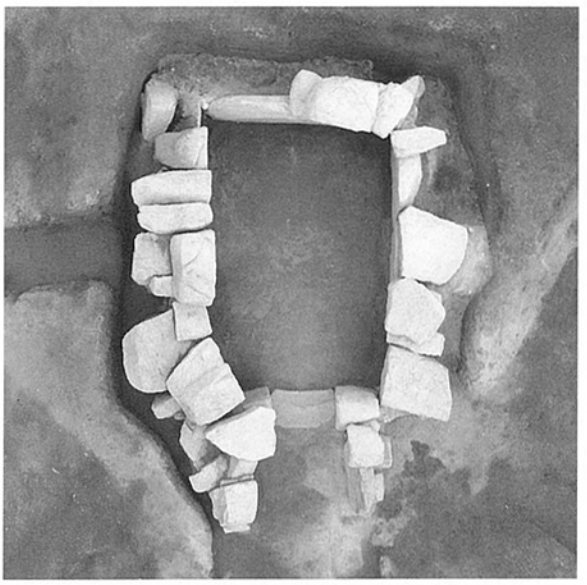


15号墳右壁側鉄刀出土状況

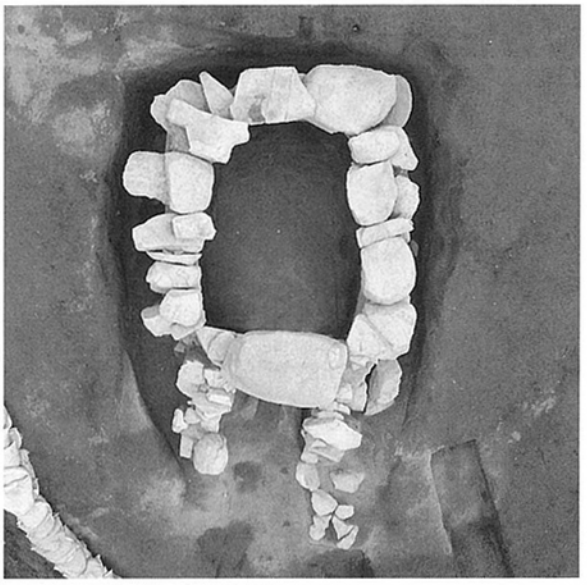
15号墳石室内装身具出土状況



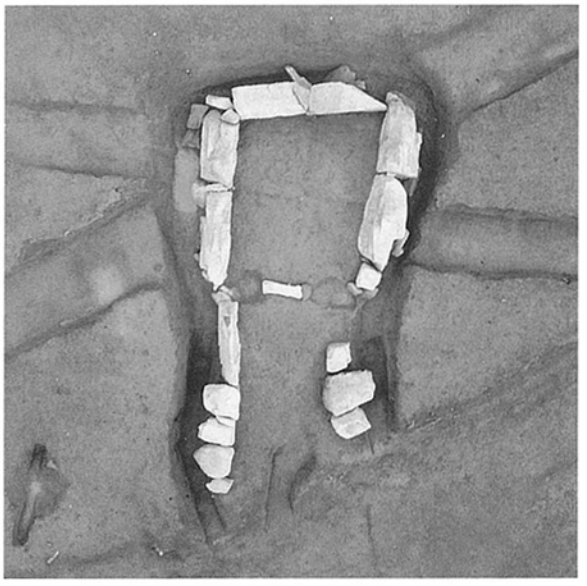
梅ヶ崎古墳群Ⅰ地区全景



梅ヶ崎１号墳



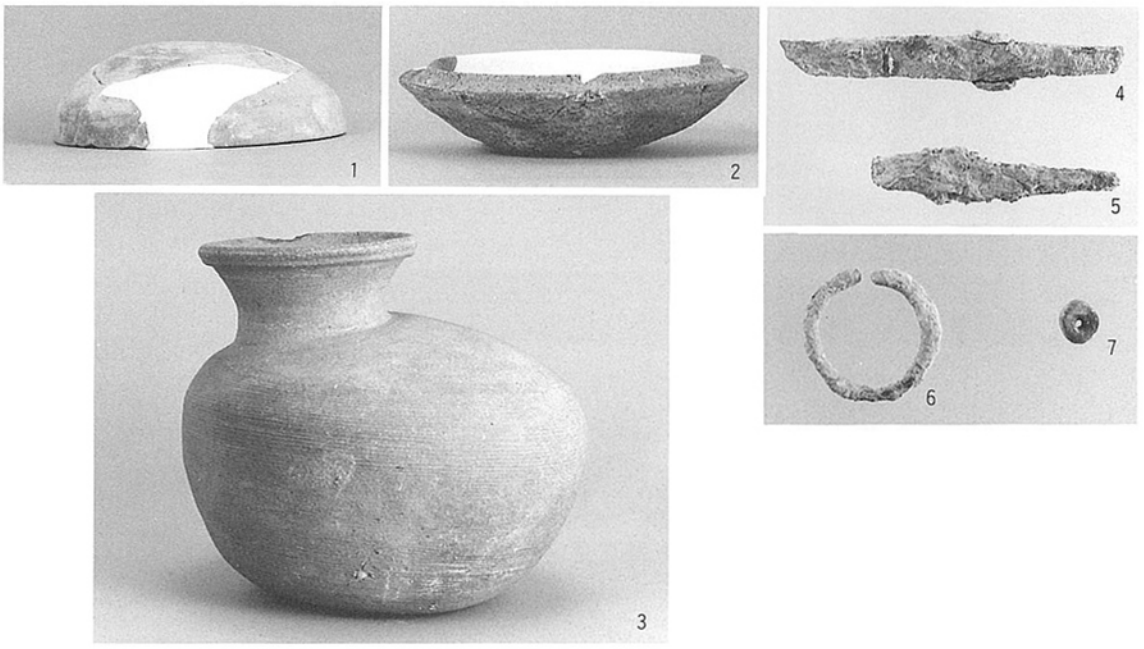
梅ヶ崎２号墳



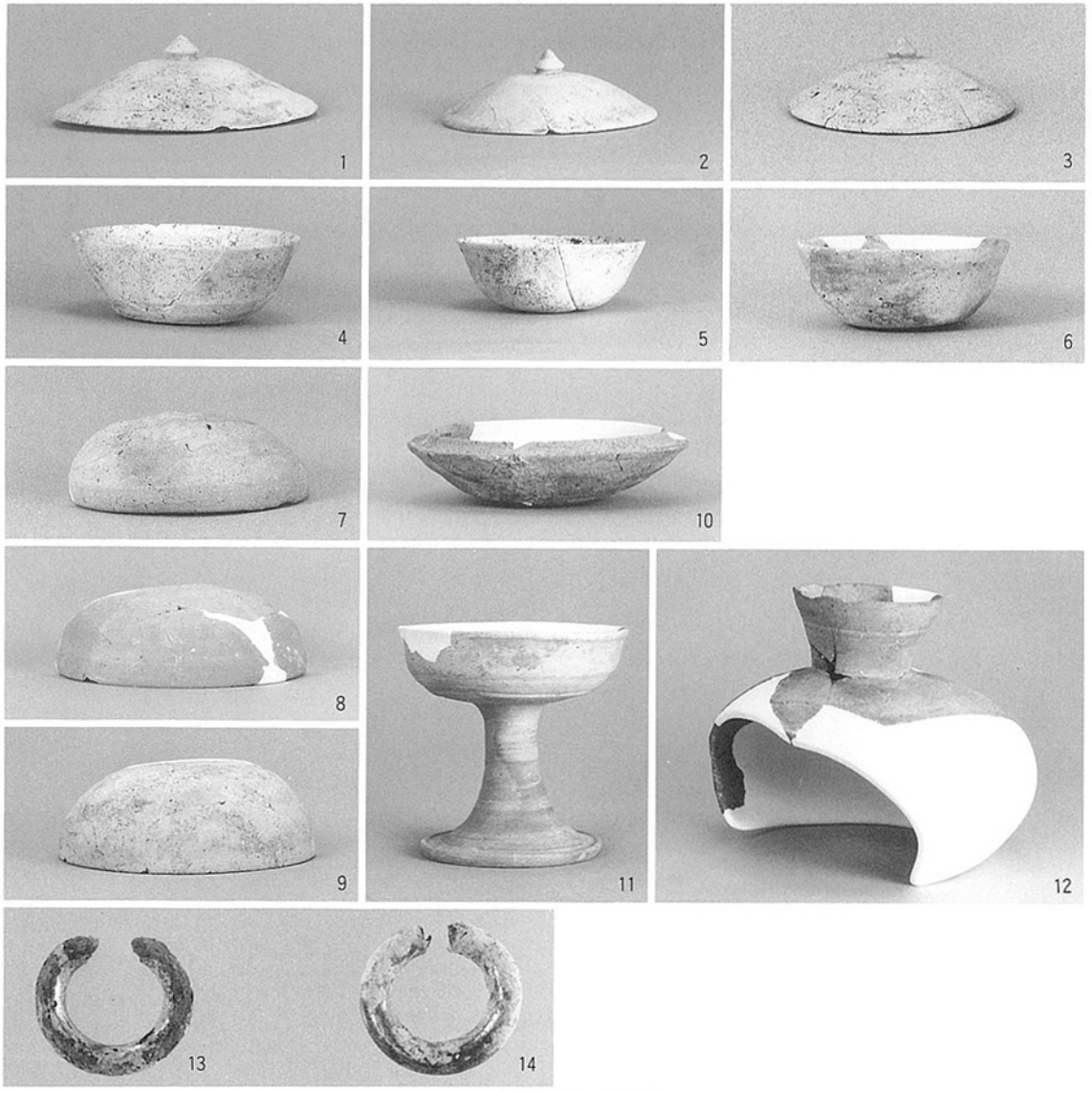
梅ヶ崎３号墳

梅ヶ崎４号墳

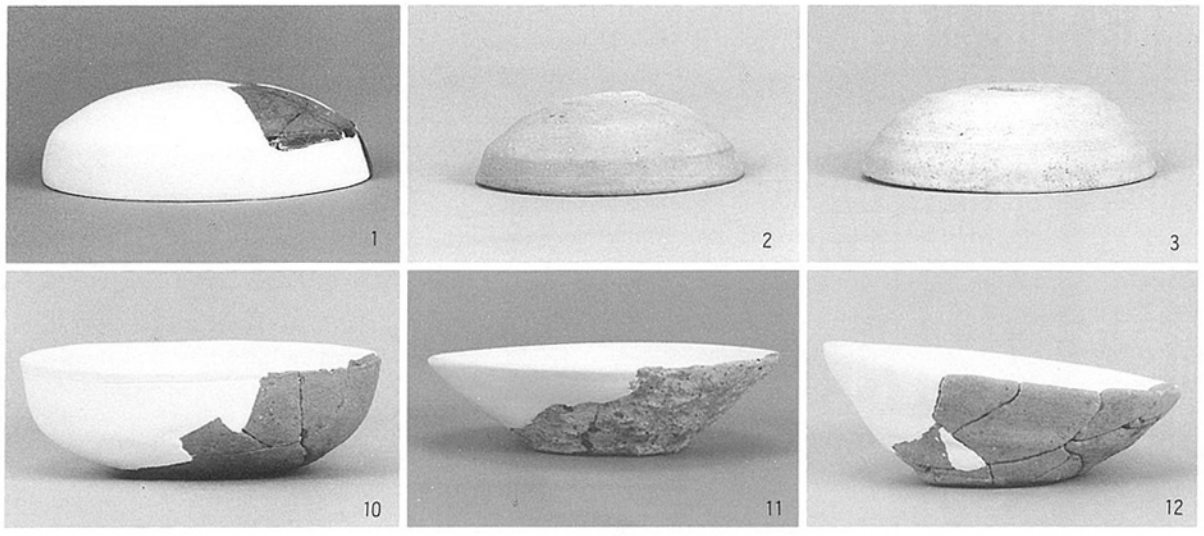
梅ヶ崎５号墳



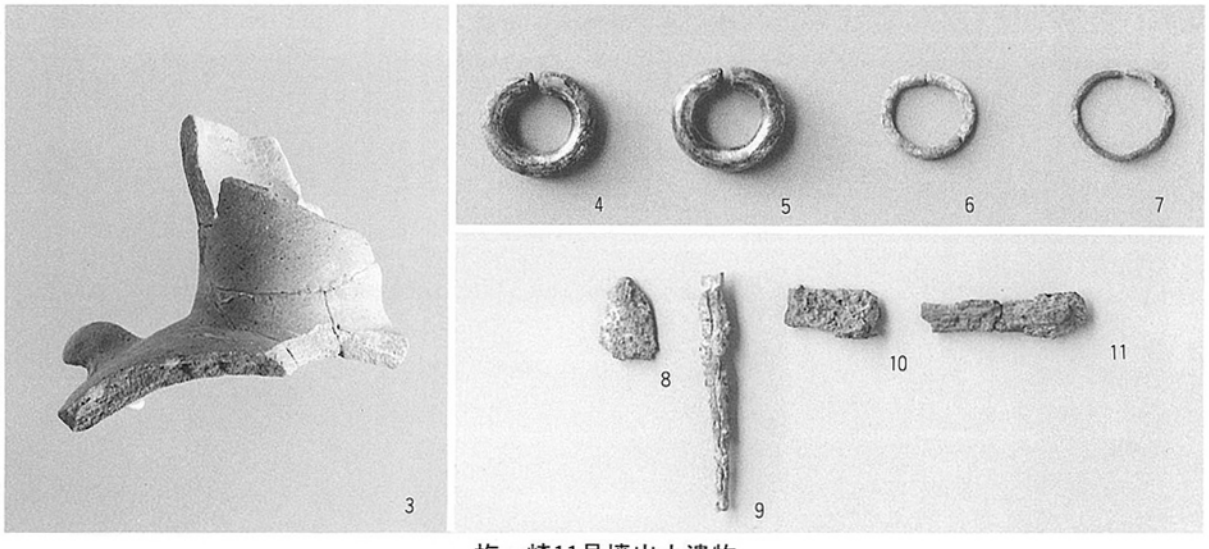
梅ヶ崎６号墳出土遺物



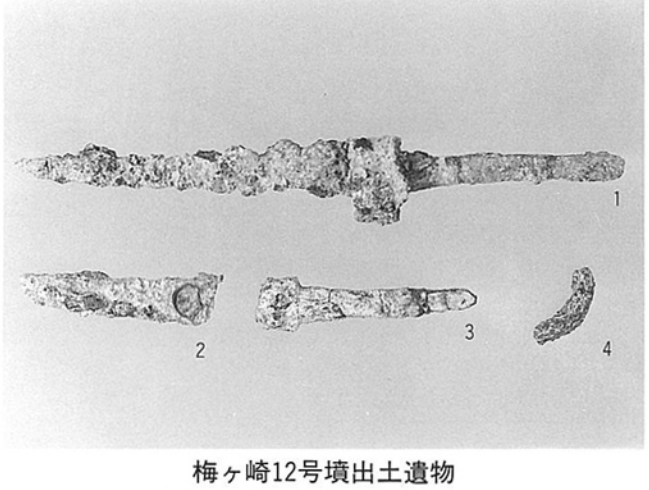
梅ヶ崎７号墳出土遺物



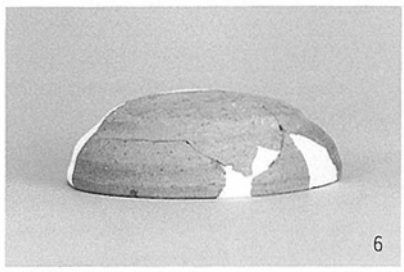
梅ヶ崎８号墳出土遺物

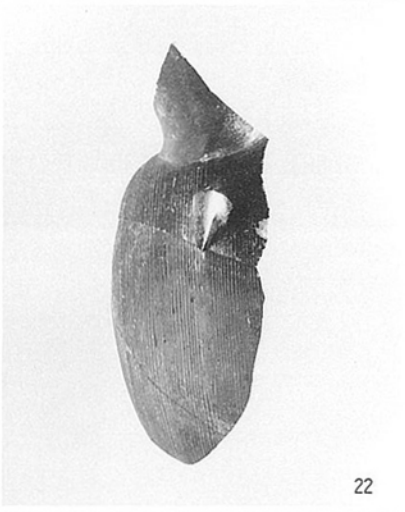


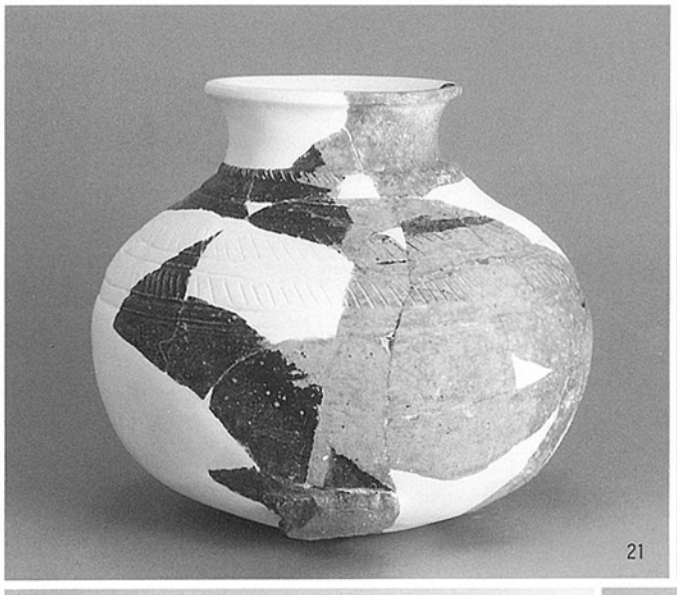
梅ヶ崎11号墳出土遺物

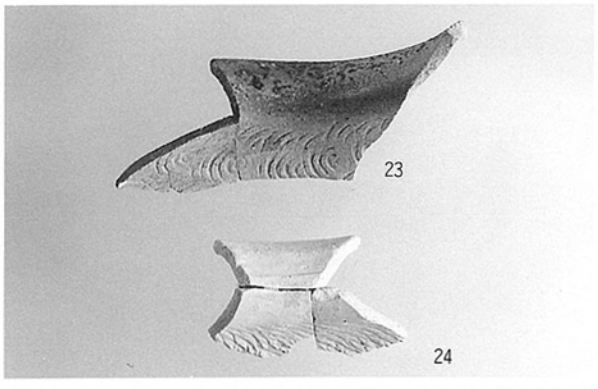


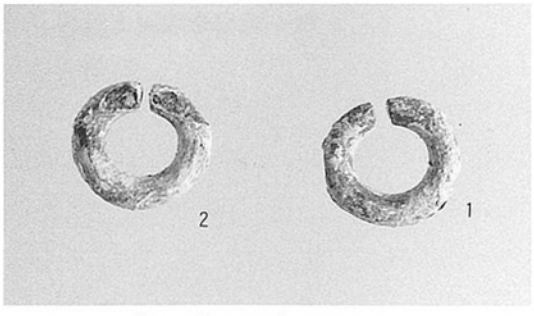
梅ヶ崎12号墳出土遺物



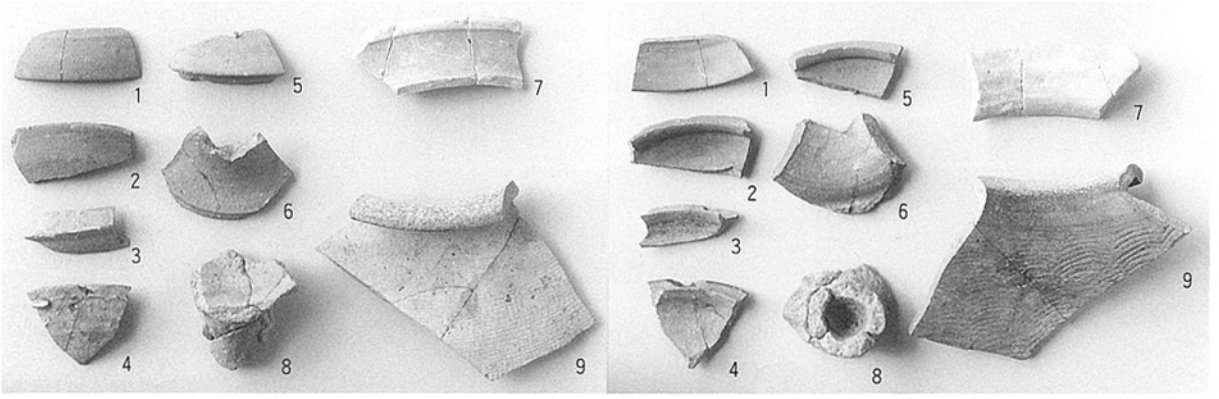


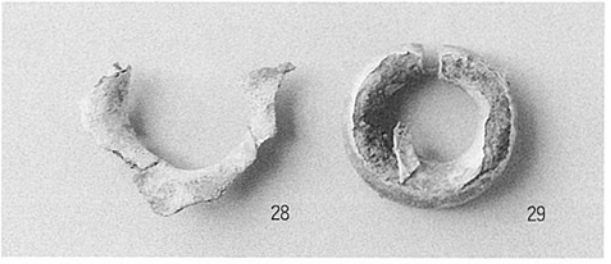


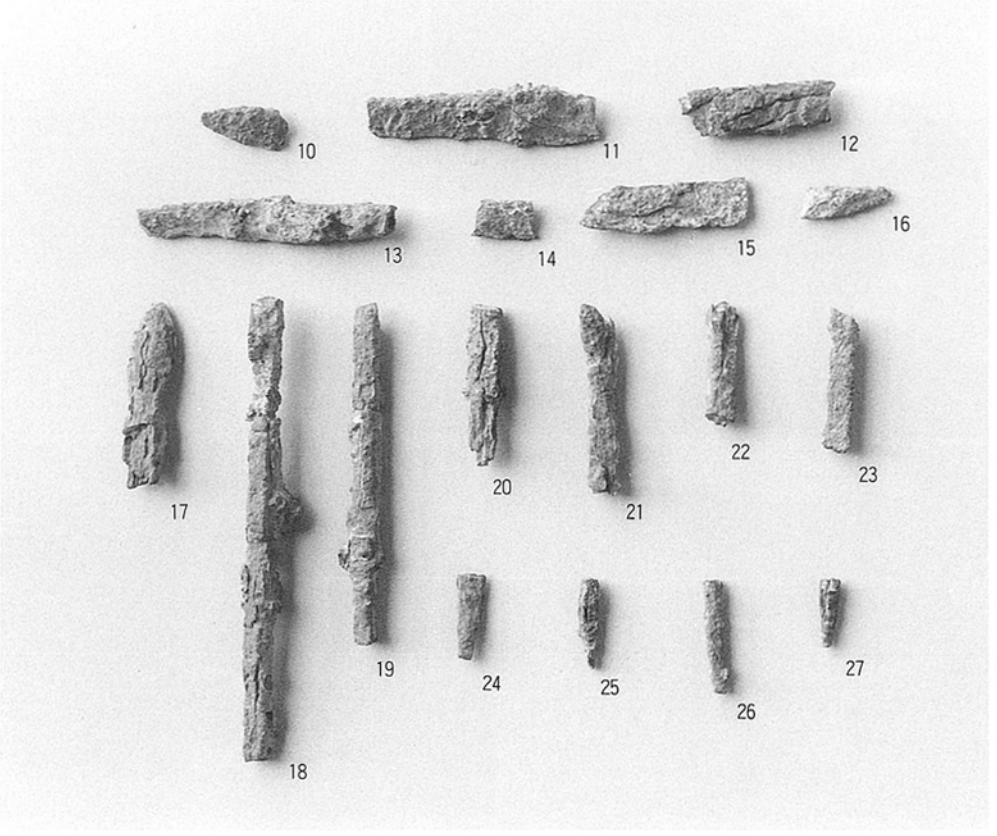




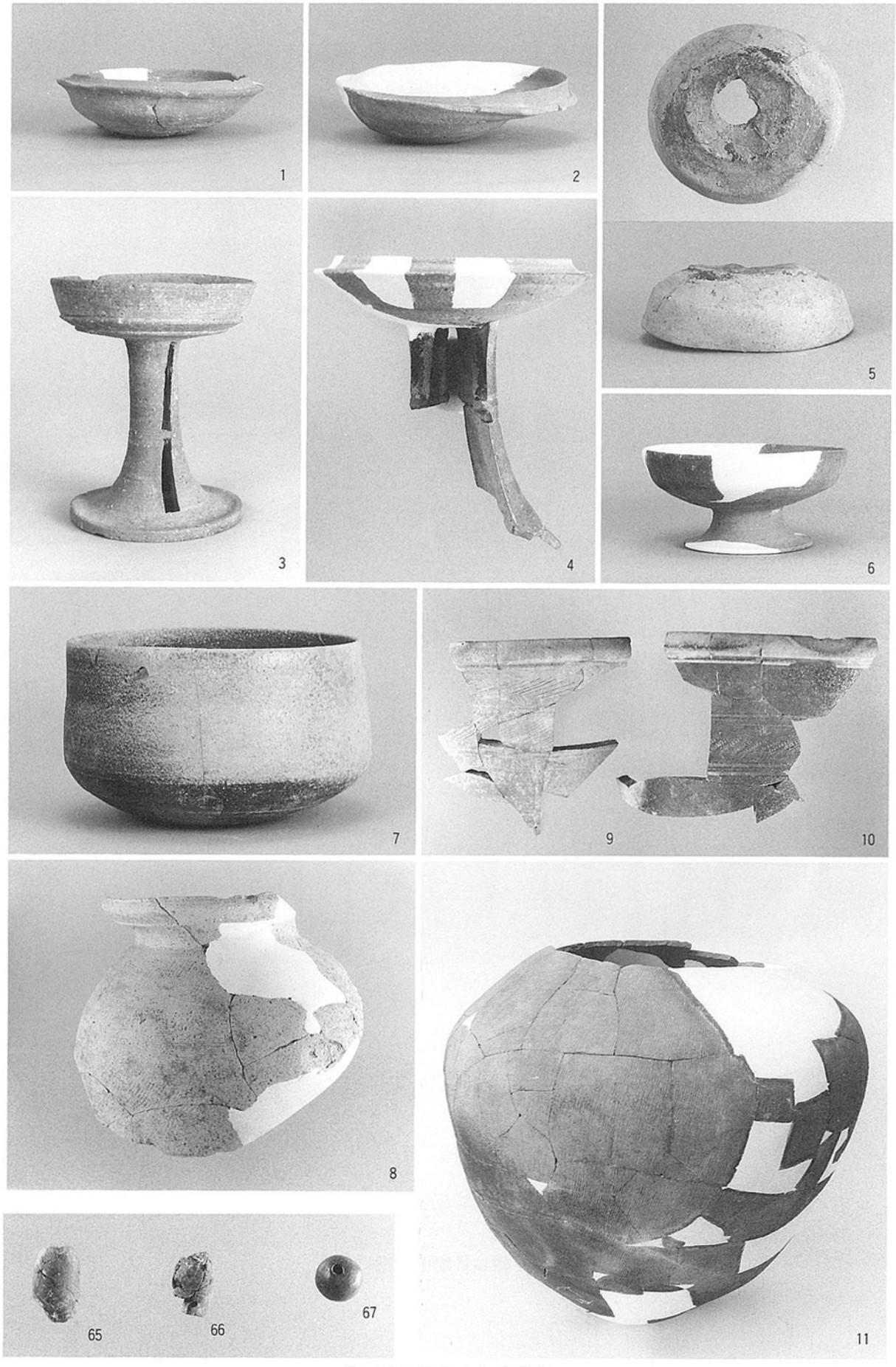
梅ヶ崎９号墳出土遺物



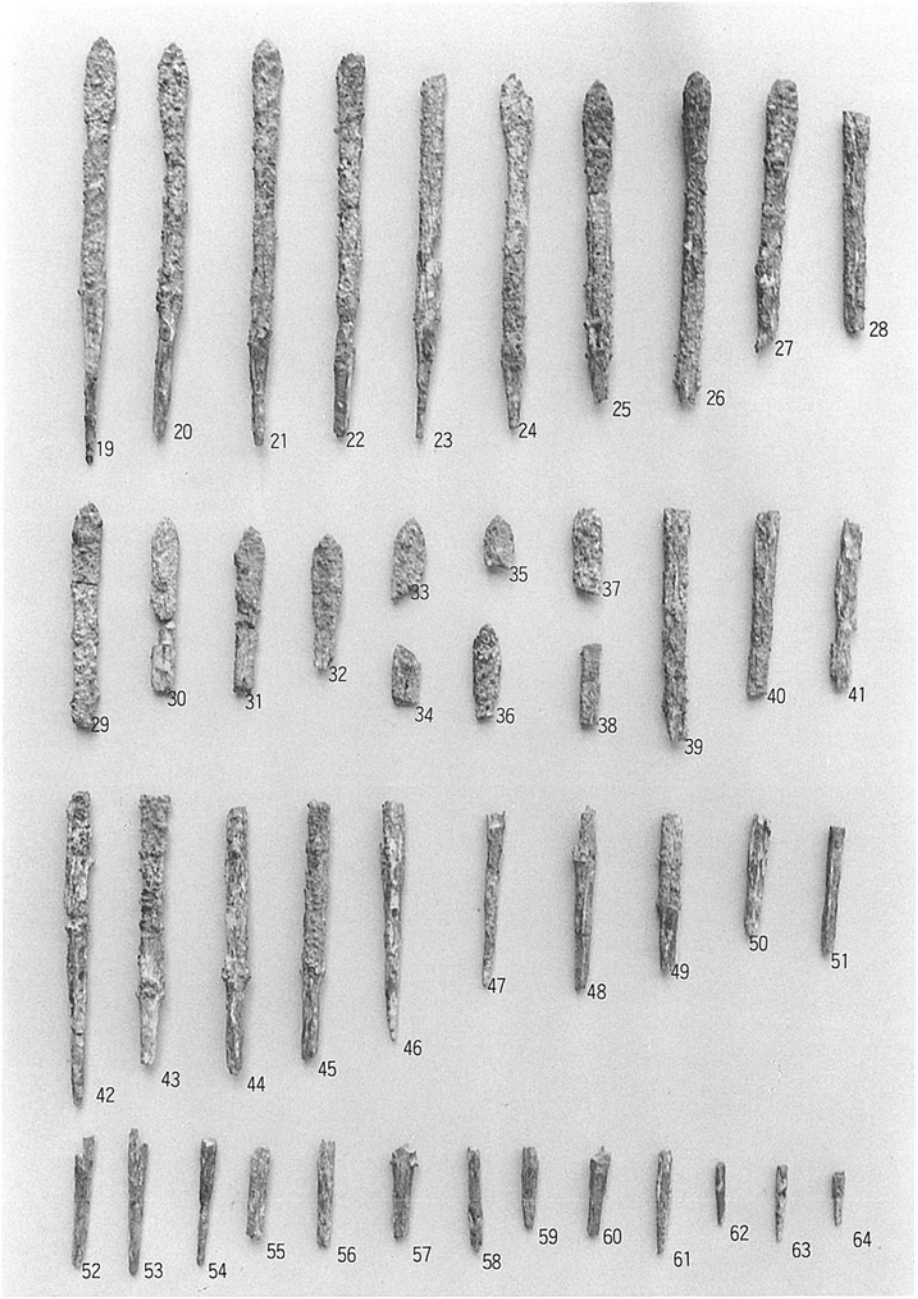


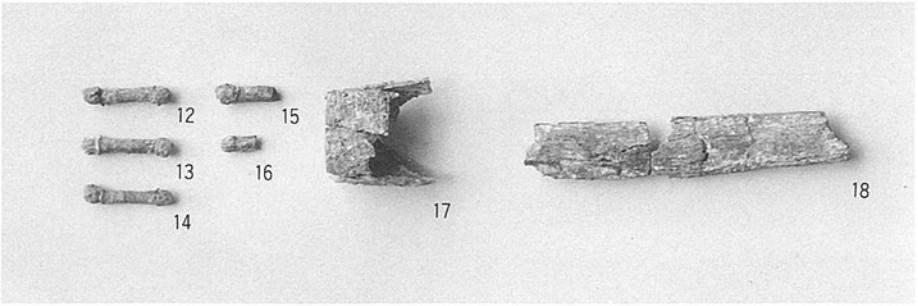


梅ヶ崎13号墳出土遺物

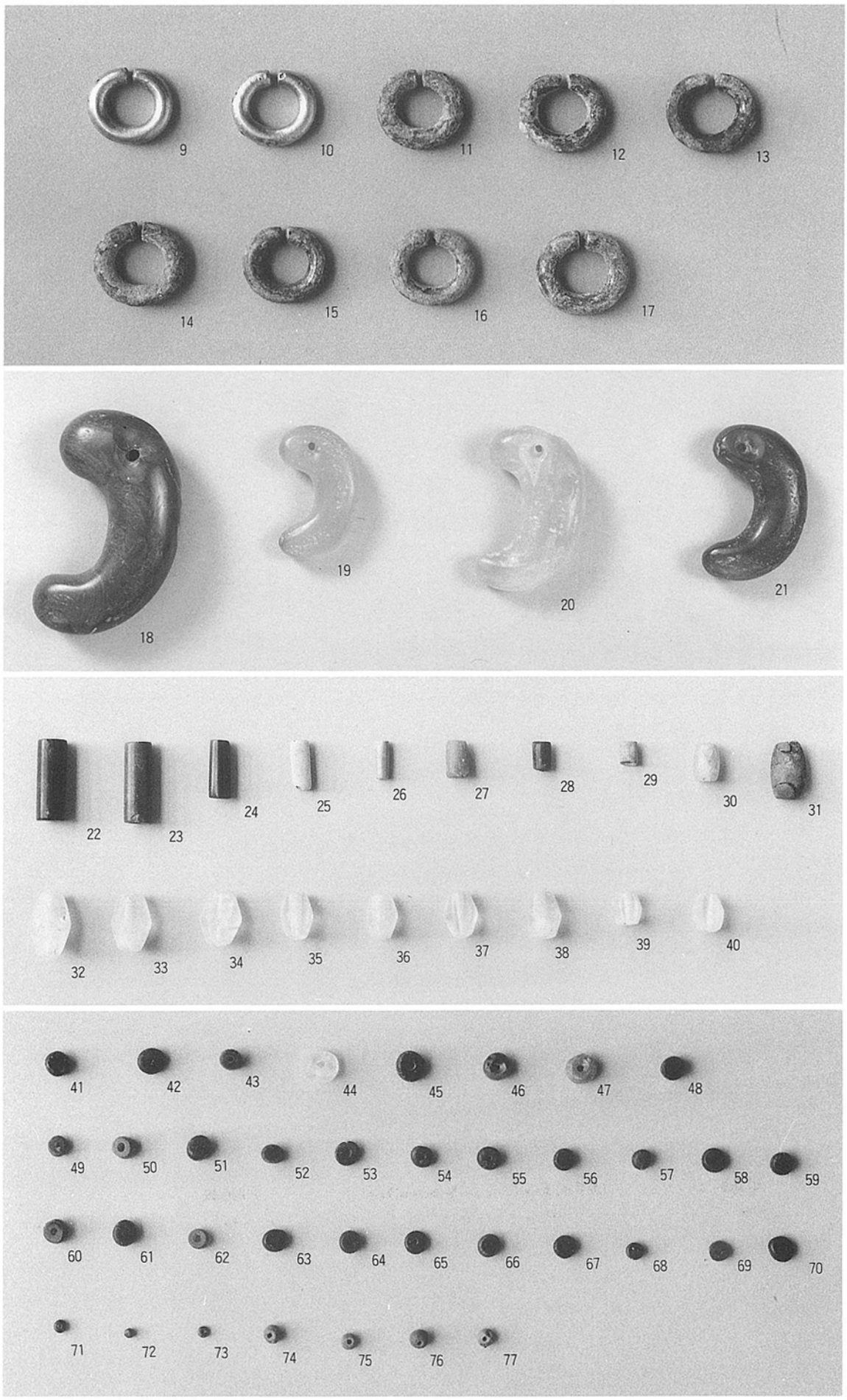


梅ヶ崎14号墳出土遺物①

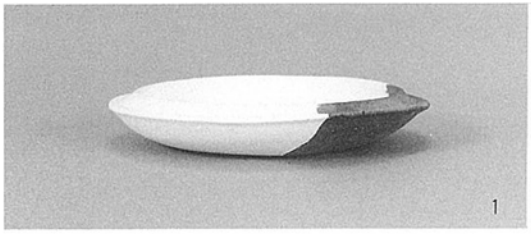


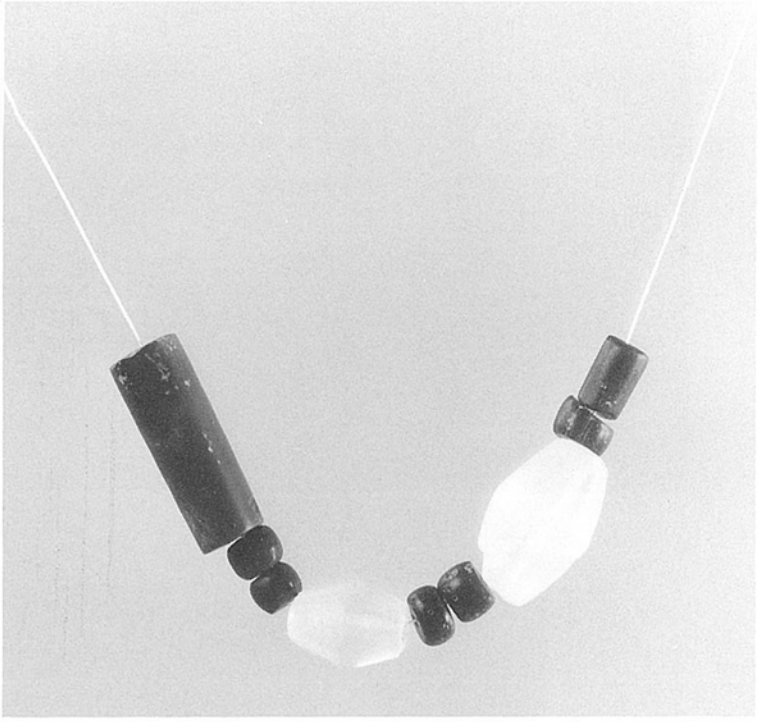


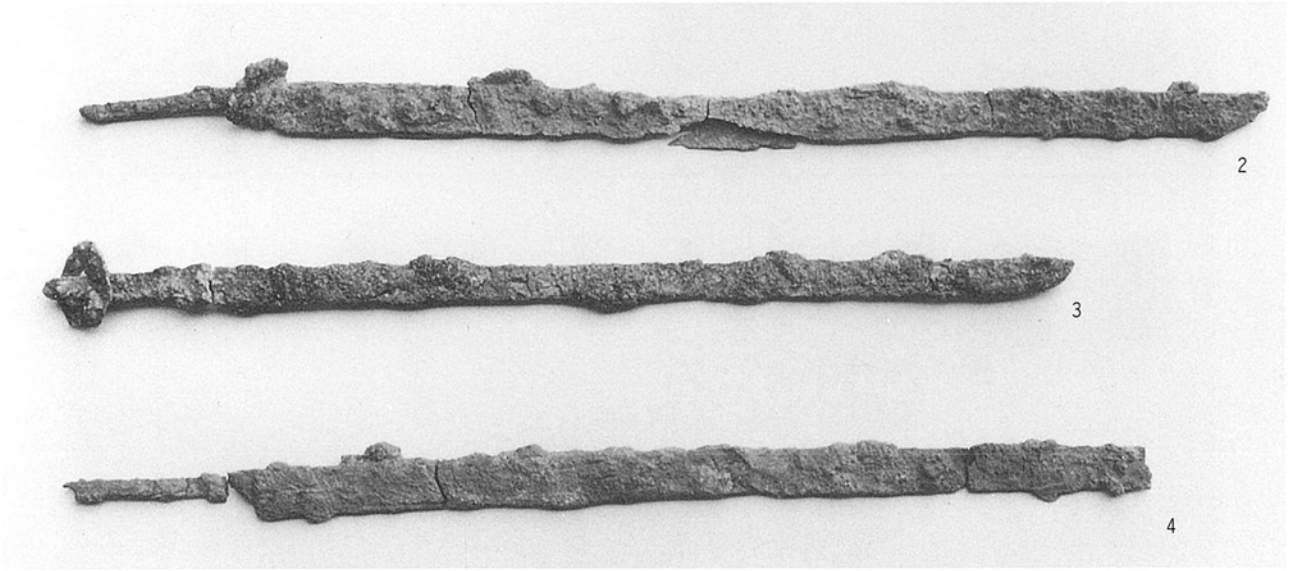
梅ヶ崎14号墳出土遺物②



梅ヶ崎15号墳出土遺物①







梅ヶ崎15号墳出土遺物②

第４章　まとめ

第１章「遺跡の位置と環境」で触れたとおり、現在の椹野川下流、山口湾岸には多数の古墳・古墳群が存在する。湾頭西側の突き出た半島の丘陵で、過去３年間に渡り、浦辺古墳群、大浦古墳群、梅ヶ崎古墳群の発掘調査が行われた。その結果、浦辺古墳群で３基、大浦古墳群で16基、梅ヶ崎古墳群で15基、総計34基と、当初予想された基数を大幅に上回る古墳が発見されると同時に、それぞれの古墳群の特徴も明らかになってきた。特に、今年度調査では、16基中７基もの「竪穴系横口式石室」及び「その系譜を引く石室」を有する大浦古墳群の範囲が、予想に反して南西側に広がらずほぼⅠ・Ⅱ地区で終結すること、また、「横穴式石室」を中心とする梅ヶ崎古墳群が、大浦古墳群に匹敵する規模を持ちながらも、大浦古墳群とは石室構造などに違いがみられ、古墳を造営した集団が異なる可能性が高いことなどが新たに判明した。もっとも、調査区外にはさらに数基から十数基の古墳が確認されており、それらの調査を待たずして結論を出すのは早計であるが、現時点での調査成果としてまとめてみたい。

１．梅ヶ崎古墳群

（１）配置・範囲

梅ヶ崎古墳群では、大浦古墳群に比べ調査範囲が比較的斜面上位まで含まれているため、上位側の古墳群の端がほぼつかめた。標高37m近くの15号墳がそれに当たり、その上位では、調査区外の踏査結果を含めて古墳は確認できなかった。15号墳を最上位として、標高差約13m、水平距離で約40m離れたところに13・14号墳が位置し、南東に延びる尾根筋に沿って、標高約16mの最下位の６号墳までⅡ地区

第12表　梅ヶ崎古墳群古墳一覧表　　（　）は残存値　単位はm

号墳	墳丘		内部主体								玄門閉塞	備考
	形状	直径	形式	主軸方向	石室長	玄室長	玄室幅	羨道長	羨道幅	玄門幅		
1	円墳	9.8	横穴式	N53°E	(4.7)	3.1	2.3	(1.6)	1.2	0.8	有	
2	円墳	9.2	横穴式	N46°E	(5.4)	2.7	2.2	(2.7)	0.9	0.8	有	
3	円墳	10.5	横穴式	N48°E	(4.5)	2.0	1.6	(2.5)	1.3	0.6	－	敷石
4	－	－	－	(N14°E)	(0.5)	(0.5)	－	－	－	－	－	敷石
5	－	－	－	N34°W	(1.5)	(1.5)	1.1	－	－	－	－	
6	円墳	10	横穴式	N24°W	4.0	1.5	1.4	2.5	0.9	0.8	－	敷石
7	円墳	11	横穴式？	(N14°W)	－	－	－	－	－	－	－	
8	円墳	8	横穴式	N28°W	(3.7)	(1.8)	1.5	(1.9)	－	－	－	
9	円墳	10	横穴式	N26°W	(4.7)	(2.4)	1.6	(2.3)	1.0	0.7	有	
10	円墳	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
11	円墳	10	横穴式	N43°W	(4.3)	2.3	1.6	(2.0)	－	－	有	
12	円墳	7	横穴式	N24°W	－	(2.2)	1.5	－	－	－	－	
13	円墳	10	横穴式	N26°W	－	2.4	1.2	－	－	－	－	敷石
14	円墳	14	横穴式	N10°W	4.7	2.5	2.1	2.2	0.8	0.7	－	羨道閉塞
15	円墳	15	横穴式	N37°W	4.4	2.3	2.0	2.1	1.0	0.7	有	鉄刀3

の古墳群が造られる。一方、15号墳から標高差約12m、水平距離で約60m離れたところに昨年度調査の１号墳が位置し、南西に延びる尾根に沿って、標高約16mの４号墳までＩ地区の古墳群が営まれるが、調査区外にはさらに少なくとも２基の古墳が知られている。II地区の東側、あるいはＩ地区の西側にも、隣接する南に張り出す尾根があるが、いずれも古墳の存在は確認されていない。従って、当古墳群の範囲はＩ地区・II地区の古墳群の造られた両尾根筋に限られ、その規模も20基前後と考えられる。

玄室の規模から見ると、15号墳・１号墳・２号墳・14号墳の玄室幅が２mを越え、他の古墳が1.6m内に収まるのと比べ一回り大きな規模を有すると共に、奥壁には一枚の鏡石を用いている。明らかに集団の中でも力を有する者の墓を、丘陵の上位から築いていると思われる。

調査区内の標高約26mから下側の斜面は、段々畑として開墾されている。今回の調査では、同じ高さの畑の下から古墳が発見されることが多く、また、羨道部の端を崖面で欠失したり、石室の上半部の石材が取り除かれたりという各古墳の損壊の状況もほぼ似ている。これらのことは、古墳を数基ずつほぼ同じ等高線上に築いた結果とも考えられよう。すると、当時の計画的な古墳群の築造の様子もうかがえる。

（２）15号墳について

15号墳から鉄刀３本をはじめ、耳環、勾玉、管玉など数多くの副葬品が出土した。鉄刀は、玄門・奥壁・右壁にそれぞれ沿う形で検出され、玄門側と奥壁側の鉄刀は切先を左壁（西）に、刃部を石室内に向けており、右壁側の鉄刀は切先を奥壁（北）に刃部を側壁に向けていた。鉄刀はほぼ原位置を保っており、装身具が鉄刀に囲まれた右壁側に集中することから、少なくとも５体の被葬者の中には頭位を東に向けたものもあったと推定される。古墳群全体の中での占地や、これらの副葬品の質・量からみて、当古墳群の造営に当たった集団の首長墓と考えられよう。

（３）古墳造営の時期

玄室内からの土器の出土が少なく、また石室も損壊を受けていることから、はっきりとした築造年代を求めることは困難であるが、大浦古墳群との比較検討も含めて可能な限り述べてみたい。

石室の開口方向を見ると、南西に張り出す尾根筋に築かれたＩ地区の古墳４基は南西に、南東に張り出す尾根に乗るII地区の古墳10基は南東に向かう。つまり、梅ヶ崎古墳群では全ての古墳の主軸は、等高線に直交、つまり開口部を斜面下位に向けている。このことから、大浦古墳群で多く用いられていた「竪穴系横口式石室」及び「その系譜を引く石室」の形態を有するものはなく、損壊の激しいものも含めて全て「両袖の単室横穴式石室」と考えられる。古墳群においては、首長墓に採用された石室形態を受け継ぎ他の古墳も築造される傾向があり、当古墳群でも15号墳を倣って、横穴式石室が造られ続けたものであろう。６世紀前半代から大浦古墳群では「竪穴系横口式石室」が造られ始め、それを追うように６世紀中頃より横穴式石室が出現する。おそらくこの時期に、梅ヶ崎古墳群でも古墳の築造が始められたと考えられる。

前述した玄室規模の大きな４基の古墳のうち、羨道長が短く、側壁の腰石並びにその上に積まれる石材が比較的小さく、かつ持ち送りの角度が大きい15号墳が最も古いと思われる。一方、１号墳・２号墳は共に玄門閉塞を有するが、概して石材が大きく、面取りがなされ、特に２号墳では両側壁が２枚の腰石で構成されるなど、より新しい石室の要素を持つと捉えられる。また14号墳では、羨道の一

部を前室的に用いるために、框石を置き羨道で閉塞を行っていることは、４基中築造時期が最も新しいと考えられる要素である。

昨年度の調査では、１号墳から６世紀前半と比定される坏蓋が報告されているが、石室内からの出土ではないため１号墳に伴う遺物とは言い難い。また、15号墳では７世紀初頭の坏身が１点出土しているが、石室内の流入土中のものであり、これをもって築造時期を決定することはできない。14号墳の羨道部から出土した無蓋長脚高坏が６世紀中頃のものであることから考えても、15号墳の築造は６世紀の中頃を少し遡る時期に行われたのであろう。

その他の玄室規模の小さな古墳は、その多くが石室の損壊を受けているため一概には述べられないが、６号墳・９号墳・11号墳などでは、玄室長に比べ比較的長い羨道部が連接する。この形態は築造時期が新しいという要素の一つであり、また、「両袖の単室横穴式石室」の形式をとりながら、奥壁を１枚の鏡石ではなく２枚の板石で構成したり、排水施設を伴った敷石を玄室内に配したりといった多様性がみられることからも、これらの古墳は15号墳などの築造に後発するものであろう。

以上のことから各古墳の築造の順を推測すると、まず斜面上位に首長墓としての15号墳が造られ、次いで２号墳・１号墳と続き、大型石室を持つ古墳として14号墳が最後に築かれる。それらを追うように、小型石室でも上位のグループである13・３・７・８・９・11号墳が、さらに下位のグループである５・６号墳が築造されたのではなかろうか。そして幾度かの追葬を経て、宝珠つまみ付坏・坏身を出土した７号墳の埋葬をもって、７世紀中頃には梅ヶ崎古墳群は終焉を迎える。

（４）大浦古墳群と梅ケ崎古墳群

昨年度、大浦古墳群では「竪穴系横口式石室」及び「その系譜を引く石室」を有する古墳が７基見つかり、県内の群集墳の在り方に新たな視点を与えたが、梅ヶ崎古墳群ではそれらにつながる古墳は１基も確認されず、横穴式石室のみ構築されたと推測できる。また、出土した土器をみると、坏が体部（底部）に貼り付いた甕や、大浦３号墳、大浦12号墳、梅ヶ崎９号墳などにおける石室外祭祀で須恵器と共に供献された土師器の高坏など、共通するものも多い。この事実は、梅ヶ崎古墳群が大浦古墳群に後発し、大浦古墳群を造営した集団に影響を受けながらも、独自の墓制を展開していったことを示すものであろう。

（山本）

第13表　梅ヶ崎古墳群出土土器編年表

年代	編年	１号	２号	３号	５号	６号	７号	８号	９号	11号	13号	14号	15号
400													
500	Ⅰ												
	Ⅱ												
	Ⅲ												
	Ⅳ												
600	Ⅴ												
	Ⅵ												
	Ⅶ												
700													

2．大浦古墳群

今年度調査した古墳は、昨年度調査したII地区の90m南側に当たるIII地区の１基と、さらに南に250m離れたIV地区の３基の合計４基である。調査に際して、昨年度までにI・II地区で確認できた「竪穴系横口式石室」及び「その系譜を引く石室」を有する古墳のさらなる確認が期待されたが、いずれの古墳も、墳丘、石室とも遺存状況が悪く、明確な資料が得られたとは言い難い。しかし、その中で確認できたことは、IV地区の14号墳の石室が玄門閉塞施設を有し、羨道部の構造が天井石を持たない短い「ハの字状」であること、同じく14号墳の墓坑が深いこと、16号墳の玄室幅が1.3mと狭かったこと、さらに15号墳も残存する墓坑幅から見て極めて狭い玄室幅であったと推定されることである。これらの事実は、I・II地区で確認できた「竪穴系横口式石室」及び「その系譜を引く石室」を有する古墳に共通する特徴であり、III・IV地区周辺にも同タイプの石室を持つ古墳が存在した可能性を示唆するものといってよい。なお、４基のうち14号墳の築造時期は６世紀後半代と推定されるが、15・16号墳についてはもう少し遡る可能性もある。

ところで、前段で２度にわたって使用した「竪穴系横口式石室」及び「その系譜を引く石室」を有する古墳について、その意味する形態を明確にしておく必要がある。昨年度の報告書では、大浦古墳群の12基のうち７基について「竪穴系横口式石室」として捉えた。しかし、「竪穴系横口式石室」についての捉え方が曖昧なところがあり、ここでは、「竪穴系の埋葬施設に横口部を取り付けたもの」が「竪穴系横口式石室」であり、「楣石・前壁を有するものはこの種の石室には含め得ない」とする蒲原宏行氏の定義に基本的に従いたい。そこで、改めて再検討すると、昨年度「竪穴式横口式石室」とした７基のうち、石室上部が欠失するため断定はできないものの、「竪穴式横口式石室」と見なしてよいものはI地区の２・７号墳のみとなる。

２号墳は、石室長は3.2m、羽子板状の平面プランは玄室長2.4m、玄室幅1.4mと小型で、天井石を架構しない「ハの字状」の羨道側壁も0.8mと短い。玄門幅に至っては0.5mと極めて狭く、玄門に向かい下降する墓道の傾斜角は26°と急である。両袖石にかかる石は一見楣石と見受けられるが、天井石と見なすことも十分可能で、「竪穴系横口式石室」としてよいであろう。また、７号墳についても、石室長3.5m、玄室長2.3m、玄室幅1.5mと小型の形態を持ち、玄門幅も２号墳と同じ0.5mである。前庭部の傾斜角度は２号墳以上に急で、あたかも竪穴式石室のような墓坑を有している点から見ても、２号墳同様「竪穴系横口式石室」と見なすべきものと思われる。

一方、I地区の１・３号墳とII地区の９～11号墳については、いずれも玄室幅が1.8mを越えており、玄門幅も２・７号墳に比べて広い。しかも、10号墳については不明だが、他の古墳は明らかに楣石と見なされる大型の石が袖石上に架構されていることから、「両袖単室の横穴式石室」と見なしたい。ただし、「横穴式石室」ではあるが、これらの５基は、６世紀前半から展開する大浦古墳群の古墳に共通する形態である、「深い墓坑」、「小型の玄室プラン」、「天井石を架構しないハの字状の短い羨道」、「玄門に向かい傾斜する墓道」、「玄門閉塞」などの特徴を備えている。そして、それは、５世紀後半から北部九州の宗像地域や遠賀川流域で展開した「竪穴系横口式石室」と、「その系譜を引く石室」の影響を強く受けて成立したものと考えられる。

以上、「竪穴系横口式石室」及び「その系譜を引く石室」を有する古墳とはこのような意味であり、

以下この考えによって、大浦古墳群を中心とする古墳時代後期の山口湾岸地域の群集墳の展開とその特性について述べたい。

蒲原氏の定義によると、大浦２・７号墳以外の山口市及び周辺一帯の古墳の中で、厳密な意味での「竪穴系横口式石室」を主体部に持つものは、現時点までに確認された中では朝田１－２号墳のみである。狭長な長方形の玄室プランを有し、短い「ハの字状」の羨道側壁と、幅の狭い両袖の玄門部を持つ。奥壁に大きな板石と、側壁基部石に大き目の板状の石を使う他は、小さめの石を小口積みにする。ほぼ直立に積み上げられた側壁の形状と玄門高から見て、石室高はさほど高いとは思われず、楣石が架構された可能性は残すものの、「竪穴系横口式石室」であることは間違いない。ただ、６世紀初頭までには導入されたとされる同タイプの石室は、周辺地域では確認されていない。時期的にやや後続すると思われる大浦２・７号墳に比べると玄室が狭長であり、これが山口市近辺における同時期の一般的石室形態とは考えにくい。

それに対して、大浦古墳群で確認された７基の「竪穴系横口式石室」と「その系譜を引く石室」を主体部とする古墳と類似する形態は、宇部市東岐波の砂山古墳、防府市大字台道の岩淵古墳の両古墳に求めることができる。砂山古墳は羽子板状の小型玄室プランを持ち、狭い両袖の玄門と、短い小口積みの羨道側壁を持つ。大きめの基部石の上部に小振りの石を小口積みにする石室の組み方、玄門部に向かい下降する墓道など、大浦古墳群の多くの古墳と同じ形態的特徴を持ち、時期もほぼ同時期と思われる。岩淵古墳は、長方形で広めの玄室プランを持ち、楣石とその上部の完全な前壁構造から見ると一般的な横穴式のそれである。しかし、天井石を持たない小口積みの羨道側壁、玄門に向かい下降する墓道を持つ点では、大浦古墳群の古墳と共通する形態を持ち、やはり同じ系譜に繋がるものと見なしてよい。ただ、岩淵古墳は横穴式石室の要素がさらに強く、時期的には大浦古墳群に後続するものと思われる。

他方、山口湾岸の古墳時代後期の古墳では、湾西岸の吉敷郡阿知須町の丸塚古墳群と東湾口の山口市秋穂二島の幸崎古墳群の調査例が知られる。丸塚古墳群の５基の石室はいずれも「複室構造の横穴式石室」で、出土土器の時期から見ると６世紀後半から７世紀前半代にかけての築造と推定される。これは、大浦古墳群では同じく複室構造の８・12号墳とほぼ同時期の築造であり、その関連性が注目される。また、幸崎古墳群では、最も残りのよいB－１号墳を見ると、出土した須恵器のうち最も古いタイプは６世紀後半代に比定され、玄室プランは大型で、直線的に延びる羨道部は長い。石室形態は一般的な「単室両袖の横穴式石室」であり、「竪穴系横口式石室」の系譜に繋がる形態は持たない。また、同古墳群で調査されたC－１号墳とB－３号墳は、遺存状況が悪く断定はできないが、山口湾岸の他の古墳群では見られない片袖プランの石室の可能性が指摘されている。

山口湾岸の周辺一帯において、大浦２・７号墳（大浦古墳群で最も古く６世紀前半に築造）と同時代、もしくはそれに先行する時代の集落跡と墓制は未だもって確認されていない。その地域に、北部九州を起源とする「竪穴系横口式石室」及び「その系譜を引く石室」を有する古墳が、他の古墳時代後期の群集墳に先行する時期に出現したことは何を意味するのだろうか。そして、その形態は、６世紀後半から７世紀前半にかけて築造された幸崎B－１号墳、梅ヶ崎14号墳、浦辺１・２号墳などに代表される、比較的大型の「両袖単室の横穴式石室」や、大浦古墳群で２基、丸塚古墳群でも５基確認さ

れた「複室構造の横穴式石室」を持つ古墳より時期的に先行することは明らかである。のみならず、その形態は、砂山古墳や昨年度調査された岩淵古墳の存在が示す通り、宇部東部沿岸から防府市西部沿岸にかけての一帯で、6世紀前半から後半にかけて広く存在した可能性がある。敢えて言えば、「竪穴系横口式石室」の系譜を引く、「深い墓坑」、「小型の玄室プラン」、「天井石を架構しないハの字状の短い羨道」、「玄門閉塞」、「玄門に向かい傾斜する墓道」を持つ古墳は、6世紀前半から後半にかけてこの地域に分布した後期古墳の一般的形態である可能性が高い。そしてそれは、6世紀後半以降、「複室構造の横穴式石室」がこの地域に導入されることと合わせて、山口湾岸周辺地域が強く北部九州地域と繋がっていたことを示すものである。

最後に、「竪穴系横口式石室」及び「その系譜を引く石室」を有する古墳は、朝田Ⅰ－2号墳を除いていずれも海岸近くに分布しており、同様の形態を持つ古墳は山口県の内陸部では確認できていない。また、昨年度の報告書では、大浦11号墳で出土した山口県内での類例に乏しい土師器の鉢と同タイプのものが、福岡県遠賀郡岡垣町や同鞍手郡若宮町から宮田町にかけての後期の群集墳で出土していることを指摘した。同地域の「竪穴系横口式石室」は宗像地域の影響を受けて成立したと思われ、山口湾岸地域の群集墳の被葬者の性格についても、それに繋がる可能性があることを付け加えてまとめとしたい。

（大村）

参考文献

蒲原宏行「竪穴式横口式石室考」(『古墳文化の新視角』　雄山閣　1983)

山口県埋蔵文化財センター『浦辺古墳群・大浦古墳群・梅ヶ崎古墳群・小郡開作経塚』1998

山口県教育委員会『朝田墳墓群Ⅰ』1976

岩淵古墳調査団『岩淵古墳』1998

宇部市教育員会『宇部の遺跡』1968

阿知須町教育委員会『引野遺跡・丸塚古墳群』1979

阿知須町委員会委員会『引野遺跡・丸塚古墳』1978

阿知須町教育委員会『丸塚古墳群』1980

山口県教育委員会『幸崎古墳・松ヶ迫遺跡』1973

山口県教育委員会『幸崎古墳』1973

第13表　大浦古墳群古墳一覧表

（　）は残存値　単位はm

号墳	墳丘 形状	墳丘 直径	内部主体 形式	主軸方向	石室長	玄室長	玄室幅	羨道長	玄門幅	玄門閉塞	備考
1	円墳	13	横穴式	N3°W	3.4	2.6	1.8	0.8	0.6	有	ハの字状の羨道
2	円墳	10	竪穴系横口式	N71°E	3.2	2.4	1.4	0.8	0.5	有	ハの字状の羨道
3	円墳	10	横穴式	N45°E	4.6	2.7	1.9	0.9	0.9	－	ハの字状の羨道
4	円墳	16	横穴式	N5°W	(6.0)	3.4	2.2	(2.6)	0.8	有	
5	円墳	11	横穴式	N1°E	(4.4)	2.2	1.8	(2.2)	0.8	有	
6	円墳？	？	横穴式？	N46°W	不明	不明	1.8	不明	不明	－	
7	円墳	8	竪穴系横口式	N41°E	3.5	2.3	1.5	1.2	0.5	有	ハの字状の羨道
8	円墳	11	横穴式(複室)	N27°W	6.4	2.1	2.1	2.5	1.1	－	前室長1.8幅1.6
9	円墳	9	横穴式	N26°W	3.6	2.6	1.9	1.0	0.7	有	ハの字状の羨道
10	円墳	11	横穴式	N36°E	3.6	2.6	1.8	1.0	0.6	有	ハの字状の羨道
11	円墳	10	横穴式	N28°E	3.6	2.4	1.8	1.2	0.6	有	ハの字状の羨道
12	円墳	11	横穴式(複室)	N30°W	6.1	2.0	1.8	2.7	0.7	有	前室長1.4幅1.2
13	円墳	10	横穴式？	N43°E	不明	不明	不明	不明	不明	－	
14	円墳	10	横穴式	N50°E	3.4	2.2	1.6	1.2	0.9	有	ハの字状の羨道
15	？	？	不明	N27°W	不明	不明	不明	不明	不明	－	
16	円墳	6～8	横穴式？	N33°W	不明	不明	1.3	不明	不明	－	

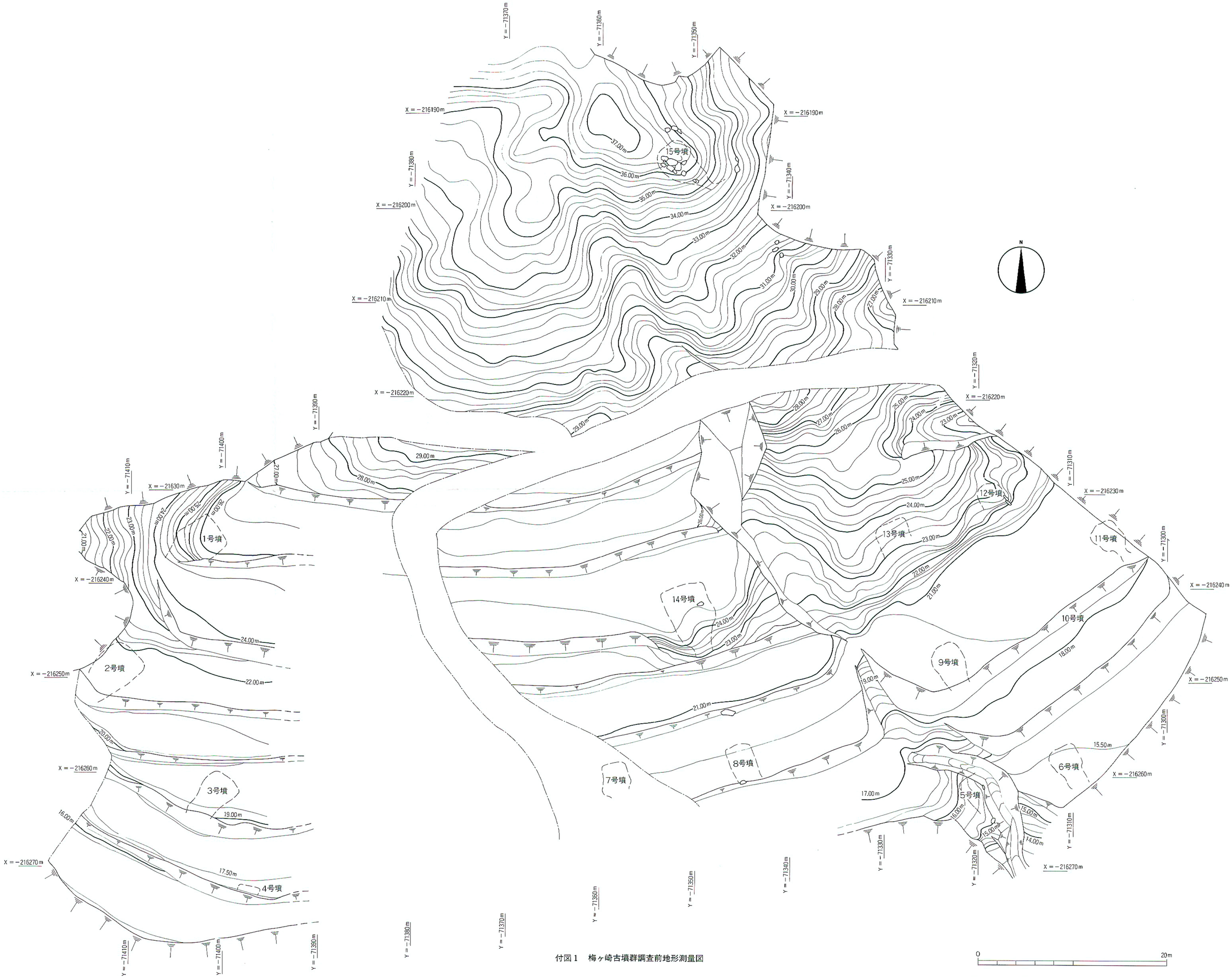
報告書抄録

ふりがな	おおうらこふんぐん　うめがさき　こふんぐん
書名	大浦古墳群　梅ヶ崎古墳群
副書名	一般県道山口阿知須宇部線道路改良事業に伴う発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第11集
編集著者名	山本義信　安部康史　河村悟史　大村秀典　奥原栄一郎
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753－0073　山口県山口市春日町３－22　TEL0839－23－1060
発行年月日	西暦1999年３月26日（平成11年３月26日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
大浦古墳群（おおうらこふんぐん）	山口県山口市（やまぐちけんやまぐちし） 大字江崎（おおあざえさき）	35203		34°2′58″	131°23′51″	980415～ 990325	1,500	一般県道山口阿知須宇部線道路改良事業に伴う事前調査
梅ヶ崎古墳群（うめがさきこふんぐん）	山口県山口市（やまぐちけんやまぐちし） 大字江崎（おおあざえさき）	35203		34°2′54″	131°23′38″	980415～ 990325	1,900	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大浦古墳群	埋葬跡	古墳	円墳　4基	須恵器、土師器 鉄製品、装身具	県内３例目となる釣針が出土。
梅ヶ崎古墳群	埋葬跡	古墳	円墳　10基	須恵器、土師器 鉄製品、装身具	鉄刀３本を副葬する首長墓を確認。

付図1　梅ヶ崎古墳群調査前地形測量図



付図１　梅ヶ崎古墳群調査前地形測量図

山口県埋蔵文化財センター調査報告　第11集

大　浦　古　墳　群
梅ヶ崎古墳群

一般県道山口阿知須宇部線道路改良事業に伴う発掘調査報告

１９９９年３月

編集　財団法人　山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
（山口市春日町３－２２）

発行　財団法人　山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
（山口市春日町３－２２）

印刷　大村印刷株式会社
（防府市西仁井令一丁目２１－５５）